

福音寺地区の遺跡

筋違C・D・E・F
G・H・I・川附

1996

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

ふくおんじ

福音寺地区の遺跡

すじかい
筋違 C・D・E・F
G・H・I・川附



1996

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター



卷頭図版1 筋違F遺跡SB5出土の変形土器



巻頭図版2 筋達C遺跡出土の赤色顔料付着遺物

序

本書は、昭和60年度から平成元年度にかけて松山市教育委員会文化教育課と松山市埋蔵文化財センターが福音寺地区で緊急調査しました8遺跡の発掘調査報告書です。

松山平野の東部に位置する本遺跡群は、小野川と川附川に挟まれた微高地上に立地する弥生時代から古墳時代の大規模な集落群の中にあります。近年、この地域における発掘調査は、急増する宅地に伴って増え続けているのが現状です。

今回報告します筋違C遺跡からは、弥生時代の赤色顔料に関する資料が出土し、筋違D～I遺跡・川附遺跡では弥生時代から古墳時代にかけての集落関連遺構を確認しています。

これらの調査結果は、当地域の遺跡群における古代の集落遺構を明らかにする基礎的資料となるものと思われます。

こうした成果を上げることができましたのも、関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のお陰と感謝申し上げますとともに、今後ともなお一層のご指導、ご助言をお願い申し上げる次第であります。

また、ひいては文化財保護、教育文化の向上に寄与できることを願っております。

平成8年3月28日

財団法人 松山市生涯学習振興財団

理事長 田中誠一

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが昭和60年度～平成元年度の間に福音寺町内と星岡町内で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺構の実測は、担当調査員の責任のもと、愛媛大学・松山大学学生他の援助を受けた。遺構の撮影は担当調査員が行った。
3. 遺構は呼称を略号で記述した。竪穴式住居：S B、溝：S D、土塼：S K、自然流路：S R、柵列：S A、柱穴：S P、掘立柱建物：掘立、性格不明遺構：S Xである。
4. 本書にかかる図面の作成は、担当者責任のもと、水口あをい、山下満佐子、平岡直美、村上規子、兵頭千恵、渡部明日香、伊藤みわこ、竹内真琴、中平久美子、長岡千尋、山下純代、渡辺いづみ、加島なおみ、新出寿美子、丹生谷道代、山之内志郎、谷久広之、石丸直樹、関正子、萩野ちよみ、吉井信枝、酒井直哉ほか愛媛大学生の援助をえた。
5. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
6. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
7. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
8. 調査においては、愛媛大学下條信行先生に御指導と御教示を賜った。記して感謝申し上げます。
9. 本書の執筆は、松村淳、栗田茂敏、梅木謙一、宮内慎一、山本健一、武正良浩、平岡直美が分担執筆した。執筆者名は本文目次に記し、必要に応じ文末にも記載した。序書は、担当者及び梅木謙一の指示のもと平岡直美が担当した。
10. 写真図版は、担当調査員と協議のうえ、遺物の撮影及び図版作成は大西朋子が行った。
11. 本書の編集は梅木謙一が行った。編集及び校正には水口あをいの協力をえた。

本文目次

第1章	はじめに	〔梅木〕	1				
1.	調査に至る経緯	2.	刊行組織	3.	環境		
第2章	筋違C遺跡	〔栗田〕	7				
1.	調査の経過	2.	層位	3.	遺構と遺物	4.	小結
第3章	筋違D遺跡	〔栗田〕	43				
1.	調査の経過	2.	層位	3.	遺構と遺物	4.	小結
第4章	筋違E遺跡	〔宮内〕	53				
1.	調査の経過	2.	層位	3.	遺構と遺物	4.	小結
第5章	筋違F遺跡	〔梅木〕	99				
1.	調査の経過	2.	層位	3.	遺構と遺物	4.	小結
第6章	筋違G遺跡	〔山本〕	181				
1.	調査の経過	2.	層位	3.	遺構と遺物	4.	小結
第7章	筋違H遺跡	〔武正〕	211				
1.	調査の経過	2.	層位	3.	遺構と遺物	4.	小結
第8章	筋違I遺跡	〔武正〕	265				
1.	調査の経過	2.	層位	3.	遺構と遺物	4.	小結
第9章	川附遺跡	〔松村・梅木・平岡〕	279				
1.	調査の経過	2.	層位	3.	遺構と遺物	4.	小結
第10章	調査の成果と課題	〔梅木〕	327				

挿図目次

第1章	はじめに	
第1図	福音寺地区と周辺遺跡 (縮尺1/50,000)	3
第2章	筋違C遺跡	
第2図	調査地2区上層図 (縮尺1/40)	8
第3図	調査地位置図 (縮尺1/500)	9
第4図	遺構全測図 (縮尺1/200)	11
第5図	竪穴住居SB1 (縮尺1/60)	14
第6図	SB1出土遺物(1) (縮尺1/3)	15
第7図	SB1出土遺物(2) (縮尺1/2)	16
第8図	竪穴住居SB5 (縮尺1/60)	17
第9図	SB5出土遺物 (縮尺1/3)	19
第10図	SK3出土遺物 (縮尺1/3)	20
第11図	不明遺構SX1 (縮尺1/60)	21
第12図	SX1出土遺物 (縮尺1/3)	22
第13図	竪穴住居SB2 (縮尺1/60)	23
第14図	SB2出土遺物(1) (縮尺1/3)	25
第15図	SB2出土遺物(2) (縮尺1/3)	26
第16図	SB2出土遺物(3) (縮尺1/3)	27
第17図	SB2出土遺物(4) (縮尺1/2)	
第18図	SB3出土遺物 (縮尺1/3)	28
第19図	竪穴住居SB3 (縮尺1/60)	29
第20図	掘立柱建物SB6 (縮尺1/60)	30
第21図	SB6出土遺物 (縮尺1/3)	31
第22図	掘立柱建物SB4 (縮尺1/60)	32
第23図	SB4出土遺物 (縮尺1/3)	33
第24図	土坑SK2 (縮尺1/60)	34
第25図	土坑SK4 (縮尺1/60)	
第26図	包含層出土遺物(1) (縮尺1/3)	35
第27図	包含層出土遺物(2) (縮尺1/3)	36
第28図	包含層出土遺物(3) (縮尺1/3)	37
第29図	包含層出土遺物(4) (縮尺1/3)	
第30図	包含層出土遺物(5) (縮尺1/3)	38
第3章	筋違D遺跡	
第31図	調査地土層図 (縮尺1/40)	44
第32図	調査地位置図 (縮尺1/600)	45

第33図	遺構全測図 (縮尺 1/60)	46
第34図	掘立柱建物 S B 1 (縮尺 1/40)	47
第35図	S B 1 出土遺物 (縮尺 1/3)	48
第36図	掘立柱建物 S B 2 (縮尺 1/40)	49
第37図	その他の出土遺物 (縮尺 1/3・1/2)	50

第 4 章 筋違 E 遺跡

第38図	調査地位概図 (縮尺 1/2,000)	53
第39図	調査地測量図 (縮尺 1/800)	54
第40図	北岸土層図 (縮尺 1/40)	55
第41図	西壁土層図 (縮尺 1/40)	57
第42図	遺構配置図 (縮尺 1/150)	59
第43図	調査地区剖図 (縮尺 1/300)	61
第44図	S B 1・S B 2 測量図 (縮尺 1/40)	62
第45図	S B 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/3・2/3)	64
第46図	S B 2 出土遺物実測図 (縮尺 1/3・2/3)	65
第47図	掘立 2 測量図 (縮尺 1/100)	66
第48図	掘立 3・掘立 4 測量図 (縮尺 1/100)	67
第49図	掘立 1 測量図 (縮尺 1/100)	68
第50図	掘立 5 測量図 (縮尺 1/100)	69
第51図	掘立出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	70
第52図	S K 6 測量図 (縮尺 1/40)	
第53図	S K 6 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	71
第54図	S K 7 測量図 (縮尺 1/40)	72
第55図	S K 7 出土遺物実測図(1) (縮尺 1/3)	73
第56図	S K 7 出土遺物実測図(2) (縮尺 1/3)	74
第57図	S K 9 測量図 (縮尺 1/40)	75
第58図	S K 9 出土遺物実測図 (縮尺 1/3・2/3)	76
第59図	S K 12 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/3)	77
第60図	S K 1・S K 11 測量図 (縮尺 1/40)	78
第61図	S K 2 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/3)	79
第62図	S K 13 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/3)	80
第63図	S K 5・S K 10 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/3)	81
第64図	S K 3・S K 4・S K 8 測量図 (縮尺 1/40)	82
第65図	S K 14 測量図 (縮尺 1/40)	83
第66図	S D 1・S D 2・S D 3 断面図 (縮尺 1/20)	84
第67図	S X 1 測量図 (縮尺 1/40)	85
第68図	S X 1 断面図 (縮尺 1/40)	86
第69図	S X 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	

第70图	包含層出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	87
第5章 筋違F遺跡		
第71图	調査地位位置図 (縮尺 1/1,000)	100
第72图	基本層位図 (縮尺 1/20)	
第73图	遺構配置図 (縮尺 1/200)	101
第74图	S B 5 出土遺物実測図1 (縮尺 1/4)	102
第75图	S B 5 測量図 (縮尺 1/50)	103
第76图	S B 5 出土遺物実測図2 (縮尺 1/4)	106
第77图	S B 5 出土遺物実測図3 (縮尺 1/4)	107
第78图	S B 5 出土遺物実測図4 (縮尺 1/4)	108
第79图	S B 5 出土遺物実測図5 (縮尺 1/4)	109
第80图	S B 5 出土遺物実測図6 (縮尺 1/4)	110
第81图	S B 5 出土遺物実測図7 (縮尺 1/4)	111
第82图	S B 5 出土遺物実測図8 (縮尺 1/4)	112
第83图	S B 5 出土遺物実測図9 (縮尺 1/4)	113
第84图	S B 5 出土遺物実測図10 (縮尺 1/4)	114
第85图	S B 5 出土遺物実測図11 (縮尺 1/4)	115
第86图	S B 5 出土遺物実測図12 (縮尺 1/4)	116
第87图	S B 5 出土遺物実測図13 (縮尺 1/4)	117
第88图	S B 5 出土遺物実測図14 (縮尺 1/4)	119
第89图	S B 5 出土遺物実測図15 (縮尺 1/4)	120
第90图	S B 5 出土遺物実測図16 (縮尺 1/4)	121
第91图	S B 5 出土遺物実測図17 (縮尺 1/4)	122
第92图	S B 5 出土遺物実測図18 (縮尺 1/4)	123
第93图	S B 5 出土遺物実測図19 (縮尺 1/4)	124
第94图	S B 5 出土遺物実測図20 (縮尺 1/4)	125
第95图	S B 5 出土遺物実測図21 (縮尺 1/4)	126
第96图	S B 5 出土遺物実測図22 (縮尺 1/4)	127
第97图	S B 5 出土遺物実測図23 (縮尺 1/4)	128
第98图	S B 5 出土遺物実測図24 (縮尺 1/4 · 1/2)	129
第99图	S B 5 出土遺物実測図25 (縮尺 1/3 · 1/2)	130
第100图	S B 7 測量図 (縮尺 1/50)	131
第101图	S B 7 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	132
第102图	S B 1 測量図 (縮尺 1/50)	133
第103图	S B 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/4 · 1/3 · 1/2)	134
第104图	S B 3 測量図 (縮尺 1/50)	135
第105图	S B 3 出土遺物実測図 (縮尺 1/4 · 1/3 · 1/2)	136
第106图	S B 8 測量図 (縮尺 1/50)	

第107図	S B 9・10測量図 (縮尺1/50)	138
第108図	S B 4 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/50・1/3)	139
第109図	S B 11・12測量図 (縮尺1/50)	140
第110図	S B 13測量図 (縮尺1/50)	141
第111図	S B 14・S K 1・2 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/50・1/4)	143
第112図	S K 3 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/50・1/4・1/3)	144
第113図	S K 4・5・6 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/50・1/4・1/3)	145
第114図	S K 7・8 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/50・1/4)	147
第115図	S K 9・10 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/50・1/4・1/3)	148
第116図	S K 11・12 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/50・1/4)	149
第117図	S K 12出土遺物実測図(1) (縮尺1/4・1/3)	150
第118図	S K 12出土遺物実測図(2)・S K 13測量図 (縮尺1/50・1/4・1/3)	151
第119図	S K 14測量図 (縮尺1/50)	152
第120図	S K 14出土遺物実測図 (縮尺1/4・1/3)	153
第121図	その他の出土遺物実測図 (縮尺1/4・1/3・1/2)	155
第122図	包含層出土遺物実測図 (縮尺2/3)	156
第6章 筋違G遺跡		
第123図	調査地位位置図 (縮尺1/2,000)	181
第124図	遺構配置図・基本層位図 (縮尺1/150・1/40)	183
第125図	S B 2 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/60・1/3)	185
第126図	S B 1・3・4 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/60・1/3)	187
第127図	S D 1 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/60・1/3)	188
第128図	掘立1 測量図 (縮尺1/40)	189
第129図	掘立1 出土遺物実測図 (縮尺1/3)	190
第130図	掘立2 測量図 (縮尺1/40)	
第131図	掘立3 測量図 (縮尺1/40)	191
第132図	S E 1 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/40・1/3)	192
第133図	S E 2 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/40・1/3)	193
第134図	S K 1 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/40・1/3)	194
第135図	S K 2 測量図 (縮尺1/40)	
第136図	S K 2 出土遺物実測図 (縮尺1/3)	195
第137図	S K 5 出土遺物実測図 (縮尺1/3)	196
第138図	S P 出土遺物実測図(1) (縮尺1/3)	197
第139図	S P 出土遺物実測図(2) (縮尺1/3)	198
第140図	S P 出土遺物実測図(3) (縮尺1/3・1/2)	199
第141図	S X 1 他出土遺物実測図 (縮尺1/3)	200
第7章 筋違H遺跡		
第142図	調査地位位置図 (縮尺1/1,500)	212

第143图	調查地区剖面 (縮尺 1/80)	213
第144图	遺構配置図 (縮尺 1/200)	214
第145图	基本層位図 (縮尺 1/20)	215
第146图	S B 1 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4)	216
第147图	S B 2 測量図 (縮尺 1/60)	217
第148图	S B 2 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3・1/2)	219
第149图	S B 3 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/3・1/1)	220
第150图	S B 4 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/3)	221
第151图	S B 5 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/3)	222
第152图	S B 6 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4)	223
第153图	S B 7 測量図 (縮尺 1/60)	224
第154图	S B 7 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3・1/1)	225
第155图	S B 8 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/3)	226
第156图	S B 9 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/3)	227
第157图	S B 10 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4)	228
第158图	S B 11 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4)	229
第159图	S B 12 測量図 (縮尺 1/60)	230
第160图	S B 12 出土遺物実測図① (縮尺 1/4・1/3)	231
第161图	S B 12 出土遺物実測図② (縮尺 1/3・1/1)	232
第162图	掘立 1 測量図 (縮尺 1/80)	233
第163图	掘立 2 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/80・2/3)	234
第164图	掘立 3 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/80・1/4)	235
第165图	掘立 4 測量図 (縮尺 1/80)	236
第166图	掘立 5 測量図 (縮尺 1/80)	237
第167图	掘立 6 測量図 (縮尺 1/80)	238
第168图	掘立 7 測量図 (縮尺 1/80)	239
第169图	掘立 8 測量図 (縮尺 1/80)	240
第170图	掘立 9 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/80・1/4)	241
第171图	掘立 10 測量図 (縮尺 1/80)	242
第172图	掘立 11 測量図 (縮尺 1/80)	243
第173图	S D 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3)	244
第174图	S K 3 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・2/3)	246
第175图	S K 30 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/3)	247
第176图	S K・S P 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3)	248
第177图	包含層出土遺物実測図 (縮尺 2/3・1/1)	249
第178图	樹不明出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3・1/2)	250
第 8 章 筋違 I 遺跡		
第179图	調査地位側図 (縮尺 1/1,500)	266

第180図	調査地区割図 (縮尺 1/400)	266
第181図	基本層位図 (縮尺 1/40)	267
第182図	遺構配置図 (縮尺 1/150)	268
第183図	S B 1 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・2/3)	269
第184図	掘立 1 測量図 (縮尺 1/80)	270
第185図	S K 2 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/3・2/3)	272
第186図	出土地点不明遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3・2/3)	273

第9章 川附遺跡

第187図	調査地位置図 (縮尺 1/1,000)	280
第188図	基本層位図 (縮尺 1/10)	281
第189図	遺構配置図 (縮尺 1/100)	283
第190図	弥生時代の遺構配置図 (縮尺 1/100)	284
第191図	S D 5 測量図 (縮尺 1/80)	285
第192図	S D 5 出土遺物実測図1) (縮尺 1/4)	286
第193図	S D 5 出土遺物実測図2) (縮尺 1/4)	287
第194図	S D 5 出土遺物実測図3) (縮尺 1/4)	288
第195図	S D 5 出土遺物実測図4) (縮尺 1/4)	289
第196図	S D 5 出土遺物実測図5) (縮尺 1/4)	290
第197図	S K 5 測量図 (縮尺 1/20)	291
第198図	S K 5 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	292
第199図	S K 7 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/20・1/4)	294
第200図	S K 10 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/20・1/4)	295
第201図	S K 11 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/20・1/4)	
第202図	S K 6 測量図 (縮尺 1/20)	296
第203図	包含層出土遺物実測図1) (縮尺 1/4)	298
第204図	包含層出土遺物実測図2) (縮尺 1/4)	299
第205図	中近世の遺構配置図 (縮尺 1/100)	301
第206図	S K 1 測量図 (縮尺 1/20)	302
第207図	S K 2 測量図 (縮尺 1/20)	303
第208図	S K 3 測量図 (縮尺 1/20)	304
第209図	包含層出土遺物実測図3) (縮尺 1/4)	306
第210図	包含層出土遺物実測図4) (縮尺 1/3)	308
第211図	包含層出土遺物実測図5) (縮尺 1/3)	309
第212図	包含層出土遺物実測図6) (縮尺 1/3)	310
第213図	包含層出土遺物実測図7) (縮尺 1/3)	312
第214図	包含層出土遺物実測図8) (縮尺 1/3・1/4)	313

第10章 調査の成果と課題

第215図	福音寺地区の竪穴式住居址分布図 (縮尺 1/1000)	327
-------	-----------------------------	-----

表 目 次

第1章 はじめに	
表1 調査地一覧	1
第4章 筋違E遺跡	
表2 竪穴式住居址一覧	90
表3 掘立柱建物址一覧	
表4 土坑一覧	
表5 溝一覧	91
表6 SB1出土遺物観察表 (土製品・石製品)	
表7 SB2出土遺物観察表 (土製品・石製品)	92
表8 掘立柱遺物観察表 (土製品)	
表9 SK6出土遺物観察表 (土製品)	93
表10 SK7出土遺物観察表 (土製品)	
表11 SK9出土遺物観察表 (土製品・石製品)	94
表12 SK出土遺物観察表 (土製品)	95
表13 SX1出土遺物観察表 (土製品)	
表14 包含層出土遺物観察表 (土製品)	
第5章 筋違F遺跡	
表15 竪穴式住居址一覧	157
表16 掘立柱建物址一覧	
表17 土坑一覧	
表18 SB5出土遺物観察表 (土製品・石製品・鉄製品)	158
表19 SB7出土遺物観察表 (土製品)	170
表20 SB1出土遺物観察表 (土製品)	171
表21 SB3出土遺物観察表 (土製品・石製品)	172
表22 SB4出土遺物観察表 (土製品)	
表23 SK1出土遺物観察表 (土製品)	173
表24 SK2出土遺物観察表 (土製品)	
表25 SK3出土遺物観察表 (土製品)	
表26 SK4出土遺物観察表 (土製品・石製品)	174
表27 SK5出土遺物観察表 (土製品)	

表28	S K 6 出土遺物観察表 (土製品).....	174
表29	S K 8 出土遺物観察表 (土製品)	
表30	S K 9 出土遺物観察表 (土製品)	
表31	S K 10 出土遺物観察表 (土製品・石製品).....	175
表32	S K 11 出土遺物観察表 (土製品)	
表33	S K 12 出土遺物観察表 (土製品・石製品)	
表34	S K 14 出土遺物観察表 (土製品).....	176
表35	柱穴とその他の出土遺物観察表 (土製品・石製品・鉄製品).....	177
表36	表採品出土遺物観察表 (石製品).....	178

第6章 筋違G遺跡

表37	竪穴式住居址一覽.....	202
表38	掘立柱建物址一覽	
表39	土坑一覽	
表40	溝一覽	
表41	井戸一覽	
表42	S B 2 出土遺物観察表 (土製品).....	203
表43	S B 1 出土遺物観察表 (土製品)	
表44	S D 1 出土遺物観察表 (土製品)	
表45	掘立1 出土遺物観察表 (土製品)	
表46	S E 1 出土遺物観察表 (土製品).....	204
表47	S E 2 出土遺物観察表 (土製品)	
表48	S K 1 出土遺物観察表 (土製品).....	205
表49	S K 2 出土遺物観察表 (土製品)	
表50	S K 5 出土遺物観察表 (土製品).....	206
表51	S P 出土遺物観察表 (土製品・石製品)	
表52	S X 1 他出土遺物観察表 (土製品).....	208

第7章 筋違H遺跡

表53	竪穴式住居址一覽.....	253
表54	掘立柱建物址一覽	
表55	土坑一覽.....	254
表56	溝一覽.....	255
表57	S B 1 出土遺物観察表 (土製品)	
表58	S B 2 出土遺物観察表 (土製品)	
表59	S B 3 出土遺物観察表 (土製品・ガラス製品).....	256
表60	S B 4 出土遺物観察表 (土製品)	
表61	S B 5 出土遺物観察表 (土製品).....	257
表62	S B 6 出土遺物観察表 (土製品)	
表63	S B 7 出土遺物観察表 (土製品・ガラス製品)	

表64	S B 8 出土遺物観察表 (土製品)	
表65	S B 9 出土遺物観察表 (土製品)	258
表66	S B 10 出土遺物観察表 (土製品)	
表67	S B 11 出土遺物観察表 (土製品)	
表68	S B 12 出土遺物観察表 (土製品・ガラス製品)	
表69	掘立 2 出土遺物観察表 (石製品)	259
表70	掘立 3 出土遺物観察表 (土製品)	
表71	掘立 9 出土遺物観察表 (土製品)	
表72	S D 1 出土遺物観察表 (土製品)	260
表73	S K 3 出土遺物観察表 (土製品・石製品)	
表74	S K 30 出土遺物観察表 (土製品)	261
表75	S K・S P 出土遺物観察表 (土製品)	
表76	包含層出土遺物観察表 (石製品)	262
表77	出土地点不明遺物観察表 (土製品)	

第 8 章 筋違 I 遺跡

表78	竪穴式住居址 一覧	275
表79	掘立柱建物址一覧	
表80	溝 一覧	
表81	土坑 一覧	
表82	S B 1 出土遺物観察表 (土製品・石製品)	
表83	S K 2 出土遺物観察表 (土製品・石製品・ガラス製品)	
表84	S K・S P 出土遺物観察表 (土製品)	276
表85	出土地点不明遺物観察表 (土製品・石製品)	

第 9 章 川附遺跡

表86	土坑 一覧	315
表87	溝 一覧	
表88	性格不明遺構 一覧	
表89	S D 5 出土遺物観察表 (土製品)	316
表90	S K 5 出土遺物観察表 (土製品)	319
表91	S K 7 出土遺物観察表 (土製品)	
表92	S K 10 出土遺物観察表 (土製品)	
表93	S K 11 出土遺物観察表 (土製品)	
表94	包含層出土遺物観察表 (土製品・石製品)	320

巻頭図版 1. 筋違 F 遺跡 S B 5 出土の壺形土器

2. 筋違 C 遺跡出土の赤色顔料付着遺物

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

昭和59年度～平成元年度に、福音寺町482以下表1に示す8ヶ所の地点について、開発事業者より、当該地の宅地開発に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課に提出された。

申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「114 松木遺物包含地」と「116 川附遺物包含地」内にあり、周地の遺跡内にある。

また、申請地一帯は福音寺遺跡と呼称され、古墳時代中～後期の集落地帯であったことが、発掘調査で明らかとなっている（森 光晴 1983）。

よって、松山市教育委員会文化教育課では、確認願いが申請された地点について、同地点の埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認するために、順次事前調査（試掘調査）を実施した。試掘調査の結果、各地で弥生時代から中世の遺構と遺物、包含層を確認した。

試掘調査の結果を受け、松山市教育委員会文化教育課と申請者及び関係者は、遺跡の取り扱いについて協議を行った。協議の結果、遺跡が消失する地点に対し、当該地域における弥生時代から中世にわたる集落構造解明を主目的とした緊急調査を実施するものとした。調査は松山市教育委員会文化教育課及び財団法人生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、申請者ならびに関係者各位の協力のもと、昭和60年度から平成元年度の間に終わった。

なお、野外調査終了後は、松山市立埋蔵文化財センターにて財団法人生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、案内調査及び報告書刊行事業を実施した。

【文献】

森 光晴 1983 『国道11号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』松山市教育委員会

表1 調査地一覧

遺跡名	所在地	面積(m ²)	期 間
筋違C遺跡	松山市福音寺町480-1、 482-1、483-1	550	昭和60年4月15日～同年4月25日
筋違D遺跡	松山市早岡町621-1	70	昭和62年5月6日～同年5月12日
筋違E遺跡	松山市福音寺町448-1	1,502	昭和63年2月6日～同年4月4日
筋違F遺跡	松山市福音寺町426、427-4	1,509	昭和63年9月6日～同年12月27日
筋違G遺跡	松山市福音寺町455-1、456	1,546	平成元年5月24日～同年7月8日
筋違H遺跡	松山市福音寺町428、429-4	1,540	平成元年7月4日～同年9月17日
筋違I遺跡	松山市福音寺町429-1	462	平成元年10月2日～同年11月11日
川附遺跡	松山市福音寺町567-11	495	昭和63年11月14日～同年12月26日

2. 刊行組織〔平成8年3月28日現在〕

松山市教育委員会	教育長	池田 尚郷
生涯教育部	部長	渡辺 和彦
	次長	三好 俊彦
文化教育課	課長	松平 泰定
財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	田中 誠一
	事務局長	一色 正士
埋蔵文化財センター	所長	河口 雄三
	次長	田所 延行
	調査係長	田城 武志
	調査主任	栗田 正芳（文化教育課職員）
	調査員	栗田 茂敏
		梅木 謙一
		宮内 慎一
		山本 健一
		武正 良浩

3. 環 境

1) 立 地

松山平野は、愛媛県の中央部、瀬戸内海に突き出した高縄半島の東側のつけね部分にある。平野は、高縄山に水源を発した河川により形成された沖積平野である。福音寺地区は平野の中央部にあり、川附川、堀越川、小野川などの大小河川に囲まれるようである。集落地は微高地になっており、弥生時代より居住地及び耕作地として栄えてきたところである。東には古代の遺跡として知られる来住・久米の遺跡群がある。

2) 歴史的環境

福音寺周辺には、数多くの遺跡がある。以下、時代別に主たる遺跡を記述する。

先土器時代

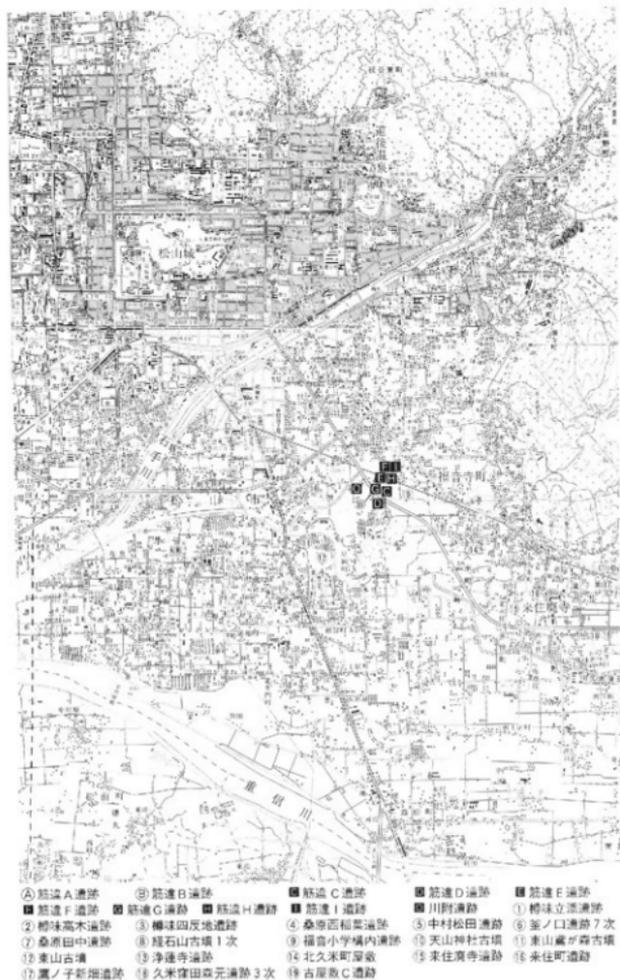
東山宮ヶ森古墳の調査よりナイフ形石器（サヌカイト）、天山天王が森遺跡よりナイフ形石器（安山岩）、釜ノ口遺跡よりナイフ形石器（チャート）と矢頭器が出土している。遺構の検出はない。

近年、福音寺町の北にある桑原地区ではA T火山の一次堆積層が検出され、先土器時代の遺跡の発見が期待されることである。

縄文時代

当地区には資料は未だなく東接する来住台地上に後期の遺跡がある。久米窪田森元遺跡では、土器片約40点が検出された土坑があり、集落が展開していたことが知れる。

晚期資料には、南久米片廻り遺跡2次調査出土の土器があげられる。朱塗りの壺と刻目凸帯を有する深鉢が出土している。



第1図 福寿寺地区と周辺遺跡 (S=1:50,000)

弥生時代

前期末から中期初頭に比定される遺物は来住台地上に多数みられる。来住V遺跡、来住庵寺18次、久米高畑遺跡22・23次からは溝が検出され、集落区画の溝が台地上に存在していたことが明らかとなっている。

後期では福音寺地区の東半部を占める福音小学校構内遺跡からは、燵棺、溝、区画溝、多量の土器壺りが検出されており、集落の様相が明らかとなってきている。

古墳時代

前期に比定されるものは稀少で、中期以降、特に5世紀後半から6世紀前半の資料が多い。集落は、福音小学校構内遺跡で塚穴式住居址と掘立柱建物が100棟あまり検出されている。墳墓は、天山や東山などの独立丘陵上に多くの古墳があり、東山古墳群にみられるようにはやくより群集墳が造営されている。水田は未だ検出されていないが、農群具が竹の下地区で多数出土していることより、福音寺地区の麓高地と天山等の独立丘陵間にある低湿地帯に存在しているものと思われ、今後の調査が待たれるところである。

古代

来住台地上には官衙遺構と寺院跡があり、一段低い福音寺地区には居住城があると推察される所である。近年の淨蓮寺遺跡3次調査では、当該期の建造物が検出されており、福音寺地区東部は注目される地域である。

中～近世

天山、土塙山等の独立丘陵は合戦の場として知られ、現在も「旗立て」「登りたて」等の地名があり当時をうかがわせている。

〔文献〕

- 西尾幸博編 1987『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会
 瓦尾幸博編 1989『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
 沼田義徳編 1991『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会、松山市立埋蔵文化財センター
 赤小塚一編 1984『久米高畑遺跡-3次調査地-』松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 赤小塚一・立正広済 1995『福音小学校構内遺跡-弥生時代編-』松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 小笠原好彦編 1979『来住庵寺』松山市教育委員会
 上田 真樹 1991『来住庵寺』松山市教育委員会、松山市立埋蔵文化財センター
 赤小塚一編 1992『来住・久米地区の遺跡』御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 沼田幸博編 1993『来住庵寺遺跡』松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 赤小塚一編 1994『来住・久米地区の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第2章

筋違C遺跡



第2章 筋違C遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1985（昭和60）年4月、国道11号沿線の福音寺町において中古車展示場造成中に遺物の出土がみられたとの連絡が松山市教育委員会（以下、市教委）になされた。現地は松山市の指定する周知の包蔵地、「福音寺遺物包蔵地」内にあって、1974（昭和49）年に国道11号バイパス関連遺跡として調査された福音寺筋違A・B遺跡の隣接地にあたる。市教委は当面の造成中止を要請し、遺構・遺物の分布範囲の確認につとめた。この結果、該当地内の2箇所において顕著な遺構の検出がみられたため、遺跡の取り扱いについて原因者と協議、これらの部分を中心とした約500m²の記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなった。

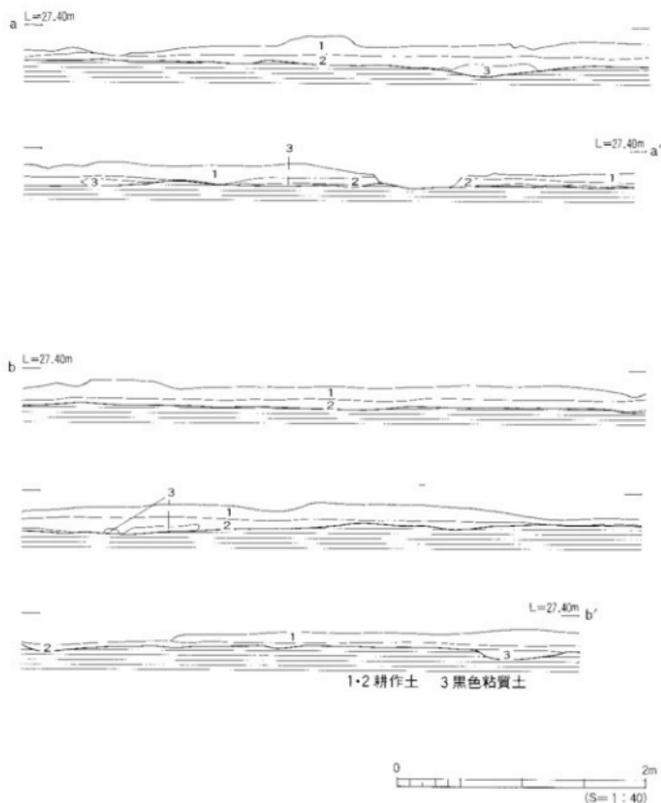
調査は市教委が主体となり、以下の組織で同年4月15日から25日までの実働11日の期間で実施された。

(2) 調査組織

調査主体	松山市教育委員会	
	教育長	西原多喜男
	参事	松原 重雄
	教育次長	井出 治巳
	文化教育課	
	課長	伊賀 俊輔
	課長補佐	坪内 晃幸
	第二係長	大西 輝昭
	主任	西尾 幸則
調査担当	調査員	池田 學 松村 淳 栗口 茂敏
調査地	松山市福音寺町480-1、482-1、483-1	
調査面積	500m ²	
調査期間	1985（昭和60）年4月15日～1985（昭和60）年4月25日	

2. 層位 (第2図)

調査地周辺は、北東方向から南西方向への緩傾斜をなす微高地を開削した水田地帯となっており、調査地はこの微高地の南西端に近い部分にあたる。20cm前後の水田耕作土下層には包含層である黒色粘質土が10cm程度残っている部分もあるが、そのほとんどは削平され、耕作土直下で遺構面たる黄色シルトに達するのがおおかたの部分である。遺構はこの黄色シルトを切り込んだ状況で検出され、遺構は黒色粘質土で埋まっている。下図の断面計測位置は第4図に示されている。



第2図 調査地2区土層図



第3圖 調査地位圖

3. 遺構と遺物



第4図 遺構全測図

調査は、便宜上南方の調査区を1区、排土置き場を挟んだ北方の調査区を2区として行った。検出された遺構には、両調査区あわせて竪穴住居址4棟、掘立柱建物2棟、土壇4基、そのほか性格不明の竪穴状遺構などがあり、弥生時代後期から古墳時代中・後期、平安時代と各時代にわたっている。以下では、これらの遺構とこれに伴う遺物について各時代ごとに両調査区まとめて記述する。なお、1区においては平安時代の掘立柱建物構築の際にかなり広範囲な整地が行われているものと思われ、各遺構の覆土中に各時代の遺物が混雑状態で検出されている。調査段階では、整地層と遺構埋土との判別が困難であった。そこで、本報告段階で遺構のプランや、床面直上出土の遺物との年代的な整合関係を模索して遺構に伴う遺物を抽出し、その他のものについては包含層出土遺物として一括して扱った。

3. 遺構と遺物

(1) 弥生時代

1) 竪穴住居

SB-1 (第5図、図版1・2)

1区南端で、その2/3程度が検出された円形住居で、直径4.8m、後述する平安時代の掘立柱建物SB-4に切られている。遺存状況の良い北部には周壁溝が残り、立ち上がり10cm程度を測る。径20~30cm、深さ30~40cmの支柱穴は、柱間2~2.2mの4本柱の構成である。床面中央部にはSB-4の支柱に切られた焼土を伴う窪みがあり、炉址と考えられる。赤色顔料(水銀朱)付着の土器片数点を出土している。後期後半の遺構である。

SB-1 出土遺物 (第6・7図、図版7)

甕(1~3) 口頸部片3点が出土している。1は口縁部、2は頸~胴部のいずれも小片で、両者ともに内面に朱の付着がみられ、付着部位を網点で表現している。2は鉢としたほうがよいかもしれない。胎土に1~2mm大の石英・長石粒を多く含み、雲母片も少量含まれている。内外面ともに粗く磨かれ、内面の磨きが深い部分に朱が特に多く残存している。3は復元口径12.7cmを測る口頸部小片で、口端部は軽く面取りされている。

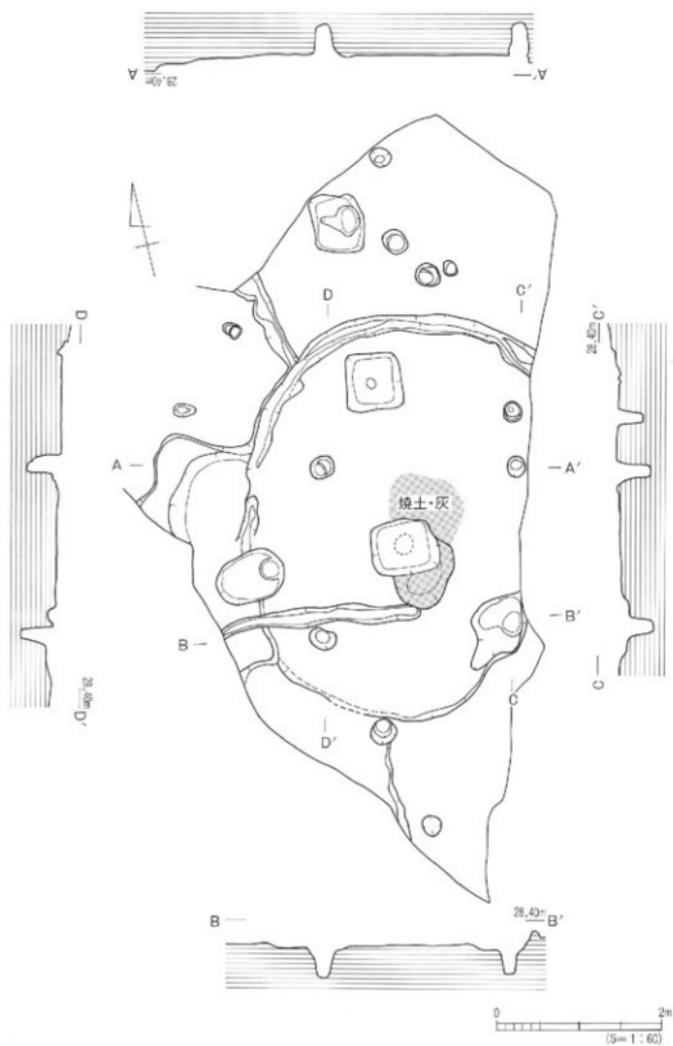
鉢(4~8) 断面台形状に突出した底部から外上方に若干内湾しながら立ち上がる4~6のようなものと、甕の下半部と同形態で、丸底あるいはコイン大の平底から内湾して立ち上がるもの、7・8がある。8の底部外面には植物の葉脈圧痕がある。

壺(9~13) 口縁部には、太い頸部から短く外上方に開く9と、複合口縁の10が出土している。底部には、突出した平底の11・12や平底の13がある。11は外面に粗い刷毛目調整を施されるが、底部外面も同種の工具により調整されている。

高坏(14~16) 14は脚部片、4条の沈線とその下位に円孔を持つ。坏部15は、内湾した坏体部から稜を介して口縁部が外反する。復元口径26.2cmを測る。16は所謂エンタシス状の脚柱部を持つ形態の高坏である。

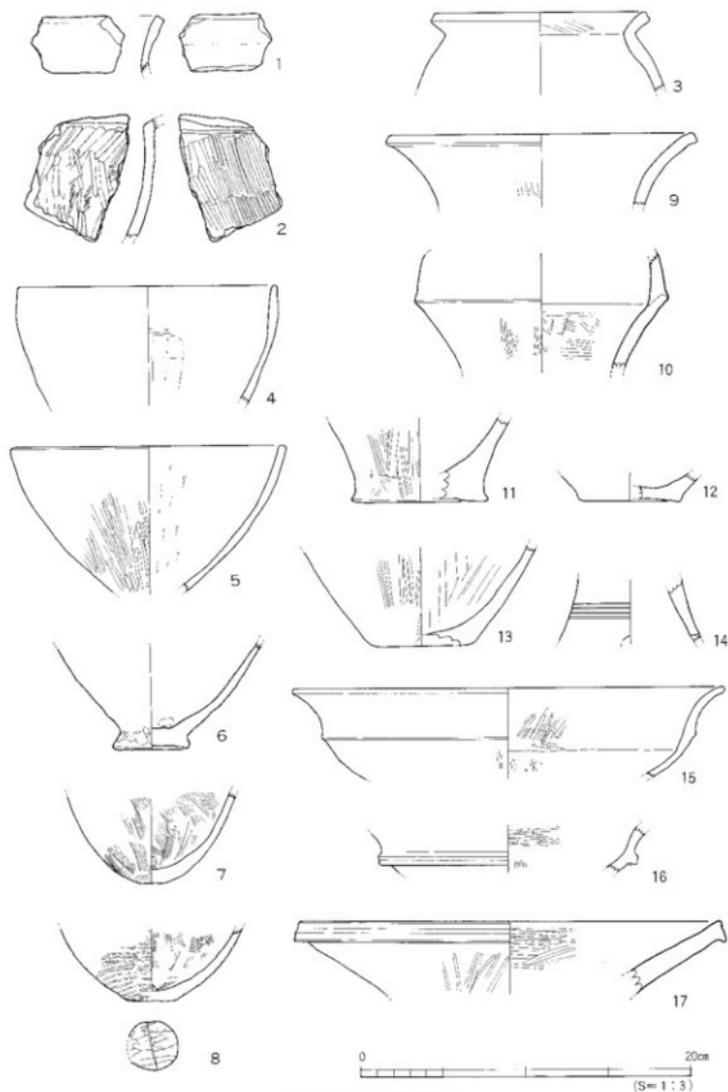
器台(17) 復元口径25.5cmを測る受部片、胎土は精良で内外面ともに磨かれるが、外面のほうが疎である。口端部周縁は横撫でされている。

筋迹 C 遺跡



第5図 竪穴住居SB-1

遺構と遺物

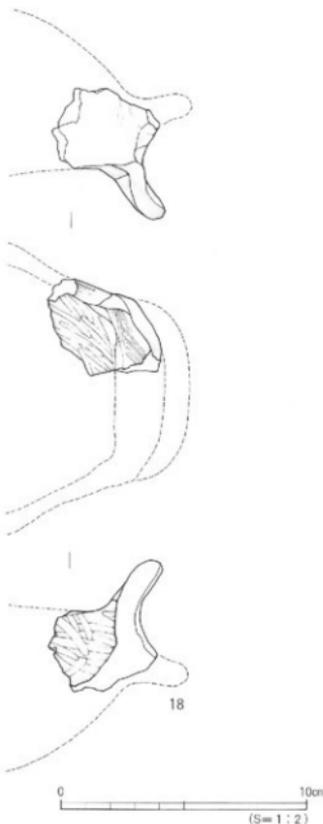


第6図 SB-1 出土遺物(1)

鉢 (18) 「広片口三耳鉢」あるいは「把手付広片口皿」と呼称されている容器の尾部立ち上がり付近の片である。内面は入念にへら磨きされ、この内面や立ち上がり部内外面、側縁部上端面に朱が付着している。

SB-5 (第8図、図版5)

2区において検出された唯一の竪穴住居址で古墳時代の土坑SK-1や古墳時代後期以降の掘立柱建物SB-6に切られている。遺存状況が悪く、現況は不定形のプランをなしているが、本来直径6m程度の円形をなしていたものと思われる。SB-6の柱穴に切られているが中央部に炉址と考えられる窪みと焼土のひろがりが出された。周壁からやや内側寄りの床面に軽1m前後の浅い溝状の窪みが巡っている。貼り床の確認はできなかったが、おそらく貼り床面直下に施された地業で、湿気抜きのような機能を意図した施設であったものと思われる。主柱穴は図示された6本によって構成される。後期後半の遺構である。



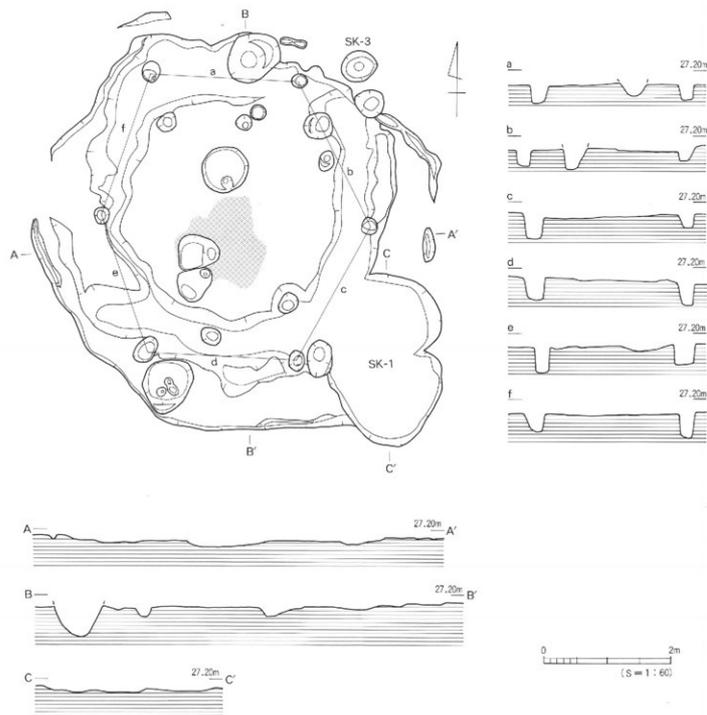
第7図 SB-1出土遺物(2)

SB-5出土遺物 (第9図、図版7)

壺 (19~22) 口縁部には19のように広口になるものと、20のように直口の形態をなすものがある。21は肩部の片、胴頭部の境には二枚貝による列点文を施されている。22の底部は、20のような口縁部形態の壺、あるいは長頸壺に伴う底部と考えられる。

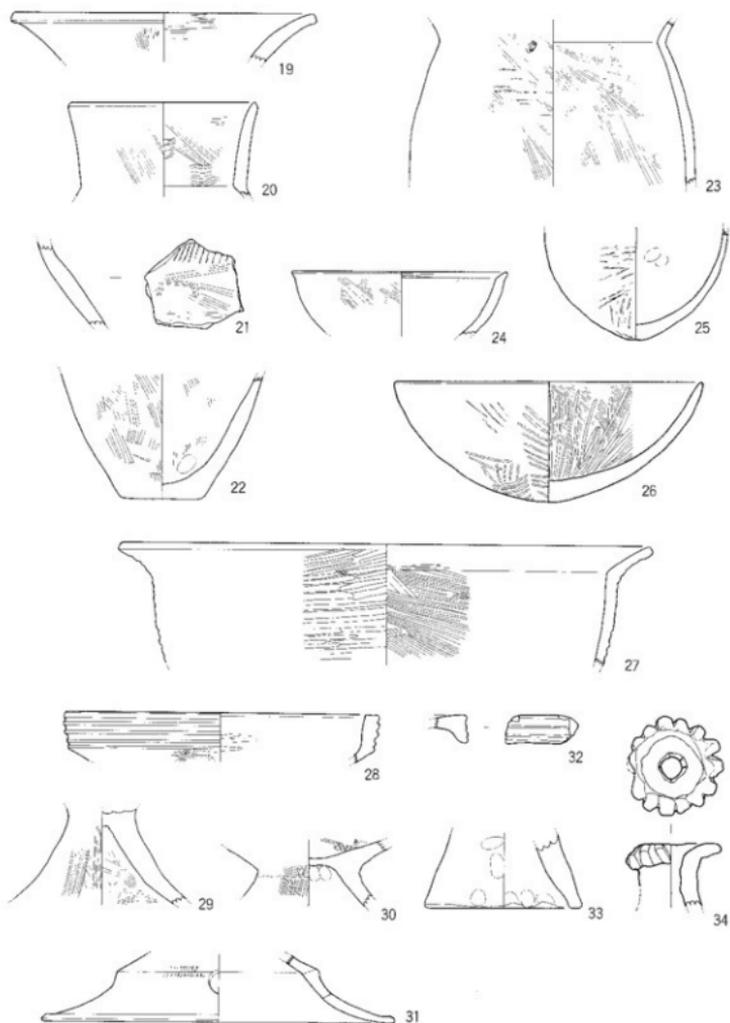
甕 (23) 頸~胴部の片、外面はタタキの後刷毛目調整が施される。頸部には糊圧痕が認められる。

鉢 (24~27) 24~26は椀皿状の形態をなすもの、27は菱形のものである。このうち25は炉址と考えられる窪みからの出土である。26は器高7.4cm、口径18.5cmで、外面はタタキ、内面は磨かれている。



第8圖 竪穴住居 SB-5

遺構と遺物



第9図 SB-5出土遺物

0 20cm (S=1:3)

24の内面も明瞭ではないが磨かれているものと思われる。27は復元口径32cmと大型で、外面のタタキは口縁部の外面にまで及んでいる。

高坏 (28~31) 28はI縁部の片、外面に棒状工具による凹線状の施文を4条施される。坏体部の内外面を磨かれている。ラッパ状に開く脚柱部の片29・30のうち30は付付壺もしくは鉢のようなものになるかもしれない。31は、エンタシス状の柱部形態をなす高坏の襷部片で、復元口径21cmを測る。外面稜の部分に半截竹管による3段の列点文を施され、この部分に円孔を持つ。

器台 (32) 口縁部の小片で、端面に凹線状の浅い窪み(以下、このような施文を擬凹線と呼ぶ)が3条巡る。受部上面はヘラ磨きされている。

支脚 (33・34) 裾部33と受部34の2点がある。34は筒状のものの端部を大きく折り曲げ、端面を花卉状に刻んでいる。

2) 土 坑

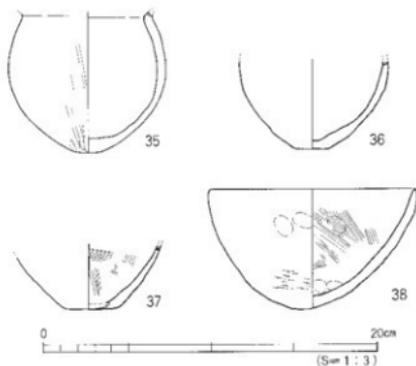
SK-3 (第8図、図版7)

2区のSB-5北に近接して検出された長径0.6m、短径0.5mの円形に近い穴で、深さ0.15mの楕円鉢状の断面形状を呈する。後期後半の遺構である。

SK-3出土遺物 (第10図)

甕 (35~37) 小型のもの3点の出土がある。35はきわめて小さな平底をなす寸づまりの器型で、口縁部を欠失している。器面は内外面ともに平滑で、明瞭ではないが磨かれているようである。36も同様の器型になるものと思われる。37はこれらより若干広いめの底部を持つ。

鉢 (38) 器高7.4cm、口径12.3cmの碗形のもので、外面をタタキの後撫で、内面は刷毛目の後撫でられている。



第10図 SK-3出土遺物

3) 不明遺構

SX-1 (第11図、図版5)

1区の北端で一部が検出された不整形の堅穴で、5世紀代まで下る土師器壺1点が混在するほかは、弥生時代後期前半の遺物を主として出土しており、該期の遺構と判断される。

SX-1出土遺物 (第12図)

弥生土器

甕 (39~41) 39は口縁部の小片、L端部をわずかに拡張し、端面に擬凹線を2条巡らせている。

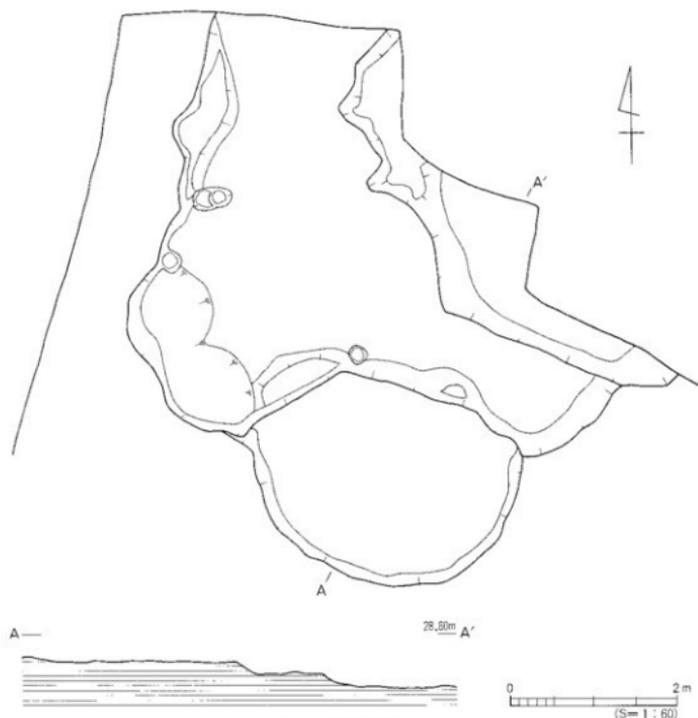
40は復元口径13.7cmを測る口頸部片で、器型のわりにやや長めの口縁部が外上方に緩やかに開き、頸部以下の外面に粗い刷毛目を施される。底部11はやや突出した平底の形状をなす。

壺 (42~54) 口縁部42は端部を上方にわずかに拡張したものである。頸部~胴部の片には様々な施文を持つものがある。43はヘラによる羽状文を頸胴部の境に持つものであるが、甕になるかもしれない。44は半截竹管による刺突文が2段にわたって施されるもの、45は竹管とヘラ描斜線文を組み合わせたもので、長頸壺の頸部下端にあたる部位と考えられる。底部には大型品から中・小型品の各サイズのものがあり、すべてが平底になるものである。

高坏 (55・56) 55は口縁部の小片で、端部上面に5条の擬凹線を持つ。56は復元口径15.8cmの脚部片、裾部の中位に円孔がみられる。

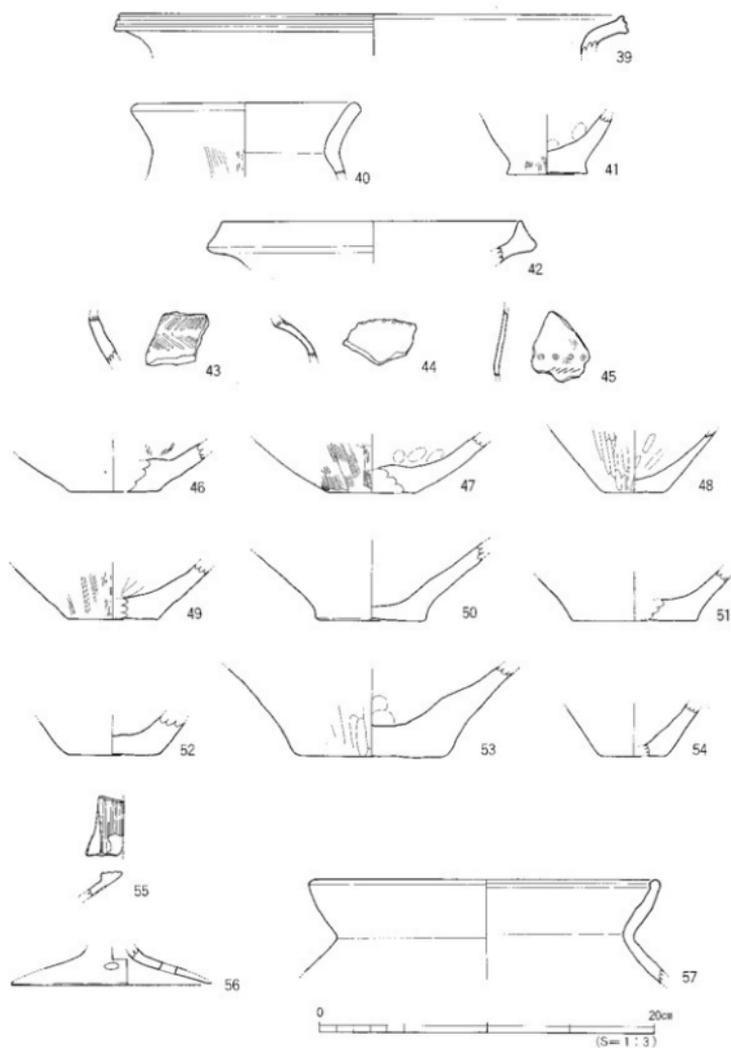
土師器

甕 (57) 復元口径20.4cmの口頸部片、口縁部は若干内湾しながら外上方に立ち上がり、端部を内側にわずかに肥厚させ、丸く収めている。



第11図 不明遺構SX-1

筋違 C 遺跡



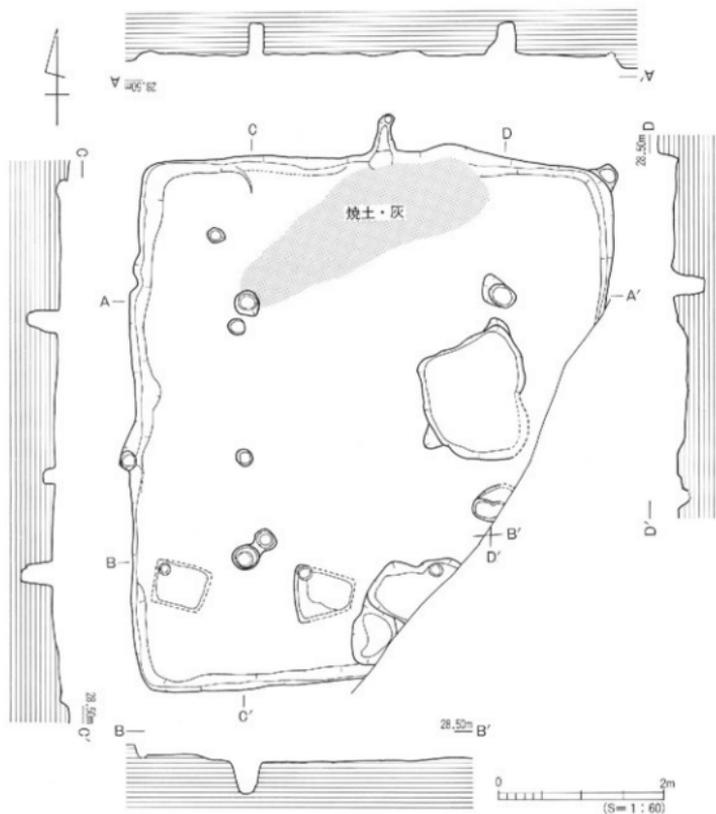
第12図 SX1出土遺物

(2) 古墳時代

1) 竪穴住居

SB-2 (第13図、図版2・3)

1区SB-1の北5mで検出された長方形プランの住居址で、南北6.6m、東西5.5mを測る。4本柱の主柱穴構造をなす。北辺中央部で焼土塊や灰のまとまりが検出されており、カマドを持っていたことがわかるが、構造体として把握することはできなかった。この部分から燻道の一部と思われる浅



第13図 竪穴住居SB-2

い溝が、北方向に0.5m伸びている。平安時代掘立柱建物SB-4に切られており、この建物構築の際にかなり広範囲の造成がなされたものと考えられ、住居址埋土中に弥生時代後期の遺物やSB-4に伴う土師器の類が含まれているが、この住居に伴うものは床面直上あるいはカマド周辺で出土した5世紀末の須恵器・土師器であると判断される。

SB-2 出土遺物 (第14-17図、図版8・9)

須恵器

坏 (58-63) 破片で、坏・高坏の別が不明なものを坏に含めると、蓋4点、身2点の出上がある。蓋58は口縁部をわずかに欠くがほぼ完形品で、器高4.9cm、口径12.2cmを測る。天井部と口縁部の境にそれほど高くはないが、鋭い稜が巡る。口縁部は段状をなす。外面の回転ヘラ削りは、時計方向、天井部の2/3以上の部分に施される。59は器高4.7cm、復元口径11.9cmで稜は58に比べると突出している。口縁部は面をなす。天井部ヘラ削りはやはり、2/3以上の部分に及ぶ。60は、復元口径13.5cm、灰白色の甘い焼成のものである。口縁部の処理は、明瞭な段というよりも撫で窪みに近い。61は歪みのため、口径や器高にはやや曖昧な部分がある。外面の稜は若干鋭さに欠ける。口縁部は窪みを持った面をなす。

身62は口径11.2cm、口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は窪みを持った面となる。体部ヘラ削りは時計方向で、受部の下位1cm程度の部分まで及んでいる。63は小破片のため、口径には若干無理があるかもしれないが、62と同様の形態の身である。

有蓋高坏 (64-71) 64は器高6.1cm、口径12.3cm、中窪みの扁平なつまみを持つ。外面の稜は鋭く、口縁部は段をなす。天井部外面は逆時計方向にヘラ削りされ、その範囲は天井部の2/3を越える。65は64と同大のつまみである。

身には復元完形品67のほか、身1個体、脚4個体の出土がある。67は短脚三方透孔を持つもので、器高10cm、脚高5.1cm、口径10.6cm、脚裾径8.8cmを測る。口縁部は若干内傾して立ち上がり、端面は内斜した面をなす。脚根上位には、低く鈍い突帯が1条巡る。66は、坏底部に透孔の切り取り痕が一方分だけ確認され、高坏であることがわかる。口縁は67よりも内傾が強く、端面の処理は面と段との中間的な印象のものである。坏底部のヘラ削りは66が逆時計、67が時計方向である。脚根のうち透孔は68・70が三方向、破片のため確実ではないが、69も三方向、71は四方向の可能性もある。裾部の形態には図示されたようなバリエーションがあり、69が最もシャープさに欠ける印象がある。71は67と基本的には同形態であるが、突帯は高く端面の処理もシャープである。

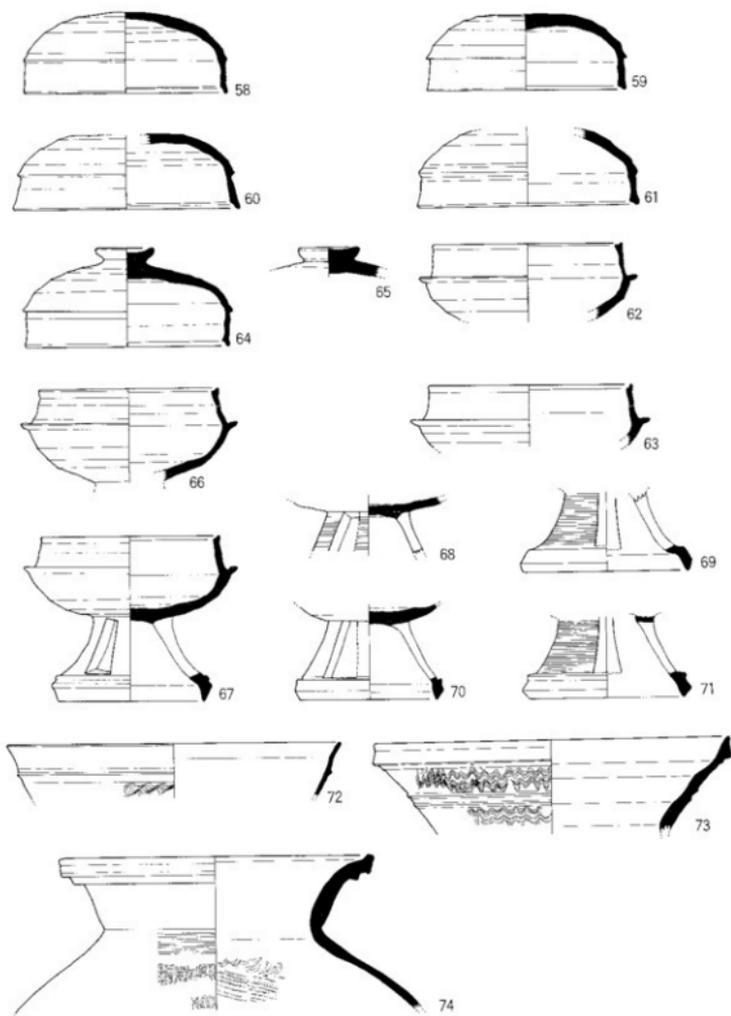
無蓋高坏 (72) 小片のため、口径に不安定な部分があるが、一応復元口径19.8cmとなる。坏体部に稜を持った突帯を一条、その下位に櫛歯状文の施文が確認される。

甕 (73・74) 73は口頸部片、頸基部で折損している。復元口径21.3cmを測る。口縁下を1条の、頸部中位を2条の凸線ともいふべき低い突帯で区別し、突帯下の空間を櫛歯状文で埋めているが、施文そのものはやや粗雑である。74は口径18.9cmの甕、口縁部直下に1条の突帯が巡る。口縁は上方に水平な面をなしている。

土師器

鉢・甔 (75-82) 甔と特定できる底部片81が1点、79や80の把手片も甔のものであろうが、口縁部片のみではいずれとも判別できないため一括して扱う。復元完形品77は器高18.8cm、口径31cmを測

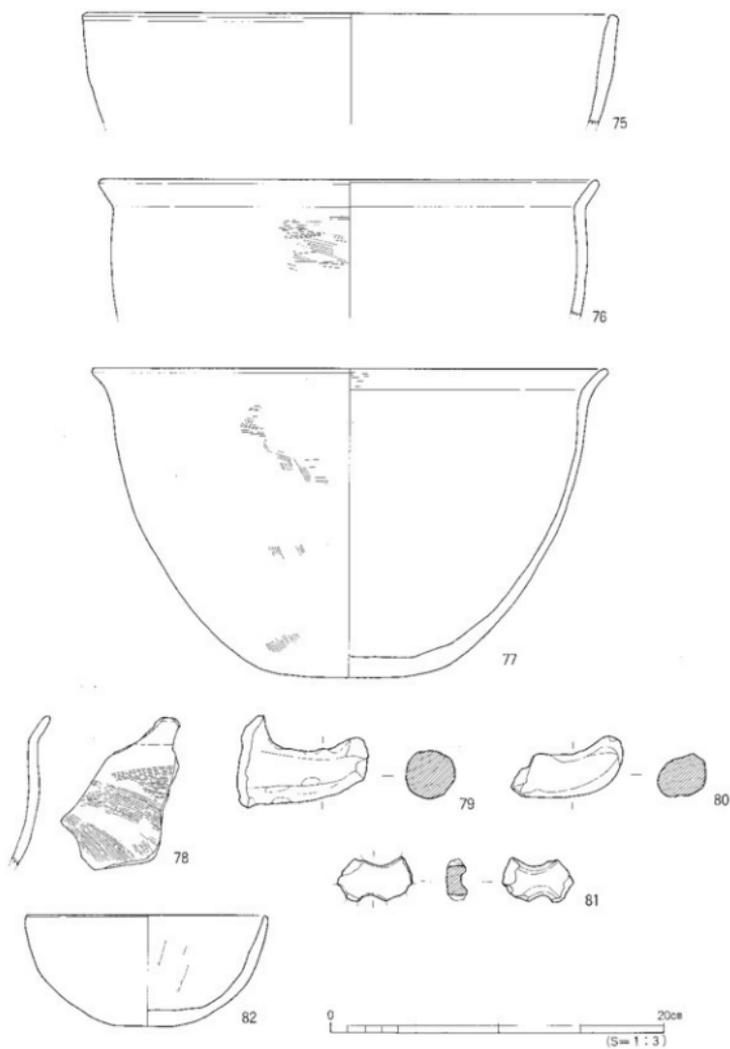
遺構と遺物



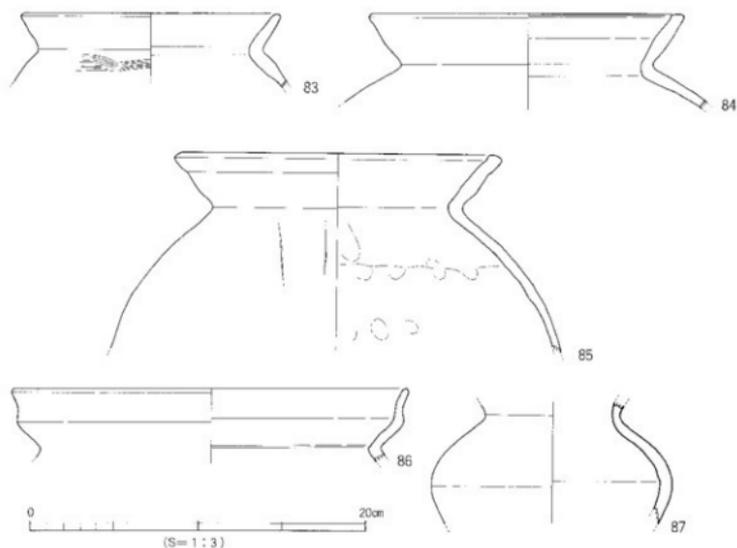
0 20cm
(S=1:3)

第14図 SB-2出土遺物(1)

筋違 C 遺跡



第15図 SB-2出土遺物(2)



第16図 SB-2出土遺物(3)

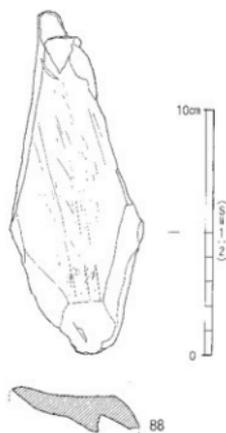
る。やや丸みを帯びた平底からわずかに内湾しながら胴部が外上方に開き、口縁部を短く折り曲げている。胴部外面に刷毛目がわずかに看取される。胎土は精良である。同様の口縁部形態をとるものに76・78があり、75は直11の口縁部形態となるものである。82は器高6.7cm、口径14.5cmの碗形をなす完形品である。

甕 (83-86) 83-85の口縁部は、頸部でくの字状に折れ曲がり外上方に開くもので、端部を丸く収める83と84・85のように鈍い面を持つものがある。85の頸部下方の外面にはヘラ状工具を用いた縦方向の2条の線刻による記号がある。86は、口縁部中位で鈍い稜を持って屈曲する口縁部片である。これら甕の胎土は、先ほどの鉢や後述の壺のように精良なもの異なり、砂粒を多く含んでいる。

壺 (87) 胴部最大径4.3cmを測る胴-頸部片で、外面の肩部には須恵器のカキ口に似た横撫で痕がある。

石製品

砥石 (88) 粘板岩製の砥石破損品である。



第17図 SB-2出土遺物(4)

SB-3 (第19図、図版4)

1区でSB-2の北に近接して検出された方形住居址で、一辺5.6m前後を測る。SB-2と同様、北辺中央部にカマドを持つ。柱間3mの4本柱の主柱穴構成で、立ち上がり部分に周壁溝が巡るが、南辺中央部に2.5mの間隔で大きく途切れる部分があり、入り口に相当するものと考えられる。

SB-3出土遺物 (第18図、図版10)

上飾器

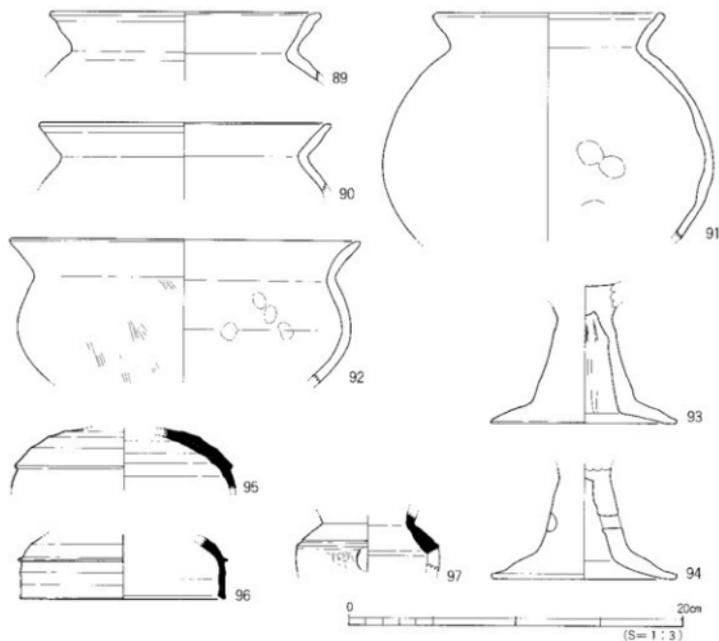
甕 (89~91) 頸部でくの字状に屈曲し、外上方に開く口縁部を持つ甕で、球形の胴部となる。最も遺存のよい91はカマド前面部の出土、口径14cm、胴部最大径19.8cmを測る。

鉢 (92) 甕を押しつぶしたような形態のもので、復元口径20.7cm、胴部最大径19.5cmを測る。

高坏 (93・94) 脚部2点の出土がある。両者ともに内面に稜を持って裾部が水平に近く開くもので、94は柱部中位の2方向に円孔を施される。

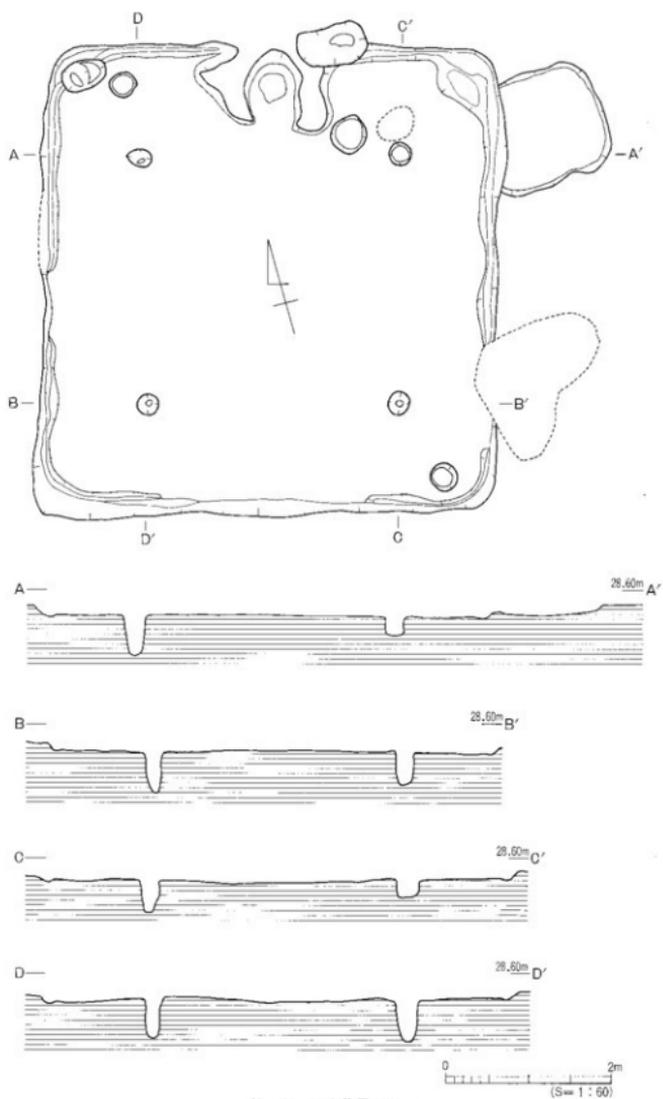
須恵器

坏 (95・96) 蓋片2点が出土している。いずれも天井部と口縁部の境に稜を持つが、96は突帯の



第18図 SB-3出土遺物

遺構と遺物



第19図 竪穴住居SB-3

ように突出しており、門端部は面をなす。

図(97) 頸部から胴部の小片で、比較的頸部の短い器型になるものと考えられる。胴部の凹線と楕円状施文具による列点文や胴部の円孔が確認できる。

2) 掘立柱建物

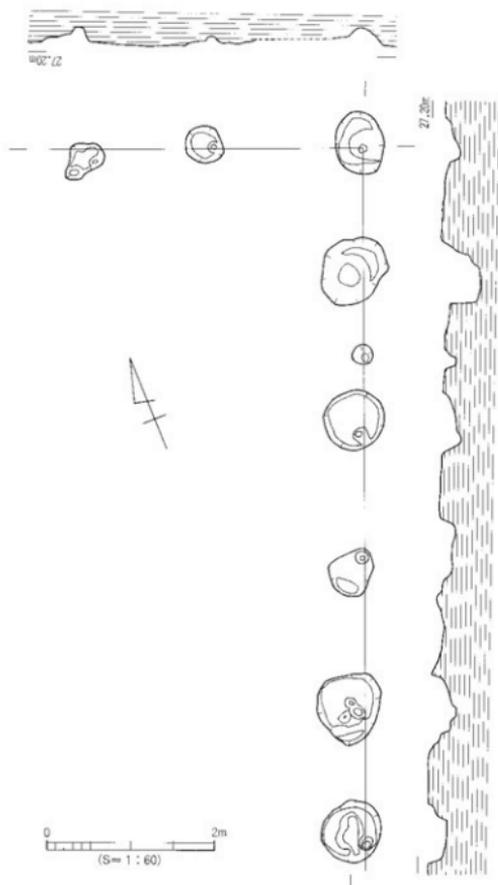
SB-6 (第20図、図版6)

2区で弥生時代の竪穴住居 SB-5 を切って検出された建物で、主軸を磁北から約21° 東にとる。当地の磁北は真北から約6° 西へ振れているので、正方位から約15° 東に振れていることになる。検出されているのは、建物の北東コーナーを中心とした北辺と東辺の一部である。桁行を南北方向にとり、5間分、梁行2間分の検出であるが、本調査区周辺の該期の掘立柱建物の規模としては、桁行5～6間まで、梁行3間までにおさまる例がほとんどといってよく、この建物も3×5間、あるいは3×6間の建物である可能性が高い。柱穴は0.8m程度の円形で、柱間は1.6mを前後する値である。柱穴から弥生土器、須恵器の破片が出土しており、年代の上限を6世紀後半におくことができる。

SB-6 出土遺物 (第21図)

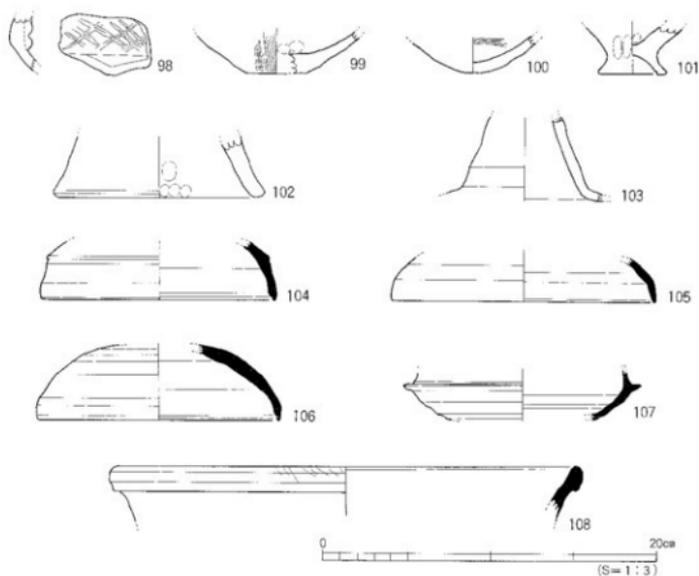
弥生土器

壺(98・99) 98は突帯を持つ頸部片、突帯上をヘラ描の斜格子文で刻んでいる。99は平底の中・小型品の底部。



第20図 掘立柱建物SB-6

遺構と遺物



第21図 SB-6出土遺物

甕・鉢 (100・101) 101は上げ底の鉢底部、100は甕・鉢いずれかの丸底をなす底部である。

支脚 (102) 裾部の小片である。なお、以上の遺物はすべて弥生時代後期に属するものである。

土師器

高坏 (103) 脚柱部の小片である。

須恵器

坏 (104-107) 104-106は蓋片、104では天井部と口縁部の境に凹線に近い鋭い稜がある。105・106は稜を持たないものであるが、105の口径には若干曖昧な部分がある。復元口径14.4cmの106の口縁部内面には非常に浅く不明瞭な凹線状の空みが巡る。身107は受部径14.3cmを測る。

甕 (108) 玉縁状をなす口縁部の破片で、口端部に擦痕がみられる。

(3) 平安時代

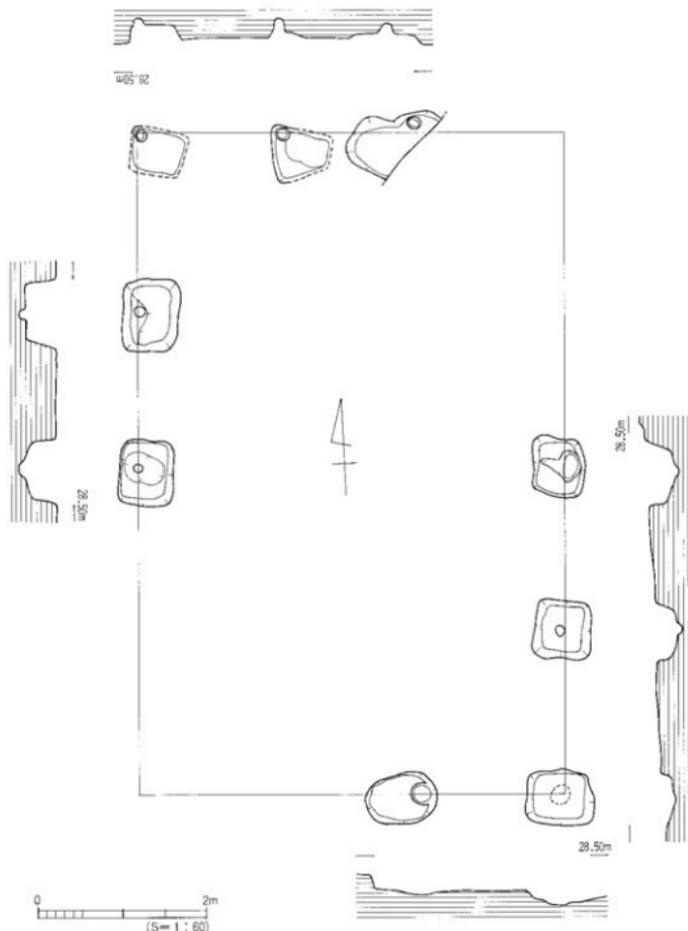
1) 掘立柱建物

SB-4 (第22図)

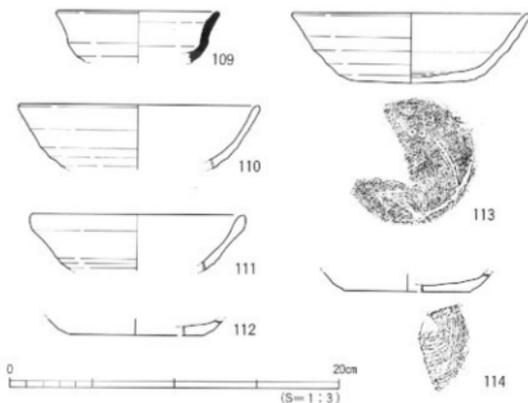
1区の堅穴住居SB-1・2を切る建物である。桁行を南北方向のほぼ磁北にとっており、建物の

筋違 C 遺跡

すべてが検出されたわけではないが、規模は桁行4間、柱間2m前後で総長8m、梁行3間、柱間1.65m前後、総長5mに復元できる。柱穴は一辺0.7-0.8mの方形、あるいは長方形のもので構成される。先述のように、整地層を確認できたわけではないが、建物の周辺から弥生土器や土師器が混濁状態で出土している。柱穴からの出土遺物との整合関係から、以下に述べる遺物のうち土師器がこの建物に伴うものと判断される。概ね12世紀後半頃の遺構であろう。



第22図 掘立柱建物SB-4



第23図 SB-4出土遺物

SB-4 出土遺物 (第23図、図版10)

須恵器

坏 (109) 柱穴出土、復元口径9.9cmの身で、外反する口縁部を持つ。7世紀前半代のものであろう。

土師器

坏 (110~114) 底部回転糸切りの坏の一群で、全形を知ることができるのは柱穴出土の113で、その他は建物周辺の出土である。113は器高4.3cm、口径14.4cm。底径8cmの底部からやや内湾気味の体部が外上方に立ち上がる。外面には多段撫での痕跡を残し、口端部は丸く収めている。その他の坏もほぼ同様の手法・器型になるものと思われる。

(4) その他の遺構

1) 土 坑

遺物の出土がないため、所属時期が不明な土坑が2区において3基検出されている。いずれも深さ10cm程度の遺存で、他の遺構とは異なる黒灰色の砂質土を埋土としており、年代的には下る時期のものと考えられる。

SK-1 (第8図)

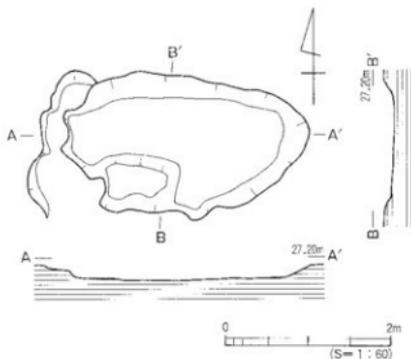
竪穴住居SB-5を切るもので、長径2.7m、短径1.8mの楕円形に近いプランをなす。

SK-2 (第24図)

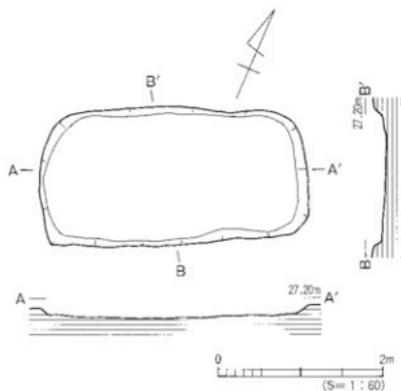
2区の北東隅で検出された。SK-1と同様の楕円形プランのもので、長径3m、短径1.7mを測る。

SK-4 (第25図)

S B-5の東に位置し、3.25×1.7mの隅丸長方形プランで、長軸を東西方向にとる。



第24図 土坑 SK-2



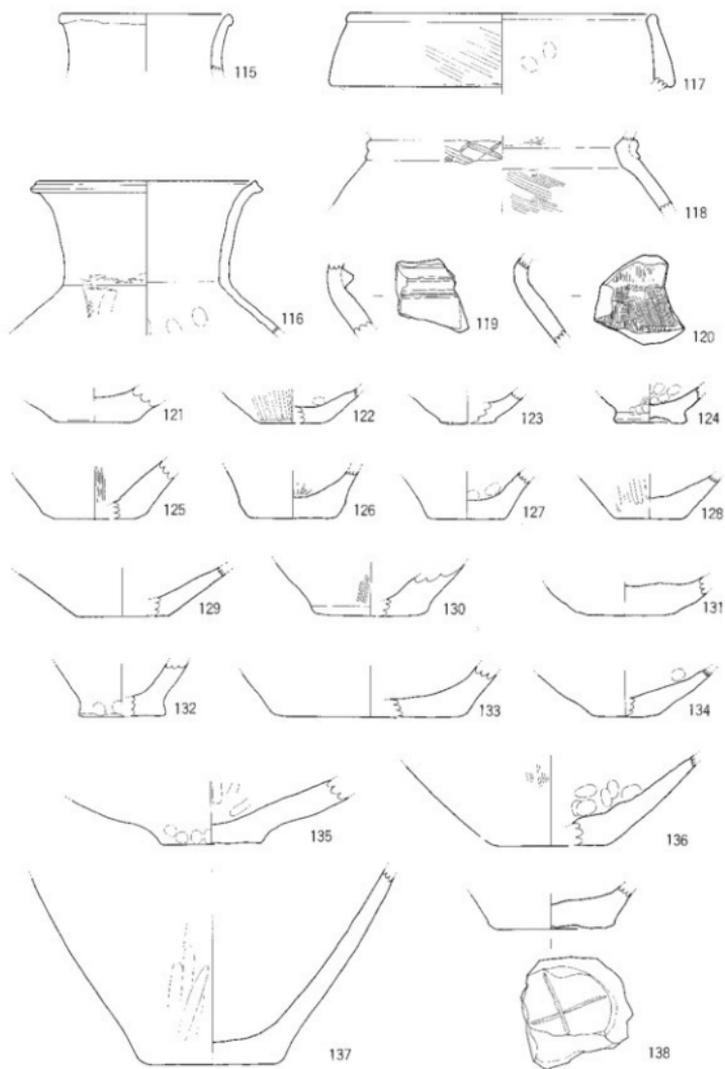
第25図 土坑 SK-4

(5) 包含層出土の遺物

弥生土器 (第26～28図、図版10・11)

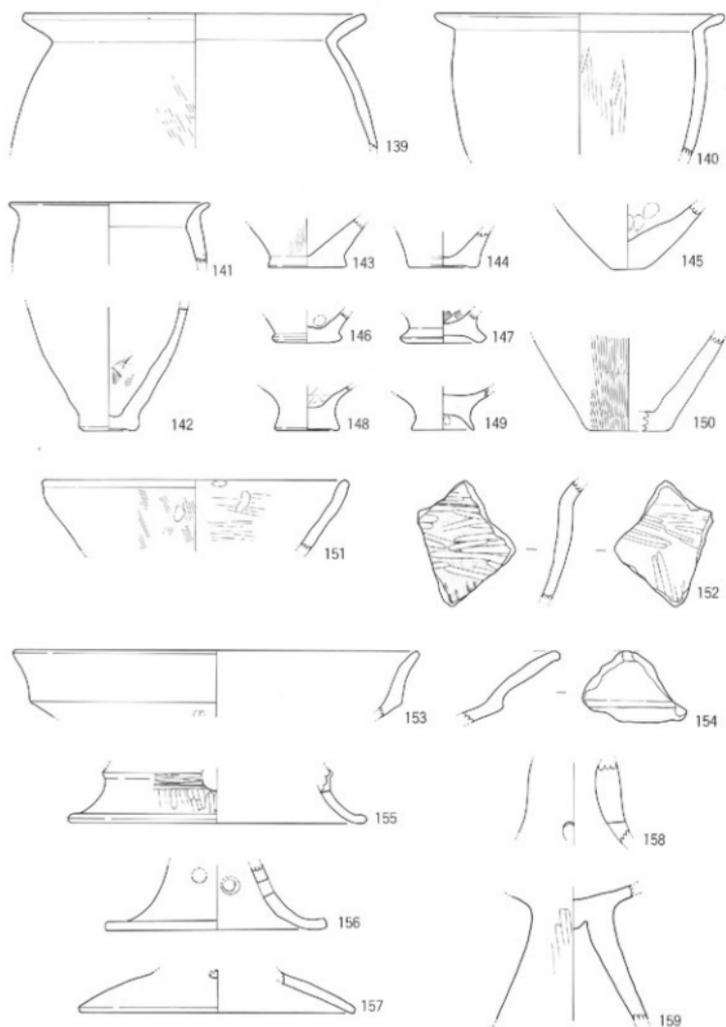
主として1区で出土しており、ほとんどそのすべてが後期の中～後半に属する。

遺構と遺物



第26図 包含層出土遺物(1)

筋溝 C 遺跡

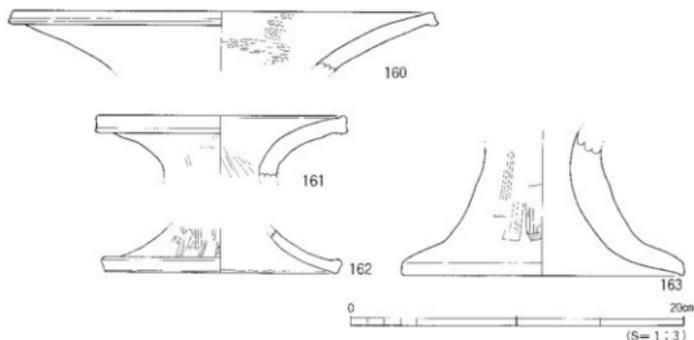


第27回 包含層出土遺物(2)

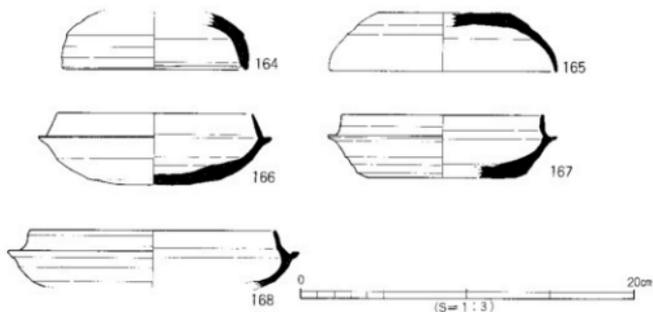
(S=1:3)

壺 (115~138) 115は直口気味の口縁部の破片で、端部を玉縁状に仕上げている。116は口径13.2cmの口頸部、直立気味の頸部から口縁部がわずかに外反する。端部は横撫でによる窪みを持った面をなす。117・118は複合口縁壺のそれぞれ口縁部と頸部片である。118の突帯上の刻みは櫛歯状工具の木口による。119・120は頸部の小片で、119の断面三角形突帯は複数条施されているようである。120の外表面には粗い刷毛目が著しい。底部には小型品から大型品までであるが、そのほとんどが単純な平底である。突出したものには121・132や135があるが前二者は鉢の底部になるかもしれない。138の外底面にはヘラ描による「+」状の記号がある。

壺 (139~150) 139は復元口径20.6cmの口頸部片、胴部最大径が口径を上回る形態で、口端部は面をなす。胴部外面には刷毛目がわずかに看取される。140は口径が胴部径を上回る。胴部内面は粗く掻き取られている。141・142は小型壺のそれぞれ口頸部、下半部の片である。底部には143~150の

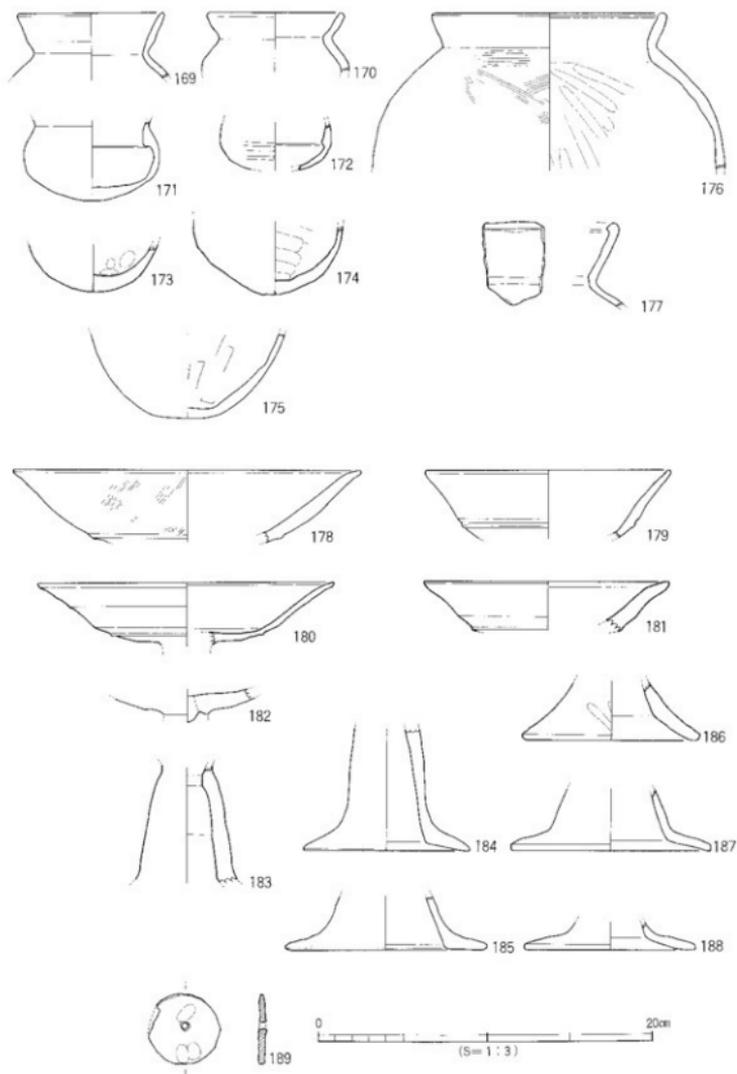


第28図 包含層出土遺物(3)



第29図 包含層出土遺物(4)

新遠 C 遺跡



第30圖 包含層出土遺物(5)

ようなものがあるが、150のように壺と判別がつかかねるものもある。また、147～149のような形態のものは鉢の底部かもしれない。

鉢 (151・152) 151は口縁部が単純に外上方に直線的に開くもの、152は口縁部が外反するものである。152は内外の器表面を磨かれており、内面に水銀朱の付着がみられる。

高坏 (153～159) 坏部片2点と脚部片5点の出土がある。坏部153・154は両者ともに坏体部の稜を介して口縁部が外反するものである。脚部片3点のうち、155はエンタシス状柱部形態の高坏脚部で、稜を介して大きく外反する裾を持つ。稜の直下には浅く細い沈線が6条施され、この部位に焼成前の円孔を穿たれている。裾部の円孔は156～158にもみられるが、このうち157は短く細い柱部と椀状の坏部形態になる高坏と考えられる。

器台 (160～162) 内外面の調整によって、受部と裾部とを判別している。160・161が受部、162が裾部である。いずれの器とも端部周縁を横撫でされ、端面はわずかに窪んだ面をなしている。

支脚 (163) 復元裾径17cmを測る下半部の片である。

須恵器 (第29回)

蓋 (164) 短頸蓋の蓋と思われる復元口径11.1cmの片、天井部と口縁部の境に鈍い稜を持つ。

坏 (165～168) 蓋1点と身3点がある。蓋165の天井部は、ロクロからの切り離しの後軽く撫でられるだけで、削りは行われていない。このような手法の特徴は身167にもみられ、それぞれ口径は若干大きいもののTK-217の範疇におさまる遺物と考えられる。166・168はこれらよりも遅る時期のもので、166の胎土には小指先大の長石礫が混入している。

土師器 (第30回)

壺 (169～175) すべて小型のもの、頸部でくの字状に屈曲し、口縁部が外上方に開くものである。169の口縁部に比べると170は短く、わずかに内湾している。底・体部は171や172と同様の丸底で扁球形をなすものと思われるが、体部と口縁部の接合には区にみられるような違いがあり、また頸部のくびれかたにも異なる部分がある。

甕 (176・177) 176は球形の胴部から短い口縁部が立ち上がるもので、復元口径14cmを測る。胴部外面は刷毛目調整、内面は頸部直下まで粗く撫でられている。177は口頸部の小片、端部は内側に肥厚する。

高坏 (178～187) 178～182は坏部の片で、器型の大小、口縁部の角度などバリエーションはあるが、いずれも坏底部との境に稜を持って開くものである。脚部も基本的には裾広がりの柱部から、内面に稜を持って裾部が開くものである。

紡錘車 (189) 弥生時代に属するものかもしれないが、胎土は土師器のものに近い。直径4.2cm、厚さ0.4cm程度と非常に薄く、一部を欠損しているが現況重量8.4gを量る。

4. 小 結

本調査では、その調査面積・期間にさまざまな制約があり、僅かに500㎡の調査実施面積であったにもかかわらず、各時期の遺構・遺物が検出されている。

これらの遺構についてまとめておくと、弥生時代では竪穴住居2棟、土坑があり、いずれも後期後半のものと考えられる。古墳時代の2棟の方形竪穴住居は、その北辺にカマドを有するもので、いずれも5世紀末のものである。堀立柱建物S B-6は、これら竪穴住居よりも下り、6世紀後半以降のものである。これらの遺構のほか、平安時代の堀立柱建物1棟や時期不明の土坑がある。

これらの遺構のありかたをみても、西方に隣接する筋違A・B遺跡や、東方直近で調査され、弥生時代後期から古墳時代にピークを持つ拠点集落と評価されている福音小学校構内遺跡での遺構のありかたに類似している。福音小学校構内遺跡では7棟の住居址と検出長140mの南北方向の区画溝や、多量の土器が投棄された土器溜まりが検出されているが、本調査の遺構群と同様の後期後半に確実に比定できるものは、構内調査地西部にあつて本調査地東方約150mと比較的接近した位置にある土器溜まりである。7棟の住居は構内調査地の北東部に集中しており、土器溜まりよりは遡る時期のものと考えられている。また、区画溝も土器溜まりの時期には埋没して機能しなくなったと考えられており、この土器溜まりはむしろ本調査の遺構群との関わりが強いものと判断されよう。本調査地と構内遺跡との間には、なお未調査の部分約100mの幅で存在しており、この部分にこれら両調査をつなぐ鍵が残されている。

古墳時代の竪穴住居2棟は、その出土遺物より5世紀末のものと考えられ、先述の福音小学校構内遺跡の遺構群とのかかわりはこの段階において最も濃密といえる。詳細は本報告を待たねばならないが、構内遺跡では少なくとも80棟を越える古墳時代の竪穴住居が検出されており、うち前期末から中期後半のものが30棟足らず、中期末～後期前半に属するものが50棟を超えると推定されており、本調査の竪穴住居の段階に集落のピークが存在している。これらのことから、本調査検出の遺構群は多少の遺構分布の濃淡はあるにせよ、同一集落の一部である可能性が高い。

また、構内遺跡では平安時代後期の遺構も溝や柱穴を中心として僅かながら検出されている。これらの遺構に伴う中心的な施設が本調査の方形柱穴の堀立柱建物S B-4となるものと考えられる。

上述の遺構のほか、遺物として注目されるものに弥生時代後期後半の竪穴住居S B-1出土の「把手付広片皿」がある。この種の土器は東は大阪から西は佐賀・福岡に至るまでの主として瀬戸内沿岸に分布するとされており、四国でも香川・徳島に分布の中心がある。本調査での出土が愛媛県では初の出土例となった。この種の土器には朱が付着することが多く、朱の使用に関する専用土器と推定されている。本調査でも、この土器はもちろん、包含層出土のその他の土器片にも朱が付着している例が9例あり、巻頭図版や図化可能なものは図として掲載している。香川県「上天神遺跡」では、この種の土器が80点あまり出土し、その他朱付着の鉢を主とした土器片が多量に出土しているにもかかわらず、石杵・石皿の類が全く出土していないことから、朱製造の最終工程に近い段階、あるいは消費段階での使用を推定されているが、本調査においても同様の出土状況にあることは注目されなければならない。なお、「把手付広片皿」の呼称は大久保徹也氏に倣った。

【文献】 大久保徹也 ほか 1995 「上天神遺跡」 香川県教育委員会・新香川県歴史文化財調査センター

第3章

スジカイ
筋違D遺跡

第3章 筋違D遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1987（昭和62）年3月、国道11号沿線の星岡町における店舗新築に伴う埋蔵文化財確認調査願が松山市教育委員会（以下、市教委）になされた。現地は松山市の指定する周知の包蔵地、「川附遺物包蔵地」内にあって、1974（昭和49）年に国道11号バイパス関連遺跡として調査された福音寺筋違A・B遺跡や、1985（昭和60）年調査の筋違C遺跡の東隣接地にあたる。同年4月30日、市教委による確認調査が実施され、柱穴数基が検出されたため、遺跡の取り扱いについて市教委と地権者の二者による協議が行われた。この結果、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

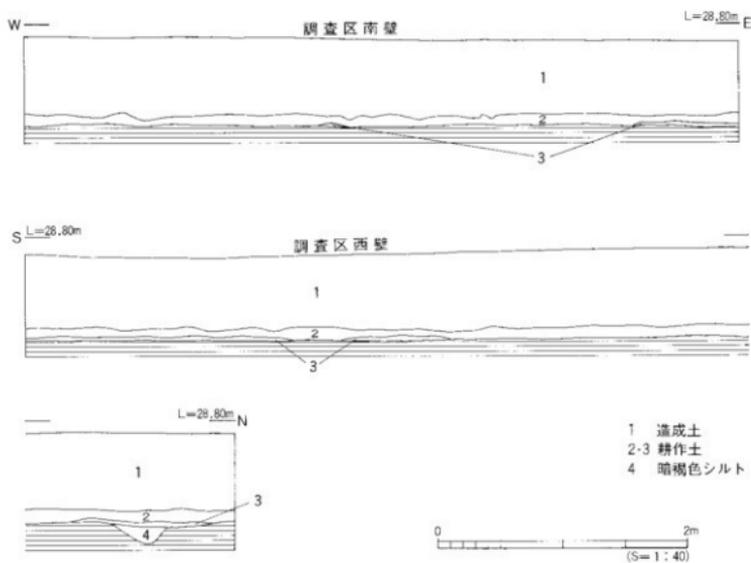
調査は市教委が主体となり、以下の組織で同年5月6日から12日までの期間で実施された。

(2) 調査組織

調査主体	松山市教育委員会	
	教育長	西原多喜男
	参事	松原重雄
	教育次長	井出治巳
	文化教育課	
	課長	伊賀俊輔
	課長補佐	大野衛治
	第二係長	戸田浩
	主任	西尾幸則
調査担当	調査員	栗田茂敏
調査地	松山市星岡町612-1	
調査面積	295.06㎡	
調査期間	1987（昭和62）年5月6日～1987（昭和62）年5月12日	

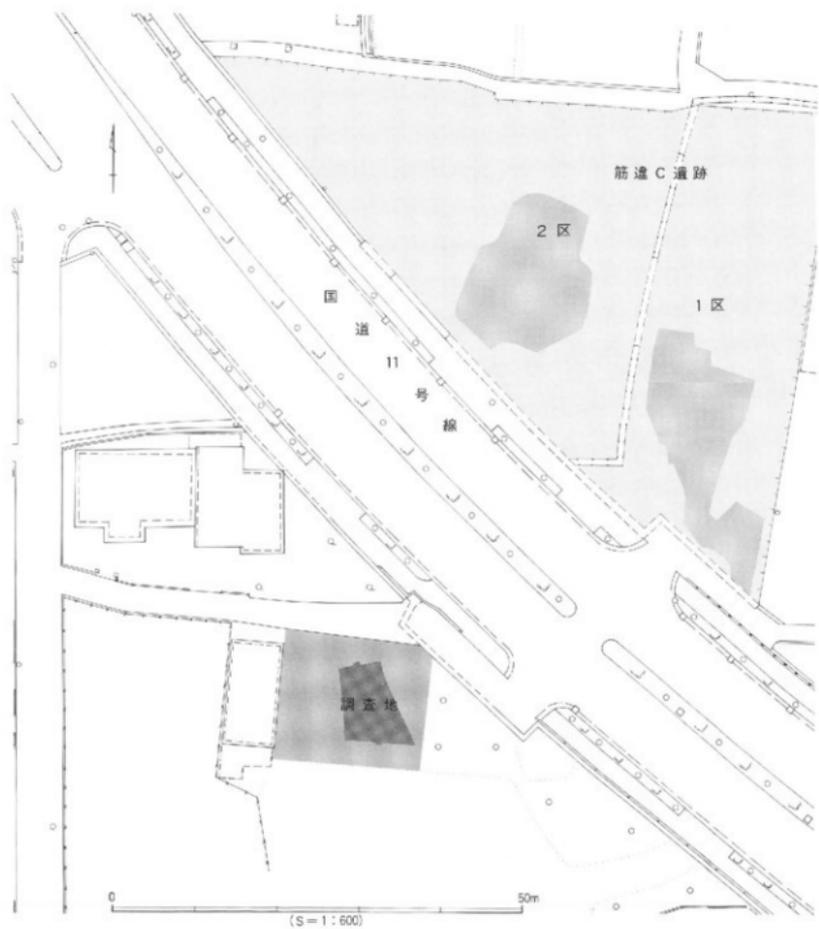
2. 層位 (第31図)

調査地は遺構面での標高27.5m、筋違C遺跡と同様、微高地の南西縁辺付近にあたる。旧水田面を約1mの客土でもって造成しており、約20cmの水田耕作土を下げると黄色シルトの遺構面にあたる。包含層ともども遺構面が剛平されている状態で、遺構自身もかなり浅いものであった。遺構の埋土は暗褐色のシルトである。



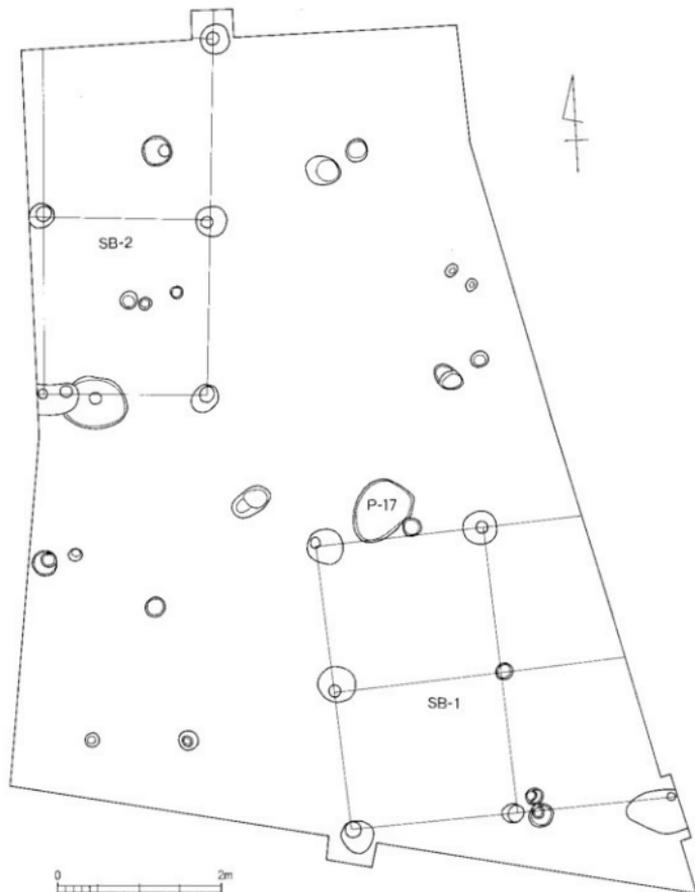
第31図 調査地土層図

層位



3. 遺構と遺物

前項で述べたように、調査地はかなり大規模な客土造成がなされている。このため排土置き場の都合もあって、300㎡近い申請面積のうち、南よりの約70㎡が実際に調査可能な範囲となった。検出されたのは2棟の掘立柱建物と、その他20基あまりの柱穴群であった。掘立柱建物のうち調査区の南東隅で検出されたものをSB-1、北西隅で検出されたものをSB-2としている。

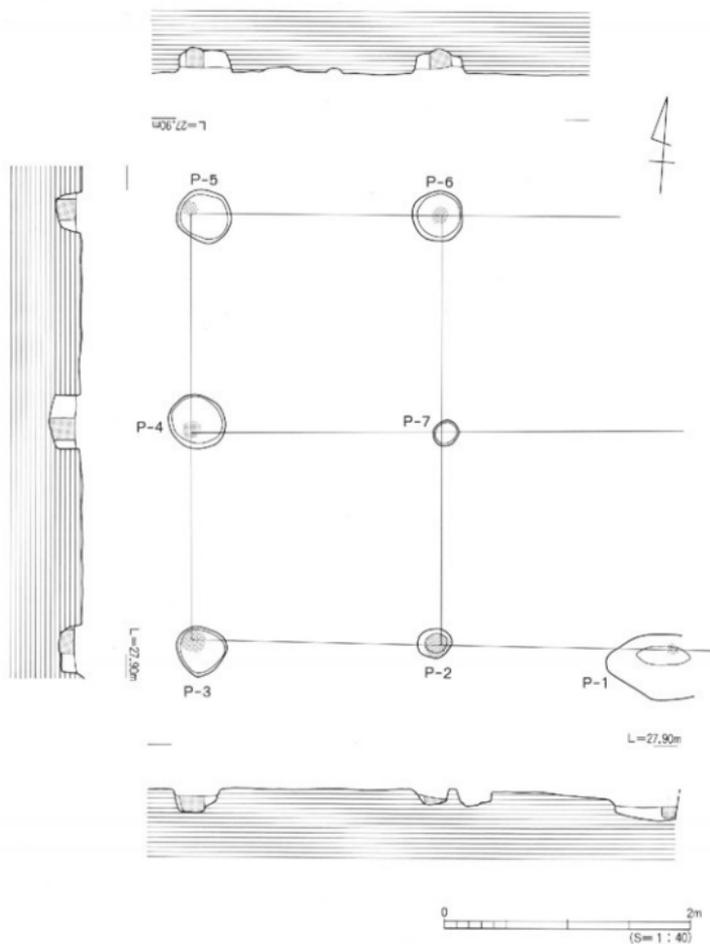


第33図 遺構全測図

1) 掘立柱建物

SB-1 (第34図、図版12・13)

軸を磁北より約4°西に振る南北棟で、2×2間分が検出されている。桁行柱間1.8m、梁行総長4m、柱間2mを測る。棟通りの柱穴は側柱よりも規模が小さく、床東柱穴と考えられる。したがって、



第34図 掘立柱建物SB-1

桁行はさらに南へ延びるものと推定される。柱穴からの出土遺物より、上限を6世紀後半におくことができる。

SB-1 出土遺物 (第35図)

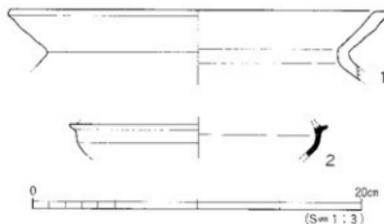
柱穴から何点かの弥生土器、土師器、須恵器の小片を出土しているが、図化可能なものはP-1出土の以下の2点の遺物のみであった。

土師器

甕(1) 口頸部片、復元口径23.2cmを測る。I縁部は上方に水平な面をなす。観察できる範囲に割れはなく、内外面ともに横撫でされている。

須恵器

坏(2) 受部の小片で、若干正確さを欠くが、復元受部径16cmを測る。



第35図 SB-1 出土遺物

SB-2 (第36図、図版13・14)

SB-1とは逆に、軸を路北から約4°東に振る。南東コーナー部だけの検出で、棟方向はいずれとも決し難い。やはり総柱の形態をとるが、建物内側の柱穴P-22が東柱になるのかどうかは不詳である。各柱穴から弥生土器、土師器、須恵器の小破片を出土しているが、図化には至らない。P-22出土の須恵器の小破片は、坏蓋あるいは身の端部の可能性が高く、端面がしっかりした平坦面をなしている。仮に坏であれば5世紀末頃のものとして推定でき、上限をこの時期におくことができる。

2) その他の遺物 (第37図)

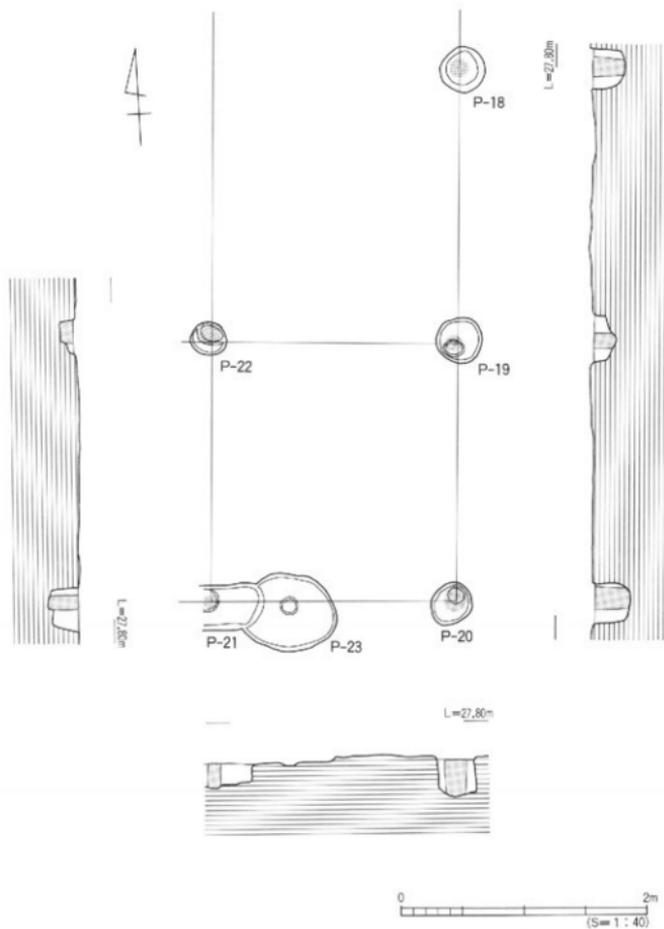
弥生土器

甕(3) P-17出土で、復元口径18.2cmの如意形に折り曲げられた口縁部形態をなす。胴部最大径20.2cmとI縁部径を凌ぐ。口縁部は丸く取められ、下端に浅い刻みを施される。胴部の内外面は磨かれている。前期前半のものである。

石製品

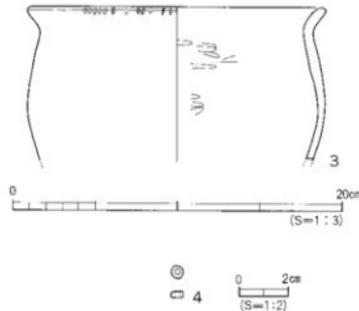
白玉(4) 調査区南東隅付近の耕作土中からの出土で、灰黒色の滑石製である。

遺構と遺物



第36図 掘立柱建物SB-2

筋違 D 遺跡



第37図 その他の出土遺物

4. 小 結

調査は僅かに100㎡足らずと非常に小規模なものではあったが、掘立柱建物2棟を検出することができた。包含層が削平され、また建物が掘立柱ということもあって年代の決め手を欠くが、僅かな遺物をてがかりにすると、概ね古墳時代後期を前後する時期のものである可能性が高い。東方200mの福音小学校構内遺跡^①の大規模な古墳時代中～後期集落は、その範囲を西に広げ、同一集落の一部と考えられる住居・建物群が筋違C遺跡で確認されている。この筋違C遺跡の状況や、本調査地とC遺跡の間に存在する筋違A・B両遺跡^②の古墳時代遺構群のありかたを総合すると、本調査検出の遺構も構内遺跡集落の一部であると判断される。さらに、調査地周辺の地形からみると、東方から緩傾斜をなしながら延びる微高地の南西縁辺付近に本調査地が位置することになり、集落の南西限に近い部分が検出されているものと考えられる。

注

- ① 武正良浩 「福音小学校構内遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991
- ② 森 光明 「国道11号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書」松山市教育委員会 1983

第4章

スジカイ
筋違E遺跡



第4章 筋違E遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1987（昭和62）年11月24日、仙波誠光氏より松山市福音寺町448-1地内における共同住宅建築にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。当地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『116 川附遺物包蔵地』内にある。同包蔵地内では、これまでに数多くの発掘調査が行われており、弥生時代から中世にかけての集落が存在していたことが近年明らかになりつつある。

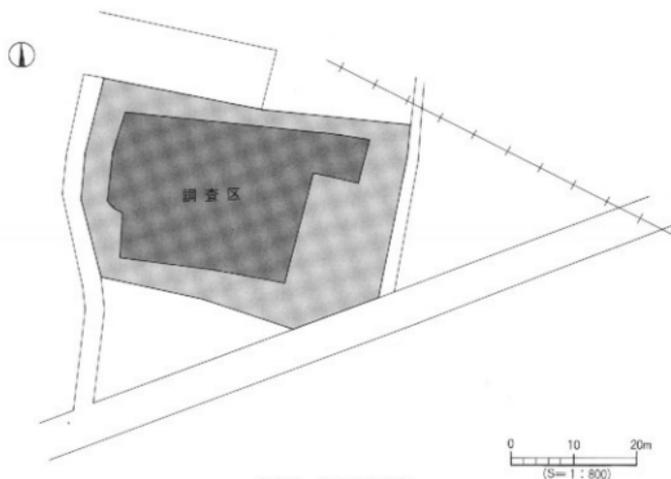
これらのことより、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため1987（昭和62）年12月に文化教育課は試掘調査を実施した。その結果、弥生土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層と遺構を検出し、当該地に遺跡が存在することが明らかになった。

この結果を受け、文化教育課・申請者の両者は遺跡の取り扱いについての協議を行い、宅地開発により失われる遺構・遺物について記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は文化教育課が主体となり申請者の協力のもと、1988（昭和63）年2月5日より開始した。



第38図 調査地位位置図

筋違E遺跡



第39図 調査地測量図

(2) 調査組織

調査地	松山市福音寺町448-1
遺跡名	筋違E遺跡
調査期間	1988(昭和63)年2月5日～同年4月4日
調査面積	1,502.32㎡
調査担当	西尾幸則(現 松山市教育委員会文化教育課) 宮内慎一

2. 層位(第40・41図)

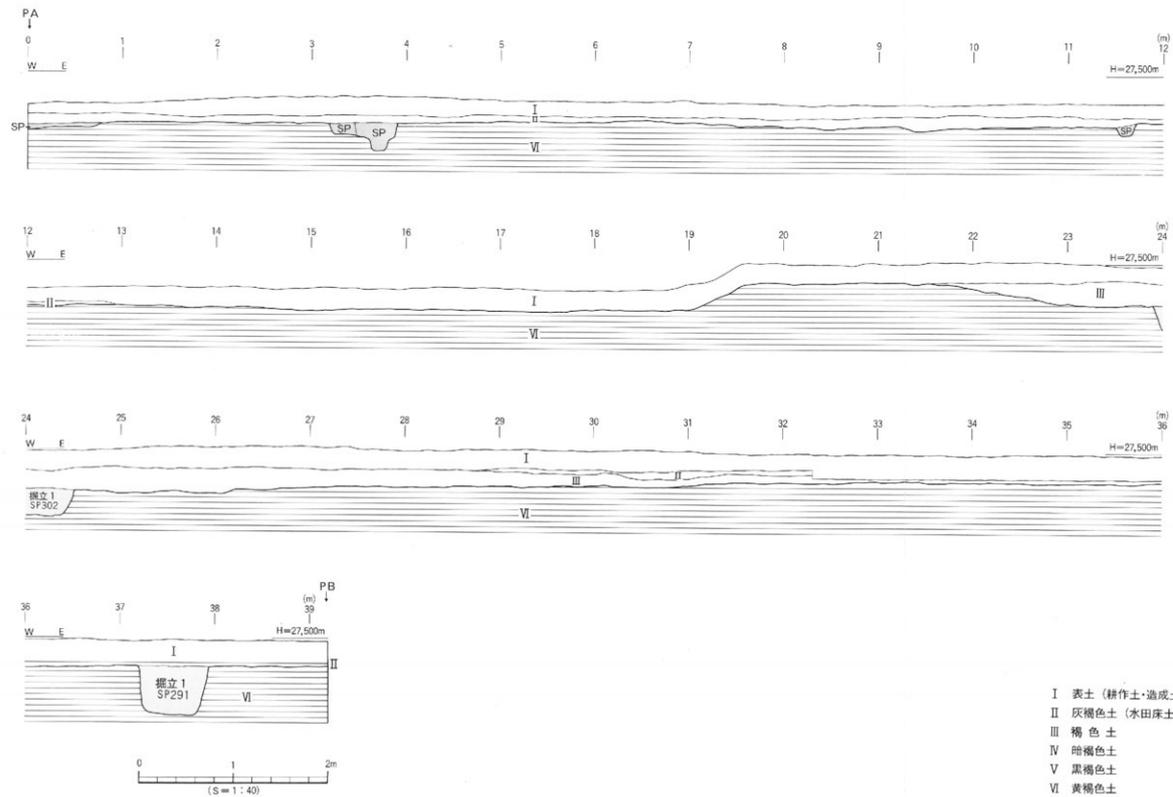
本調査地は、松山平野東側丘陵裾部、畑寺・東野から続く微高地上、標高約27.5m前後に立地する。調査地は調査以前は水田であった。

本調査地の基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層灰褐色土、第Ⅲ層褐色土、第Ⅳ層暗褐色土、第Ⅴ層黒褐色土、第Ⅵ層黄褐色土である。

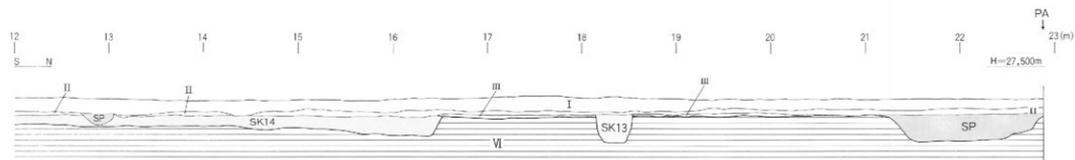
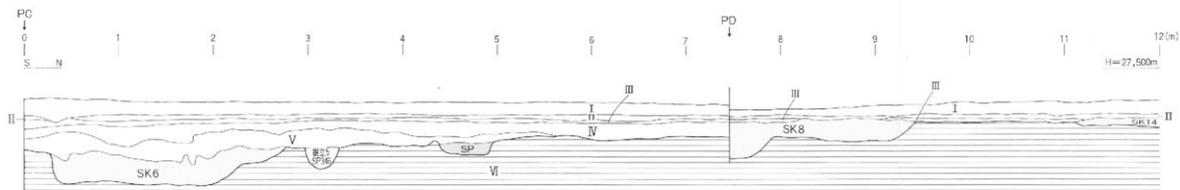
第Ⅰ層—水田耕作に伴う客土で地表下15～30cmまで開発が行われている。

第Ⅱ層—水田床土で5～10cmの厚さを測る。

第Ⅲ層—調査地北西隅を除くほぼ全域で検出された。ただし、調査以前に水田が調査地中央部付近で段差をもっていたため、中央部より西側の水田は東側の水田より25～30cm程低くなっている。そのために調査地西半部は、第Ⅱ層以下の土層が削平された可能性もある。堆積状況は調査地北東中央部付近が厚さ25cm前後と最も厚い堆積をなす。その他の地点では約5

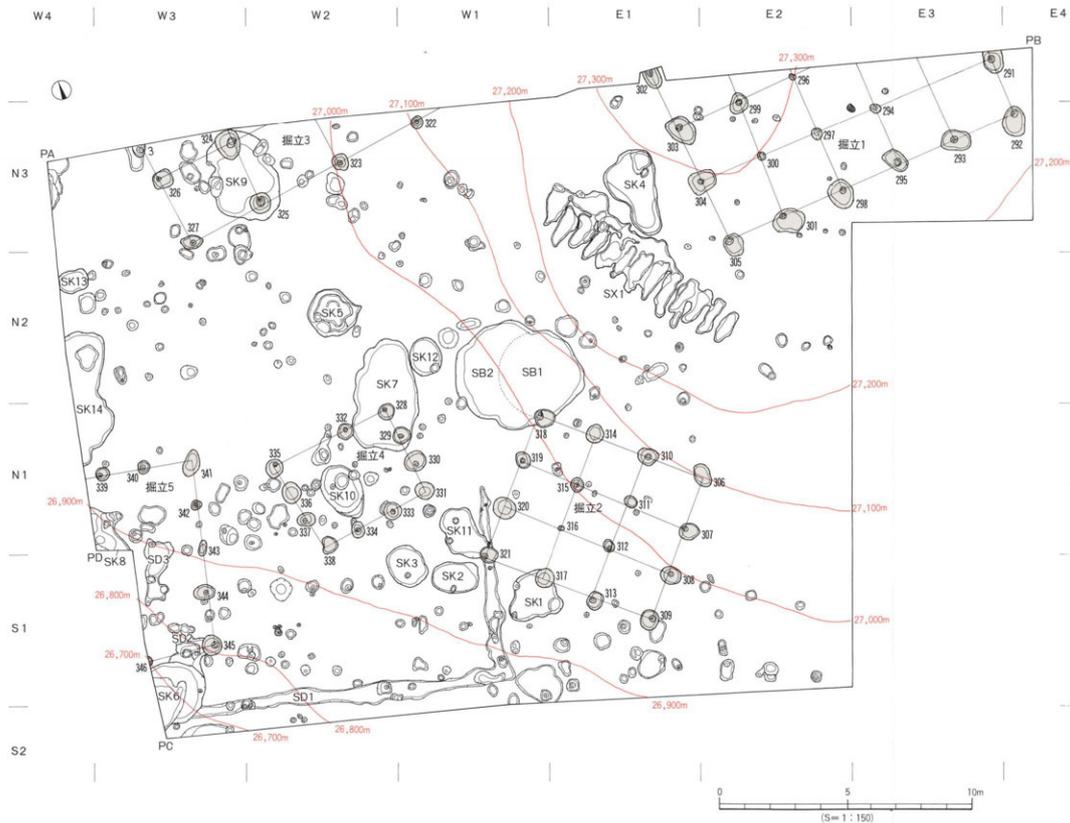


第40回 北壁土層図



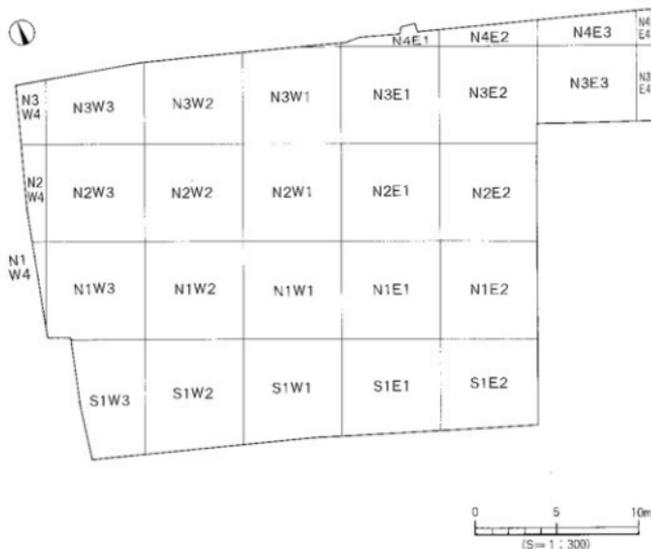
- I 表土 (耕作土・造成土)
- II 灰褐色土 (水田床土)
- III 褐色土
- IV 暗褐色土
- V 黒褐色土
- VI 黄褐色土

第41回 西發土層図



第42図 遺構配置図

調査の概要



第43図 調査地区割図

～10cm程度の堆積である。調査中は調査期間の関係上、第Ⅲ層以上の層は重機による剥ぎ取りを行った。

第Ⅳ層—調査地南西部のみに検出された。西壁中央部付近が最も厚く漸次南へ緩傾斜堆積をなす。厚さは10～20cmを測り弥生土器・土師器・須恵器を包含する。

第Ⅴ層—調査地南西隅にのみ検出された。粘性の強い土壌で北から南へ向けて緩傾斜堆積をなす。厚さは10～20cmを測り、弥生土器・土師器・須恵器が混在する。

第Ⅵ層—本調査における遺構検出面である。特に東側の水田面では第Ⅰ層及び第Ⅱ層下に第Ⅵ層が検出された。しかも、調査地北東部では、第Ⅵ層上面に5～10cm大の円礫が多数露出した状況がみられた。

遺構はすべて第Ⅵ層上面での検出である(第42図)。竪穴式住居址2棟、掘立柱建物址5棟、土坑14基、溝3条、性格不明遺構1基、柱穴350基(掘立柱建物柱穴56基を含む)他である。ただし、遺構の深さなどから判断すると、本来は第Ⅴ層以上の層から掘り込まれた可能性が高いものが多い。

遺物は第Ⅳ層、第Ⅴ層及び遺構内からの出土であり、弥生土器(後期)、土師器(古墳～中世)、須恵器(5～6C)、石器(石斧1点、石砲丁1点、石鏃1点)等がある。

第Ⅵ層上面の標高を測定すると調査区北東部が最も高く、漸次南西方向へ向けて緩傾斜をなす(比高差60cm)。なお調査にあたり調査区内を6m四方のグリッドに分けた。呼称名は第43図に示す。

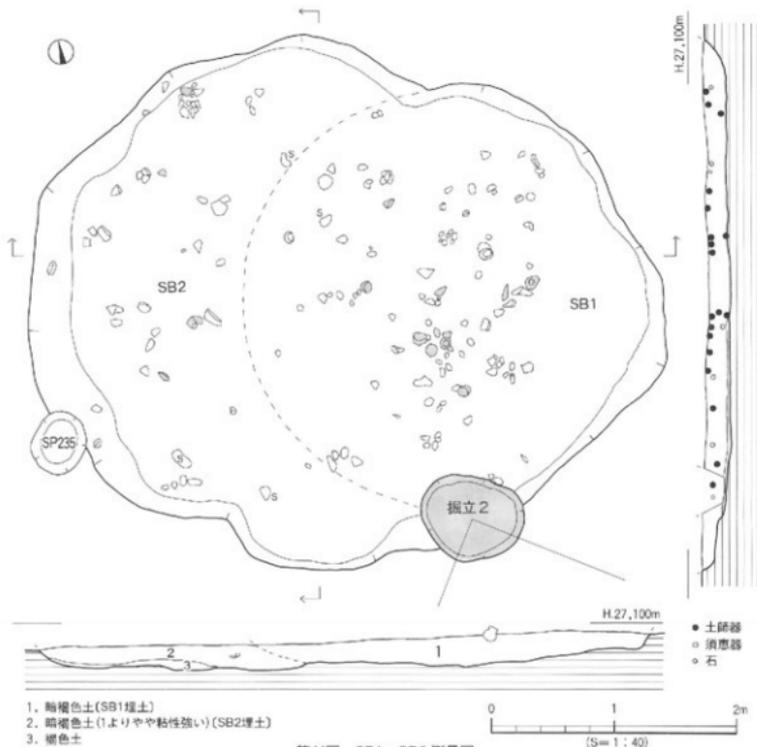
3. 遺構と遺物

(1) 竪穴式住居址

本調査において検出した竪穴式住居址は2棟である。いずれも第VI層上面での検出である。両者は重複しているが、遺構埋土が酷似していたため明確な切り合い関係や平面プランは調査中は判断し兼ねた。わずかな埋土の土色の違いからSB1号住居址がSB2号住居址を切っているものと判断し、重複している箇所については平面プランを想定したうえで、出土遺物の取り上げを各々行った。そのため、両者の遺物が混在している可能性がある。

SB1号住居址 (第44図、図版17~19)

調査区中央部N1E1-N2W1区に位置する。遺構南側は掘立2に切られている。平面形は円一隅九方形を呈するものと考えられ、規模は検出長約5m、深さ25~30cmを測る。遺構埋土は暗褐色土単層である。床面は比較的硬く、東から西へ緩傾斜をなし比高差約15cmを測る。炉や支柱穴などの施



設は未検出である。

遺物は遺構中央部の埋土中及び床面付近から集中して出土している。土師器類は部分的に押しつぶされた状態で、須恵器類は完形の蓋や有蓋高坏が床面に横たわった状態で出土している。他に石甕丁が1点、埋土上位から出土している。

出土遺物 (第45図、図版25・26)

土師器 (1～5)

甕形土器 (1～3) は口縁部が内湾して立ち上がる。1・2は端面をナアにより面取りし、内傾させる。3は端面に丸みをもたせる。いずれも、頸部内面に弱い稜をもつ。壺形土器 (4) は扁球形の体部を呈する。口径は胴部最大径を凌がない。口縁端面は内傾する。胴部外面に刷毛目調整を施す。5は高坏形土器。柱裾部境内面に弱い稜をもつ。坏底部は充填技法を用いる。擬口縁を看取する。

須恵器 (6～12)

坏蓋 (6) は天井部は丸みもち、段差による稜をもつ。坏身 (7) はたちあがりは内傾し、端部は凹面をなして内傾する。8～11は珠をもつ蓋である。8・9は珠中央部が凹み、10・11は突出する。いずれも稜もち、口縁端部は凹みないし段をもって内傾する。12は完形の有蓋高坏である。たちあがりは内傾し、端部は凹面をなして内傾する。脚部は「ハ」の字状に外反し、端部付近で段をなす。三方向に長方形の透かしが入る。

石器 (13) 13は結晶片岩製の石甕丁である。

時期: 床面直上出土の完形の須恵器 (8・10～12) が時期特定に有効な資料である。その特徴より古墳時代中期後半、5世紀後半に比定されるものであろう。よって、本住居址の廃棄・埋没時期も5世紀後半と考える。

SB2号住居址 (第44図、図版17・19)

調査区中央部N1E2～N2W1区に位置する。遺構南西部はSP235に切られている。平面形は円～隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は検出長5.8m、深さ20～30cmを測る。壁体は緩やかに立ち上がる。遺構埋土は暗褐色土を基調とするが、黄色土が混入する層が遺構北西部床面付近にて一部みられた。床面は比較的硬く、ほぼ平坦である。主柱穴やが等は未検出である。

遺物は床面上には少なく床面より20cm前後の高さの埋土中より、土師器・須恵器片及び石甕丁が1点散在して出土している。唯一、完形の須恵器高坏 (15) が遺構東部の床面に出土したがSB1との境界部分からの出土であるため、SB1の遺物の可能性もある。

出土遺物 (第46図、図版26)

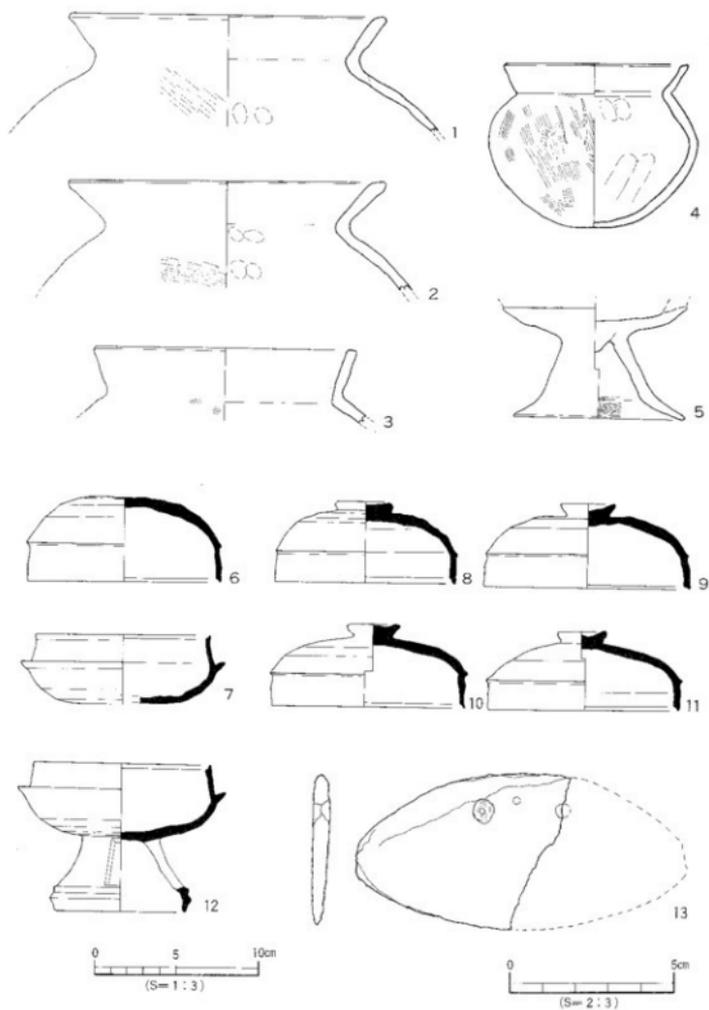
高坏 (14～17) 14は無蓋高坏の坏部である。口縁部は外反し、口縁下に断面三角形の内縁が巡る。坏部中に精緻な櫛波状文を施す。15は完形の有蓋高坏である。たちあがり端部は凹みをもって内傾する。脚部はゆるやかに「ハ」の字状に外反し、端部は内傾する。脚柱部中に径1.3cm大の円孔を3ヶ所穿つ。16・17は高坏の脚部片である。柱部外面に回転カキメ調整を施す。長方形の透かしをもつ。小片。

甕 (18) 口縁部は大きく外反し、口縁端部は上下方に拡張する。

石甕丁 (19) 1/2の残存。材質は不明。

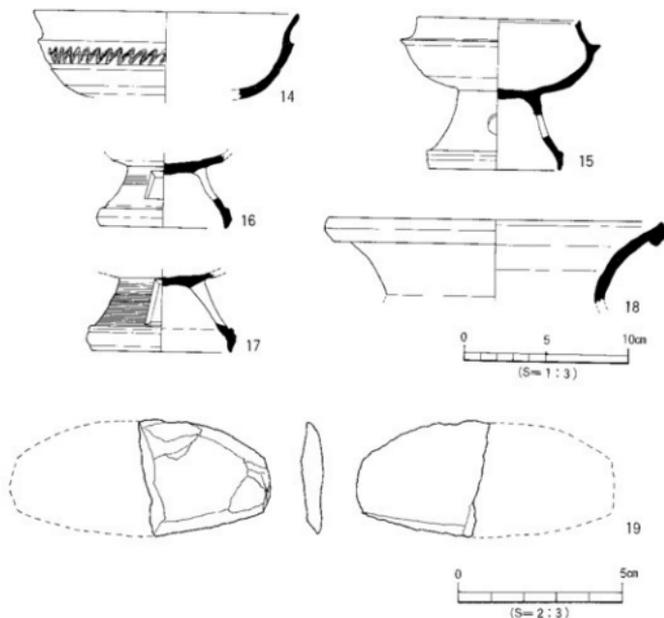
時期: 床面出土の須恵器の特徴などより、これらは古墳時代中期後半、5世紀後半に比定されるものである。よって本住居址の廃棄・埋没時期も5世紀後半頃と考えられる。

筋違E遺跡



第45図 SB1出土遺物実測図

調査の概要



第46図 SB2出土遺物実測図

〔2〕掘立柱建物址

本調査において確認された掘立柱建物址は5棟である。いずれも第VI層上面での検出である。建物柱穴からは弥生土器・土師器・須恵器片がごく少量出土している。建物の方位・埋土により少なくとも3グループに分類できる。

- 第1類—東西棟で埋土が黒色土の建物址……掘立1
- 第2類—東西棟で埋土が暗褐色土の建物址……掘立3・4
- 第3類—南北棟で埋土が黒褐色土の建物址……掘立2・5

全般に、東西棟はほぼ磁北に等しい方位をとる。とりわけ掘立1は今回検出の建物址の中でも最大規模の総柱建物址であろう。造営時期は、いずれの建物も堅穴式住居址や土坑等の遺構を切っており(掘立1を除く)、古墳時代以降の建物址であることが知れる。

掘立2 (第47図、図版20)

調査区南東部N1W1～S1E1区に位置する。建物北西隅はSB1を、南西隅はSK1及びSK11を切っている。3×3間の総柱建物址で規模は桁行長6.3m、梁行長6.1mを測り、平均柱間は2.0～2.2m

である。各柱穴は円～楕円形を呈し、径40～90cm、深さ15～45cmを測る。柱痕径は約20cmで、深さ25～45cmを測る。柱穴埋土は黒褐色土単層である。柱穴内からは須恵器片が数点出土している。

時期：建物柱穴がS B 1（古墳中期後半）を切っていることから上限を古墳時代中期後半と考える。

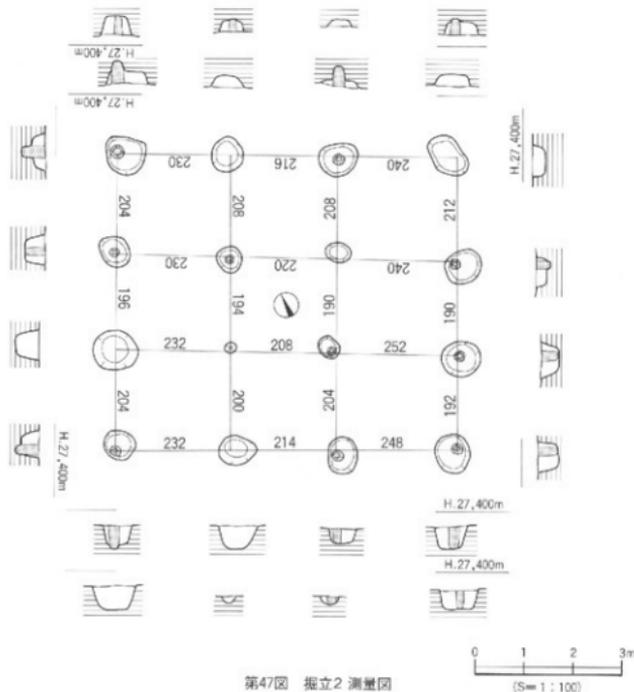
掘立3（第48図）

調査区北西部N 3 W 3・N 3 W 4区に位置する。土坑S K 9（古墳後期）を切っている。建物北半部は調査区外に続いたため全容はわからないが3×1間以上の総柱建物址と考える。桁行検出長10.8m、梁行検出長4.1mを測る。東西棟で、ほぼ磁北に等しい方位をとる。平均柱間は2.8～3.2mで、桁行間がやや広がっている。各柱穴は円～楕円形を呈し、径50～100cm、深さ25～50cmを測る。柱痕径は約20cm前後、深さ30～50cmである。柱穴埋土は暗褐色土である。柱穴内からは弥生土器片が数点出土している。

時期：柱穴内から弥生土器片が出土しているが、古墳時代の土坑S K 9を切っていることなどから、本建物の造営時期の上限を古墳時代後期と考える。

掘立4（第48図、図版20）

調査区中央やや南西より、N 1 W 1・N 1 W 2区に位置する。建物北東隅は土坑S K 7（古墳中期後半）を切っている。3×3間の建物址で、規模は桁行長4.9m、梁行長3.8mを測る。東西棟ではほぼ磁



第47図 掘立2 測量図

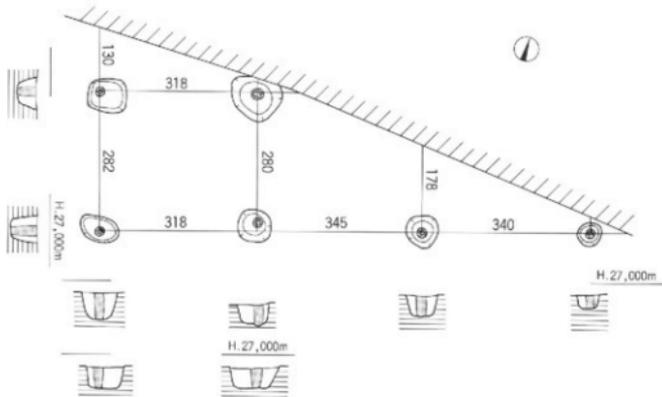
調査の概要

北に等しい方位をとる。平均柱間は1.3～1.6mで、桁行間がやや広がっている。各柱穴は円～楕円形を呈し、径50～90cm、深さ35～45cmを測る。柱穴埋土は暗褐色土に黄色土が混入するものである。柱穴内からは、須恵器片、弥生土器片が少量出土している。

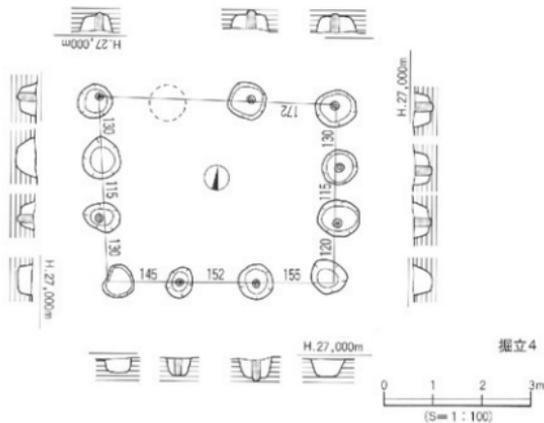
時期：出土した須恵器の特徴や古墳時代中期後半の土坑SK7を切っていることなどから、本建物址の造営時期は古墳時代後期前半頃と考える。

掘立1 (第49図、図版21)

調査区北東隅N3E4-N4E1区に位置する。建物北東部及び東半部は調査区外に続くものと思



掘立3

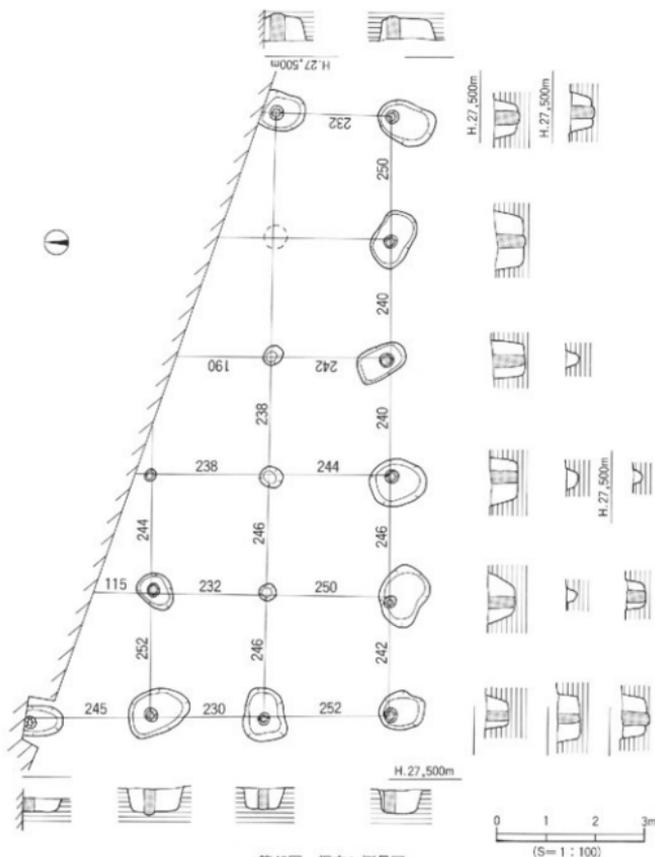


掘立4

第48図 掘立3(上) 掘立4(下) 測量図

われる。本調査検出の建物址のうち最大規模のもので、磁北にはほぼ等しい方位をとる。5×3間以上の総柱建物址で桁行検出長12.2m、梁行検出長7.4mを測る。平均柱間は2.4m前後である。各柱穴は円～楕円形を呈し、柱穴の規模は、最大のもので100×130cmを測る。深さは検出面下50～60cmを測る。柱底径も30cm前後を測り、本調査検出の建物址の中でも最も大きな柱材が使用されていたことがわかる。柱穴埋土は、粘性の強い黒色土である。柱穴内からは土師器高坏片や須恵器片などが数点出土している。

時期：柱穴内からの遺物の出土がわずかであり、時期の特定は難しい。あえて時期を求めるとすれば、出土した須恵器や土師器の特徴から古墳時代後期以降の建物址と考えられる。



第49図 掘立1 測量図

掘立5 (第50図)

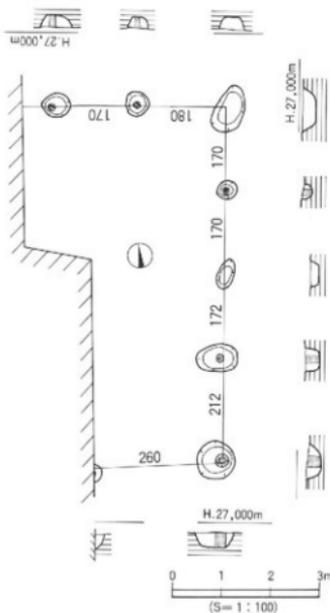
調査区南西部N1W3～S1W3区に位置する。建物西半部は調査区外に続くため全容は不明だが4×2間以上の建物址と考えられる。現状では南北棟と考え、規模は桁行長7.3m、梁行検出長4.2mを測る。建物南東隅は溝SD2(古墳後期以前)を切っている。平均柱間は1.8m前後を測る。各柱穴は円～楕円形を呈し、径40～80cm、深さ20～35cmを測る。柱底径は15cm前後、深さ20cm前後である。柱穴堀土は黒褐色土に黄色土が混入するものである。柱穴内からは土師器片・須恵器片が少量出土している。

時期：溝SD2を切っていることから、本建物址の造営時期は古墳時代後期以降と考える。

掘立出土遺物 (第51図)

20・21は掘立2出土の須恵器坏蓋・坏身である。いずれも小片である。20は丸みのある稜をもち口縁端部は内傾する段をなす。21はたちあがり端部は欠損している。22・23は掘立4出土品である。22は須恵器坏身片で、たちあがりは内傾した後直立し、端部は内傾する段をなす。23は弥生土器の壺の底部である。

24・25は掘立3出土の弥生土器である。柱穴上面からの出土であり流れ込みの可能性が高い。両者とも壺の底部である。26は掘立1出土の土師器高坏である。脚柱部は三角錐を呈し、裾部は傾斜する。



第50図 掘立5 測量図

〔3〕土坑

本調査において確認された土坑は14基である。すべて第VI層上面での検出である。ただし西壁の土層観察によりSK13は第III層上層からの掘り込みであることが判明している。平面形で大きく3つのグループに分類できる。SK2・3・5・6・7・9・10・11・12は円～楕円形、SK13は長方形、SK1・4・8・14は不定形である。竪穴式住居址や掘立柱建物址との切り合いや出土遺物などから、弥生時代・古墳時代・中世の3時期に大別される。

以下、時期別に遺構の概略を説明することにする。

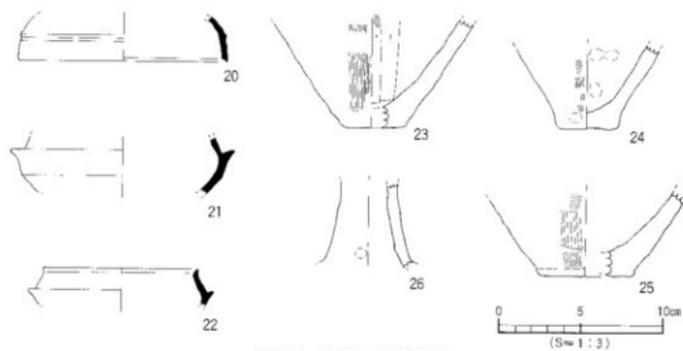
(1) 古墳時代

古墳時代の土坑はSK1・2・6・7・9・11・12の7基である。

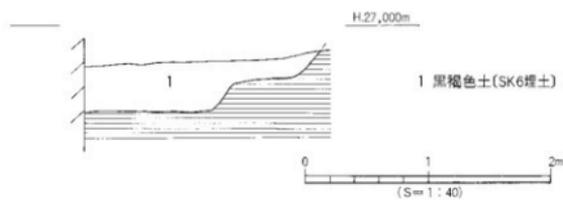
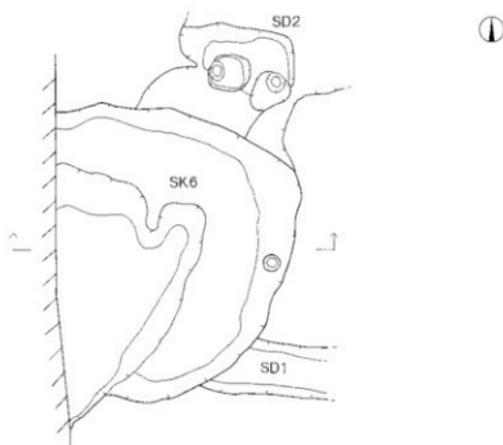
SK6 (第52図)

調査区南西隅S1W3・S2W3区に位置する。遺構北東部は溝SD2を、南東部は溝SD1を切っ

筋違E遺跡



第51図 掘立出土遺物実測図



第52図 SK6 測量図

ている。遺構西半部は調査区外に続く。平面形は円～楕円形を呈するものと考えられ、規模は検出径2.0～2.4mを測る。遺構中央部付近で段をなし、深さは20～50cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は埋土中からの出土であり土師器・須恵器・弥生土器が混在する。図化するものを第53図に掲載した。

出土遺物 (第53図)

土師器 (27～30)

甕形土器 (27・28) は口縁部が内湾して立ち上がる。口縁端面はナデにより面取りし、内傾させる。頸部内面に稜をもつ。椀形土器 (29) は口縁部が内湾するものである。口縁端面は丸く仕上げる。30は甕形土器である。口縁部はわずかに外反し、端面は丸く仕上げる。

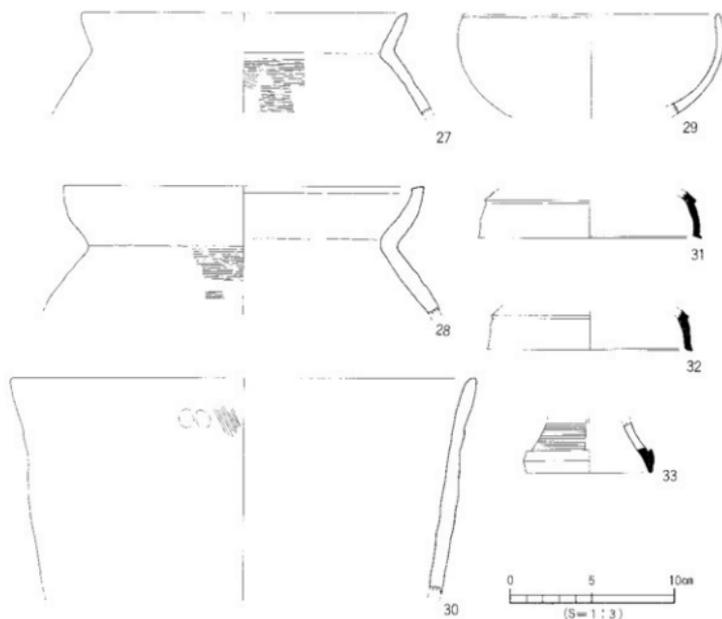
須恵器 (31～33)

31・32は坏蓋である。鈍い稜をもち、口縁部は内湾気味に下がる。口縁端面は凹みないし段をもつて内傾する。33は高坏脚部片である。柱部外面に回転カキメ調整を施す。透かしを看取る。小片。

時期：埋土中からの出土ではあるが、遺物の特徴などから5世紀後半頃の遺構と考える。

SK 7 (第54～56図、図版22)

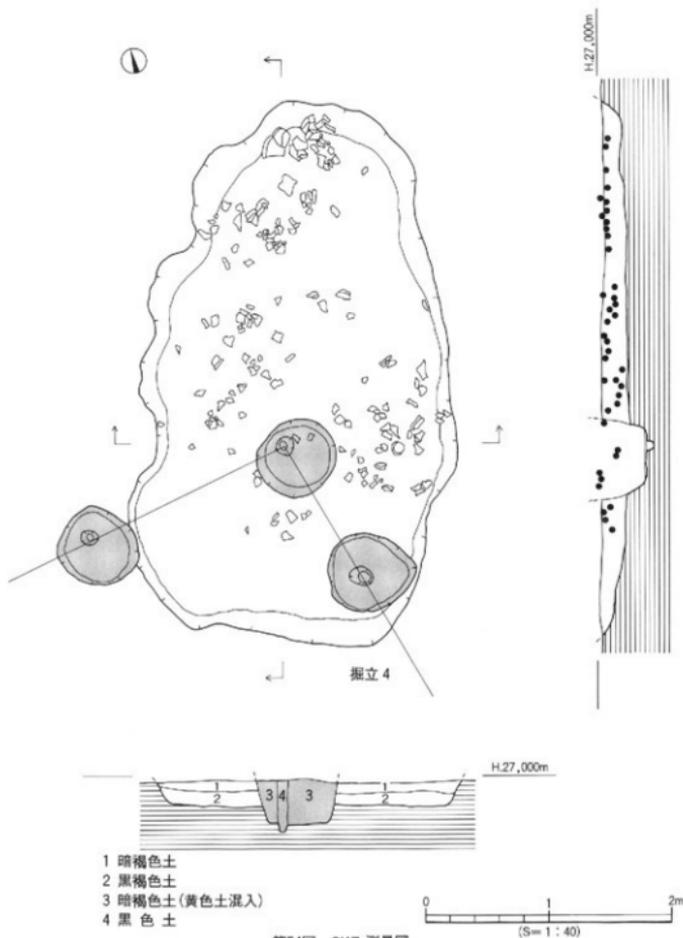
調査区中央部やや西寄りN1W1～N2W2に位置する。遺構南半部は掘立4に切られている。平面形は楕円形を呈し、規模は長径4.4m、短径2.4mを測る。床面は遺構中央部付近に向けて漸次緩傾



第53図 SK6 出土遺物実測図

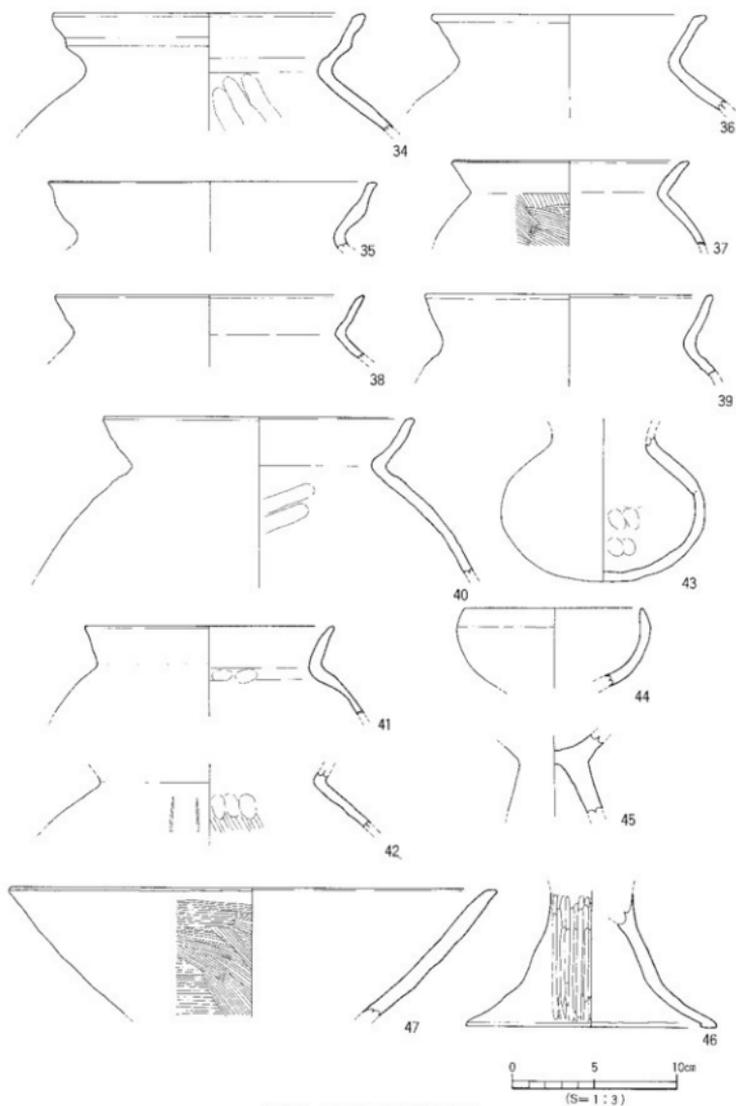
筋違 E 遺跡

斜をなす。深さは15~23cmを測る。埋土は上層が暗褐色土、下層は粘性の強い黒褐色土である。遺物はほとんどが上層中及び下層部上位からの出土である。土師器・須恵器が出土しており、特に土師器は遺構北側及び中央部東寄りの地点に1箇所にまとまってつぶれた状態で出土したものがある。また、完形の須恵器坏身(50)が下層部上位から出土した。遺物の状況から、投棄された可能性が考えられる。

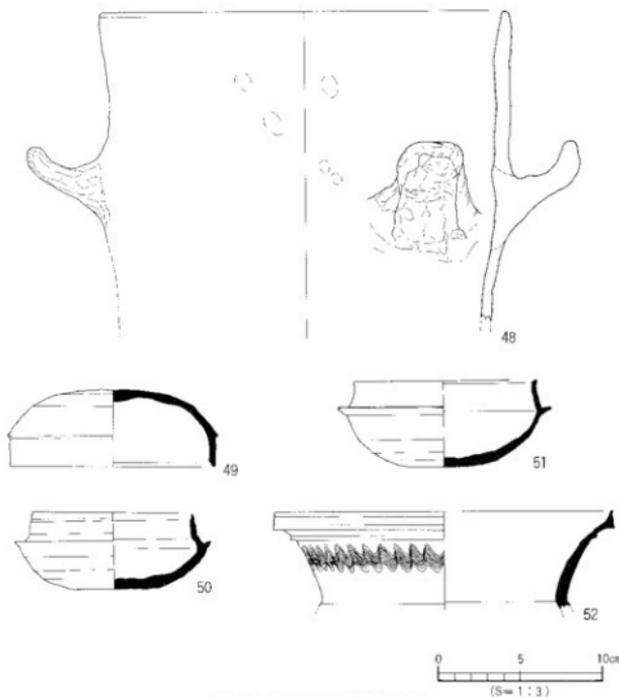


第54図 SK7 測量図

調査の概要



第55図 SK7 出土遺物実測図(1)



第56図 SK7 出土遺物実測図(2)

出土遺物 (第55・56図、図版27・28)

土師器 (34-48)

甕形土器34-42は42を除き、いずれも11線部が内湾して立ち上がる。34-40は口縁端面をナデにより面(凹む)取りし、内傾させる。41は端面に丸みをもたせる。34・35は11線中位に屈曲部をもち、口縁上部を直立気味に立ち上がらせることを特徴とする。41は口縁部はわずかに内湾させるものの、直立気味に外傾させ立ち上がる。42は胴上部にヘラ描きの沈線文が2条みられる(記号か?)。壺形土器(43)は扁球形の胴部を呈する。内面は粘土接合痕と指頭痕を残す。椀形土器(44)は内湾する胴部に直立気味に立ち上がる口縁部が付く。45-47は高坏形土器である。46は脚部で、外面に丁寧なヘラミガキ調整を施す。47は坏部片で、外面に粗い刷毛目調整を施す。48は甕形土器である。口縁部は直立し、口縁端部は丸い。把手は水平にのびた後、上外方へのびる。

須恵器 (49-52)

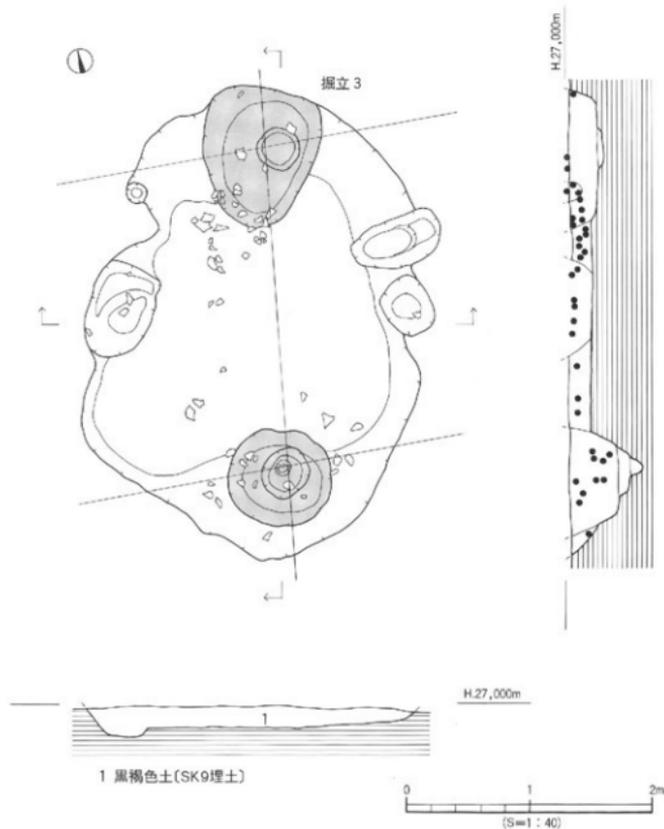
49は坏蓋である。天井部は丸みをもち、11線部は垂下する。端部は内傾する凹面をなす。50・51は坏身である。50は完形品で、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。52は甕の口縁部である。口縁端部は上下方に拡張し、11線下に断面三角形のシャープな凸帯が巡る。頸部に櫛描波状文を施す。

調査の概要

時期：遺物のほとんどが埋土中からの出土ではあるが、完形の須恵器の特徴と、掘立4（古墳後期前半）に切られることなどから、本土坑の時期を古墳時代中期後半と考えておく。

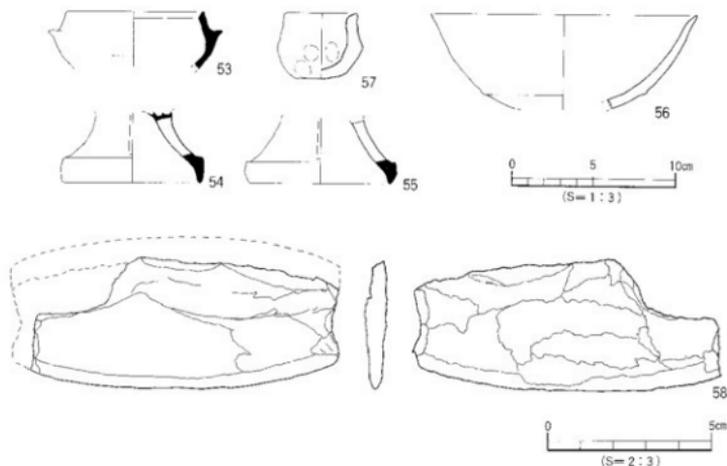
SK9（第57図、図版23）

調査区北西部N3W2・N3W3に位置する。遺構北部は調査区外に続き、掘立3のほか4基のピットに切られている。平面形は楕円形を呈し、規模は長径3.75m、短径2.6m、深さ18cm前後を測る。床面は平坦である。断面形は皿状を呈する。埋土は粘性の強い黒褐色土である。遺物はほとんどが埋土中からの出土であり、遺構の北側及び南側の2箇所に集中している。土師器・須恵器片のほか埋土上位から石甕丁が1点出土した。



第57図 SK9 測量図

筋 違 E 遺 跡



第58図 SK9 出土遺物実測図

出土遺物 (第58図、図版29)

須恵器 (53-55) 53は坏身片である。たちあがりは内傾し、端部は内傾する段をもつ。54・55は高坏脚部片である。小片ではあるが透かしを看取する。

土師器 (56・57) 56は高坏形土器の坏部である。屈曲部にわずかに丸みのある段をもつ。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は先細りする。57は手づくね土器である。内外面に指頭痕を顕著に残す。

石廬丁 (58) 結晶片岩製。

時期：遺物はほとんどが小片でありかつ、埋土中からの出土であるため明確な時期判断はしかねるが、概ね古墳時代中期後半～後期初頭の遺構と考える。

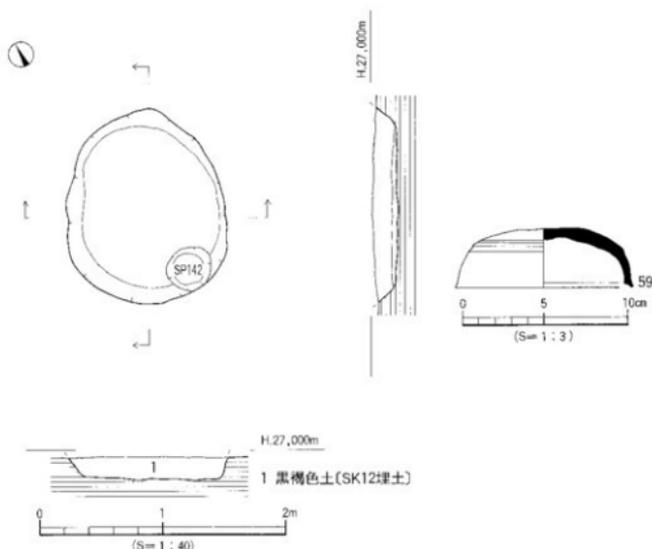
SK12 (第59図、図版29)

調査区中央部N 2 W 1に位置する。遺構南西隅は土坑SK 7を切り、南東隅はビットSP 142に切られている。平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.58m、短径1.27m、深さ19cm前後を測る。断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土は粘性の強い黒褐色土である。遺物は埋土下層から完形の須恵器坏蓋が1点出土しているほか、土師器片・須恵器片が数点出土している。

出土遺物 (59) 59は須恵器坏蓋である。ほぼ完形品で、天井部と口縁部の境界は凹線により表される。口縁部は内湾し、端部は内傾する凹面をなす。

時期：本土坑がSK 7(古墳中期後半)を切ることや、出土した完形の須恵器の特徴などから、時期は古墳時代後期前半、6世紀前半頃と考えておく。

調査の概要



第59図 SK12 測量図・出土遺物実測図

SK1 (第60図)

調査区南側S1E1・S1W1に位置する。遺構北側は掘立2に切られ、北西隅はSP211に切られている。平面形は不定形で、規模は東西1.93m、南北1.87m、深さ約6cm前後を測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰色土である。遺物は埋土中にて土師器・須恵器片が出土しているが陶化したものはない。

時期：出土遺物が稀少であるため時期決定は難しいが、掘立2に切られることから、下関を古墳時代後期前半頃と考える。

SK11 (第60図)

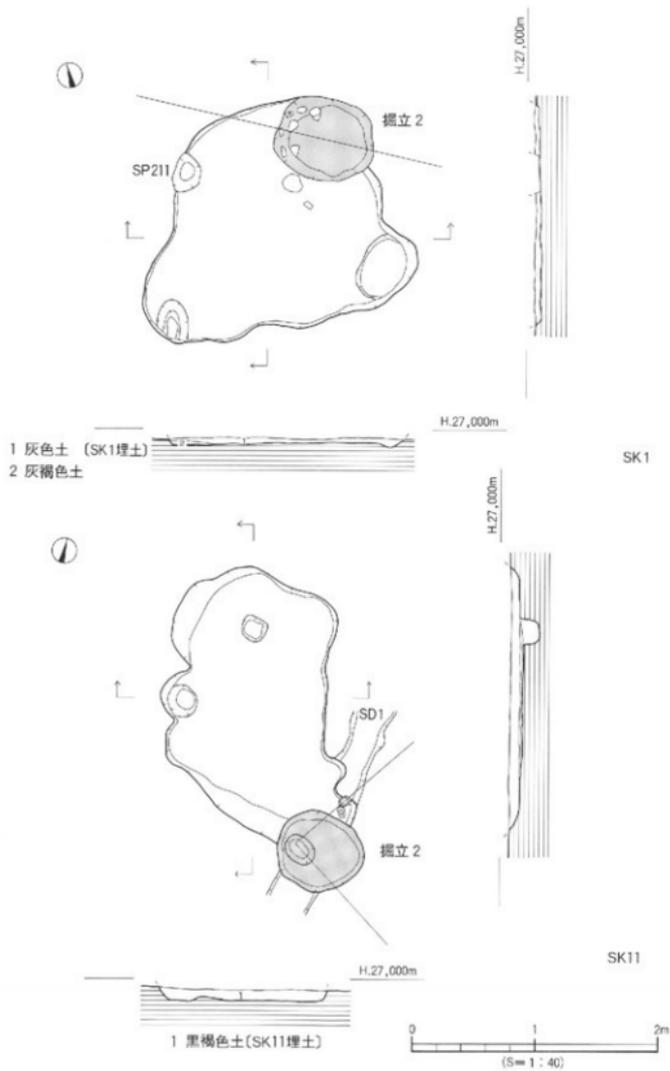
調査区南側N1W1区に位置する。遺構南東隅は掘立2に切られ、なおかつ溝SD1を切っている。平面形は不整の楕円形を呈し、規模は長径2.2m、短径1.34m、深さ9cm前後を測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色土である。床面にて径25cm前後の小ピットを2基検出した。土坑からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物もなく時期決定は困難ではあるが、掘立2と溝SD1との切り合い関係などから古墳時代中期後半～後期前半の間の遺構であろうと考えられる。

SK2 (第61図、図版29)

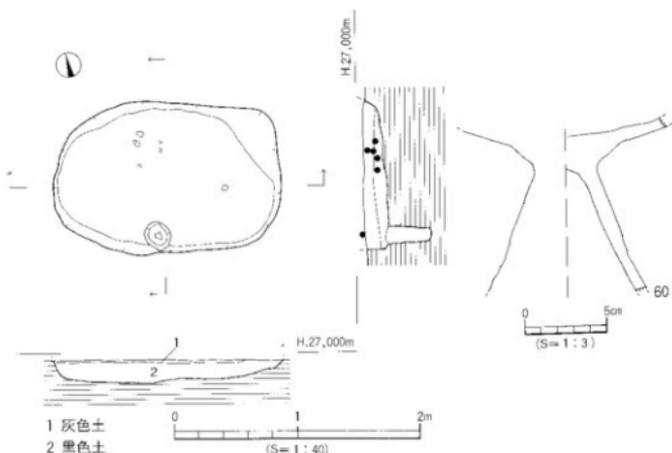
調査区南側S1W1区に位置する。平面形は東西方向に長い楕円形を呈し、規模は長径1.84m、短径1.25mを測る。床面は北東から南西方向へ緩やかな傾斜をなす(比高差約10cm)。深さ10～20cmを

筋道E遺跡



第60図 SK1(上) SK11(下) 測量図

調査の概要



第61図 SK2 測量図・出土遺物実測図

測る。塚土は上層に数cm灰色土が覆うが、ほとんどが黒色土である。片面にて径20cm前後の小ピットを検出した。遺物は黒色土中からの出土であり土師器片・須恵器片が出土している。図化するものを1点掲載した。

出土遺物 (60) 60は土師器高坏である。柱部内面にケズリ調整を施す。坏底部は組み合わせ技法で、坏脚部境の外面に粘土を貼り付ける。

時期：出土した土師器高坏形土器の特徴などから、あえて時期をもとめるならば古墳時代中期以降のものと思われる。

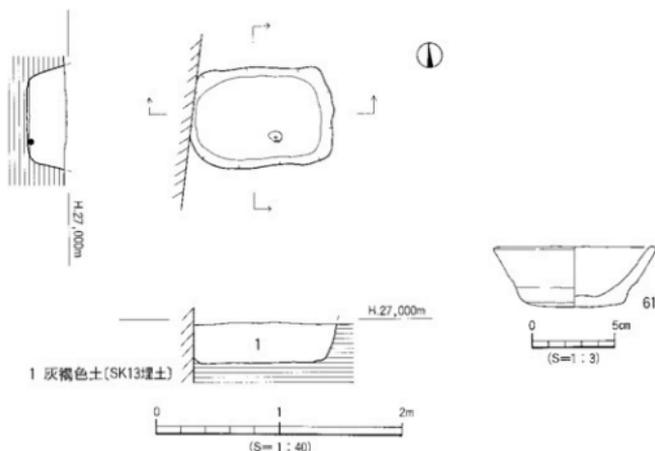
(2) 中世

SK13 (第62図、図版23・24・29)

調査区北西部N2W4区に位置する。遺構西半部は一部、調査区外に続く。西壁の上層観察より第Ⅲ層上面から掘り込まれた遺構である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は東西検出長1.14m、南北長0.82m、深さ32cm前後を測る。塚土は灰褐色土である。断面形は逆台形状を呈する。遺物は完形の土師器坏(61)が遺構南側の床面直上にて横たわった状態で出土している。おそらく遺物の出土状況などから土壊葬の可能性が高いと考えられる。

出土遺物 (61) 61は土師器坏である。完形品で床面付近からの出土品である。底部は丸みのある平底で1線部は直立気味に立ち上がる。調整は内外面ともに丁寧なヨコナデを施す。底部の切り離しの技法は不明。

時期：出土した土師器坏は14世紀代に比定されるものである。よって本土坑の時期も14世紀代と考えられる。



第62図 SK13 測量図・出土遺物実測図

(3) 弥生時代

弥生時代の土坑はSK5・10の2基である。土坑内より弥生土器片が出土しており、明確な時期特定は難しいが、本稿では、弥生時代の遺構として報告することにする。

SK5 (第63図)

調査区北西部N2W2区に位置する。遺構南西隅はSP144に切られている。平面形は円形を呈し、規模は径1.81~1.89mを測る。床面は階段状になっており、床面最深部付近から弥生土器が数点出土している。図化しうるものを2点掲載した。甕形土器(62)は床面出土品である。

時期：埋土中及び床面出土の弥生土器片が弥生時代後期の特徴を示す。よって本土坑の時期も弥生時代後期と考える。

SK10 (第63図)

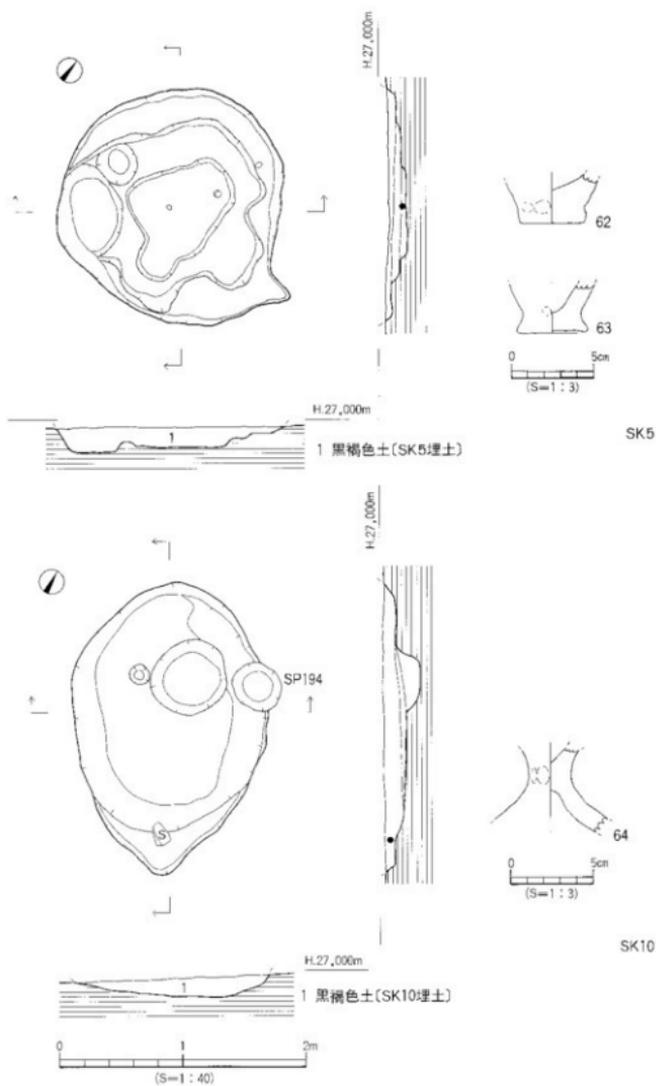
調査区中央やや南西寄りN1W2区に位置する。遺構東側はSP194に切られている。平面形は不整の楕円形を呈し、規模は長径2.35m、短径1.57mを測る。床面は遺構中央部付近がやや凹む。深さは最深部で16cm前後である。埋土は粘性の強い黒褐色土である。遺構は埋土中に弥生土器が数点出土している。

時期：出土遺物も僅少で、明確な時期判断はしかねるが、概ね弥生時代以降のものと考えておく。

(4) 時期不明 (第64・65図)

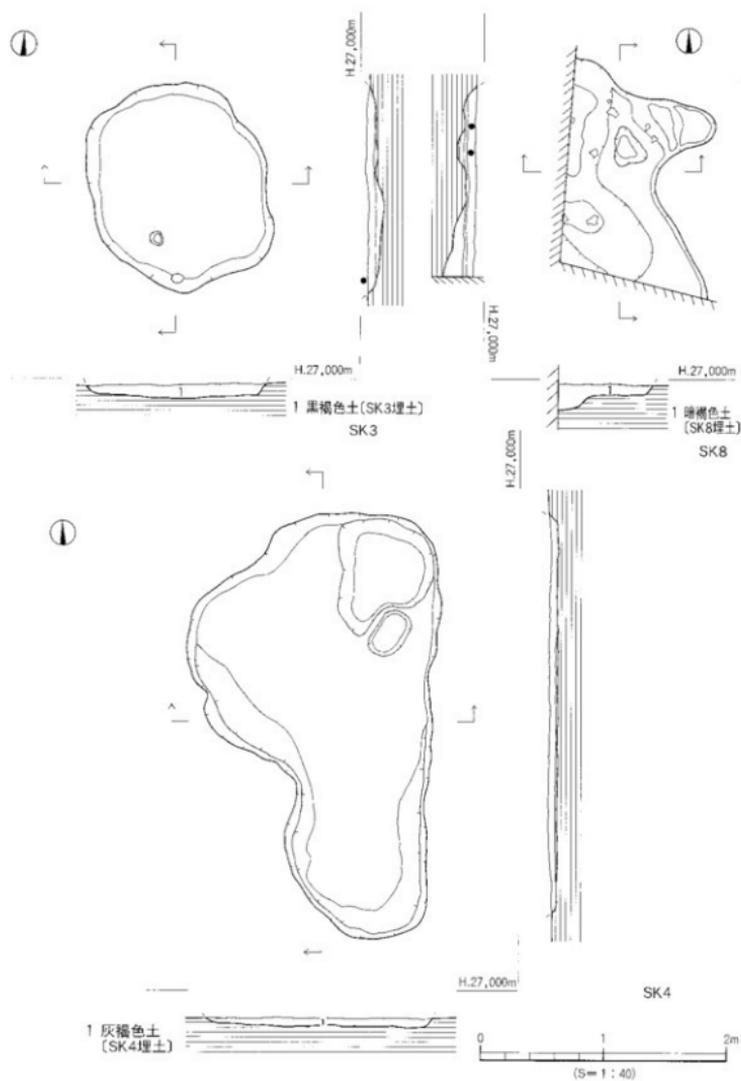
本調査において時期判断の困難な土坑が4基ある。SK3・4・8・14である。いずれも出土遺物や他の遺構との切り合い関係がなく、掘り方もわからないため、ここでは時期不明の土坑として扱うこととする。各土坑に関する詳細は一覧表に記す(表4)。

調査の概略



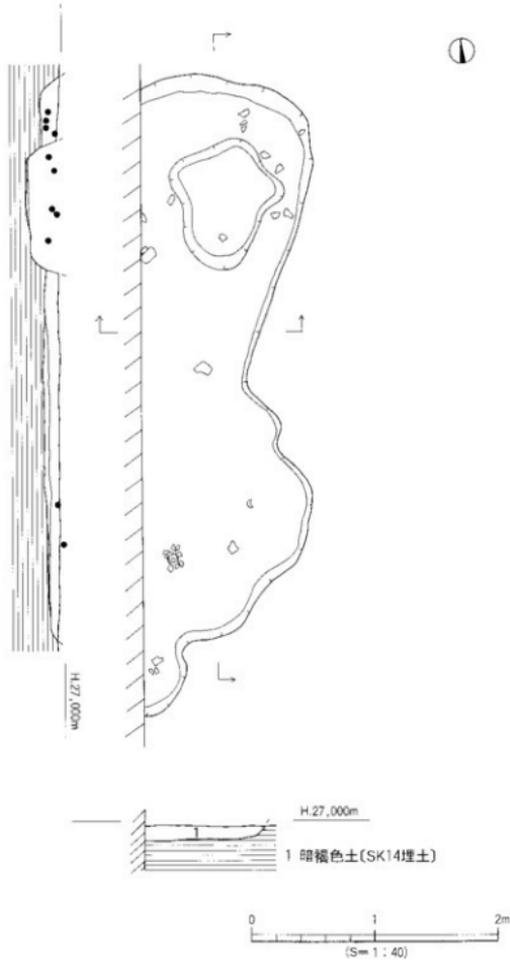
第63図 SK5(上)・SK10(下)測量図・出土遺物実測図

筋違 E 遺跡



第64図 SK3(左上) SK4(下) SK8(右上) 測量図

調査の概要



第65図 SK14測量図

〔4〕溝 (第66図)

本調査において確認された溝は3条である。いずれも第Ⅵ層上面での検出である。調査区南西部を流れる溝SD1は西端は土坑SK6に切られ、北端は掘立2に切られ消失する。途中「L」字状に屈曲するが、溝の性格はわからない。溝床は東から西へ向けて緩やかな傾斜をもつ(比高差5cm)。溝の埋土は暗褐色土単層である。時期はSK6や掘立2に切られることから、6世紀以前に掘削されたものであろう。また溝SD2・SD3は短く不定形のもので、SD2は掘立5及びSK6に切られている。

時期はSD2はSD1同様、6世紀以前に掘削されたものと思われる。SD3については出土遺物もなく時期は不明である。各溝に関する詳細は一覧表に記す(表5)。

〔5〕性格不明遺構 (第67・68図、図版24)

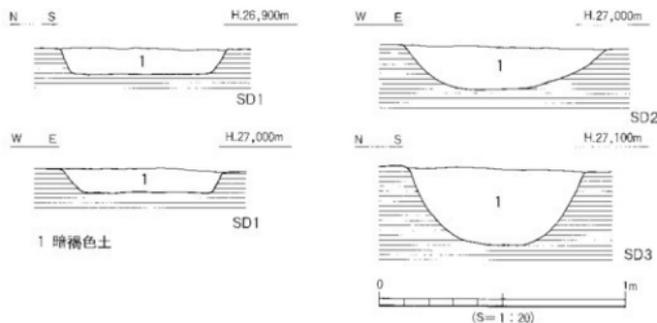
本調査において、性格不明遺構として布掘り状遺構SX1を検出した。調査区北東部N2E2-N3E1区に位置する。規模は検出長約8.85mを測る。長径1.5m前後、短径40~80cm前後、深さ5~15cmの布掘り状遺構が13基並ぶものであるが一部各遺構が分離する所もある。埋土はいずれの遺構も暗褐色土単層である。遺物は埋土上位及び埋土中から弥生土器・土師器・須恵器が混在して出土している。本遺構の性格や目的並びに時期については不明である。

出土遺物 (第69図)

65は「く」の字状口縁を呈する甕形土器である。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。66は複合口縁壺である。口縁接合部は短くタガ状に突出し、拡張部は外反気味に立ち上がる。67・68は高杯形土器である。67は脚部片で、径1cm大の円孔を穿つ。68は内湾する裾部をもち、柱裾部境内面に稜をもつ。69は須恵器坏蓋である。口縁端部は丸く仕上げる。70は須恵器坏身である。たちあがりは内傾し、端部は段をもって内傾する。71は珠である。中央部が凹む。

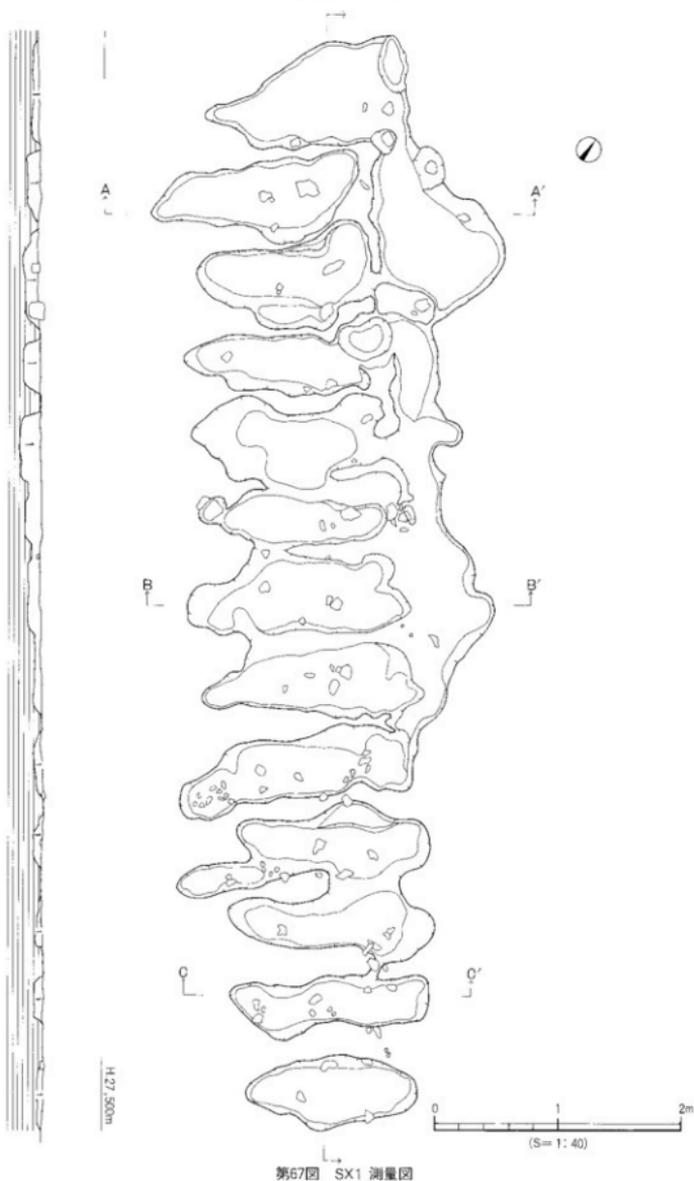
〔6〕その他の遺構と遺物

本調査において350基のピットを検出した。埋土の違いで4グループに分類できる。埋土①—黒褐色土、埋土②—暗褐色土、埋土③—褐色土、埋土④—灰褐色土である。埋土①は調査区中央部及び南



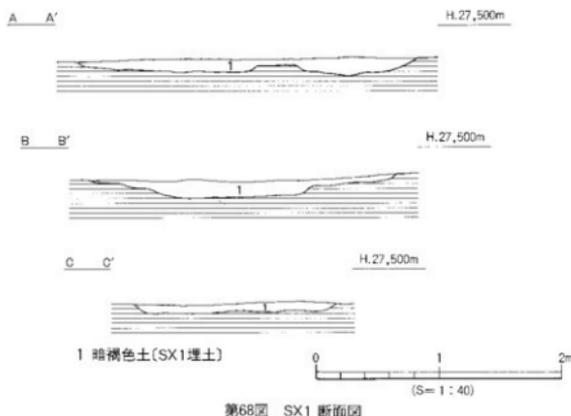
第66図 SD1・SD2・SD3 断面図

調査の概要

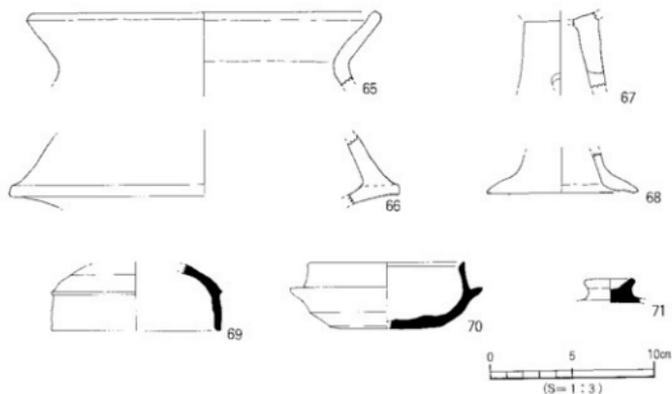


第67図 SX1 測量図

筋違 E 遺跡



第68図 SX1 断面図

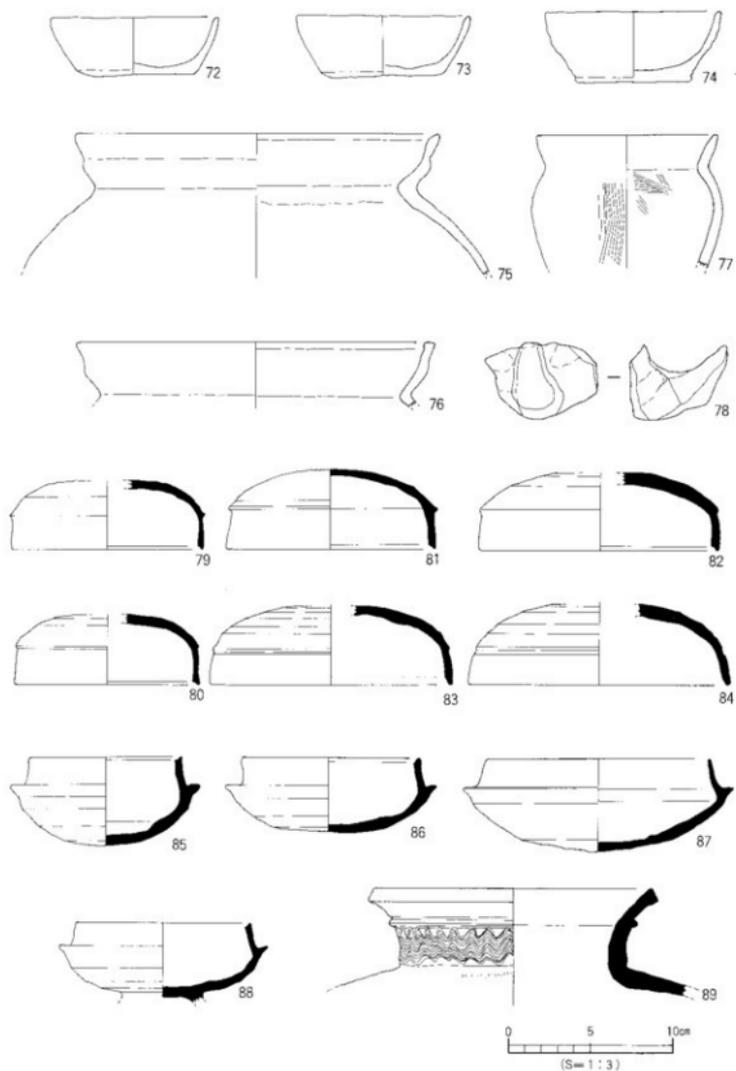


第69図 SX1 出土遺物実測図

西隅に集中して分布する。埋土②は調査地北東部を除くほぼ全域に散在して分布する。埋土③は調査地東半部に、埋土④は調査地北西隅に散在して分布する。ピット内からの遺物は僅少であり、破片が多いため明確な時期は判断しかねるが、本調査で検出された遺構埋土などから考えると、埋土①・埋土②の柱穴は古墳時代以降、埋土③・埋土④の柱穴は中世以降の遺構であると推測される。

他に包含層中より弥生土器・土師器・須恵器などが出土している。第IV層及び第V層中からの出土ではあるが、調査時には両方を同時に掘り下げたため、明確な遺物の取り上げを行うことができなかった。そのため、ここでは一括して包含層遺物として報告する。

調査の概要



第70図 包含層出土遺物実測図

包含層出土遺物 (第70図、図版29・30)

土師器(72~78) 72~74は坏である。いずれも平底で、胴部は内湾気味に立ち上がる。胴上位でわずかに屈曲し、口縁部は直立する。口縁端部は丸く仕上げる。内外面共にココナデ調整を施す。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。75・76は甕形土器である。口縁部は内湾し、口縁中位に屈曲部をもつ。口縁端面は、ナデにより面取りし内傾する。頸部内面に稜をもつ。75の胴部内面には粘土接合痕を顕著に残す。77は甕形土器である。扁球形の胴部で、口縁部は直立し、端部は丸く仕上げる。胴部内外面共に刷毛調整を施す。78は甕形土器の把手であろう。

須恵器(79~89) 79~84は坏蓋である。大井部と口縁部の境界はシャープな稜をもつもの(79~81)、鈍い稜をもつもの(82・83)、凹線で表されるもの(84)がある。口縁端部は84は丸く仕上げるが、それ以外は、凹みないし段をもって内傾する。85~87は坏身である。85・86はたちあがり端部は内傾する段をなすが、87は丸く仕上げる。88は高坏の坏部である。89は甕の口縁部である。口縁端部は「コ」字状に仕上げ、頸部上位に断面三角形の丸みのある凸帯が巡る。頸部下半には櫛歯きの波状文を施す。胴部外面には平行印きが残る。

4. 小 結

本調査において、弥生時代・古墳時代・中世の遺構と遺物を確認することができた。

(1) 弥生時代

確実に弥生時代に時期比定できる遺構は未検出であるが、土坑SK5及びSK10から弥生時代後期の遺物が出土している。そのほか、掘立柱建物柱穴や土坑の埋土上面からも同時期の遺物が出土していることから、近隣地域に弥生時代集落が展開されていることを示唆するものであろう。

(2) 古墳時代

本調査検出の遺構及び遺物の主体をなす。

〔古墳時代中期〕 注目されるものはSB1・SB2である。本稿では竪穴式住居址と報告しているが、主柱穴や炉などの施設が未検出であることなどから本来住居としての役割を果たしていなかった可能性もある。遺物は土師器・須恵器が床面付近に比較的集中して出土した。甕形土器の出土数は多く、甕形土器や高坏形土器は少量であり好対照の出土状況を示す。土器様相は、甕形土器は口縁端部は内傾するものの肥厚はない。甕形土器は口径が胴部長径より小さく、頸部がやや短くなる。

古墳時代中期後半の土器様相が知られる好資料となるものである。同時に、これらの土師器と共伴して完形の須恵器が出土していることから、松山平野における土師器・須恵器編年を考えるうえでも貴重な資料といえよう。

〔古墳時代後期〕 時期の特定はできないものの、掘立柱建物址はいずれも古墳時代後期以降のものであろう。掘立1・2・3は掘り方・柱痕ともに明確に検出できた。いずれも竪柱建物址であり、倉庫的な施設かもしくは、権力者の住居の可能性が考えられる。調査地当方には來住庵寺や官衛関連遺構が検出されており、今後、古墳時代後期以降の松山平野内の当地の歴史的作用や來住・久米地区との関係など考える必要があると思われる。

住居址のほか当該期と考えられる土坑が多数検出された。SK6・7・9は規模が4mを超え、本調査検出の土坑の中でも大型のものである。土坑内からは古墳時代中期後半~後期初頭の遺物が比較的多く出土している。これら土坑の性格は不明である。

(3) 中世

土坑SK13及び包含層中より14世紀代に比定される遺物が出土している。特にSK13は遺物の出土状況などから土坑墓の可能性がある。本調査地西方もしくは北方に中世の墓域が広がっている可能性が考えられる。

以上、簡単に調査の報告を行った。SB1・SB2については調査時に何度も切り合い関係を検索したが判断できなかった。また、住居址と記述したが、支柱穴や炉などの施設が未検出であったことなどから、住居としての役割を果たしていたかどうかは疑問が残る。

【参考文献】

- 田辺 昭二 1966 『陶器古窯址Ⅰ』平安学園考古学クラブ
 田辺 昭二 1981 『須恵器大成』角川書店
 橋本 雄一 1994 『北久米浄蓮寺遺跡-3次調査地-』御松山市生涯学習振興財団歴史文化財センター
 梅木 謙一 1992 『樽味立派遺跡・桑原地区の遺跡』御松山市生涯学習振興財団歴史文化財センター
 梅木 謙一 1992 『朝美澤遺跡・辻町遺跡』御松山市生涯学習振興財団歴史文化財センター
 中野 真一 1988 『愛媛県における古代末から中世の土器様相』『中近世の土器の研究Ⅴ』御愛媛県歴史文化財調査センター
 栗田 正芳 1994 『古照遺跡-第7次調査-』松山市教育委員会・御松山市生涯学習振興財団歴史文化財センター

遺構・遺物観察表

一凡例一

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄は略記した。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、胴→胴部、底→底部、天→天井部、坏上→坏部上部、坏下→坏部下部、
脚柱→脚部柱部、脚裾→脚部裾部

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土

() 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~3) →「1~3mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄では焼成具合を略記した。

例) ◎→良好、○→良、△→不良

表2 竪穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時期	平面形	規 模		床面積 (㎡)	主柱穴 (本)	内 部 施 設			周壁溝	備 考
			長さ×幅×深さ (m)				高床	土坑	炉 カマド		
1	古墳中期後半	小正方形	3.7×2.0+ α ×0.20		(10.2)	0					掘立2に切られる。
2	古墳中期後半	円形	4.2×3.2+ α ×0.25		(13.8)	0					SB2と重複

表3 掘立柱建物址一覧

掘立	方位	規 模 (間)	桁 行		梁 行		床面積 (㎡)	備 考	時 期
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)			
1	東西	5×3	12.2	2.4・2.5・2.4 2.4・2.5	7.4	2.4・2.3・2.7	59.13	掘立柱建物址	古墳以降
2	南北	3×3	6.3	2.3・2.2・2.1	6.1	2.0・2.0・2.1	38.43	SR1-SK1-SD1 を切る 移住建物址	古墳後期以降
3	東西	3×1	10.8	3.2・3.2・3.4	4.1	2.8・(1.3)	22.40	SK9を切る	古墳後期以降
4	東西	3×3	4.9	1.6・1.6・1.7	3.8	1.3・1.2・1.3	18.62	SK7を切る	古墳後期以降
5	南北	4×2	7.3	1.8・1.8・1.8・1.9	4.2	2.0・1.8・(0.4)	17.90	SD3を切る	古墳以降

表4 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	S1E1- S1W1	不整形	皿状	1.93×1.87×0.06	灰色土	土師・須恵	古墳後期前半	掘立2に切られる
2	S1W1	楕円形	舟底状	1.84×1.25×0.19	①灰色土 ②黒色土	土師・須恵	古墳中期以降	
3	N1W2- S1W1	円形	舟底状	1.70×1.44×0.12	黒褐色土		不 明	
4	N3T1	不定形	皿状	3.22×1.81×0.07	灰褐色土		不 明	
5	N2W2	不整形円形	舟底状	1.89×1.81×0.16	黒褐色土	弥 生	弥生後期以降	
6	S1W3- S2W3	円形	舟底状	2.39×1.93×0.40	黒褐色土	土師・須恵	古墳中期後半	SD1-SD2を切る
7	N1W1- N2W2	不整形円形	舟底状	4.40×2.43×0.23	①暗褐色土 ②黒褐色土	土師・須恵	古墳中期後半	掘立4-SK12に切られる
8	N1W3- N1W4	不定形	舟底状	1.65×0.75×0.21	暗褐色土		不 明	
9	N3W2- N3W3	楕円形	皿状	3.75×2.58×0.18	黒褐色土	土師・須恵・ 石版丁	古墳中期後半	掘立2に切られる
10	N1W2	楕円形	レンズ状	2.35×1.57×0.16	黒褐色土	弥 生	弥生以降	
11	N1W1	楕円形	皿状	2.19×1.94×0.09	黒褐色土		古墳後期以前	掘立2に切られる
12	N2W1	円形	逆台形状	1.38×1.27×0.19	黒褐色土		古墳後期以降	SK7を切る
13	N2W4	楕丸長方形	逆台形状	1.14×0.82×0.32	灰褐色土	土 師	中 世	
14	N1W3- N2W4	不定形	皿状	4.60×0.96×0.14	暗褐色土		不 明	

遺物観察表

表5 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規 長さ×幅×高さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	SIW1~SIW3	皿状	13.02×0.68×0.10	暗褐色土	赤生	古墳後期以前	掘立2-SK6に切られる
2	SIW3	U字状	1.56×0.82×0.18	暗褐色土	赤生	古墳後期以前	SK6に切られる
3	NIW3~SIW3	U字状	1.75×0.76×0.34	暗褐色土		不明	

表6 SB1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色澤 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	壺	口径(19.3)	わずかに内湾する口縁部。口縁端部は内傾する。1/5の残存。	㊦ヨコナデ	㊦ヨコナデ	褐色	石・長(1~2)		25
		残高 7.0		㊧ハケ	㊧磨減の為不明	褐色			
2	壺	口径(19.1)	わずかに内湾する口縁部。口縁端部はやや凸する。口縁端部は内傾する。1/8の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (指環痕)	褐色	石・長(1~2)		25
		残高 6.4				褐色			
3	壺	口径(15.8)	わずかに内湾する口縁部。口縁端部は丸く仕上げ。1/3の残存。	㊦ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色	石・長(1)		25
		残高 4.4		㊧ハケ		乳褐色			
4	甕	口径 10.9	ほぼ完形品。壺球形の胴部。口縁部は近く立立し、端部は内傾する。底部は丸底痕。	㊦ヨコナデ	㊦ヨコナデ	乳黄褐色	石・長(1~2)	黒塗	25
		器高 9.9		㊧ハケ(6~8本 /1cm)	㊧ナデ(指環痕)	乳黄褐色			
5	高坏	底径(10.5)	長方形に三角を立し、肩部はゆるやかに傾斜する。仕舞部内面に磨減痕をたがひたがひに施す。底部は丸底痕による。	磨減の為不明	㊦ナデ	褐色	石・長(1~2)	黒塗	25
		残高 7.2			㊧ハケ	褐色			
6	坏蓋	口径 11.8	完形品。天井部は丸く、断面三角形の残をもつ。口縁端部内面は内傾する凹面をなす。	㊦回転ヘラケズ リ1/2	㊦ナデ(一部)	灰色	石・長(1~3)		26
		器高 5.2		㊦回転ナデ	㊦回転ナデ	灰色			
7	坏身	口径(10.5)	1/3の残存。たちあがりは内傾し、肩部は内傾する凹面をなす。受部端に凹線状の凹みあり。	㊦回転ヘラケズ リ1/2	㊦回転ナデ	青灰色	蜜		26
		残高 4.3		㊦回転ナデ		青灰色			
8	蓋	口径 10.8	完形品。有蓋高坏の蓋。扁平なつまみかけ。断面三角形の残をもつ。口縁端部内面は内傾する凹面をなす。	㊦回転ヘラケズ リ1/3	㊦回転ナデ	灰色	石・長(1~4)		26
		つまみ径 3.5				灰色			
9	蓋	口径 12.4	1/3の残存。凹みを持つつまみかけ。口縁部は下下し。口縁端部内面は内傾する凹面をなす。	㊦回転ヘラケズ リ1/2	㊦回転ナデ	青灰色	石・長(1~5)		26
		つまみ径 3.3				灰色			
10	蓋	口径 11.6	ほぼ完形品。中央部が突出するつまみかけ。扁平な天井部で断面三角形の残をもつ。口縁端部内面は内傾する凹面をなす。	㊦回転ヘラケズ リ1/2	㊦回転ナデ	灰色	石・長(1~3)		26
		つまみ径 3.2				灰色			
11	蓋	口径 11.5	完形品。中央部が突出するつまみかけ。扁平な天井部で断面三角形の残をもつ。口縁端部内面は内傾する凹面をなす。	㊦回転ヘラケズ リ1/2	㊦回転ナデ	青灰色	石・長(1~3)		26
		つまみ径 3.0				青灰色			
12	高坏	口径 10.7	完形品。たちあがりは内傾し、肩部は内傾する凹面をなす。肩部に三角状の透かしがある方向にあられる。	㊦回転ヘラケズ リ1/3	㊦回転ナデ	青灰色	石・長(1~3)		26
		底径 7.9				青灰色			
器高 9.1									

SB1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
13	石板丁	3/5	結晶片岩	(6.5)	4.6	0.52	23.5		26

遺物観察表

表9 SK6 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
27	甕	口径(19.4) 残高 6.1	内湾して立ち上がる口縁部。胴部は大きく一部や丸頸する甕をもつ。頸部外面に深い稜あり。	磨滅の為不明	㊦ヨコナデ ㊦ハケ(伊・秋/法)	乳黄色 乳黄色	心・長(1-3)		
28	甕	口径(21.5) 残高 7.5	1/4の残存。口縁部は内湾し、肩部は内湾する甕をもつ。頸部内外面に深い稜をもつ。	㊦ヨコナデ ㊦ハケ(伊・秋/法)	㊦ヨコナデ 磨滅の為不明	赤褐色 乳褐色	石・長(1-5)		27
29	埴	口径(15.3) 残高 6.1	1/3の残存。胴部は内湾し、口縁部はわずかに外反する。頸部は丸い。器壁薄い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳褐色 乳褐色	密		27
30	甕	口径(27.9) 残高 13.0	頸部は南面的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁肩部は丸く仕上げられる。	㊦ヨコナデ・ハケ 磨滅の為不明	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	密 密	黒斑	27
31	坏蓋	口径(13.3) 残高 2.8	小片。断面三角形の稜あり。口縁部は内湾して下がり、増部は内湾する面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密		
32	坏蓋	口径(12.2) 残高 2.4	小片。シャープな稜をもち、口縁部は扁平する。口縁肩部は内湾する段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密		
33	高坏	口径(7.3) 残高 3.3	小片。頸部肩部に上外方へのびる凸線がある。透かしを看取。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密		

表10 SK7 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
34	甕	口径(18.8) 残高 7.2	内湾する口縁部。口縁中央に屈曲部をもつ。口縁増部は内湾する。頸部外面に深い稜あり。	㊦ヨコナデ ㊦ナデ	㊦ヨコナデ ㊦ナデ	褐色 乳黄色	石・長(1-3)		28
35	甕	口径(20.2) 残高 4.1	1/6残存。内湾する口縁部。口縁中央に深い屈曲部をもつ。口縁増部はナデにより取り除かれる。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 乳黄褐色	石・長(1-4)		28
36	甕	口径(16.8) 残高 5.8	1/6残存。内湾する口縁部。肩部外面はわずかに外方に突出する。頸部内面はナデにより取り除かれる。	㊦ヨコナデ 磨滅の為不明	㊦ヨコナデ ㊦ナデ	褐色 乳褐色	石・長(1-3)		28
37	甕	口径(13.4) 残高 5.3	わずかに内湾する口縁部。口縁増部はわずかに内湾する。頸部に深い稜をもつ。1/4残存。	㊦ヨコナデ ㊦ハケ(伊・秋/法)	㊦ヨコナデ 磨滅の為不明	乳褐色 乳黄褐色	心・長(1-2)		28
38	甕	口径(18.6) 残高 3.8	やや内湾する口縁部。口縁下位に深い屈曲部をもつ。口縁増部はわずかに内湾する。小片。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳色 乳褐色	石・長(1-2)		28
39	甕	口径(17.2) 残高 4.1	内湾する口縁部。口縁増部はわずかに内湾する。頸部に稜をもたない。小片。	㊦ヨコナデ	㊦ヨコナデ	乳褐色 赤褐色	石・長(1-3)		28
40	甕	口径(18.8) 残高 9.6	1/2残存。内湾する口縁部。口縁増部はナデにより取り除かれる。底部内面に深い稜をもつ。器壁を看取。	㊦ヨコナデ 磨滅の為不明	㊦ヨコナデ ㊦ナデ	乳黄褐色 乳黄色	石・長(1)		28
41	甕	口径(15.2) 残高 5.3	外反する口縁部。口縁増部は丸く仕上げられる。頸部に深い稜をもつ。小片。	㊦ヨコナデ ㊦ナデ	㊦ヨコナデ ㊦ヘラナズリ	乳黄褐色 褐色	密		28
42	甕	残高 2.5	小片。胴部外面にヘラ描きの点線文を2条施す(記号か?)。	ナデ	ハケ(指頭後)	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1)		28
43	甕	残高 9.0	口縁部欠損。半球形の頸部。胴中央に肩入稜をもつ。内面は屈曲部、接合部が顕著に残る。	ナデ	ナデ(指頭後)	乳褐色 乳褐色	石・長(1-4)		27

筋違E遺跡

SK7 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
44	埴	口径(10.7) 残高 4.1	内湾する口縁部。胴上段にわずかに屈曲部をもつ。口縁部は丸い。底部欠損。1/2残存。	白ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 密 乳黄褐色 ○	密	27	
				磨滅の為不明	磨滅の為不明				
45	高坏	残高 4.8	組み合わせ式。器壁が厚い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳褐色 暗褐色	石・長(1-2) ○		27
46	高坏	底径(15.2) 残高 8.2	三角造形の胴部。長くゆるやかに置く。肩部。肩部に凹取りされる。柱状部。腹内面に厚をもたない。1/4残存。	ヘラムガキ	磨滅の為不明	乳黄褐色 黒褐色	石・長(1-4) ○	27	
				磨滅の為不明	磨滅の為不明				
47	高坏	口径(29.6) 残高 7.2	大型の高坏坏部。内湾し、口縁部はナデにより面取りされる。1/6残存。	白ヨコナデ	ナデ	乳黄色 乳褐色	石・長(1-2) ○	27	
				磨滅の為不明	磨滅の為不明				
48	瓶	口径 24.5 残高 18.9	窟立気味に立ち上がる口縁部。肩部は丸く仕上げる。把手は長く、上外方にのびる。	ナデ	磨滅の為不明	乳褐色 乳褐色	石・長(1-5) ○		
				磨滅の為不明	磨滅の為不明				
49	坏蓋	口径(12.2) 器高 4.7	1/2残存。やや丸みのある天部。蓋面は三角形のシャープな段をもつ。口縁部は垂下し、蓋部は内湾する器壁をなす。	磨滅の為不明	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ○	27	
				磨滅の為不明	磨滅の為不明				
50	坏身	口径 9.7 器高 4.7	ほぼ球形。たちあがりは内湾した後、窟立気味に立ち上がる。肩部は内湾する器壁をなす。底部は平底。	磨滅の為不明	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1-3) ○	27	
				磨滅の為不明	磨滅の為不明				
51	坏身	口径(11.0) 器高 5.3	たちあがり内湾し、肩部は内湾する段をなす。底部は丸みをもつ。器壁は直に立ちあがり内湾する。1/2残存。	磨滅の為不明	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
				磨滅の為不明	磨滅の為不明				
52	甕	口径(20.6) 残高 5.8	肩直上縁部。口縁部は上下方に膨らむ。口縁に三角の凹取りがある。口縁中位に縁部を縮めたる文(凹線)を刻す。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ○	自然釉	27
				磨滅の為不明	磨滅の為不明				

表11 SK9 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
53	坏身	口径(9.3) 残高 3.5	たちあがり内湾し、肩部は内湾する段をなす。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
				磨滅の為不明	磨滅の為不明				
54	高坏	底径(8.0) 残高 4.2	ハの字状に外反する脚部。脚部は内湾気味に下がる。透かしを有す。1/4残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
				磨滅の為不明	磨滅の為不明				
55	高坏	底径(8.2) 残高 3.8	ハの字状に外反する脚部。脚部は内湾気味に下がる。透かしを有す。1/4残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○	自然釉	
				磨滅の為不明	磨滅の為不明				
56	高坏	口径(16.0) 残高 5.7	口縁部は外反し、肩部は先細りする。坏部曲部にわずかに段をもつ。小片。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳褐色 褐色	長(1) ○		
				磨滅の為不明	磨滅の為不明				
57	にふた	口径 4.2 器高 4.0	手づかぬ十部。底部は平底風。ほぼ球形品(口縁部一部欠損)。内外面共に器壁を顕著に残す。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	密 ○	黒洗	29
				磨滅の為不明	磨滅の為不明				

SK9 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
58	石瓶丁	4/5	結晶片岩	(10.0)	(4.0)	0.67	37.3		29

遺物観察表

表12 SK出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
59	杯蓋	口径 11.4	扁平な天井部。天井部と上縁部の境界は明確による。7縁部は滑沢気味に下がり縁部に内傾する。完形品。	◎回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	石・長(1-5)	SK12	29
		器高 3.6		◎回転ナデ					
60	高杯	残高 10.5	円筒状の柱部。杯部に旋門様を看取。組み合わせ式。	磨滅の為不明	◎ナデ 磨ケズリ	乳褐色 乳褐色	密	SK2	29
61	杯	口径 9.5	完形品。口縁部はわずかに外反し、端部は丸い。底部は丸みのある平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	石・長(1-3)	SK13	29
		底径 6.0							
62	壺	残高 3.0	平底の底部。底部外面に指痕を顕著に残す。	ナデ	ナデ	乳黄色 灰黄褐色	石・長(1-3)	SK5	29
		底径 3.6							
63	壺	底径 4.0	外方に突出するやや上げ底の底部。器壁は厚い。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1-4)	SK5	29
		残高 2.9							
64	高杯	残高 5.2	大きく外反する高柱部。器壁は厚い。	ナデ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1-3)	SK10	

表13 SX1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
65	壺	口径(20.4)	わずかに内湾する口縁部。端部は「コ」字状に仕上げる。器壁は厚い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1-2)		
		残高 4.4							
66	壺	残高 4.1	複合口縁部。接合部は短くタガ状に突出する。口縁部底部は外反して立ち上がる。小片。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳褐色 乳黄色	石・長(1-5)		
67	高杯	残高 4.6	円筒状の柱部。径8mm~1cm大の円孔を穿つ。小片。	ヘラミガキ	ナデ	乳褐色 乳褐色	密		
68	高杯	底径(8.9)	短く、やや内湾する厚めの柱部。増殖部に丸く仕上げる。柱部内面に横をもつ。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳黄色 乳黄色	密		
		残高 2.4							
69	杯蓋	口径(10.0)	前面三角形のシャープな稜をもつ。口縁部は長く垂下し、端部は丸く仕上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	石・長(1-3)		
		残高 4.0							
70	杯身	口径(9.4)	たちあがりは完済し、肩部は内湾する円筒をなす。全部は長く上方にのびる。底部は平底。1/6残存。	◎回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密		自然種
		器高 4.0		◎回転ヘラケズリ/3					
71	つまみ	つまみ径 3.0 つまみ高 1.2	中央部が回むつまみ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密		
						◎			

表14 包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
72	杯	口径(10.0)	口縁部はわずかに内湾し、端部は丸く仕上げる。底部は平底。表面外面にヘラ切り痕を看取。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	兵(1)		29
		底径 6.0							
73	杯	口径 10.5	1/2残存。口縁部は内湾し、肩部は丸く仕上げる。肩下に器底をもつ。表面外面にヘラ切り痕を看取。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄白色	砂粒多し		29
		底径 7.2							
		器高 3.6							

跡 遺 F 道 跡

包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	種類	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色調 (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
74	坏	口径(10.5) 底径(6.6) 残高 4.3	1/3残存。胴部は内径方向に立ち上がり、口縁部は直立する。肩部は無い。底部にヘラ送り痕、スノコを要す。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	砂粒多し ○		29
75	罍	口径(21.6) 残高 8.3	1/3残存。やや丸みのある口縁部。口縁中央に垂直の溝をもつ。口縁部はナデによりわずかに裏取りされる。縦糸痕あり。	ヨココナデ	ヨココナデ ◎着減の為不明	褐色 褐色	石・長(1-3) ○		
76	罍	口径(21.0) 残高 3.9	1/3残存。不揃いな口縁部。口縁中央に深い垂直の溝をもつ。口縁部内径はわずかに肥厚。肩部は平直面をなす。	ヨココナデ	ヨココナデ	暗赤褐色 灰黄色	石・長(1-5) ○		
77	壺	口径(10.7) 残高 8.2	短く内湾する口縁部。肩部は丸く仕上げず。胴部最大径は胴上位にもつ。	①ヨココナデ	◎着減の為不明 ◎ハケ(6本/1cm)	乳黄褐色 乳白色	石・長(1-3) ○		
78	甌	残高 5.0	瓶の把子。上外方に外反気味にのびる。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	密 ○		
79	坏蓋	口径(11.4) 残高 4.2	扁平な天井部。シャープな縁をもつ。口縁部は垂下する。口縁基部は内湾する段をなす。1/3残存。	◎回転ヘラズリ1/3 ◎回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		30
80	坏蓋	口径(11.1) 残高 4.2	やや丸みのある天井部。シャープな縁をもつ。口縁部は垂下する。口縁基部は内湾する段をなす。1/3残存。	◎回転ヘラズリ1/3 ◎回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	長(5) ○		
81	坏蓋	口径(12.6) 残高 4.9	定形品。やや丸みのある天井部。口縁部は垂下し、肩部は内湾する凹面をなす。	◎回転ヘラズリ1/2 ◎回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		30
82	坏蓋	口径(14.2) 残高 4.7	やや扁平な天井部。鋭い縁をもつ。口縁部は内湾した下に下がる。口縁基部は内湾する凹面をなす。1/3残存。	◎回転ヘラズリ1/2 ◎回転ナデ	◎ナデ(一部) ◎回転ナデ	灰色 灰色	長(1-5) ○		
83	坏蓋	口径(14.4) 残高 4.9	やや丸みのある天井部。鋭い縁をもつ。口縁部は内湾した下に下がる。口縁基部は内湾する凹面をなす。1/3残存。	◎回転ヘラズリ1/2 ◎回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ○		30
84	坏蓋	口径(15.5) 残高 4.9	丸みのある天井部。天井部と口縁部の接合は段差によって表される。口縁基部は丸く仕上げず。1/3残存。	◎回転ヘラズリ1/2 ◎回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ○		30
85	坏身	口径(9.2) 残高 5.3	たちあがりは内湾し、肩部は内湾する凹面をなす。受部は短く上外方にのびる。底部は丸底。1/3残存。	◎回転ヘラズリ1/2 ◎回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	石・長(1-5) ○		30
86	坏身	口径(10.6) 残高 4.5	たちあがりは内湾した後、直上する。肩部は内湾する凹面をなす。受部はやや上外方にのびる。底部は平直底。1/3残存。	◎回転ヘラズリ1/2 ◎回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○		30
87	坏身	口径(16.7) 残高 5.7	たちあがりは内湾し、肩部は丸く仕上げず。受部は水平にのびる。底部は丸底。1/3残存。	◎回転ヘラズリ1/2 ◎回転ナデ	◎ナデ(一部) ◎回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		30
88	高坏	口径(10.4) 残高 1.9	高坏の坏。たちあがりは内湾し、肩部は内湾する凹面をなす。脚部接合痕を残す。1/2残存。	◎回転ヘラズリ1/2 ◎回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1-2) ○		30
89	罍	口径(16.8) 残高 6.5	口縁部は外反し、肩部は「コ」に仕上げられ、口縁上段に1本の凸帯が張り、肩部に輪帯状の(1)を設け、1/3残存。	◎回転ナデ ◎平行印き	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		30

第5章

スジカイ
筋違F遺跡



第5章 筋違F遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査の経緯

昭和63年3月、今村健市氏より、松山市福音寺町426、427-4の宅地開発にあたり、埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課に提出された。

当該地は松山市の指定する『114 松末六丁目遺物包含地』内にあり、また筋違遺跡として過去に5次の調査が実施されている地域内にあたる。

よって、文化教育課は申請地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲やその性格を確認するために昭和63年度に試掘調査を実施した。調査の結果、当該地に遺跡が存在していることが明らかになった。この結果を受け、宅地開発に伴って消失する遺跡に対して記録保存を行うため、文化教育課は申請者の協力のもと、昭和63年9月～12月の間に本格的な発掘調査を実施した。調査は、福音寺地区における古墳時代集落の構造解明を主目的としたものである。

(2) 調査組織

調査地	松山市福音寺426、427-4
遺跡名	筋違F遺跡
調査期間	昭和63年9月6日～昭和63年12月27日
調査面積	1,500㎡
調査協力	今村健市
調査担当	西尾幸則（現、松山市教育委員会文化教育課） 池田 學（平成5年 退職）

2. 層位 (第72頁)

筋違F遺跡は、標高28.5mにあり、調査前は水出であった。

昭和63年に調査された筋違E遺跡は本調査地の南西40m、平成元年調査の筋違H遺跡は本調査地に東接するものである。

土層は、第I層表土、第II層水田床土、第III層茶褐色土、第IV層黄褐色土（黄灰色の礫含む）である。調査地は既に近現代の土地開発に伴い、大きく改変されており、遺物包含層はなかった。

遺構は第III層上面で行い、弥生時代から中・近世の竪穴式住居址7棟、掘立柱建物址5棟、土坑14基ほか柱穴や小穴を多数検出した。なお、本調査については「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ」（松山市教育委員会1989年）に概要を報告しているが、整理の結果、遺構認定及び遺構数が異なっており、取り扱いに注意していただきたい。

なお、調査にあたっては調査地に6mのグリットを設け、北から南にA-E、西から東に1-7とし、呼称はA1、A2-E7区とした。

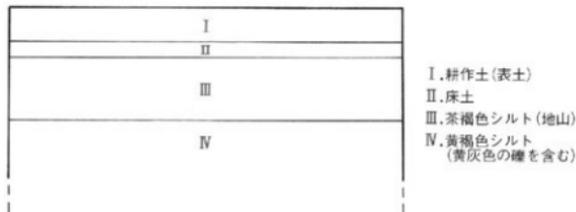
3. 遺構と遺物

本調査では、弥生時代後期と古墳時代後期の遺構が主要な検出遺構となる。検出遺構は、少なくとも、さらに時期決定が難しいものが大半を占めるため、報告に際しては時代ごとに記述を行わず、遺構ごとに記述するものとする。

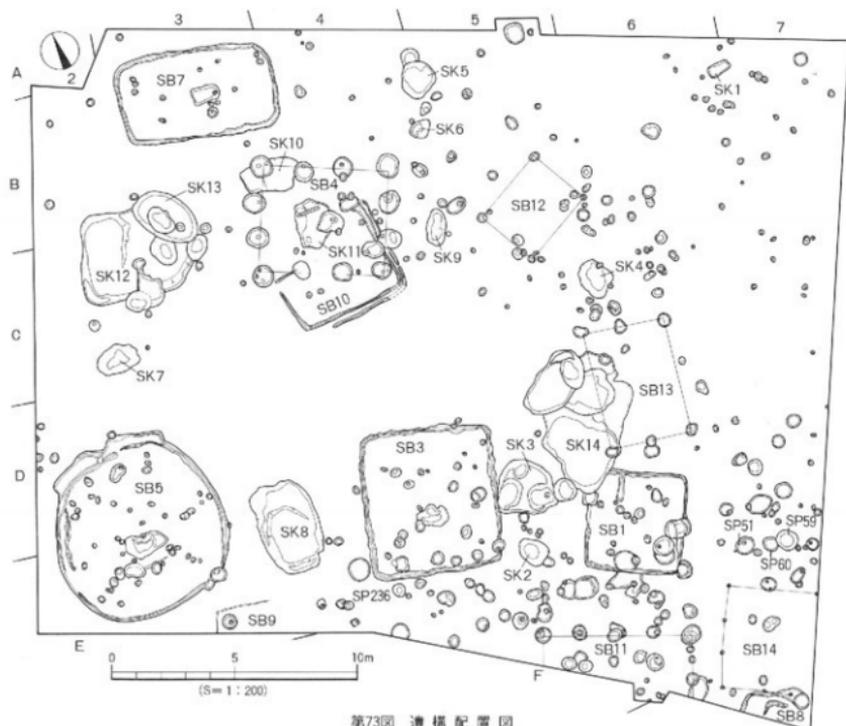


第71図 調査地位位置図 (S=1:1,000)

H=29.00m



第72図 基本層位図 (S=1:20)



第73図 遺構配置図

(1) 竪穴式住居址 (SB)

弥生時代後期2基、古墳時代後期3基、古墳時代と考えられるもの2基である。

SB5 (第73・75図、図版32~34)

調査区南西、D2～E2区にある。平面形態は円形で、直径7.1m、深さ28cmを測る。

室内施設には主柱穴、炉、壁体溝がある。主柱穴は直径15～27cm、深さ12～45cmを測る、北側のP1・2・3・6の外側には柱穴が検出されており、支柱が想定される。炉は中央やや南にあり、平面形態は楕円形状を呈す。規模は長軸1.5m、短軸0.8m、深さ34cmを測る。炉内は中央部が深く、東側はテラス状の段を設けている。中央部には2基の小穴がある。壁体溝は南西部で未検出部分が一部あり、さらに南部では内・外2条の溝が部分的に検出されている。

このほか、住居に関する施設としては、張り出し部分が検出されている。張り出し部は北西部にあり、外方に40～50cm張り出し、幅4.8mを測る。張り出し部は北北西部でくびれ部をもち、その内側で壁体溝が未検出となる。切り合い関係は確認するにいたらなかった。

遺物は、住居址全体に多量の土器が密集する状況で出土している。遺物には弥生後期土器と石製品・鉄製品がある。弥生土器は多量に出土したが、完形品は数点に限られた。なお、第98図223～226は後世の遺構に伴うものである。

出土遺物 (第74・76～99図、図版37～48)

弥生土器は、甕形土器175点、壺形土器151点、鉢形土器43点、高坏形土器77点、器台形土器25点、支脚形土器7点、土製紡錘車1点、ミニチュア4点ほか9点が出土している。

甕形土器 (第74・76～83図1～60、図版37～39)

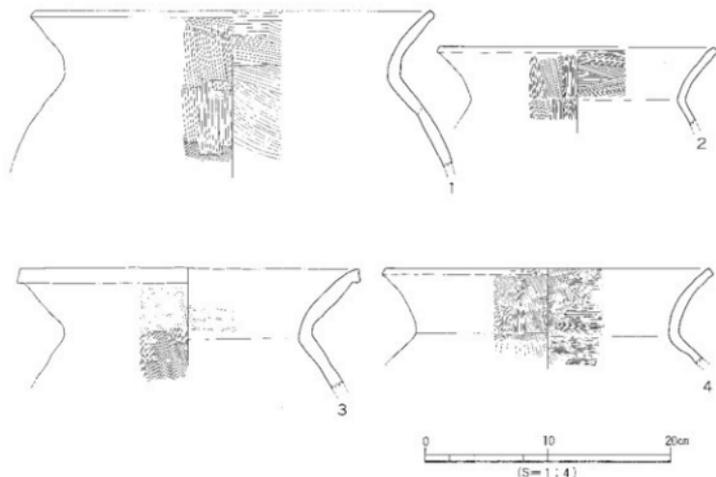
甕形土器には法量に大・中・小の三つのものがある。以下、法量ごとに記述する。

1) 大型品 (1～4) 口径が20cmを超えるものである。

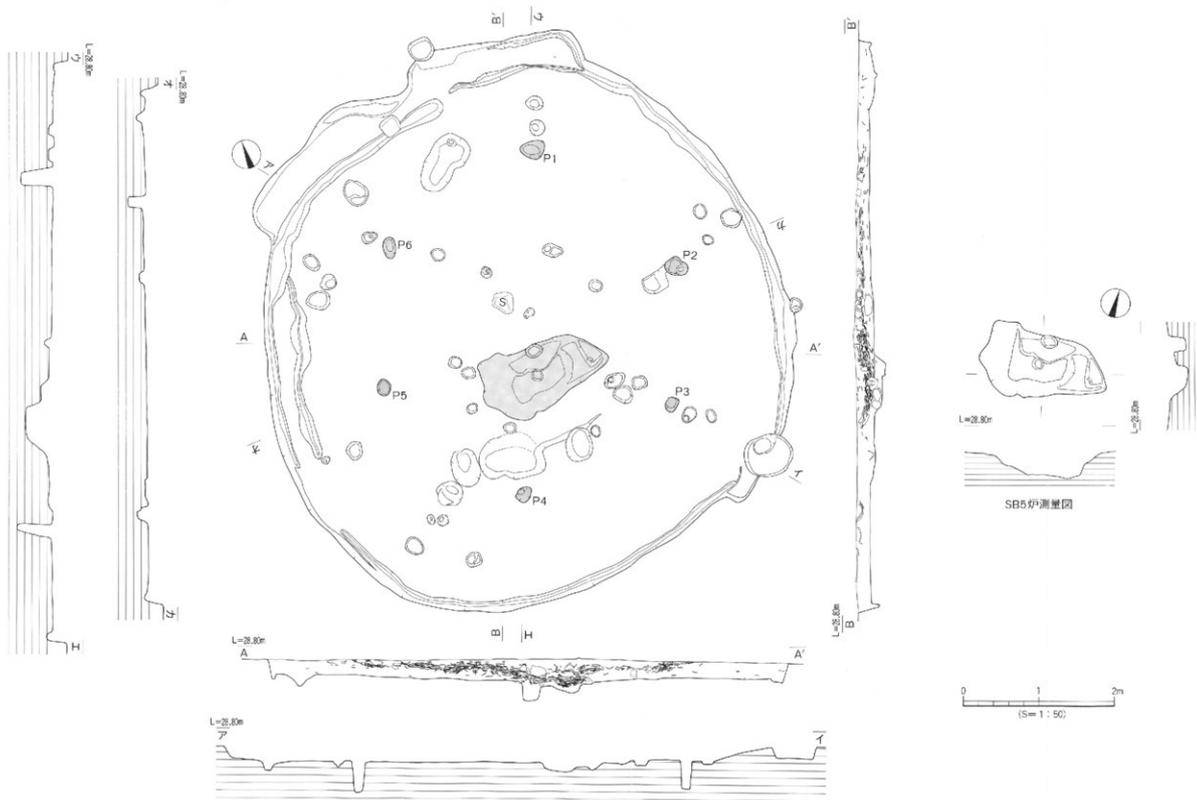
1は口径が32cmと最も大きいものである。ゆるやかに外反する口縁部をもつ。2～4は口径が20cm大で、内面に稜をもって外反する口縁部をもつ。

2) 中型品 (5～34) 口径は15・16cm～20cm未満のものである。なお、器高が26cm以上のものと、26cm未満のものに分けられる。

①器高が26cm以上のものである(5～25)。5～18は頸部が縮まるもので、5～13は肩部に張りをもち、14～18は胴中位付近に最大径をもち体部全体が膨らみをもつものである。5～18は頸部内面に稜をもち、1は縁部がナデによるあいまいな面をもつことを共通要素とする。5・15は体部にヨコ方向の叩きをもつものであり、叩き例は底部を含め4点である。



第74図 SB5 出土遺物実測図(1)



第75図 SB5 測量図

19～25は、頸部の締まりが先述のものに比べ弱いものである。頸部内面の稜は弱いものが多く、体部は全体に膨らみをもっている。口縁端面は丸みをもち、あいまいな小さい面となる。

②器高が26cmに満たないものである(26～34)。肩部が強く張る26、胴上位～中位が強く張る27・28、胴上半部にゆるやかな張りをもつ29～34がある。底部は斜めにたちあがるもので、平底と小さい上げ底がある。29と30は形態・調整がよく似ている。

3) 小型品(35～38) 胴上半部の張りが強いもの35～37と弱いもの38がある。口縁端面はあいまいで小さい面をもつ。35と36は体部の調整の方向や工具が同じものである。

底部(39～50) 胴上半は張り、胴下半は張りが弱く、直線的に底部につづく。底部は直立～傾斜する立ち上がりをもち、小さい上げ底ないし平底となる。また、底部の器壁はやや厚いものである。50は例外的で、胴下半部に膨らみをもち、平底の底部はやや薄いものである。出土数はこの1点である。

底部(51～53) 51～53は菱形土器ないし壺形土器の底部片である。やや大きい平底をもつ。

その他の壺形土器(54～60) 54は逆「L」字状口縁をもつものである。頸部に刻目凸帯をもっている。中期後葉。55・56はゆるやかに外反する口縁部をもつものである。口縁部には沈線文を2条もつ。後期前半。57は短く外反する口縁部は、端部が上方に拡張される。中～東部瀬戸内系。58は上方に大きくたちあがる口縁部をもつものである。色調は淡茶褐色である。中～東部瀬戸内系。59・60は大型品である。59は頸部に斜格子目の刻目凸帯、口縁部には2条の沈線文をもつ。器壁が厚い。出自不明、時期不明。60は頸部に刻目凸帯をもつものである。形態不明。

壺形土器(第84～92図、図版40～44)

壺形土器には、複合口縁壺と複合口縁でない単口縁のものに大別される。

複合口縁壺(61～102) 複合口縁壺は頸部形態と口縁接合部の形態により細分される。

①内傾する頸部をもち、口縁接合部が「コ」の字状になるものである(61～73)。

61～69は口縁外面に櫛描直線文、波状文、斜格子目文をもつものである。69は口縁接合部の外面にも沈線文をもつ。70は二重口縁部分で、無文である。71～72は二重口縁部を欠損するものである。71は頸部に刻目凸帯をもつ。73は口縁部を欠損するもので、内傾するあいまいな頸部をもつ。

②外傾する長い頸部をもち、口縁接合部が「コ」の字状になるものである(74～76)。

74・75は口縁部に櫛描波状文をもつ。76は口縁部が無文のものである。

③直立～外傾する頸部をもち、口縁接合部が「コ」の字状になるものである(78～80・90)。

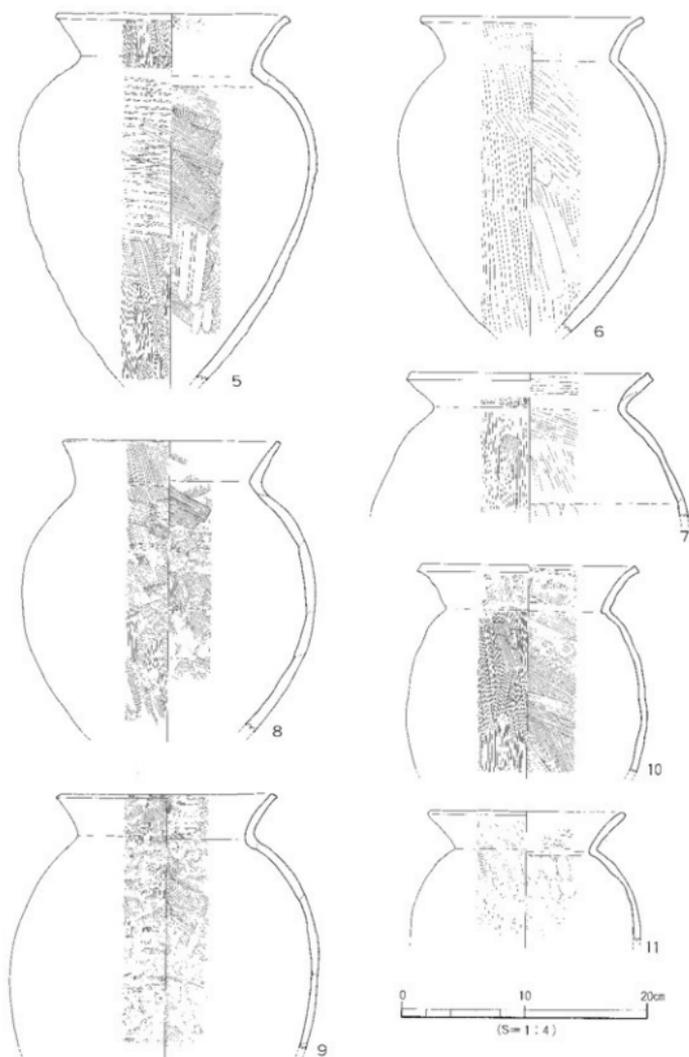
78～80は口縁部に櫛描波状文をもつ。78・79は頸部に刻目凸帯をもち、78は胴上半部にタテのやや長い刻目棒状浮文をもつ。90は胴部に2条1組の沈線(線刻)をもつ。

④直立～外傾する頸部で、口縁接合部が「く」の字状になるものである(81～86)。

81～84の口縁部は無文である。83・84は頸部に刻目凸帯をもつ。86は口縁部がゆるやかに直立するものである。口縁部に3条の沈線文をもつ。やや異形品で、出土もこの1点に限られる。

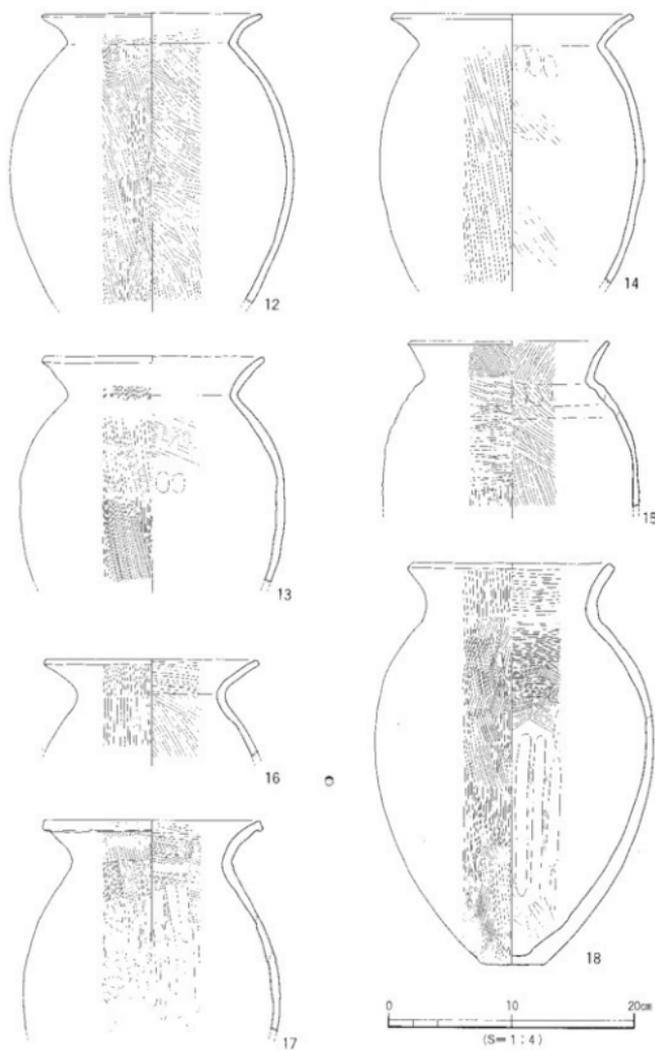
その他(87～89) 87～89は頸部の傾きは不明であるが、頸部長はやや長いものと思われる。いずれも口縁接合部が「く」の字状を呈している。88は櫛描波状文をもつ。89は二重口縁部長が著しく長いものである。

筋違 F 遺跡



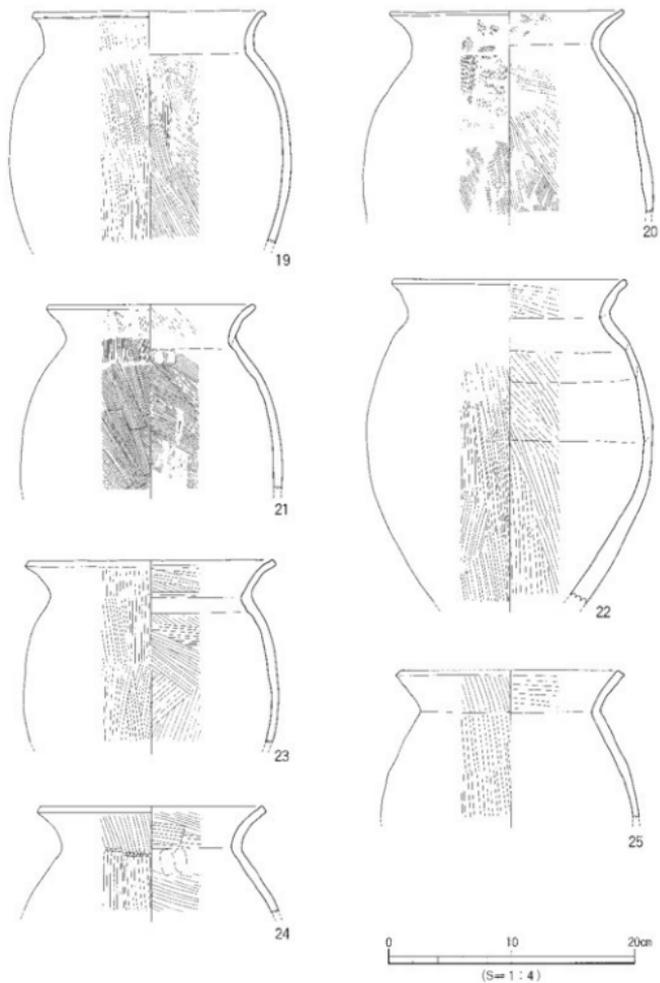
第76図 SB5 出土遺物実測図(2)

近橋と遺物



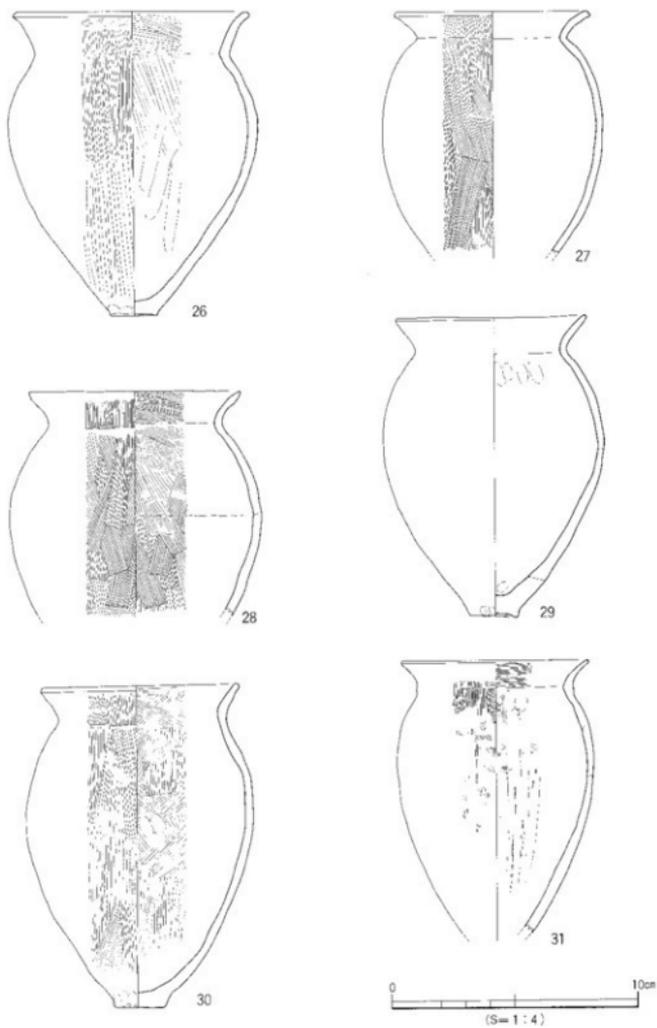
第77図 SB5 出土遺物実測図(3)

筋違 F 遺跡



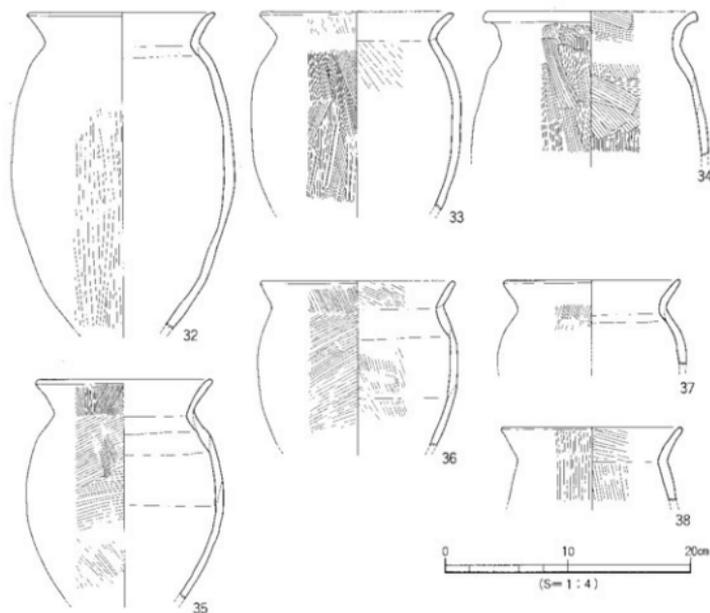
第78図 SB5 出土遺物実測図(4)

遺情と遺物



第79図 SB5 出土遺物実測図(5)

筋説 F 遺跡



第80図 SB5 出土遺物実測図(6)

⑤短い頸部のもので、口縁接合部が「く」の字状ないし丸みをもつものである(91-99)。

93は口縁部に横溝波状文、92は頸部に刻目凸帯をもつ。94の頸部には叩きないし大きめの刷毛口痕がみえる。99は口縁接合部が丸いものである。

⑥著しく長い口頸部をもち、口縁接合部が「く」の字状のものである(100)。

100は筒状の長い頸部をもつもので、出土数は本品一点に限られる。口縁部と頸部は半截竹管と、沈線文で加飾される。

101・102は複合口縁壺の頸部片である。頸部には凸帯をもつ。101は凸帯下部に刻目文をもつ。単口縁壺(103-127)

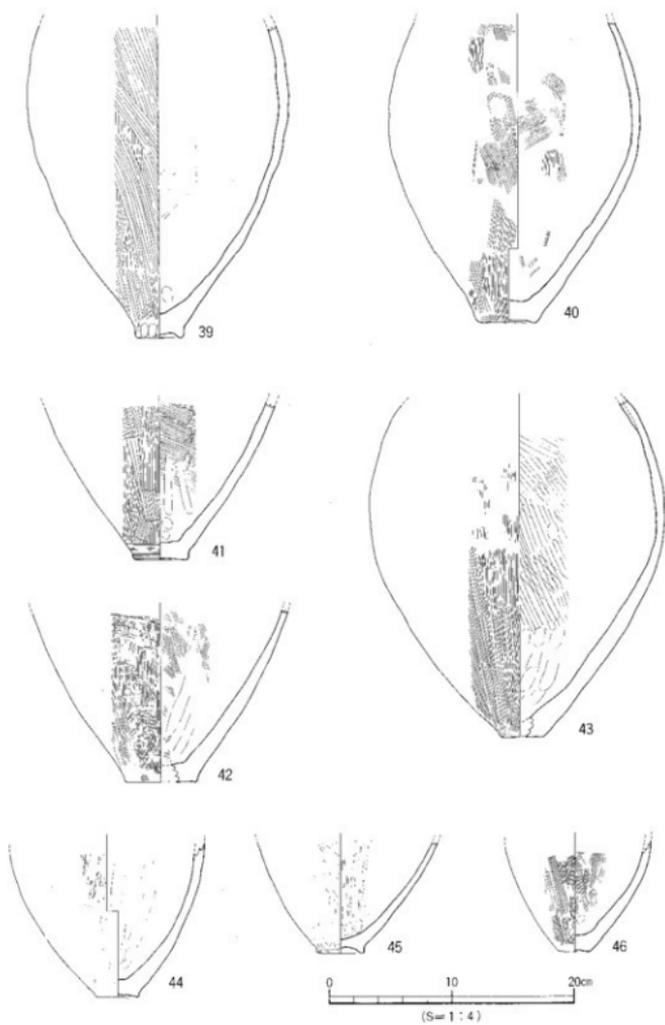
①内傾する頸部に、外反する口縁部をもつものである(103・104)。

長球形の胴部をもち、頸部の内面には上・下境に稜をもっている。

②短い頸部に、外反する口縁部をもつものである(105・106)。

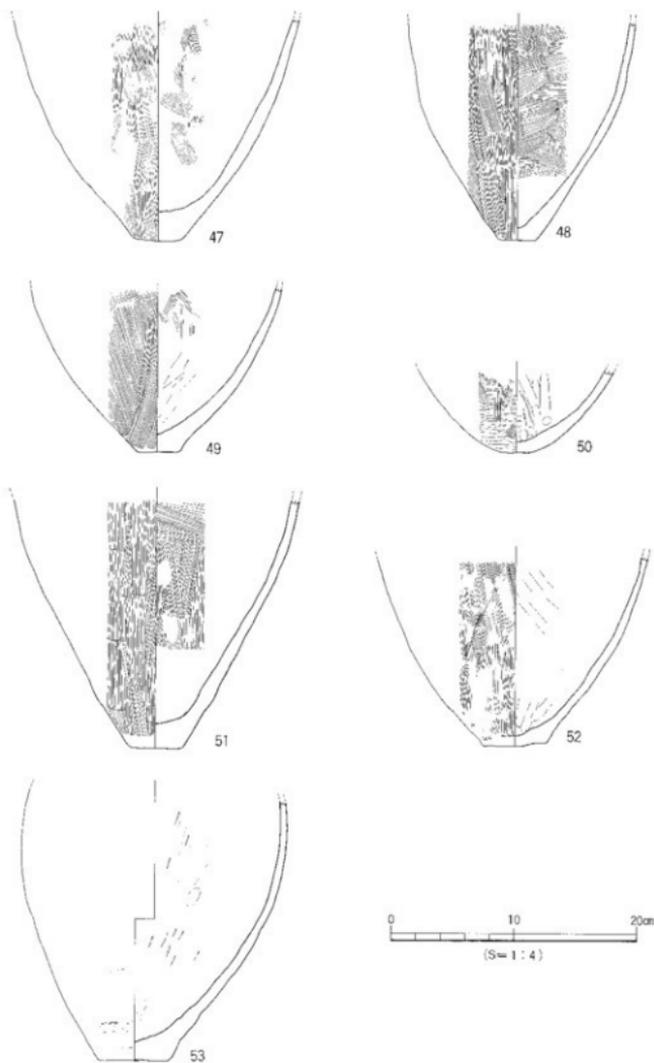
106は小型品で、胴中位が張る長球形の胴部と上げ底の底部をもつ。器壁が薄い。

遺構と遺物

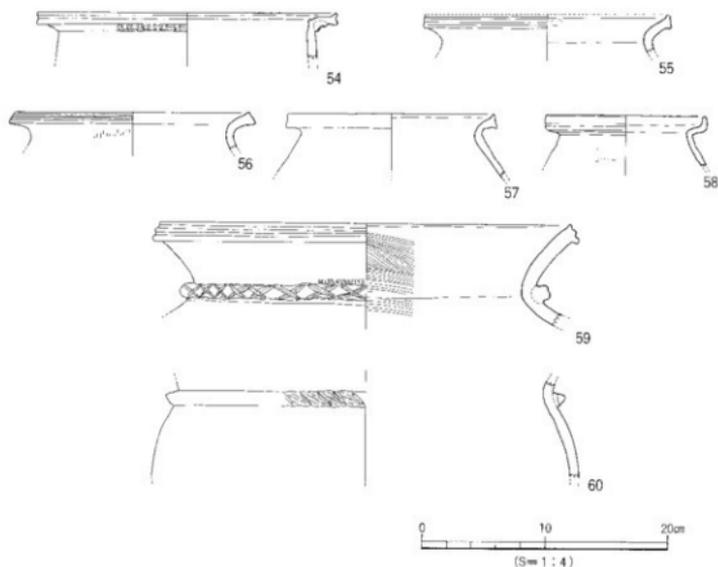


第81圖 SB5 出土遺物実測図(7)

筋違F遺跡



第82図 SB5 出土遺物実測図(8)



第83図 SB5 出土遺物実測図(9)

③筒状の口頸部をもつもので、口径と頸部下端径が大差ないものである(107~114)。

107~112は体部に比べ口頸部長が短く、113・114は口頸部長がやや長いものである。いずれも胴中位やや上から中位に最大径をもち、口縁端部がわずかに外傾~外反するものである。110は叩き痕がみとめられる。

④小型品で扁平球の胴部に、突出する底部、長い口頸部をもつものである(115・116)。

116は口頸部が内湾するもので、平野でもみられない形態を呈している。

⑤中型品で、長い口頸部と直口口縁をもち、柳指文が多用されるものである(117~120)。

117・118は頸部に柳指直線文をもち、119には半載竹管文も施される。120は胴下半部片で、扁平球の胴部に、突出する底部をもつものである。117~119の胴部も同じ形態をもつ。

⑥頸部の締まりは弱く、各部位境があいまいなものである(121・122)。

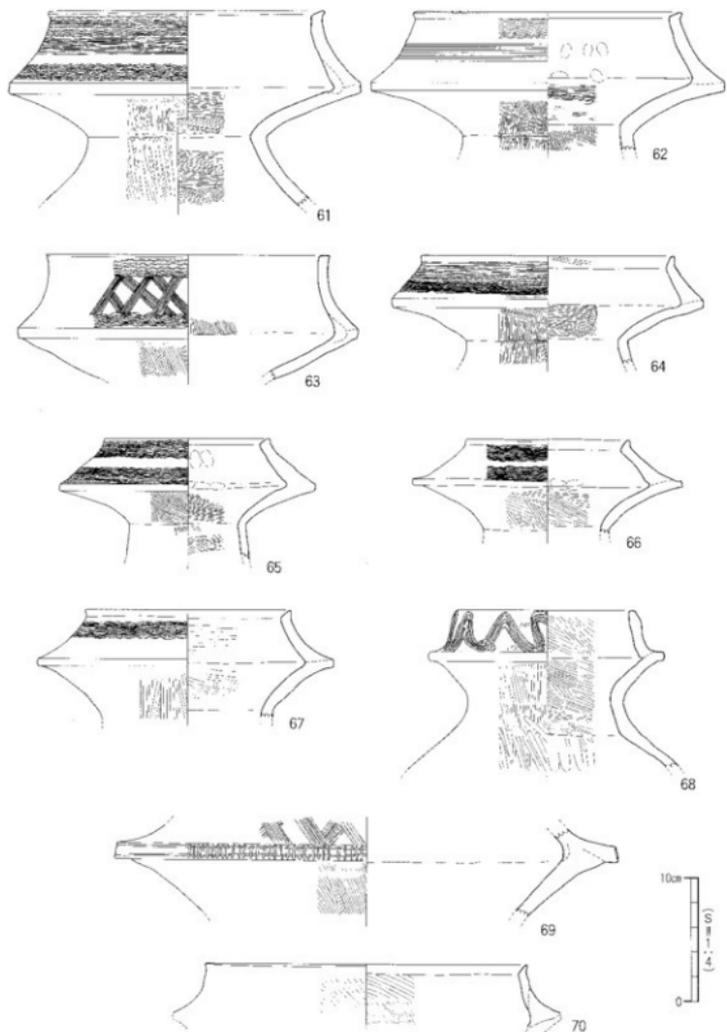
胴部は胴中位に張りをもち、長胴になるものである。

⑦外傾する長い頸部に、外反する口縁部をもつものである(123~126)。

123の口縁端部には3条の沈線文、125の口縁部には3条の沈線文と円形浮文をもつ。126の口縁端部には刻目と思われるものがみられるが明確ではない。

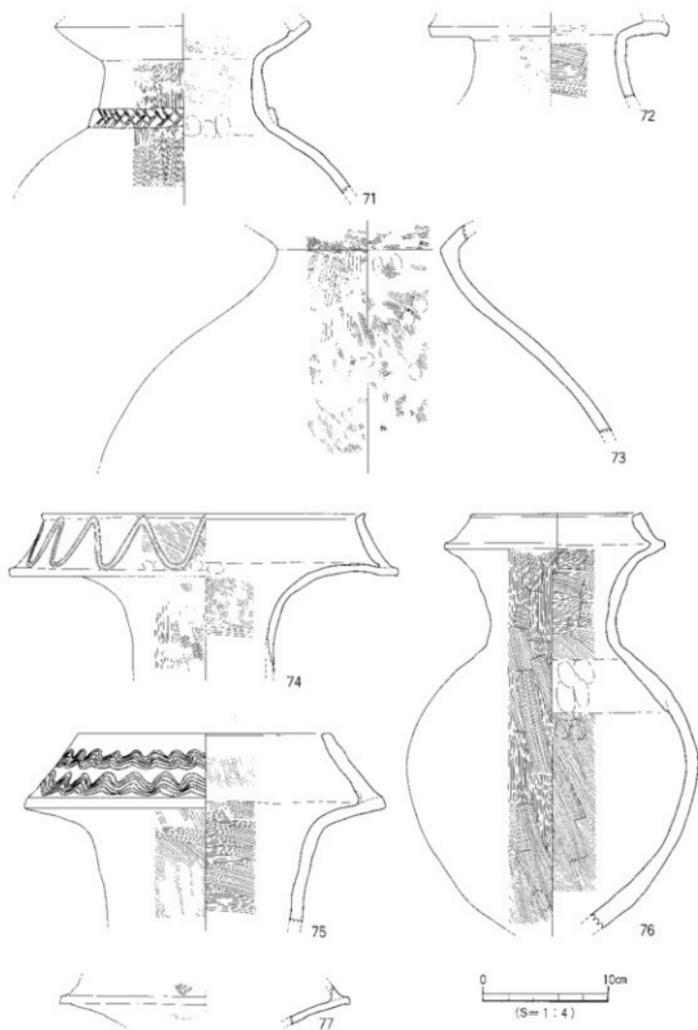
この他頸部片として127がある。127は頸部下端に刻目凸帯をもっている。

筋道F遺跡



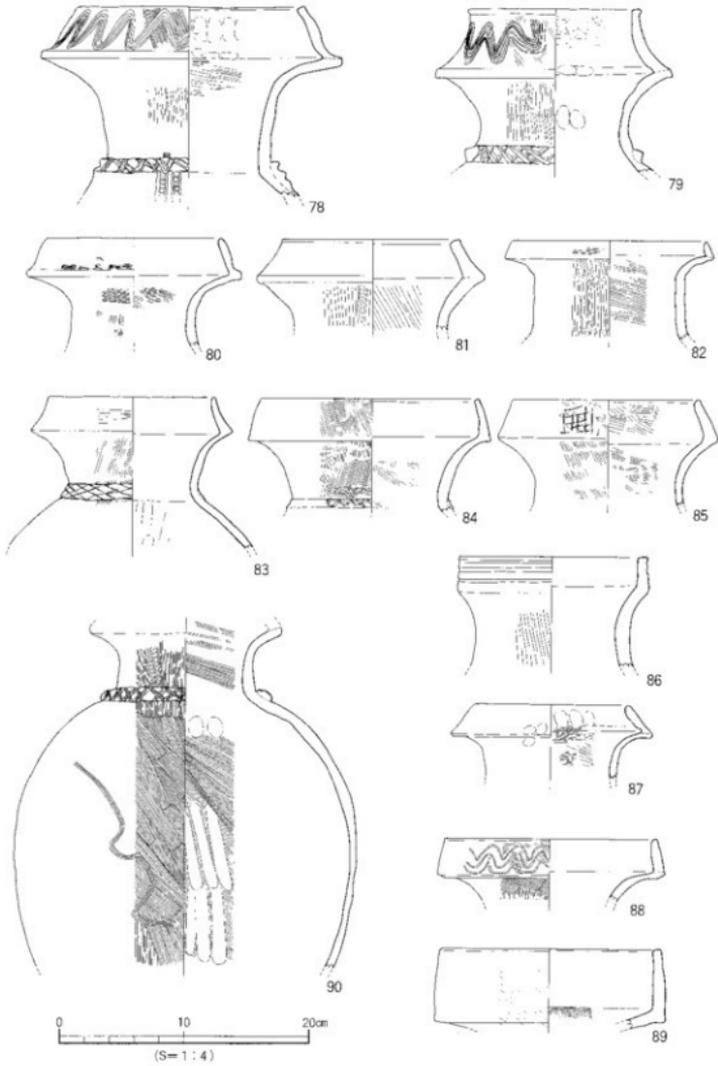
第84图 SB5 出土遺物実測图 (10)

遺構と遺物



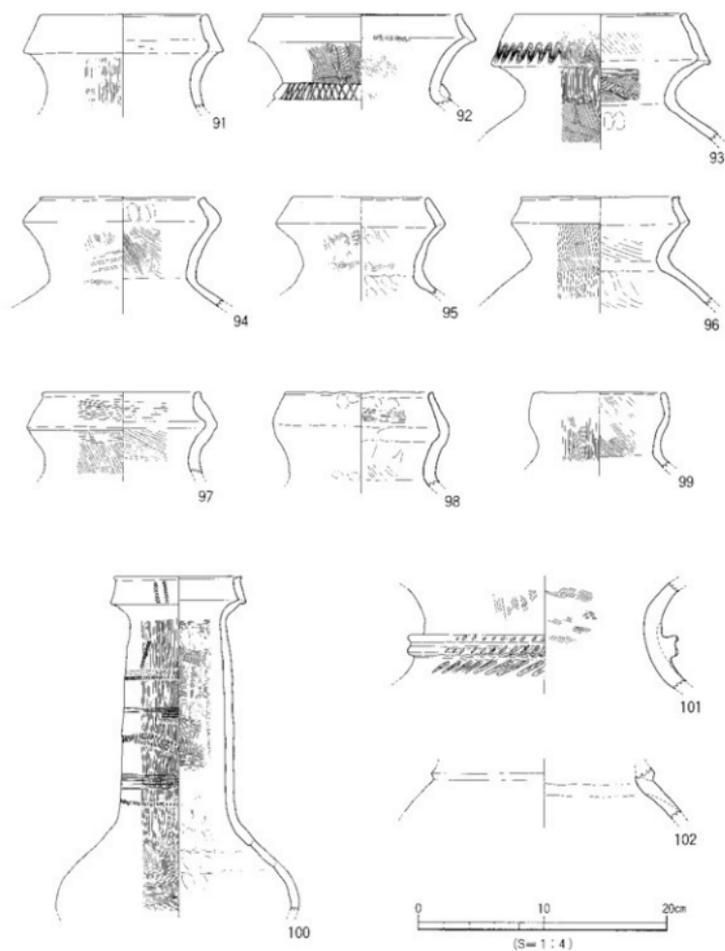
第85図 SB5 出土遺物実測図(11)

筋違 F 遺跡



第86図 SB5 出土遺物実測図 (12)

遺構と遺物



第87図 SB5出土遺物実測図(13)

底部片 (128~141) 大型・中型・小型品で残存状況のよいものを掲載する。

128~130は大型品底部である。128は平底、129・130は突出し、平底となるものである。131~139は、中型品の底部である。131~133は胴部下半にふくらみをもち、大きい平底となるものである。134~139は胴部下半は直線的からややふくらみをもつもので、小さい平底となるものである。139には、櫛描波状文が部分的に看取される。140・141は小型品の底部である。平底をもつ。

その他 (142~147) 142・143は扁半球の胴部片で、平底をもつものである。口~頸部の形態は不明である。144は大型品の胴部片である。線刻がみられる。145は短く外反する口縁部をもつものである。口縁端部には沈線文3条をもつ。胴部形態不明。146・147は弥生前期土器の破片である。146は木葉文、147は沈線文を2条もつ。

鉢形土器 (148~174、図版45・46)

口縁部を折り曲げて成形するもの148~163と直口口縁のもの164~172、台付のもの173・174がある。

①折り曲げ口縁 (148~163)。

148~154は中型品である。148~150はわずかに折れ曲がるもので、151~153は「く」の字口縁を呈するものである。底部は平底となる。154は長く大きく開く口縁部をもち、小さく突する底部は、わずかに上げ底となるものである。155~162は、小型品である。155・156は、中型品148・149に、157・158は中型品151に、160は中型品153に口縁部形態が似る。159は内面に稜をもつて直線的にたちあがる口縁部をもつものである。161・162は器高値が口径値をわずかに上回るもので、甕形土器として認定もできるものである。163は154に類似する底部片である。

②直口口縁 (164~172)。

164~169は中型品である。164は平底、165~169はたちあがりをもつものである。口縁端部は面をもつもの164・166と突るもの165がある。

170~172は小型品で、171・172は口縁端部に面をもち、170は丸くなるものである。

③台付鉢 (173・174)

173は台付部は欠損している。直口口縁をもつものである。174は脚体部で、裾部に円孔をもつ。

高坏形土器 (175~198、図版46)

高坏形土器は形態により2大別される。

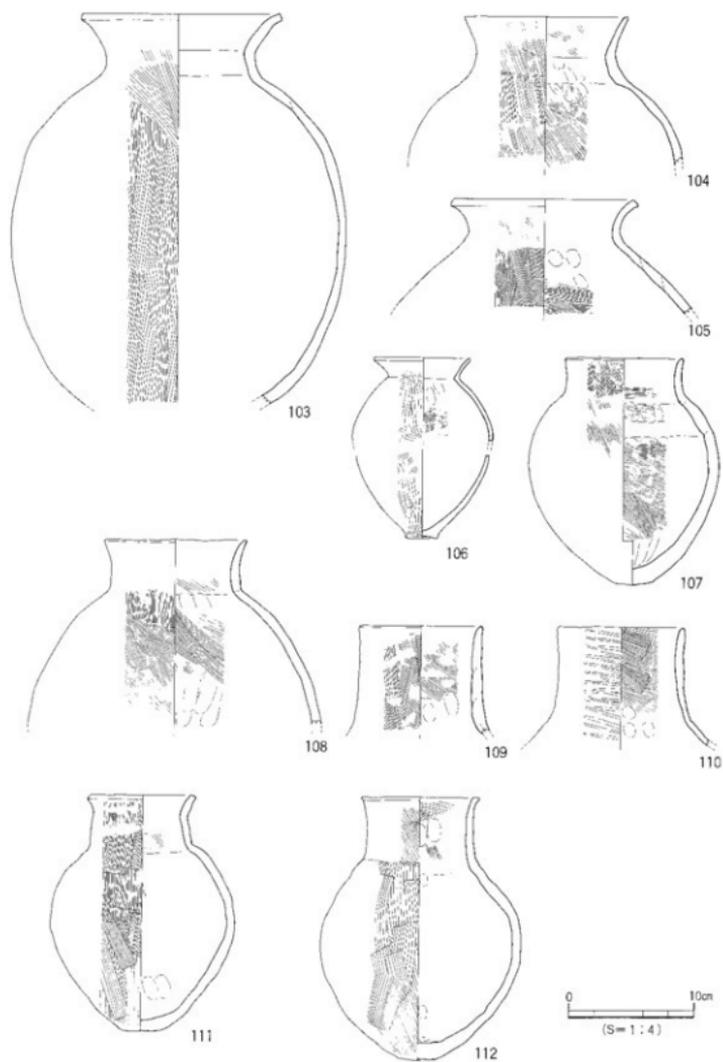
①坏部は大きく外反し、口縁端部に加飾をもたないものである。脚部は柱部と裾部が連続しゆるやかに開くものである (175~187、190・191)。

175は復元完形品である。脚部には円孔を2段もつ。176~184は坏部片である。176~178は、179~184に比べ量目が小さいものである。176の坏部は2条の沈線をもつ。185~187・190・191は脚部片で、円孔を1段ないし2段もつものである。188・189は器台形土器の可能性もあるものである。円孔を2段以上もつ。

②坏部は長い口縁部が大きく開くもので、端部に加飾をもつことを基調にする。脚部は、円筒状の柱部と有段の裾部からなるものである (192~198)。

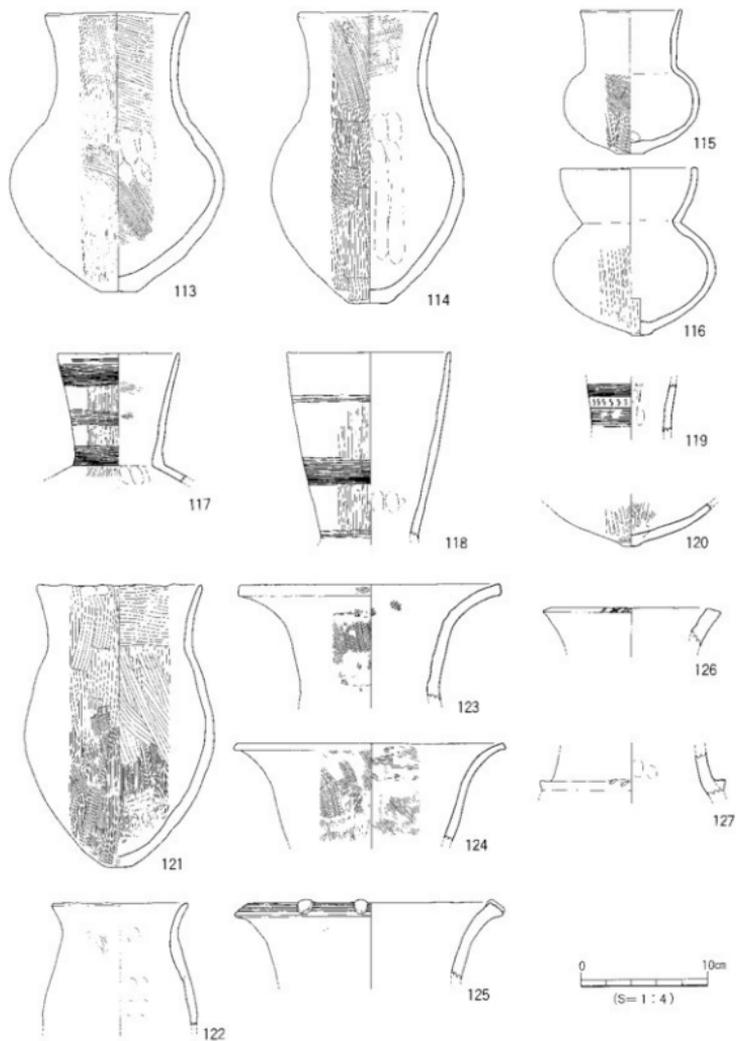
192・193は坏部の口縁端部片である。192は半載竹管の刺突文列と凹形浮文をもつ。194~196は柱部片で、194は円孔をもつ。197・198は裾部片である。

遺構と遺物

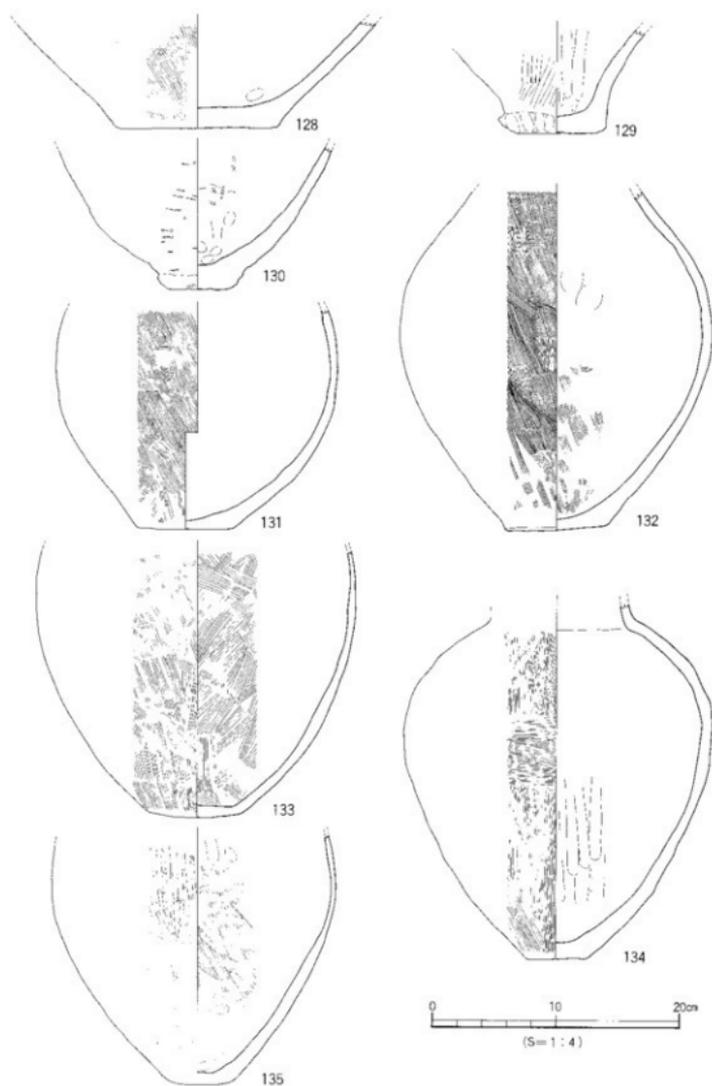


第88図 SB5 出土遺物実測図(14)

筋違 F 遺跡

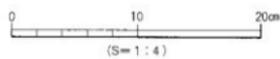
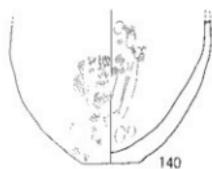
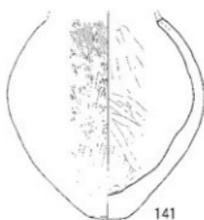
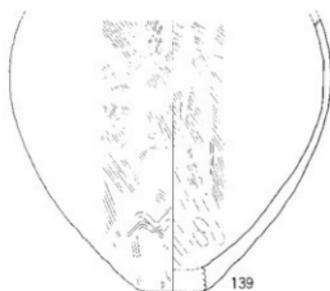
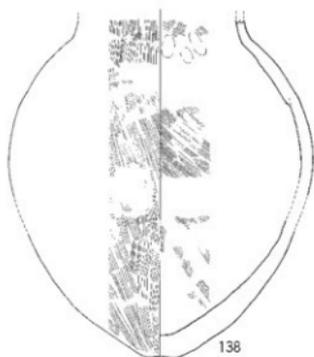
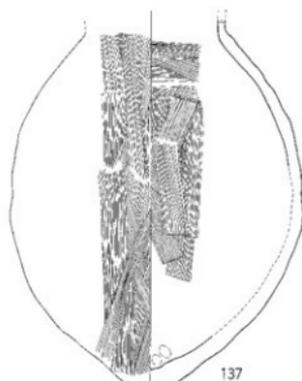
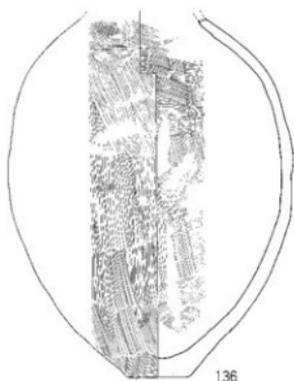


第89圖 S85 出土遺物実測圖 (15)

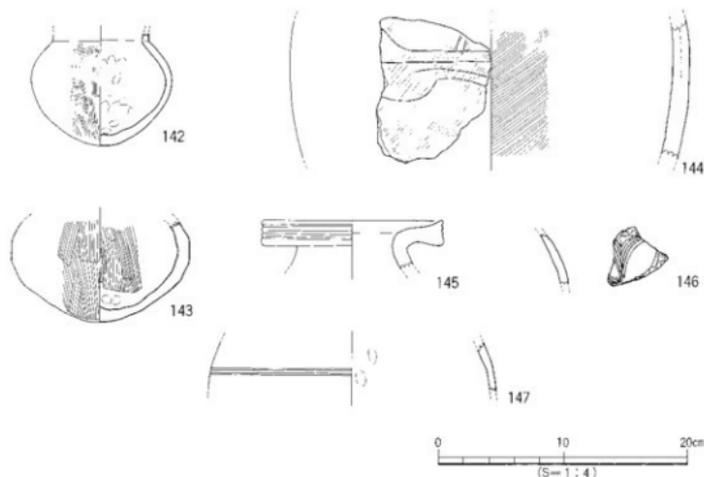


第90図 SB5 出土遺物実測図 (16)

筋違 F 遺跡



第91図 SB5 出土遺物実測図(17)



第92図 SB5 出土遺物実測図(18)

器台形土器 (第96図、199～211、図版47)

199～201は受部片である。199は脚部の可能性もある。200・201は櫛指波状文と201は「S」字状の浮文をもつ。202は受部から柱部が残存するものである。受部と柱部の境は明瞭で、柱部はふくらみをもっている。203～206は柱部片である。204と206は沈線文をもつ。207～210は裾部片である。いずれも円孔をもつ。211は柱部から裾部が残存するものである。

支脚形土器 (第97・98図、212～217、図版47・48)

212～214・217は受部が残存するものである。受部は「U」字状の傾斜部分を持ち、体部は中空となる。215・216は受部を欠損するもので、体部は中空である。

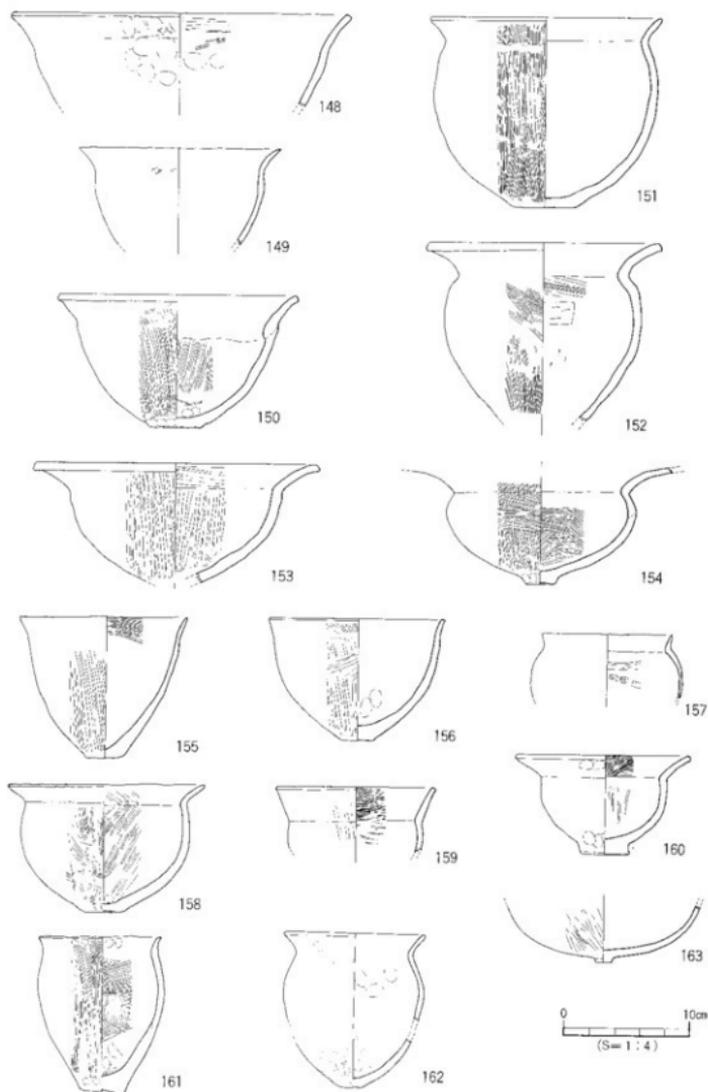
その他の土製品 (第98図、218～226、図版48)

218は土製の紡錘車である。焼成前の円孔をもつ。219～222はミニチュア品である。219～221は鉢形を呈し、222は支脚形を呈する。

223・224は古墳時代5～6世紀のコシキの把手部である。

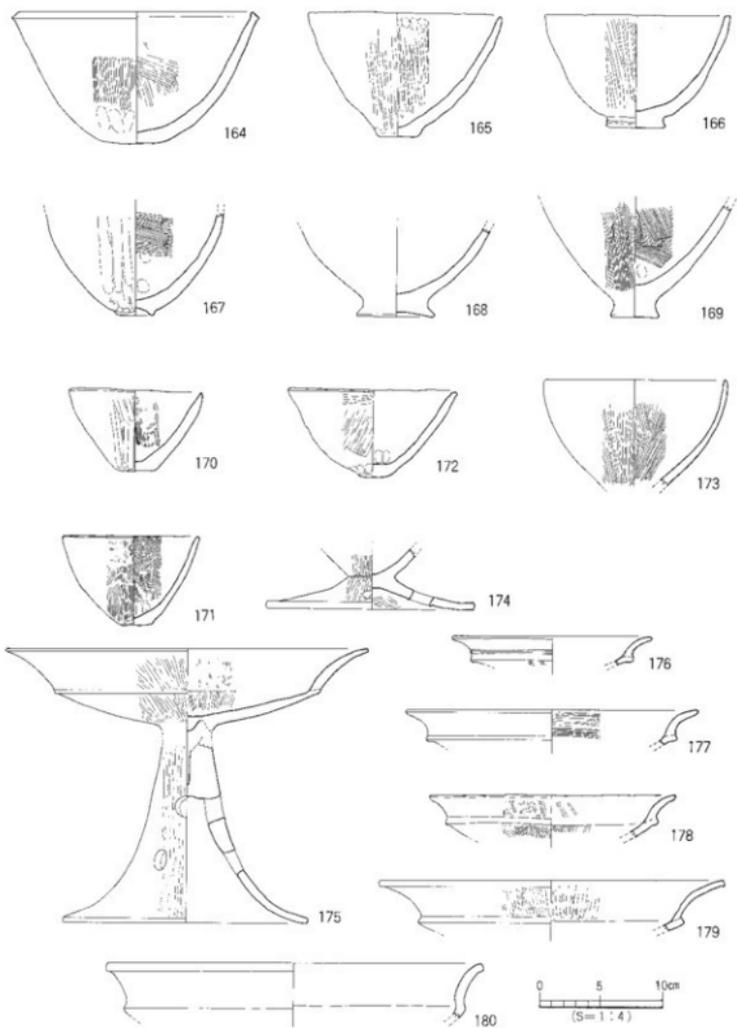
225・226はSB5を掘り込んだピットから出土したものである。円板高台にわずかに外反する口縁部をもつ白色系土師碗である。11世紀代。

筋道F遺跡



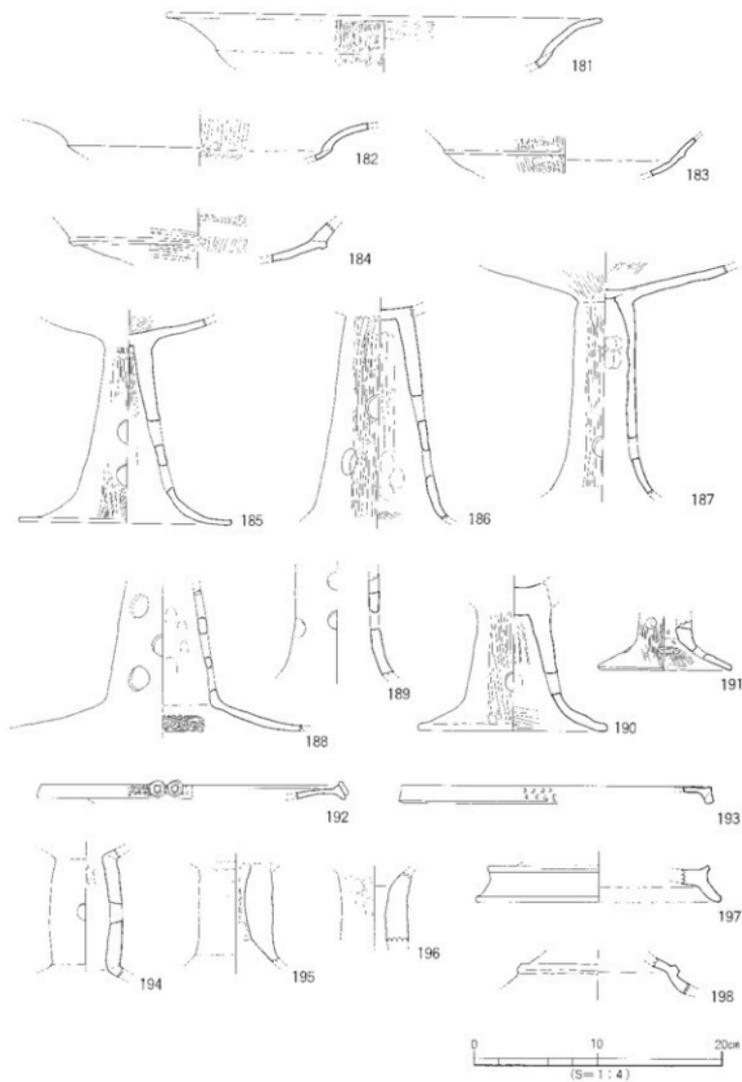
第93図 SB5 出土遺物実測図(19)

遺構と遺物

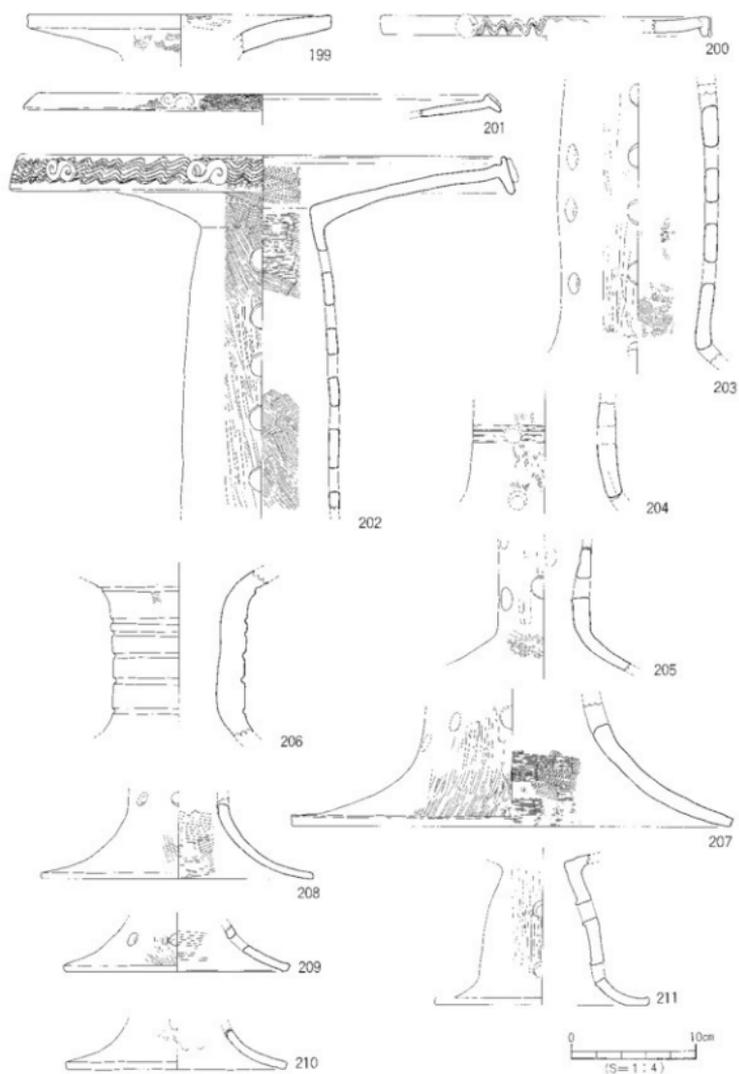


第94図 SB5 出土遺物実測図 (20)

箭通下邊跡

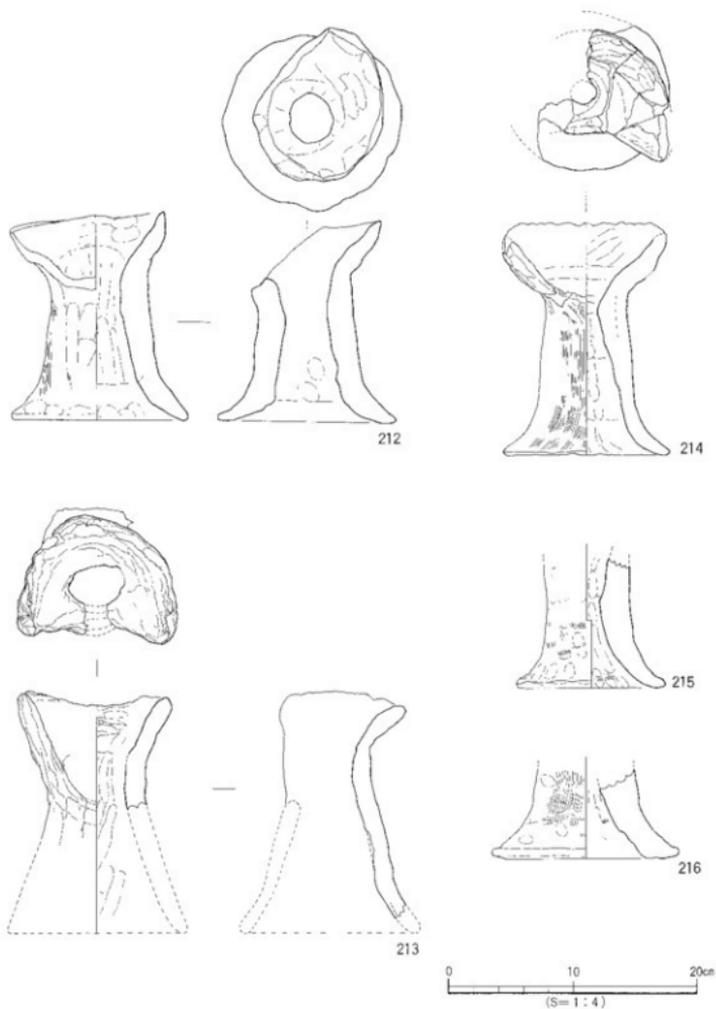


第95圖 SB5 出土遺物実測図(21)



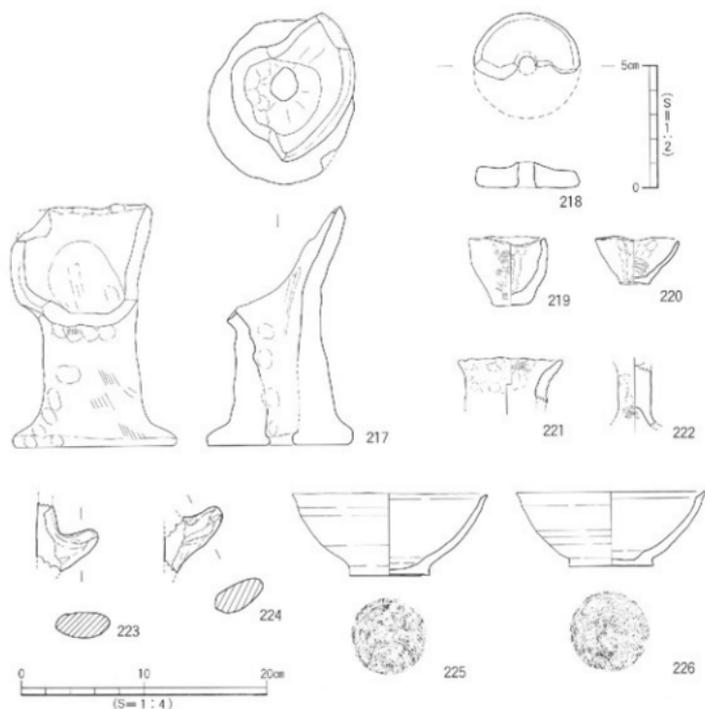
第96図 SB5 出土遺物実測図 (22)

筋違 F 遺跡



第97図 SB5 出土物実測図 (23)

遺構と遺物



第98図 SB5 出土遺物実測図(24)

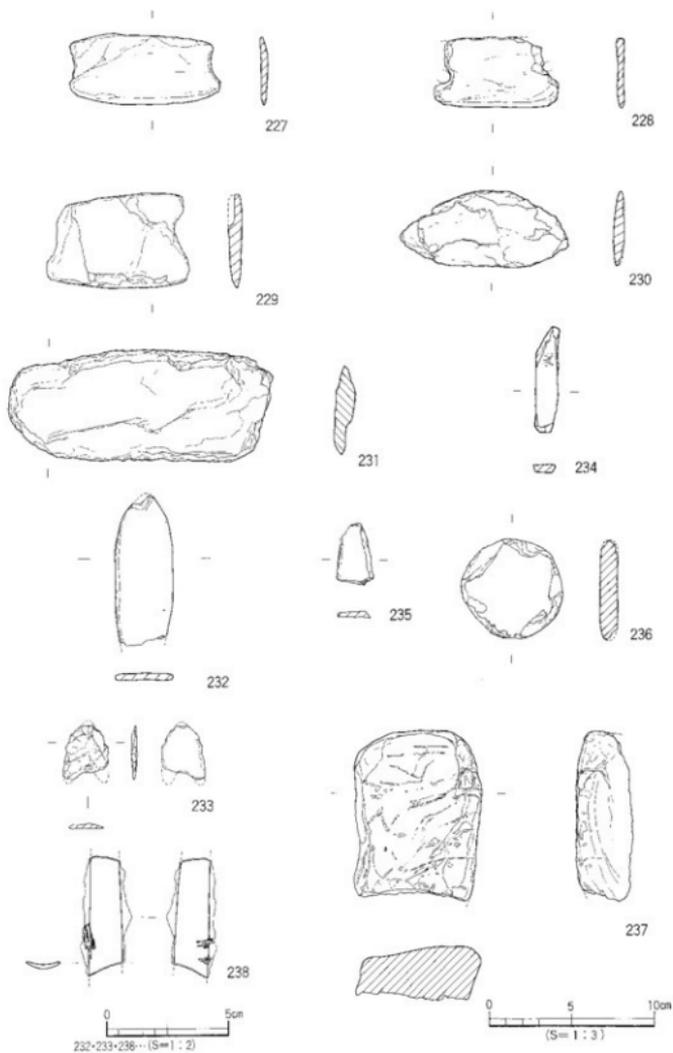
石製品 (第99図、227～237、図版52)

227～231は石応丁である。227は製品で、228～231は未製品である。227・228は方形で、両側に扶りをもつ。229は刃部を磨きだしており、230・231は研磨されていない。232は磨製石鏃である。233は石鏃である。235は石鏃の未製品と思われるものである。236は円板状の石製品の未製品である。237は用途不明の石製品である。

鉄製品 (第99図、238)

238は鉄製鉋である。残長4.9cmで、刃部を1面にもつ。

筋違 F 遺跡



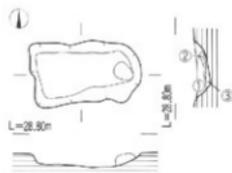
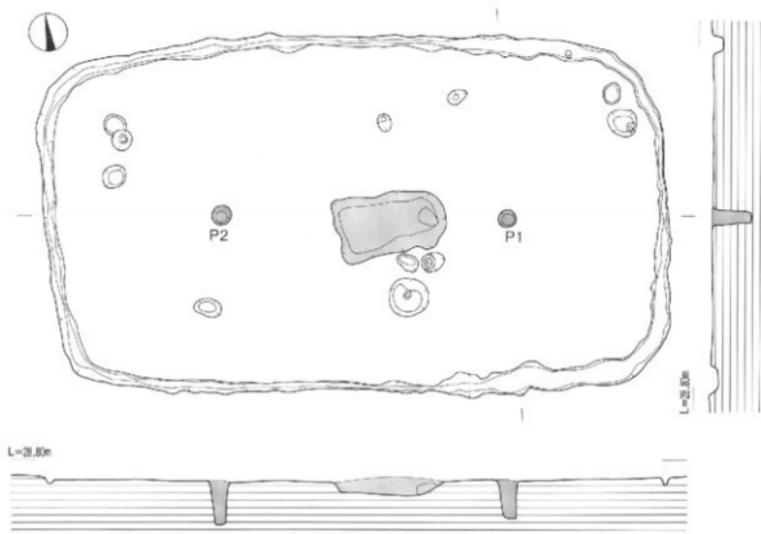
第99図 SB5 出土物実測図(25)

SB7 (第100図、図版35)

調査区の北西、B3～B4区にある。本住居は床面を検出するにとどまった。

平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸6.3m、短軸3.6mを測る。

室内施設には、主柱穴、炉、壁体溝があり、住居址床には小穴が数基検出されている。主柱穴は2基が認められ、P1は直径18cm、深さ38cm、P2は直径19cm、深さ44cmを測る。炉は中央にあり、隅丸長方形を呈する。長軸1.1m、短軸0.6m、深さ12cmを測る。炉内の床面では焼土と炭を検出し、東部では20cm大の石が出土している。炉内からは弥生土器の小片が出土している。壁体溝は壁体沿いを全周している。住居からの遺物は、弥生土器片が少量出土している。



SB7炉

- ① 暗褐色
② 赤褐色(焼土)
③ 黒色(炭)



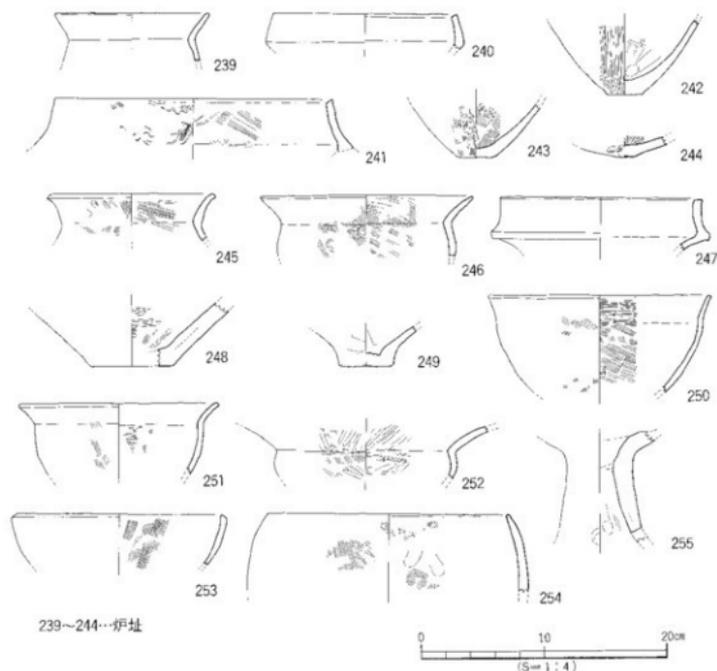
第100図 SB7 測量図

出土遺物 (第101図)

出土遺物には炉址内のもと住居址床面出土のものがある。

如出土品 (239~244) 239・242・243は甕形土器である。239は「く」の字状の口縁部をもつ。242・243はいまいなたちあがりをもつ平底の底部である。240・241は複合口縁甕である。240の口縁接合部は「く」の字状を呈する。241は櫛描波状文をもつ。244は鉢形土器である。底部は小さく突出し、上げ底となる。

住居址内出土品 (245~255) 245・246は甕形土器である。「く」の字状の口縁部をもつ。247~249は甕形土器である。247は複合口縁甕で、口縁接合部は「コ」の字状を呈する。248・249は平底の底部である。250~254は鉢形土器である。251・252は折り曲げ口縁、253・254は直口口縁である。255は高坏形土器である。柱部片で、円孔をもつ。



第101図 SB7 出土遺物実測図

SB1 (第102図、図版35)

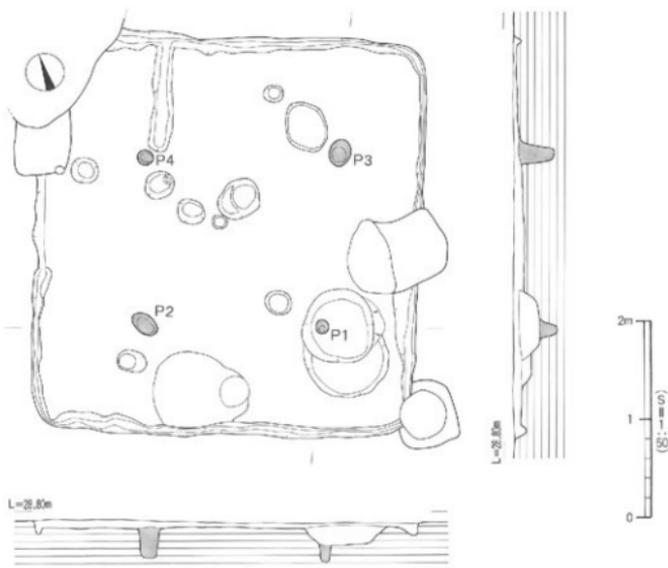
調査地の南東、E5～F5区にある。SK14と柱穴数基に切られる。

平面形態は方形を呈し、一辺4.1×3.9m、深さ10cmを測る。室内施設には主柱穴、壁体溝、小溝がある。主柱穴は4基で、直径24～84cm、深さ28～34cmを測る。壁体溝は西側一部が未検出である。北壁の西部からは南に向き幅約20cm、長さ1.1mの小溝がある。このほか、東壁中央部にあるテラス付きの土坑は住居に伴う可能性を考えている。住居床面検出の土坑やピットについては住居に伴うものかは不明である。遺物は土師器、須恵器、弥生土器の小片が出土している。

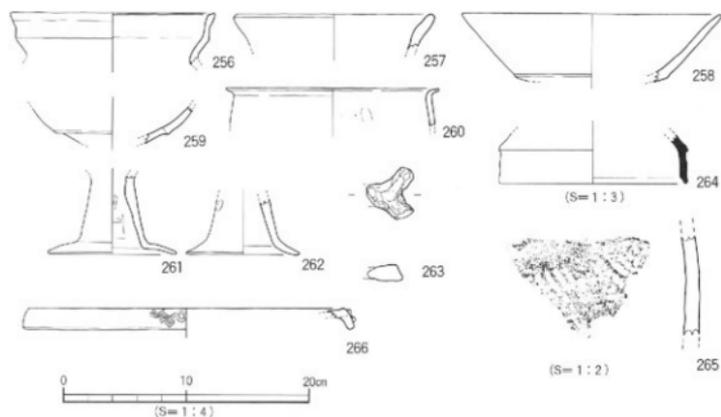
出土遺物 (第103図、図版49)

256・257は甕である。口縁端部は256は面をもち内傾し、257は丸い。258・259は高杯である。坏部にはあいまいな段をもつ。260は鉢である。逆「L」字状に曲がる口縁部をもつ。261・262は高杯である。脚部片で、裾部は大きく開く。263はコシキである。底部片で、孔を3ヶ所以上もつ。264は須恵器の口蓋である。265は韓式系軟質土器の胴部片で、斜格子目の叩き痕がみられる。266は弥生土器の器台形土器の受部片である。

時期：出土物の須恵器より、6世紀前葉に比定する。



第102図 SB1 測量図



第103図 SB1 出土遺物実測図

SB3 (第104図、図版36)

調査地中央南、E4区にあり、SK3に切られる。床面を検出するにとどまる。

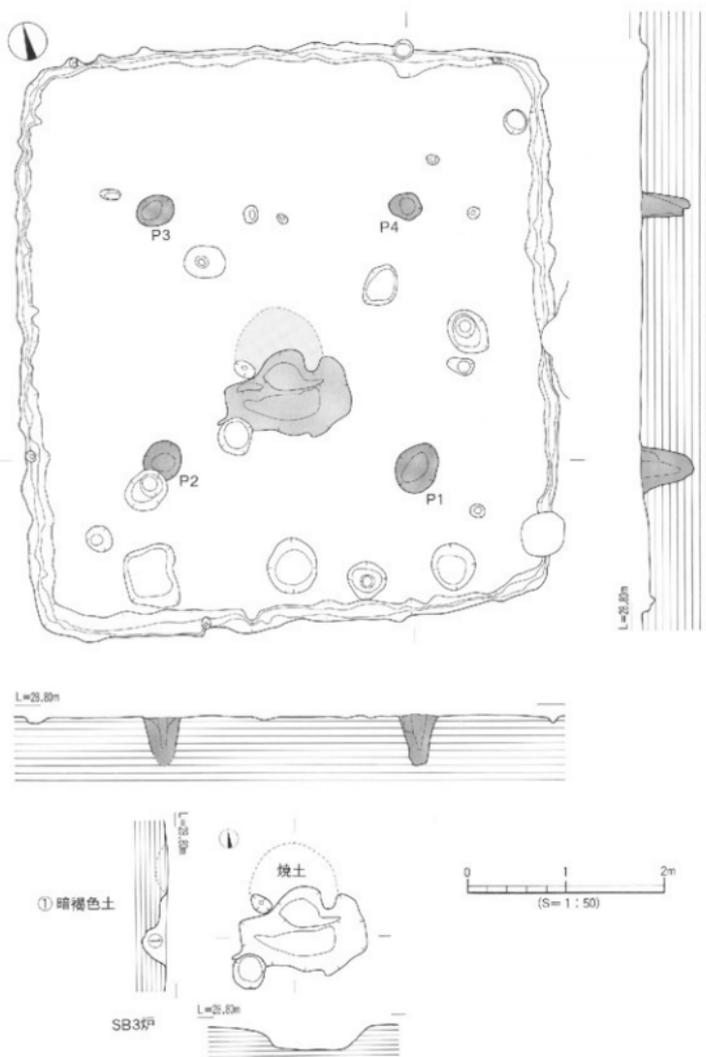
平面形態は方形を呈し、一辺5.9×5.5mを測る。室内施設には支柱穴、炉、壁溝がある。支柱穴は4基あり、直径22~50cm、深さ49~55cmである。南西部にあるP2には、切り合う柱穴がある。炉は中央やや南にあり、楕円形~隅丸長方形を呈す。規模は長軸1.2m、短軸0.8m、深さ24cmを測る。北側はテラス状となり、南側が深い。炉の北には直径90cmを測る半円形状の焼上の分布がみられる。遺物は土師器、須恵器、砥石、石製品の破片が少量出土している。

出土遺物 (第105図、図版49)

267・268は土師器の高坏である。267は坏部、268は胴部である。269は須恵器の高坏脚部である。270~273は弥生土器である。270は壺形土器、271~273は鉢形土器である。274・275は石製品である。274は砥石、275は剃片である。

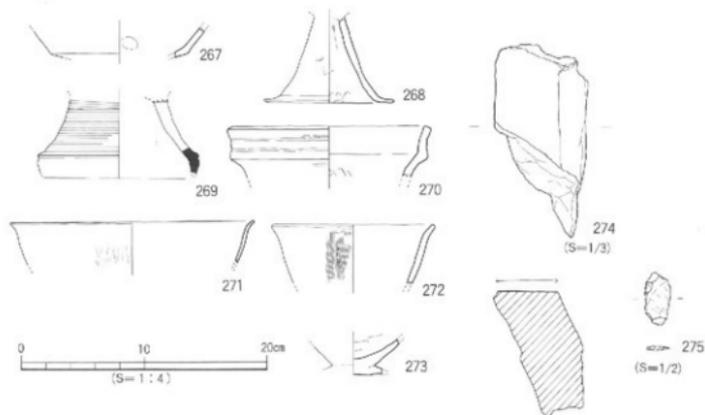
時期：出土物の須恵器より、5世紀末~6世紀前葉に比定する。

溝柵と遺物



第104図 SB3 測量図

筋違 F 遺跡



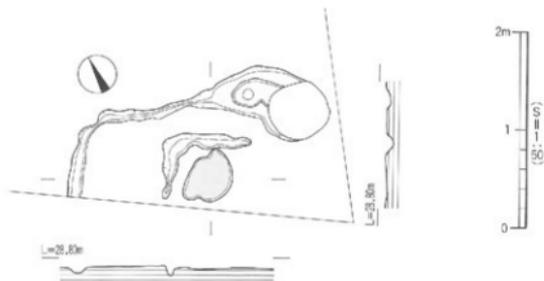
第105図 SB3 出土遺物実測図

SB8 (第106図)

調査地の南東隅、G 6 区にある。SB14に切られる。住居の一部を検出するとどまる。

平面形態は方形を呈するものと思われる。規模は検出長で一辺 1.4×2.0 m、深さ 3 cm を測る。室内施設は、炉、壁体溝、小溝がある。炉は北側壁体に近くあり、楕円形状を呈する。規模は長軸 52 cm、短軸 42 cm、深さ 4 cm を測る。内部からは焼土が検出された。炉の北及び西には最大幅 14 cm の溝が検出されており、炉の付帯施設が考えられる。壁体溝は壁体の内側全てにて検出されたが、北東部は後世の遺構に切れあいまいな溝となっている。出土遺物には時期決定できるようなものはない。

時期：住居内に炉をもつことより 5 世紀後半～ 6 世紀の住居と考える。



第106図 SB8 測量図

SB9 (第107図、図版31)

調査地の南西部、E2～E3区にある。住居は一部を検出したにすぎない。

平面形態は方形を呈し、検出長は一辺1.3×2.2m、深さ6cmを測る。室内施設は未検出である。住居内検出の柱穴は本住居址に伴うものでないと判断している。出土遺物には時期決定に有効な資料がない。

時期：平面形態が四角形で、隅が直角に近いことより5世紀以降の住居址と考える。

SB10 (第107図、図版36)

調査地の中央やや北、C3～C4区にある。SB4及びSK11ほか数基の土坑と柱穴に切られる。本住居址は床面を検出したにとどまる。

平面形態は方形を呈し、規模は一辺4.5×4.4mを測る。室内施設には主柱穴と壁体溝・小溝がある。主柱穴はP1～4で、直径16～20cm、深さ19～60cmを測る。壁体溝は北壁側に未検出部分が多くみられる。小溝は西側にあり、幅14cmを測る。

なお、本住居址は建て替えと考えられるものであり、古い時期のものは主柱穴はP5・6であり、東側と南側の壁体溝を検出している。P5・6は直径16～22cmを測る。遺物は時期決定に有効な資料がない。

時期：平面形態が四角形で、主柱穴が4本より5世紀～6世紀の住居址と考える。

SB4 (第108図、図版31)

調査地中央やや北、C3～C4区にある。SB10とSK10を切る。

3×3間で、桁行長5.26m、梁行長4.32mを測る。東西棟で、平均柱間は東西1.75m、南北1.44mである。柱穴は円形を呈し、径20～89cm、深さ10～31cmを測る。柱痕径は10～20cmを測る。柱穴からは須恵器片が出土している。

出土遺物 (第108図)

276～280は須恵器の坏蓋である。280の坏蓋が最も新しいものと思われ6世紀後半に比定されるものである。

時期：出土物より、6世紀後半以降の建物と考える。

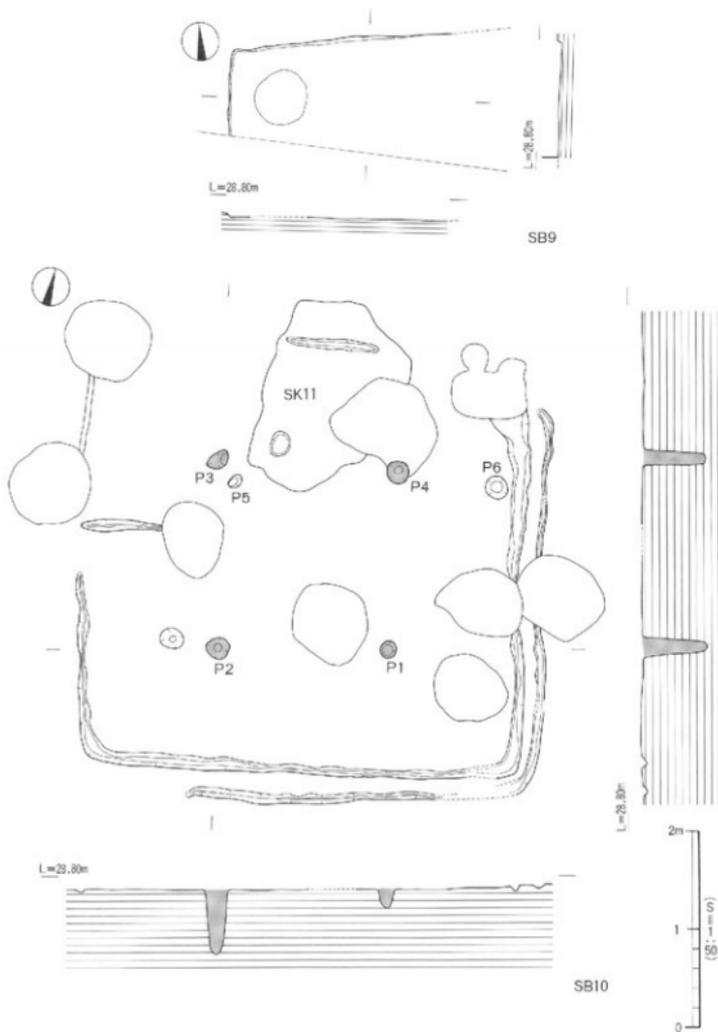
SB11 (第109図、図版31)

調査地南西、F5区にある。建物は調査区外へ続く。

東西棟である。桁行は4間で、長さ6.21m、平均柱間1.55mを測る。梁行は1間以上で、長さ2.6m、柱間1.98mを測る。柱穴は円形を呈し、径48～64cm、深さ8～49cmである。柱痕は直径12～20cmである。柱穴からの遺物の出土はない。

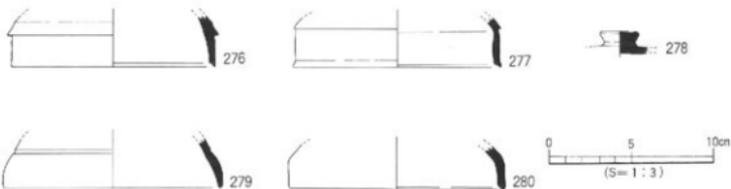
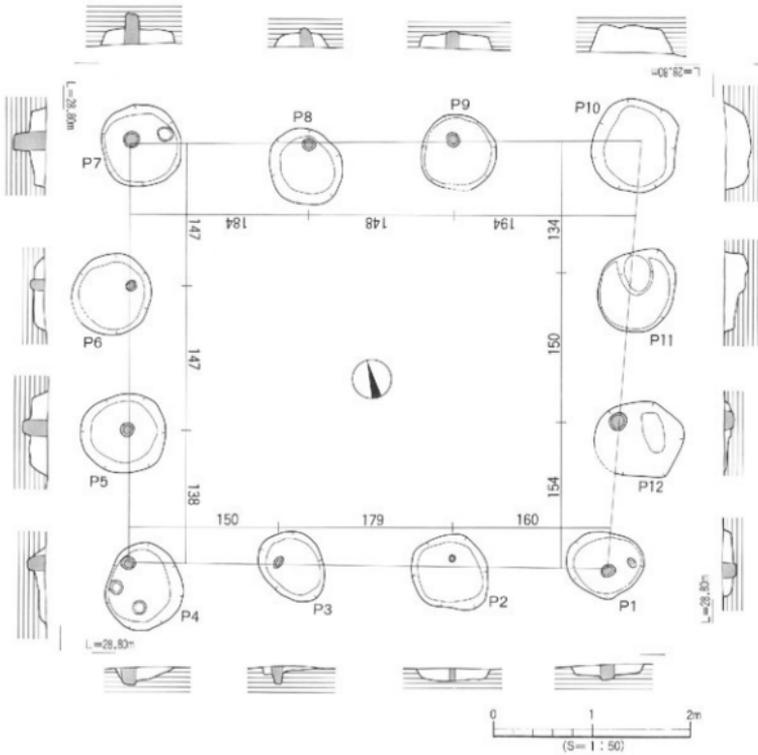
時期：出土物がないため、正確な時期決定はできない。

筋道 F 遺跡



第107図 SB9・10測量図

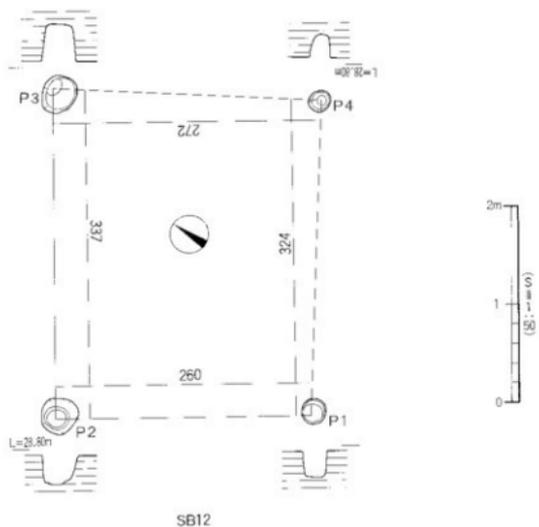
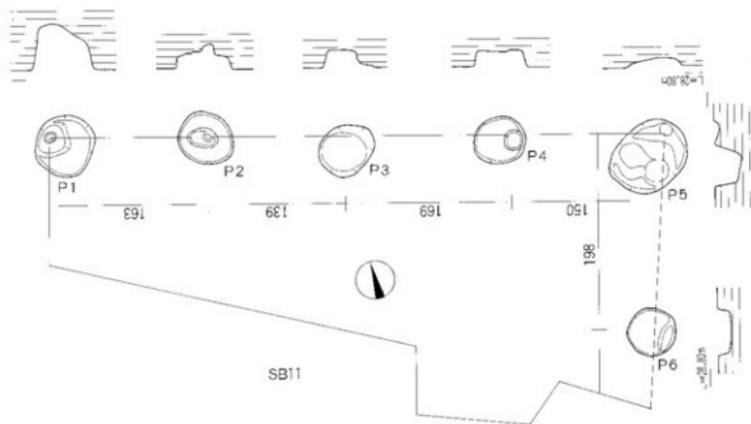
遺構と遺物



P2 : 227 - 278
 P7 : 279
 P9 : 280
 P11 : 276

第108図 SB4測量図・出土遺物実測図

筋流下遺跡



第109図 SB11・12測量図

SB12 (第109図、図版31)

調査地の中央やや北東、C5区にある。

東西棟であるが、北に大きく偏る。1×1間で、桁行長3.37m、梁行長2.72mを測る。柱穴は直径20~34cm、深さ22~40cmである。柱穴からの遺物の出土はない。

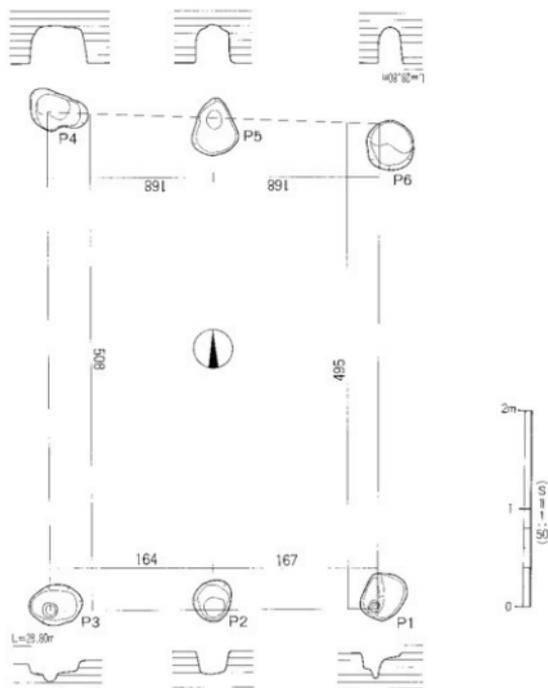
時期：出土物がないため、正確な時期決定ができない。

SB13 (第110図、図版31)

調査地の中央やや東、D5・D6・E5・E6区にある。SK14を切る。

南北棟である。1×2間で桁行長5.08m、梁行長3.36m、梁行平均長1.68mを測る。柱穴は径26~58cm、深さ22~34cmであり、柱痕は径10~14cmである。柱穴からの遺物の出土はない。

時期：出土物がないため、正確な時期決定ができない。



第110図 SB13測量図

SB14 (第111図、図版31)

調査地の南西隅、F 6～G 6 区にある。SB 8 を切る。建物は調査地外へ続く。

建物方位は判断できない。南北 3 間、東西 3 間を検出する。南北列は長さ 4.13m、平均柱間 1.37m である。東西列は検出長 3.64m、平均柱間 1.82m である。柱穴径は 8～12cm、深さは 8～32cm である。遺物の出土はない。

時期：出土物がないため正確な時期決定ができない。

(3) 土 坑 (SK)

土坑は14基を検出している。

SK 1 (第111図) 調査地の北西、B 6・7～C 6・7 にある。平面形態は長方形を呈する。規模は長軸 0.86m、短軸 0.42m、深さ 14cm を測る。出土物には弥生土器片がある。第111図281は壺形土器の底部片である。たちあがりをもつ平底の底部。時期は、出土物より弥生時代後期。

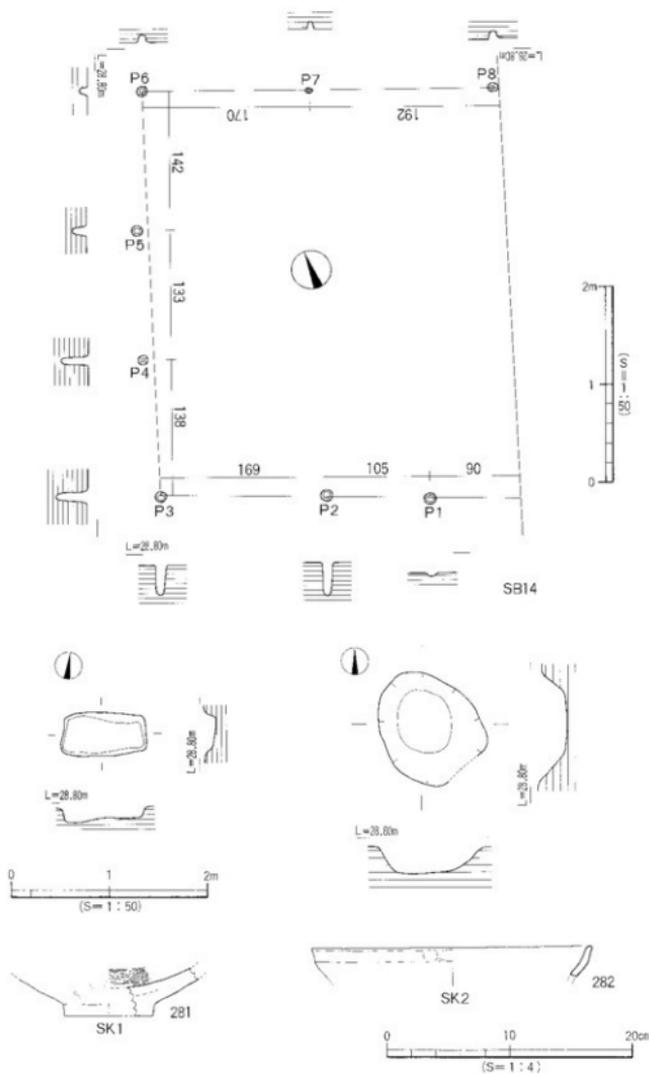
SK 2 (第111図) 調査地中央南、E 4・5 区にある。平面形態は円形を呈する。規模は長軸 1.11m、短軸 1.04m、深さ 26cm である。出土物には土師器片がある。第111図282は壺形土器口縁部片である。口縁端部は面をもち、わずかに内傾する。時期は、出土物より 5 世紀末～6 世紀前半に比定する。

SK 3 (第112図) 調査地中央やや南、E 4・5 区にあり、SB 3 を切る。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸 2.48m、短軸 2.10m、深さ 19cm である。埋土は暗褐色土である。出土物には土師器と須恵器片がある。第112図283～286は土師器である。283～285は壺形土器で、内湾してたちあがる口縁部をもつ。286はコシキであり、直口縁をもつ。287～292は須恵器である。287は坏蓋、288・289は坏身、290は甗、291・292は壺である。時期は、坏身289の形態より 6 世紀前半に比定する。

SK 4 (第113図) 調査地中央やや東、D 5 区にある。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸 1.64m、短軸 1.38m、深さ 14cm である。埋土は黒褐色土である。出土物には土師器、須恵器、石製品がある。第113図の293は土師器の壺形土器である。294は須恵器の坏蓋、295は坏身である。296は砥石で、石材は砂岩である。時期は、坏身295の形態より 6 世紀後半に比定する。

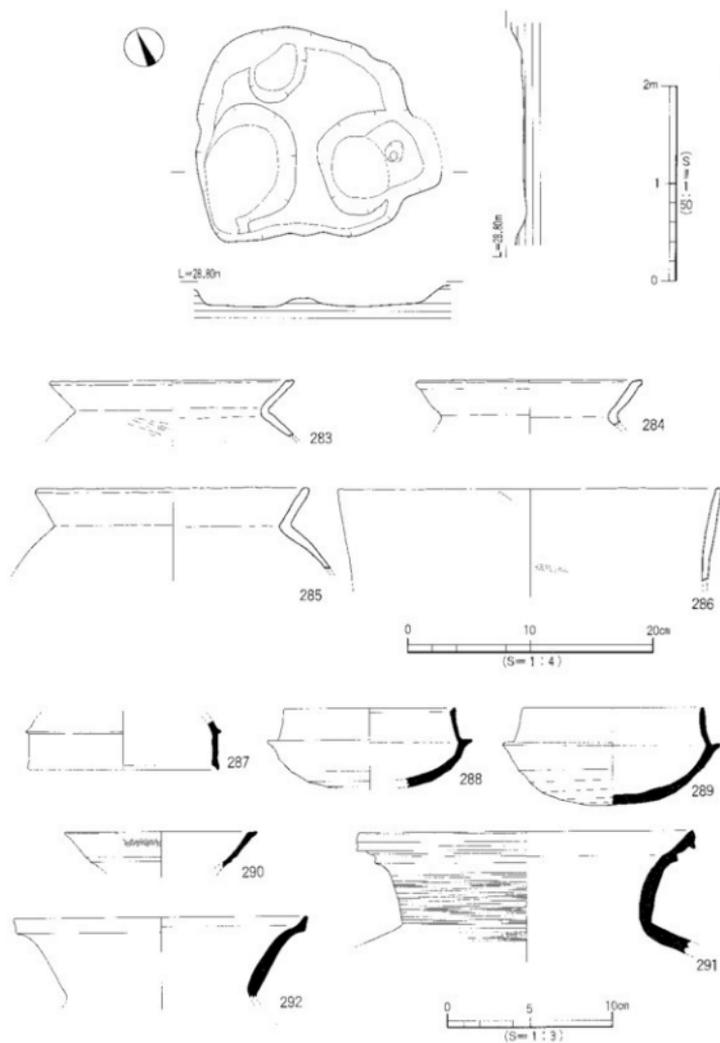
SK 5 (第113図) 調査地中央やや北、B 4・5 区にある。平面形態は円形を呈する。規模は長軸 1.50m、短軸 1.40m、深さ 16cm である。埋土は暗褐色土である。出土物には須恵器片がある。第113図297～299は須恵器である。297は坏身、298・299は高坏の脚部である。時期は、出土須恵器より 6 世紀初頭に比定する。

SK 6 (第113図) 調査地中央やや北、B 4・5 区にある。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸 0.7m、短軸 0.8m、深さ 18cm である。出土物には須恵器片がある。第113図300は坏身の小片である。時期は出土物より 5 世紀末～6 世紀初頭に比定する。



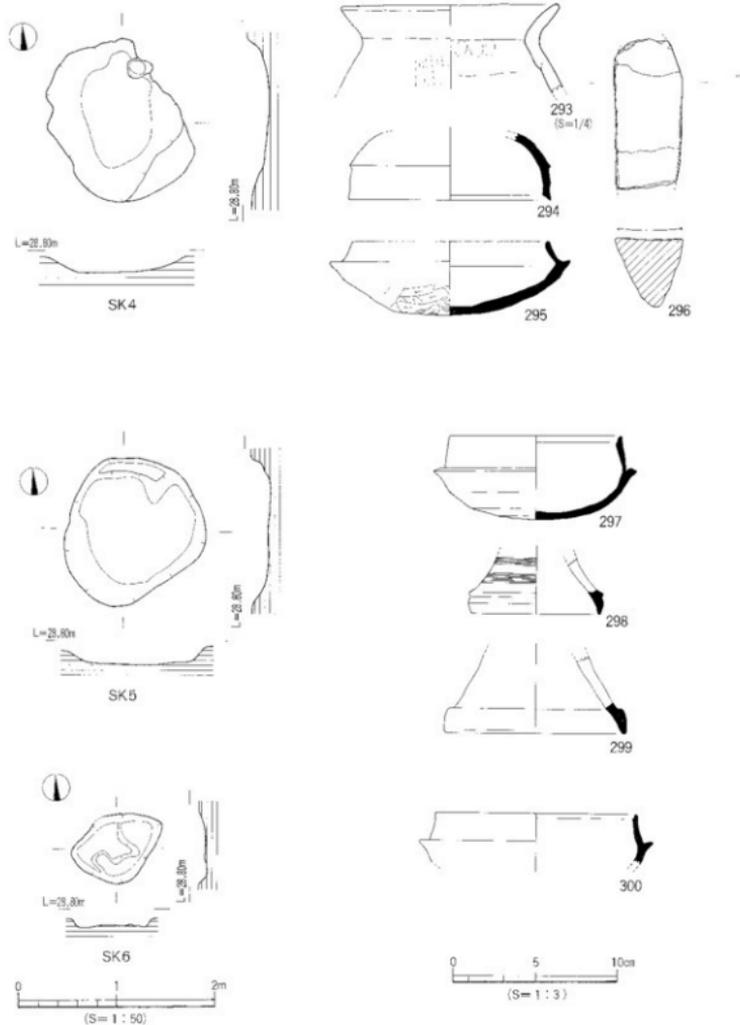
第111図 SB14・SK1・2測量図・出土遺物実測図

筋流F遺跡



第112図 SK3測量図・出土遺物実測図

遺構と遺物



第113図 SK4・5・6測量図・出土遺物実測図

SK7 (第114図) 調査地中央西、C2区にある。平面形態は楕円形を呈する。規模は、長軸1.76m、短軸1.20m、深さ34cmである。埋土は暗褐色土である。出土物はない。時期は出土物がないため比定できない。

SK8 (第114図) 調査地南西部、E3区にある。平面形態は隅丸長方形を呈する。長軸3.82m、短軸2.46m、深さ18cmである。埋土は暗褐色土である。出土物には土師器片がある。第114図301~303は高坏の脚部である。304はコシキの把手部である。時期は出土物より5世紀後半に比定する。

SK9 (第115図) 調査地中央北、C4区にある。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸1.42m、短軸0.79m、深さ14cmである。埋土は黄褐色土が混じる暗褐色土である。出土物には土師器片がある。第115図305は高坏の脚部である。時期は出土物より5世紀後半に比定する。

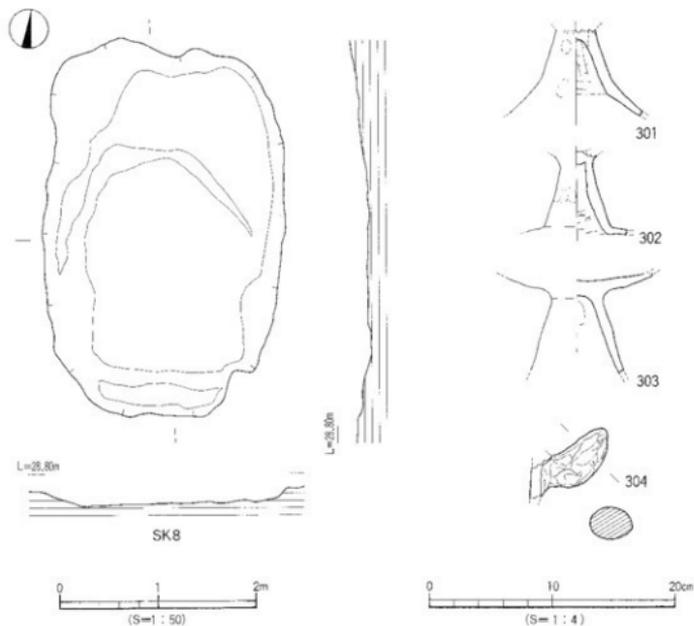
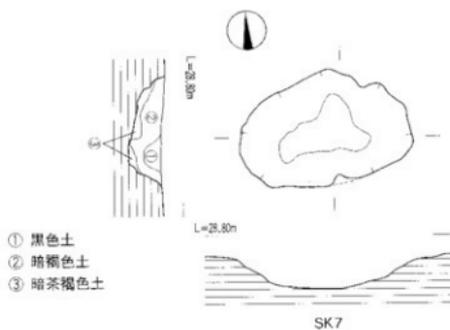
SK10 (第115図) 調査地中央やや北西、B3・4~C3・4区にあり、SB4に切られる。平面形態は不整な長方形を呈する。規模は長軸2.00m、短軸1.40m、深さ31cmである。埋土は暗灰褐色土である。出土物には弥生土器片と石製品がある。第115図306~308は弥生前期の甕形土器である。306は平底、307・308は口縁端部に刻目をもつ。309・310は石製品で、309は刃部をもっており刃器、310は石器素材である。時期は出土物より弥生時代前期に比定する。

SK11 (第116図) 調査地中央やや北西、C4区にあり、SB10に切られる。平面形態は不整な長方形を呈する。規模は長軸2.02m、短軸1.40m、深さ20cmである。出土物には弥生土器がある。第116図311は甕形土器の頸部片、312は甕形土器の胴部片である。時期は出土物より弥生時代前期に比定する。

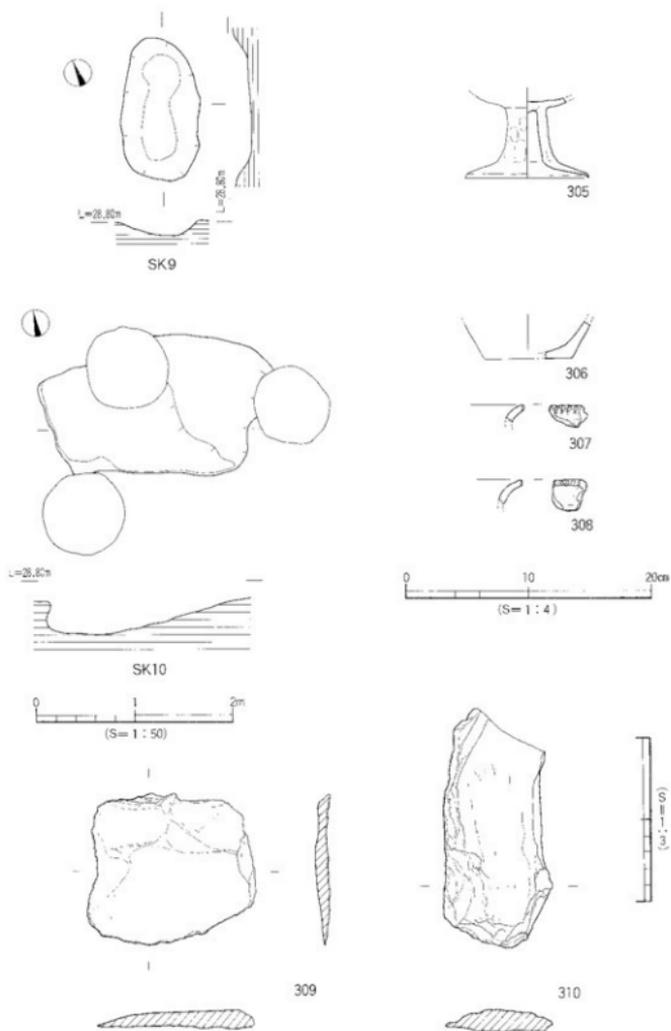
SK12 (第117・118図) 調査地南西、C2・3区にあり、SK13に切られる。平面形態は東側がやや丸みをもつ不整な方形を呈する。規模は、長軸4.50m、短軸3.54m、深さ16cmである。基底面は西が一段低くなっている。埋土は暗褐色土である。出土物には土師器と須恵器があるほか、弥生土器と石製品も出土している。第117図313~318は土師器、319~330は須恵器、331~333は弥生土器、334・335は石製品である。313~315は甕形土器、316は輪、317・318はコシキの把手部である。319~321は坏蓋、322~325は坏身、326は甕、327・328は器台、329は甕、330は長脚付きの輪である。弥生土器と石製品は混入品と思われる。331・332は甕形土器、333は器台形土器である。334は用途不明石器、335は石器素材である。時期は須恵器より6世紀後半~7世紀代に比定する。

SK13 (第118図) 調査地南西、B3~C3区にあり、SK12を切る。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸2.80m、短軸1.28m、深さ32cmである。埋土は暗褐色土である。出土物には弥生土器と石製品がある(小片にて図示せず)。時期はSK12を切ることより6世紀後半~7世紀以降に比定する。

遺構と遺物

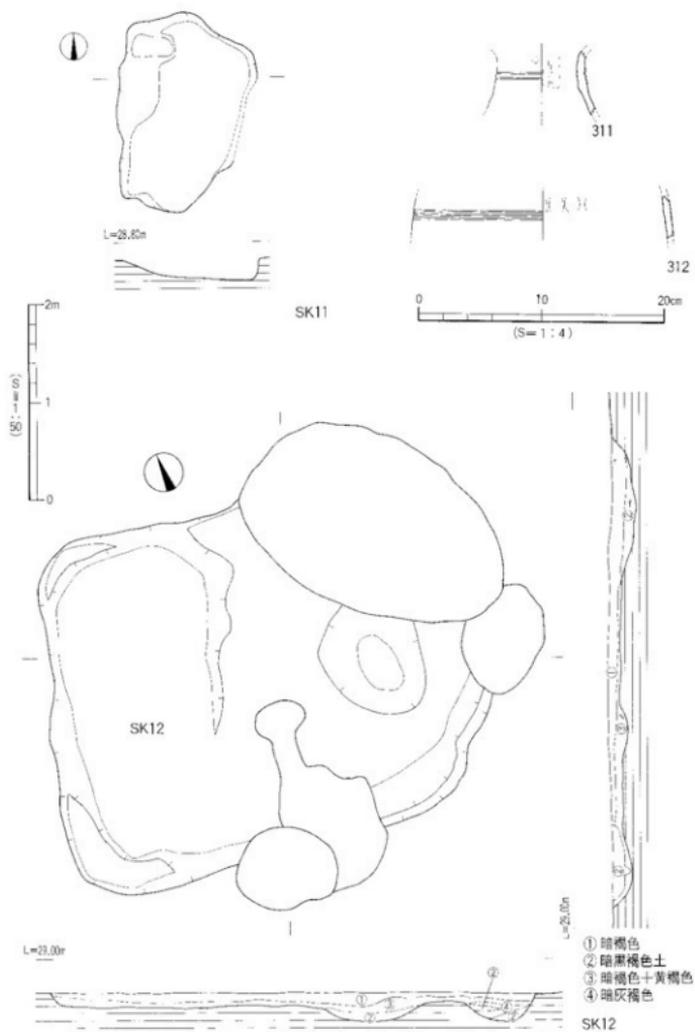


第114図 SK7・8測量図・出土遺物実測図



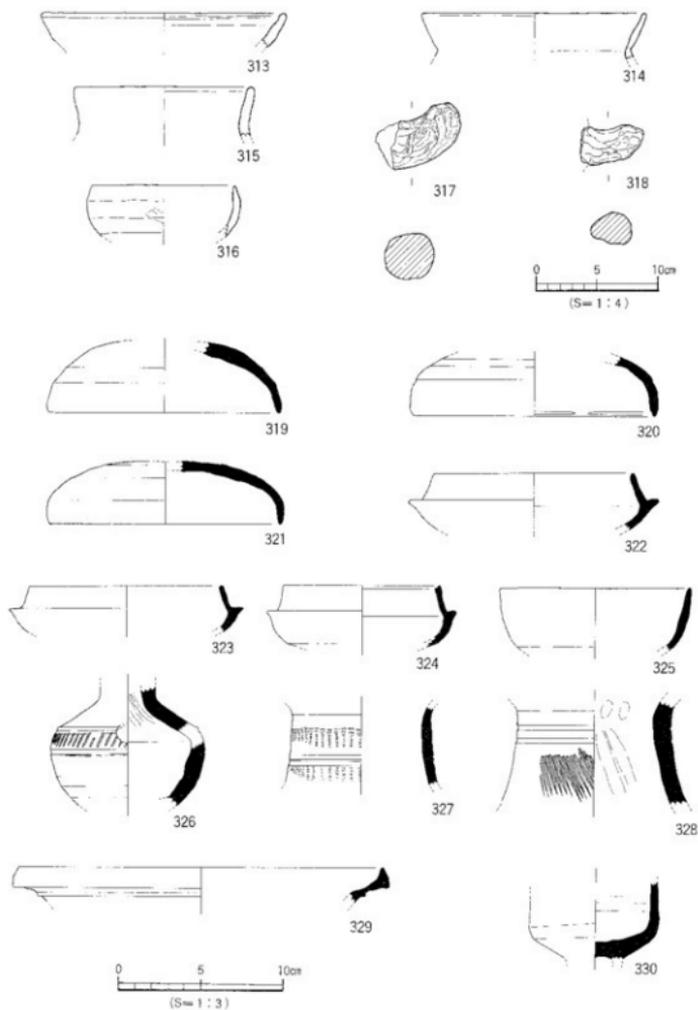
第115図 SK9・10測量図・出土遺物実測図

遺構と遺物



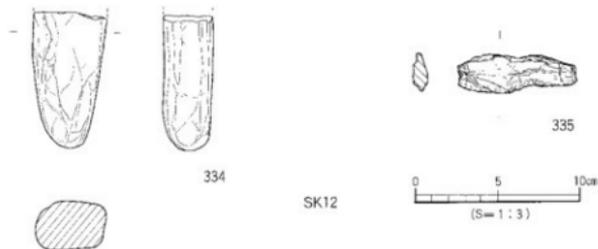
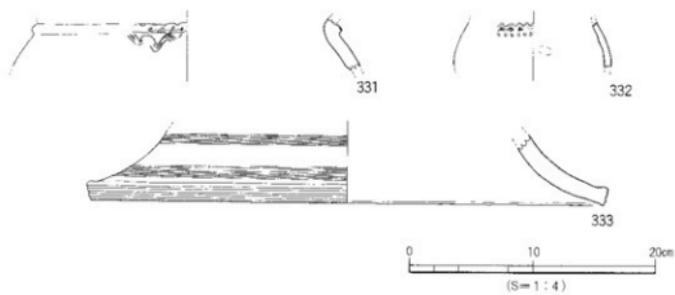
第116図 SK11・12測量図・出土遺物実測図

筋違F遺跡

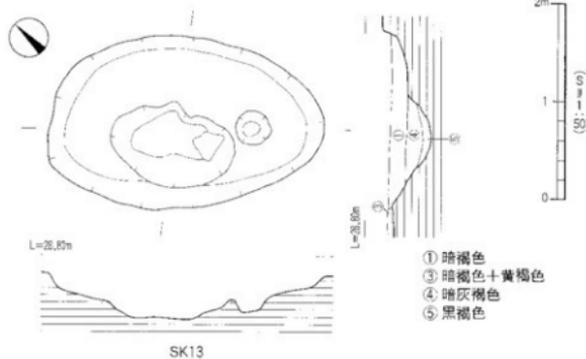


第117图 SK12出土物实测图(1)

遺構と遺物

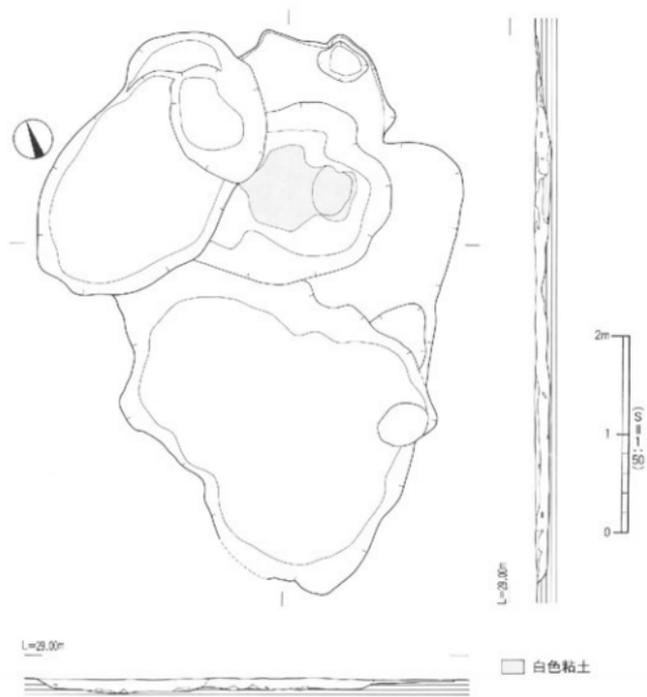


SK12



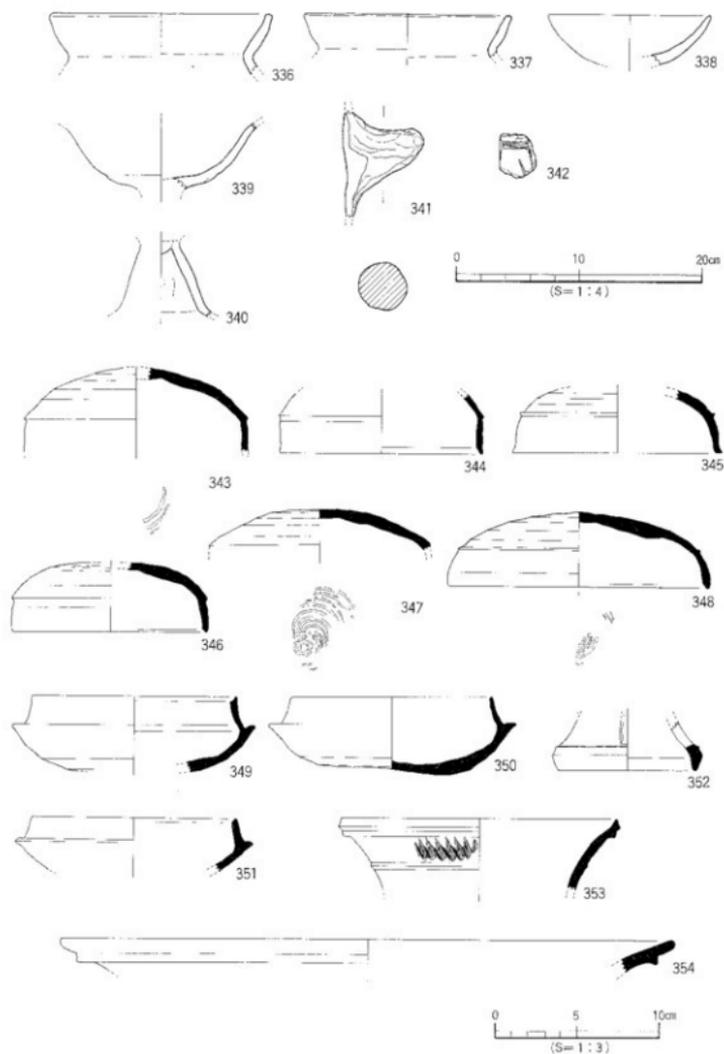
第118図 SK12出土遺物実測図(2)・SK13測量図

SK14 (第119・120図) 調査地中央やや東、C5～E5区にあり、SB1を切り、SB13に切られる。いくつかの遺構が切りあうものなのか、一遺構での掘り方の差なのか明確でない。ただし、遺構の深さは大差ないことを記しておく。平面形態は不整形で、規模は長軸5.72m、短軸4.22m、深さ12cmである。埋土は暗褐色土(黄色土混り)が主体で、北側に白色粘土が検出されている。出土遺物には土師器、須恵器がある。第120図の336～341は土師器、343～354は須恵器であり、342は小片であるが弥生土器と思われるものである。336・337は壺、338は碗、339・340は高坏、341はコシキの把手部である。343～348は坏蓋、349～351は坏身、352は高坏脚部、353は壺、354は大型甕である。時期は出土物より6世紀後葉に比定する。



第119図 SK14測量図

遺構と遺物



第120図 SK14出土遺物実測図

(4) 柱穴とその他の遺物 (第121回)

調査地内からは約200基の柱穴及び小穴が検出された。ここでは、時期が知りえる土器に限り資料提示を行う。

355～357はS P 150出土の高坏である。5世紀後半～6世紀初。358・359はS P 59出土品で高坏である。5世紀後半～6世紀初。360はS P 155出土品で、高坏脚部である。5世紀後半。361はS P 236出土品で、弥生土器の甕形土器である。後期前葉。362はS P 93出土品で、弥生土器の甕形土器である。後期前葉。364はS P 194出土品で、弥生土器の底部片。時期不明。363はS P 242出土品で、器台形土器もしくは高坏形土器の受部片である。後期後半。365・366は須恵器の坏蓋と坏身である。6世紀中～後半。367はS P 103出土品で、須恵器の有蓋高坏の蓋である。5世紀後半～6世紀初。368はS P 93出土品で、須恵器の坏蓋である。5世紀末～6世紀初。369はS P 116出土品で、須恵器の坏蓋である。6世紀前葉。370はS P 119出土品で、須恵器の高坏脚部である。5世紀後半～6世紀初。371はS P 81出土品で、南陽系須恵器の壺である。5世紀後半。372はS P 51出土品で、石版丁の欠損品である。挟りをもつ。弥生時代後期。373は表採品で、石製品である。石材は赤色チャートで、先土器～縄文時代。374はS P 242出土品で、鉄製品の刀子である。時期不明。375は表採品で、ナイフ形石器である。先土器時代。

4. 小 結

本調査では、弥生時代、古墳時代、中世の遺構と先土器時代から中世までの遺物を確認した。以下、時代ごとにとまとめをおこなう。

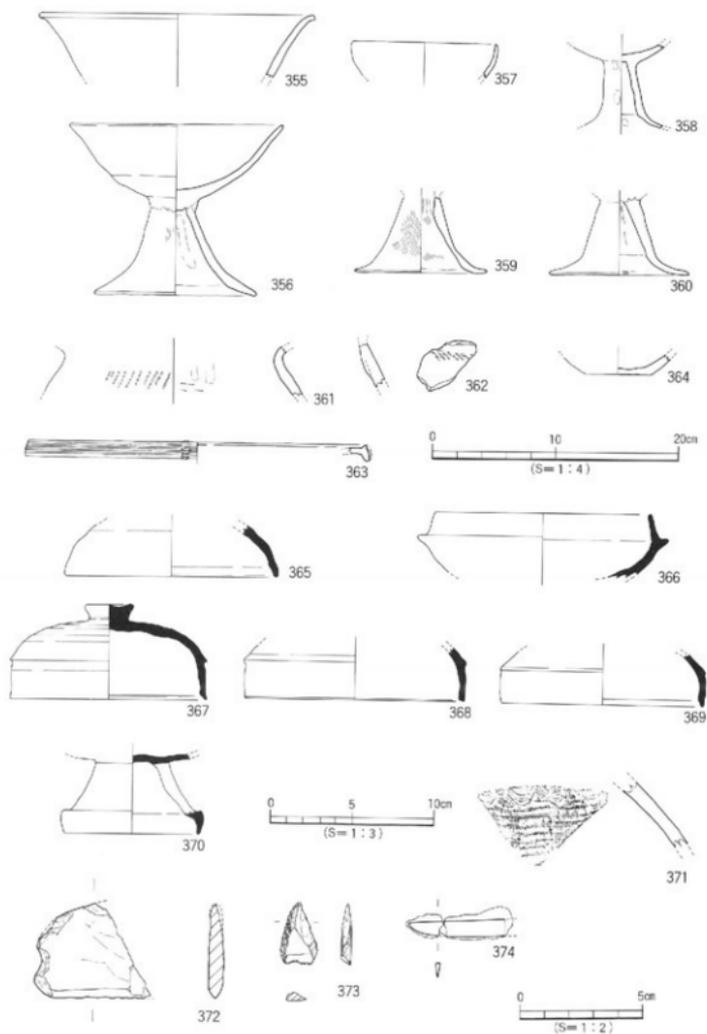
弥生時代

前期と後期の遺構を検出している。

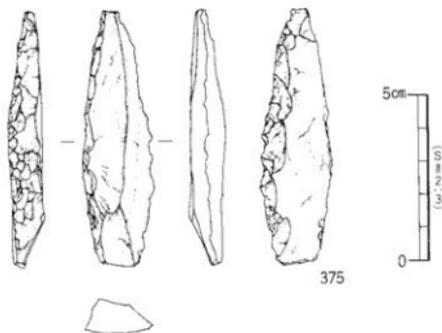
前期に比定されるSK10・11は、不整形な長方形を呈している。SB5には前期土器の破片が含まれている。よって調査地一帯には前期の集落遺構が展開していたものと推察できる。福音寺地区での弥生前期の遺構検出は初例となり貴重な資料といえる。

後期に比定される遺構にはSB5・7がある。SB5は、円形で主柱穴を6基もつ。北西部にある2つの張り出しは、張り出し長や深さより同時に存在した可能性は高いと考えている。SB5出土物は莫大で口縁部片で492点におよんだ。出土品には完形品が数点あるが、大多数は破片であり、日常生活での廃棄物と考えられる。器種には甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器、支脚形土器等がある。甕形土器は「く」の字状口縁をもち、壺形土器は複合口縁蓋と長頸壺が多数を占める。鉢は折り曲げ口縁と直口縁があり、長く大きく開く口縁部と突出する底部をもつもの(154)が出土している。高坏形土器は裾部が有段になるものがあり、脚部には凹孔が2段以上施される。器台は大型品が多くみられ、支脚は受部が「U」字状に傾斜したものに限られる。これ等は、梅木が後期土器編年の際にⅡ-2の基準要素として提示したものである。時間的には、隣接する福音小学校構内遺跡土器溜り資料に後出するものと考えている。

遺構と遺物



第121図 柱穴とその他の出土遺物実測図



第122回 包含層出土遺物実測図

古墳時代

5世紀後半～6世紀代の竪穴式住居と掘立柱建物がある。

竪穴式住居址SB1・3・10は、方形で、主柱穴4本と共通する施設をもつ。ただし、SB3は中央に炉を付設しており、他の二つとは様相を異にしている。また、SB10は新・旧の2棟が切り合っているものである。SB8・9は部分的な検出にとどまったが、調査地内の出土品からみるとSB1などと大きく時期差はないと思われる。SB8は壁体は直に焼上を検出し、さらに壁体部に切り合い関係は定かではないが小ピットがみられる。この2つの点から推測するとSB8はカマドを付設していたと考えられるのである。SB1・3・10では検出されなかった施設である。

掘立柱建物址はSB4が6世紀代であることが分かるが、SB11・12・13・14は切り合い等より古墳時代以降であることが分かるにとどまる。ただし、SB14は柱穴ないし主柱径は他のものに比べ小さく、その配列も規格的であり、古墳時代ではなく、中～近世に時期比定できるものではないかと考えている。

古代～中世

明確な遺構はない。遺物では、SB5を切るピット中より完形の碗2点が出土している。この土器は、白色系土師器碗と呼称されるもので11世紀に時期比定されるものである。平野内での出土事例は少なく、貴重な土器資料といえる。

以上、今回の調査結果を簡単にまとめた。福音寺地区の北西部域が弥生後期と古墳時代後期の主たる居住区域であったことが明らかとなり、さらには多量の弥生後期土器を得られた。これ等の資料は大きな成果といえる。なお、報告に際しては西尾幸剛氏、池田學氏に確認と助言をえた。また、先土器時代遺物については重松佳久氏の実測であり、古墳時代～中世の遺物については栗田正芳氏と宮内慎一氏に分析と助言をえた。末尾ではあるが、記して感謝申し上げます。

梅本謙一・武江良浩 1995「福音小学校構内遺跡」松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
梅本謙一 1991「松山平野の弥生後期土器」松山大学構内遺跡2次調査」松山大学、松山市教育委員会、松山市立埋蔵文化財センター

遺構一覽表

表15 竪穴式住居址一覽

竪穴 (SB)	時期	平面形	規模		床面積 (㎡)	主柱穴 (本)	内 部 施 設			周壁溝	備 考
			長さ×幅×深さ (m)				高床	土坑	炉 カマド		
5	弥生後期	円形	7.5×7.1×0.28		44.15	6		○		溝	貼り出し
7	弥生後期	隅丸長方形	6.3×3.6×a		22.68	2		○		溝	
1	古墳後期	方形	4.1×3.9×0.1		15.99	4				溝	SK14に切られる
3	古墳後期	方形	5.9×5.5×a		32.45	4		○		溝	
8	5 C以降	方形	1.4a×2.2a×0.03		3.6+a					溝	SB14に切られる
9	5 C以降	方形	1.3a×2.2a×0.06								
10	5 C以降	方形か	4.5×4.4×a		19.8	4				溝	建てかえ 掘立4に切られる

表16 掘立柱建物址一覽

掘立	方位	規模		桁 行		梁 行		床面積 (㎡)	備 考	時 期
		(間)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
4	東西	3×3	5.26	1.94・1.48・1.84		4.32	1.54・1.50・1.31	22.72	SB10を切る	6世紀後半
11	東西	4×a	6.21	1.50・1.69・1.39・1.63		3.6	1.96・0.62	22.36		
12	東西	1×1	3.37	3.37		2.72	2.72	9.17		
13	南北	2×1	3.36	1.68・1.68		5.08	5.08	17.06	SK14を切る	
14	南北	3×3+a	4.13	1.42・1.33・1.38		3.61	1.69・1.05・0.9	15.03	SB8を切る	

表17 土坑一覽

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	B6-7~ C6-7	長方形	皿状	0.86×0.42×0.14		弥生	弥生後期後半	
2	E4-5	円形		1.11×1.04×0.26	暗褐色土 暗褐色土	土師?	6 C前半	
3	M1-5	楕円形	皿状	2.48×2.10×0.19	暗褐色土	土師・須恵	6 C前半	SB3を切る
4	D5	楕円形	皿状	1.64×1.38×0.14	黒褐色土	土師・須恵・ 石器	6 C後半	
5	B4-5	円形	皿状	1.50×1.40×0.16	暗褐色土	須恵	6 C中頃	
6	B4-5	楕円形	皿状	0.70×0.80×0.18		須恵	5末~6 C初	
7	C2	楕円形		1.76×1.20×0.31	暗褐色土		?	
8	E3	隅丸長方形	皿状	3.82×2.46×0.18	暗褐色土	土師	5 C後半	
9	C4	楕円形		1.42×0.79×0.14	暗褐色土 (須恵土混り)	土師	5 C後半	
10	B3-4~ C3-4	不整形長方形		2.00×1.40×0.31	暗灰褐色土	弥生・石器	弥生前期	SB4に切られる
11	C4	不整形長方形		2.02×1.40×0.29		弥生	弥生前期	SB16に切られる
12	C2-3	小正方形		4.50×3.64×0.16	暗褐色土		6 C後半	SK13に切られる
13	BC3	楕円形		2.80×1.28×0.32	暗褐色土	弥生・石器	6 C後半~ 7 C以降	SK12を切る
14	CH5	不整形		5.72×4.22×0.12	暗褐色土 (須恵土混り)	土師・須恵	6 C後半	SH1を切り、 SB13に切られる

表18 SB5 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径(32.2) 残高 12.8	大型品。ゆるやかに外反する口縁部。口縁肩部は面をもつ。	ハケ(5本/cm) ④ハケ(10本/cm)	ハケ(一部マメフ)	褐色 淡褐色	石長(1-5) 全	黒斑	
2	甕	口径(22.4) 残高 6.4	大型品。口縁肩部は面をもつ。内面に稜をもつ。	④ナデ ④ハケ	④ハケ ④ナデ	褐色 褐色	砂 ○		
3	甕	底径(27.6) 残高 9.9	大型品。ゆるやかに外反する口縁部。口縁肩部は面をもつ。	④ヨコナデ ①ハケ・ヨコナデ ④ハケ	④ヨコナデ ①ハケ・ヨコナデ ④ナデ	褐色 褐色	石長(1-2) ○		
4	甕	口径(25.1) 残高 7.8	大型品。ゆるやかに外反する口縁部。口縁肩部は面をもつ。内面に稜。	④ハケ(8本/cm) ④ハケ(5本/cm)	ハケ(8本/cm)	乳褐色 乳褐色	石長(1-2) 全		
5	甕	口径 18.4 残高 30.0	肩部の張り強い。口縁肩部はあいまいな面。内面に稜をもつ。	④ヨコナデ ④ハケ ④タタキ ④ナデ	④ハケ(マメフ) ④ナデ ④ハケ ④ナデ上げ	赤褐色 淡褐色	石(1-2) ○	黒斑 採付者	37
6	甕	口径 18.0 残高 26.0	肩部の張り強い。口縁肩部はあいまいな面。内面に稜をもつ。	④ハケ・ヨコナデ ④ヨコナデ ④ハケ	④ハケ・ヨコナデ ④ヨコナデ ④ハケ(部マメフ)	褐色 褐色	石長(1-3) ○	採付者	
7	甕	口径(19.0) 残高 11.7	肩部の張り強い。口縁肩部はナデ凸む。内面に稜をもつ。	④ヨコナデ ④ハケ・ヨコナデ ④ハケ	①ハケ・ヨコナデ ④マメフ(ハケ) ④ナデ(部新造)	褐色 灰色・褐色	石(1-5) 全		
8	甕	口径(17.2) 残高 22.4	肩部の張り強い。口縁肩部は面をもつ。内面に稜をもつ。	ハケ	ナデ→ハケ ④ナデ	黄褐色 黄褐色	石長(1-6) ○	黒斑	37
9	甕	口径 17.2 残高 20.8	肩部の張り強い。口縁肩部は面をもつ。内面に稜をもつ。	ハケ(13本/cm)	ハケ(13本/cm)	茶褐色 茶褐色	石長(1-4) ○		37
10	甕	口径 17.1 残高 17.0	肩部の張り強い。口縁肩部は面をもつ。内面に稜をもつ。	④ヨコナデ ④ハケ・ヨコナデ ④ハケ(指頭直有)	①ハケ・ヨコナデ ④ハケ(指頭直有)	淡褐色 淡褐色	石長(1-2) 全	黒斑	37
11	甕	口径 17.8 残高 10.5	肩部の張り強い。口縁肩部はあいまいな面。内面に稜をもつ。	④ハケ・ヨコナデ ④ハケ(14本/cm)	④ハケ・ヨコナデ ④ハケ	茶褐色 茶褐色	石長(1-6) ○		
12	甕	口径(17.3) 残高 24.8	胴中位が張る。口縁肩部は丸い。内面に稜をもつ。器壁薄い。	④ハケ・ヨコナデ ④ハケ	④ハケ・ヨコナデ ④ハケ	茶褐色 茶褐色	石長(1-3) ○	採付者	37
13	甕	口径(17.6) 残高 18.6	口縁肩部はあいまいな面。内面に稜をもつ。	マメフ(ハケ) ④ハケ	マメフ(部ハケ)	褐色 褐色	石(1-2) ○	採付者	
14	甕	口径(19.2) 残高 21.9	口縁肩部はあいまいな面。内面に稜をもつ。	④ヨコナデ ④ハケ	④ヨコナデ(部ナデ) ④ハケ(マメフ)	緑褐色 黄褐色	石(1)多 ○	採付者	
15	甕	口径 15.5 残高 13.8	肩部がゆる。口縁肩部はあいまいな面をもつ。内面に稜をもつ。	④ハケ(8本/cm) ④タタキ ④タタキ→ハケ	ハケ(8本/cm)	灰褐色 灰褐色	石長(1-2) 全	黒斑	37
16	甕	口径(17.2) 残高 8.0	ゆるやかに外反する口縁部。口縁肩部は面をもつ。	ハケ	ハケ	茶褐色 灰色	砂 ○	黒斑	
17	甕	口径 17.4 残高 17.3	肩部がゆる。口縁肩部は面をもつ。器表面が著しく凸凹する。	④ヨコナデ ④ハケ・ヨコナデ ④ハケ	①ハケ・ヨコナデ ④ハケ(部ハケ) ④ナデ上げ	淡茶褐色 赤褐色	石(1-2)少 ○	黒斑	38
18	甕	口径 16.0 底径 5.2 器高 27.8	胴全体にゆるいくみをもつ。口縁部は直立状に立ち上がり外反する。口縁肩部はあいまいな面をもつ。	④ヨコナデ ④ハケ	④ハケ ④上土によるナデ	赤褐色 赤褐色	石長(1-6) ○	黒斑	38
19	甕	口径 18.5 残高 19.0	内面に稜をもって外反する口縁部。口縁肩部は小さくあいまいな面。	④ヨコナデ ①ハケ・ヨコナデ ④ハケ(5本/cm)	④ハケ・ヨコナデ ④ハケ	黄茶褐色 黄茶褐色	石長(1-3) ○	黒斑	38

遺物観察表

SB5 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	種類	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調	胎土	備考	国産
				外 面	内 面				
20	甕	口径(18.9) 残高 16.9	ゆるやかに外反する口縁部。 口縁端部は丸い。	マメツ(ハケ)	①ナデ→ヨコナデ ②ハケ(5本/cm) ③ハケ(3本/cm)	淡黄茶色 淡黄茶色	石・長(1-4) ○	黒斑	
21	甕	口径(16.6) 残高 15.0	あいまいな稜をもって外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	①ヨコナデ ②ハケ→ヨコナデ ③ハケ	①ハケ→ヨコナデ ②ハケ ③ハケ→ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	石(1-2) ○		
22	甕	口径(18.6) 残高 26.8	稜をもって外反する口縁部。 口縁端部は丸い。	①ヨコナデ ②ハケ→ヨコナデ ③ハケ(6本/cm)	①ハケ→ヨコナデ ②ナデ ③ハケ(3-5本/cm)	淡灰褐色 灰色	石(1-5) ○		38
23	甕	口径(20.0) 残高 14.9	ゆるやかに外反する口縁部。 口縁端部はあいまいな面をもつ。	①ヨコナデ ②ハケ→ヨコナデ ③ハケ(5本/cm)	①ハケ ②ナデ ③ハケ(5本/cm) ④ハケ(3本/cm)	淡褐色 淡褐色	石(1-2) ○	黒付着	
24	甕	口径(18.0) 残高 8.7	あいまいな稜をもって外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	①ヨコナデ ②ハケ→ナデ ③ハケ(4本/cm)	①ハケ ②ナデ ③ハケ(4本/cm)	淡褐色 淡褐色	石(1) ○		
25	甕	口径 17.6 残高 12.0	ゆるやかに外反する口縁部。 口縁端部は面をもつ。	①ヨコナデ ②ハケ→ヨコナデ ③ハケ(4本/cm)	①ハケ(マメツ) ②ナデ	乳白色・褐色 乳灰色	砂 ○		
26	甕	口径(18.6) 底径(3.6) 器高 25.0	肩部が張る。稜をもって外反する口縁部。口縁端部はあいまいな面をもつ。上げ底。	①ハケ→ヨコナデ ハケ	①ハケ ②ハケ→ナデ ③ナデ	淡褐色 淡褐色	石(1-2) ○	黒斑	38
27	甕	口径(15.4) 残高 19.9	あいまいな稜をもって大きく外反する口縁部。口縁端部はあいまいな面をもつ。	ハケ(8本/cm)	ナデ	茶褐色 黒灰色	石(1-2) ○	黒付着	
28	甕	口径(17.0) 残高 18.3	ゆるやかに外反する口縁部。 口縁端部は丸い。	タテハケ(3本/cm)	ハケ	淡灰褐色 灰色・褐色	石(1-4) ○		
29	甕	口径(15.3) 底径 3.7 器高 24.8	ゆるやかに外反する口縁部。 上げ底の底部。	マメツ	マメツ(ナデ)	黄茶色 暗灰色	石・長(1-3) ○	黒斑	39
30	甕	口径 15.4 底径 4.0 器高 26.4	完形品。ゆるやかに外反する口縁部。立ち上がりをもつ平底。	マメツ(ハケ) ナデ	①ハケ→ヨコナデ ②ハケ(6本/cm)	褐色 褐色	石・長(1-3) ○	黒斑	39
31	甕	口径(10.1) 残高 22.2	ゆるやかに外反する口縁部。 端部はあいまいな面。	ハケ ①マメツ	①ハケ ②ナデ ③ハケ→ナデ	白黄色 白黄色	石・長(1-3) ○	黒付着	39
32	甕	口径 14.9 残高 26.0	ゆるやかに外反する口縁部。 側部は張りが少なく長筒。	①ヨコナデ ②マメツ(ハケ)	マメツ	淡褐色 乳褐色	石(1-4)多 小石(7) ○	黒付着	39
33	甕	口径(15.6) 残高 16.1	ゆるやかに外反する口縁部。 口縁端部は面をもつ。	①ハケ→ヨコナデ ②ハケ(10本/cm) ③ハケ→ナデ	①ヨコナデ マメツ(一筋ハケ)	褐色 褐色	石(1) ○		
34	甕	口径(17.0) 残高 11.9	稜をもってゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は丸い。	①ナデ ハケ(8本/cm)	①ハケ ②ナデ ③ハケ(5本/cm)	淡茶褐色 淡茶褐色	密(金) ○	黒斑	
35	甕	口径(14.0) 残高 17.9	あいまいな稜をもって外反する口縁部。	①ハケ(9本/cm) ②ヨコナデ(4本/cm)	マメツ	淡褐色 淡褐色	石(1-2) ○	黒付着	39
36	甕	口径(15.4) 残高 13.5	あいまいな稜をもって外反する口縁部。口縁端部は小さい面をもつ。	①ハケ ②ヨコナデ(ナデ?)	マメツ(ハケ)	茶褐色 褐色	金(1-2) ○	黒付着	黒斑
37	甕	口径(14.2) 残高 7.0	ゆるやかに外反する口縁部。 口縁端部は丸い。	マメツ(一筋ハケ)	マメツ	褐色 灰色	石(1-2) ○		
38	甕	口径(14.8) 残高 6.1	ゆるやかに外反する口縁部。 口縁端部はあいまいな面をもつ。	ハケ	ハケ	乳灰褐色 乳灰褐色	砂 ○		

前述F遺跡

SB5出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土	備考	図版
				外面	内面			
39	甕	底径 4.0	くびれをもつ上げ底。	ハケ	マメツ	茶褐色	石(1-8)多 ○	廣竹造
		残高 25.7		⑤ナデ(御笠蓋)	茶褐色			
40	甕	底径 4.6	外傾する立ち上がりをもつ上げ底。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	灰褐色 淡褐色	石・長(1-6) ○	
		残高 25.4						
41	甕	底径 4.8	直立する立ち上がりをもつわずかな上げ底。	ハケ	ハケ	淡褐色	石(1-3) ○	黒斑
		残高 12.7		⑤ナデ(器ナデ)	黒灰色			
42	甕	底径 (5.7)	外傾するあいまいな立ち上がりをもつわずかな上げ底。	ナデ→ハケ(8本/cm)	ハケ(8本/cm)	淡褐色	石・長(1-3-5) ○	黒斑
		残高 10.2		⑤ナデ(器ナデ)	→ナデ	淡褐色		
43	甕	底径 3.4	外傾するあいまいな立ち上がりをもつわずかな上げ底。	①ハケ→ナデ	②ナデ	灰褐色	石・長(1-4) ○	黒斑
		残高 27.7		②下ハケ(1-3本/cm)	①ハケ(2-3本/cm)	暗褐色		
44	甕	底径 3.5	小さい立ち上がりをもつ上げ底。	ハケ(4本/cm)	ナデ上げ	乳茶褐色	石・長(1-3) ○	黒斑
		残高 12.6		⑤ナデ	乳褐色			
45	甕	底径 3.7	立ち上がりをもつ上げ底。	ハケ(3本/cm)	工具によるナデ	赤褐色	石・長(1-4) ○	黒斑
		残高 9.0		⑤ヨコナデ(器ナデ)	⑤ナデ	乳茶色		
46	甕	底径 2.4	厚く、小さい上げ底。	ハケ	ハケ	乳茶色	石・長(1-3) ○	
		残高 9.1		⑤ナデ	⑤ナデ	黒灰色		
47	甕	底径 3.5	あいまいな立ち上がりをもつ厚い平底。	ハケ(5-8本/cm・マメツ)	ハケ→ナデ	緑褐色 暗褐色	石・長(1-6) ○	
		残高 18.0						
48	甕	底径 3.1	幅広い平底。	ハケ(11本/cm)	ハケ(9本/cm)	暗褐色 暗褐色	石・長(1-4) ○	黒斑
		残高 18.7		⑤工具によるナデ	暗褐色			
49	甕	底径 3.2	あいまいな立ち上がりをもつ平底。	ハケ	①ハケ	茶褐色	石・長(1-4) ○	
		残高 13.2		⑤ナデ	⑤マメツ	淡褐色		
50	甕	底径 2.4	下半がふくらみ、幅広い平底となる。	①ハケ	ナデ	茶褐色	黒(石・長1-2) ○	
		残高 6.8		②タタキ	②タタキ	乳灰褐色		
51	甕	底径 2.4	幅広い上げ底。	マメツ	ハケ	淡褐色	石・長(1-3)多 ○	黒斑
		残高 20.2		⑤ナデ	⑤ナデ	黒灰色		
52	甕	底径 5.3	あいまいな立ち上がりをもつ平底。	ハケ	マメツ(ハケ?)	灰黄褐色	石・長(1-5) ○	
		残高 15.4		⑤ナデ	⑤ナデ(御笠蓋)	黄褐色		
53	甕	底径 5.4	あいまいな立ち上がりをもつ幅広い平底。	マメツ	①ケズリ→ナデ	暗褐色	石(1-4)・ 石・長(1-2) ○	
		残高 21.2		②ケズリ	②ケズリ	乳茶色		
54	甕	口径(24.2)	口縁部と内面に1条の沈線文。頸部に刻目凸帯1条。	ヨコナデ	ヨコナデ(器ナデ)	褐色	石(1-4)少 ○	40
		残高 3.7				褐色		
55	甕	残高 2.9	口縁部に2条の沈線文。	ナデ	マメツ	黒色	石・長(1-5) ○	
						黒色		
56	甕	口径(19.1)	口縁部に2条の沈線文。	①ヨコナデ	ナデ(マメツ)	黄灰色	石・長(1-3) ○	
		残高 3.0		⑤ハケ→ヨコナデ		乳黄褐色		
57	甕	口径(16.8)	口縁部は上方に拡張。外茶系。	マメツ	マメツ	淡黄褐色	石・長(1-2) ○	40
		残高 5.2				淡黄褐色		

遺物観察表

SB 5 出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形 態・施文	調 整		(外) 色調	胎 土	備考	図版
				外 面	内 面				
58	甕	口径(13.0) 残高 4.1	口縁部は上方に立ち上がる。 外朱系。	④ヨコナデ ⑤マメツ	④ヨコナデ ⑤ナデ	淡茶色 淡茶色	石(1-4) ○		40
59	甕	口径(33.4) 残高 8.3	口縁部に2条の太沈線。 頸部に押印の眉目凸帯。	④ヨコナデ ⑤ハケ ⑥ヨコナデ	ハケ(4本/cm)	淡褐色 淡褐色	石(1-6)・ 長(1-3) ○		
60	甕	残高 7.9	頸部に「ノ」字状の眉目凸帯。	マメツ	マメツ	乳茶色 乳白色	石(長(1-4)) ○		
61	壺	口径 22.5 残高 15.8	口頸部境は稜をもって区分される。櫛掻波状文7条→ヨコ9条→波状文7条。	④ヨコナデ ⑤ハケ ⑥ハケ→ミガキ	④ヨコナデ ハケ	茶褐色 茶褐色	石(長(1-3)) ○	黒灰	40
62	壺	口径(21.4) 残高 11.3	口頸部境は稜をもって区分される。櫛掻波状文6条以下→ヨコ9条。	④ヨコナデ ⑤ハケ ⑥ハケ→ミガキ	④ヨコナデ ⑤ハケ	明褐色 茶褐色	石(長(1-5)) 金 ○	黒灰	
63	壺	口径(23.2) 残高 10.2	櫛掻波状文5条→斜格子目文6条→波状文5条。	④ヨコナデ ⑤ハケ→ヨコナデ	マメツ(一部ヨコナデ)	褐色 褐色	石(長(1-3)) 金 ○		
64	壺	口径 26.0 残高 8.8	口頸部境は稜をもって区分される。櫛掻ヨコ6条→波状風10条。	④ハケ→ヨコナデ ⑤ハケ	④ヨコナデ ⑤ナデ	褐色 褐色	石(長(1-3)) 金 ○		40
65	壺	口径 13.4 残高 10.0	口頸部境は稜をもって区分される。櫛掻波状文11条→波状文11条。	④ヨコナデ ⑤ハケ	④ヨコナデ ⑤ハケ	褐色 褐色	石(1) ○		40
66	壺	口径 13.2 残高 7.7	口頸部境は稜をもって区分される。櫛掻波状文10条→波状文11条。	④ハケ→ヨコナデ ⑤ハケ(一部ヨコナデ)	マメツ(ハケ)	明灰褐色 明灰褐色	石(1-2) ○		
67	壺	口径 18.6 残高 9.8	口頸部境は稜をもって区分される。櫛掻波状文3条→波状文3条。	④ヨコナデ ⑤ハケ(6本/cm)	④ハケ→ヨコナデ ⑤マメツ	褐色 褐色	石(1-2) ○		
68	壺	口径 14.2 残高 12.9	口頸部境はあいまいな稜をもって区分される。櫛掻波状文5条。	④ハケ→ヨコナデ ⑤ハケ→ミガキ	④ハケ ⑤ナデ上げ	褐色 褐色	石(1-7) ○		40
69	壺	残高 7.2	櫛掻斜格子目文7条。接合面沈線2条と木状木山の押印。	④ヨコナデ ⑤ハケ	ヨコナデ	明褐色 黒灰色	長(1-2)・砂 ○		
70	壺	口径 26.2 残高 5.1	口縁部無文。	ハケ→ヨコナデ	ハケ(一部ヨコナデ)	褐色 褐色	長(1-3) ○		
71	壺	残高 14.1	口頸部境はあいまいな稜を内側にもつ。頸部に斜格子目文状の眉目凸帯。	④ナデ ⑤ハケ(13本/cm)	④ハケ→ナデ ⑤ハケ(部調整) ⑥未調整	褐色 褐色	石(1-3) ○	黒付着	
72	壺	残高 6.3	口頸部境は稜をもって区分される。	④ヨコナデ ⑤ハケ(マメツ)	④ハケ→ヨコナデ ⑤ヨコハケ	褐色 褐色	長(1-3)・砂 ○	黒付着	
73	壺	残高 19.4	口頸部境は稜をもって区分される。	ハケ→ミガキ (マメツ)	ハケ(マメツ)	橙褐色 橙褐色	石(長(1-5)) 砂 ○		
74	壺	口径 25.6 残高 12.9	櫛掻ヨコ2条→山形状の波状文2条。	④ハケ→ヨコナデ ⑤ハケ	④ヨコナデ ⑤ハケ	褐色 褐色	石(1-5) ○		40
75	壺	口径(20.0) 残高 15.4	口頸部境は内面に稜をもつ。櫛掻波状文6～7条→波状文6～7条。	④ヨコナデ ⑤ハケ→ナデ	④ハケ→ヨコナデ ⑤ハケ	淡褐色 淡褐色	長(1-5) 金 ○	黒灰	41
76	壺	口径 13.6 残高 34.1	口縁部無文。器表面に細い線が多数見られる。	④ヨコナデ ⑤ハケ	④ヨコナデ ⑤ハケ ⑥ナデ ⑦ハケ(一部マメツ)	淡黄褐色 淡黄褐色	石(長(1-3)) 金 ○		41

SB 5 出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
77	壺	残高 1.6	櫛歯波状文。	① ヨコナデ ② ハケ(マメツ)	マメツ	茶色 茶色	石・長(1-2) ○		
78	壺	口径 19.0 残高 16.5	櫛歯波状文5条。頸部に斜格子目の刺目凸帯と刺目付きのタテ凸帯(浮文?)2条。	① ハケ→ナデ ② マメツ(ハケ)	① ナデ(指環痕) ② マメツ(ハケ)	褐色 褐色	石(1-3)多 ○		41
79	壺	口径(13.5) 残高 13.3	櫛歯波状文6条。頸部に斜格子目の刺目凸帯。	① ハケ→ヨコナデ ② ハケ ③ ハケ→ヨコナデ	① ハケ→ヨコナデ ② マメツ	褐色 灰白色	石(1-2) ○		41
80	壺	口径(13.9) 残高 8.7	櫛歯波状文3条。	① マメツ ② ハケ(マメツ)	① ヨコナデ ② ハケ(マメツ)	黄褐色-褐色 淡黄褐色	石長(1-8)多 ○		
81	壺	口径 14.2 残高 7.4	口縁部無文。	① ヨコナデ ② ハケ	① ヨコナデ ② ハケ	褐色 褐色	石(1-7) ○		
82	壺	口径(15.6) 残高 8.0	口縁部無文。	① ヨコナデ→ハケ ② タテハケ→ミゾキ	① ヨコナデ ② ハケ(ハクリ筋)	褐色 褐色	石(1-3) ○		
83	壺	口径 13.4 残高 12.3	口縁部無文。頸部に斜格子目(押圧)の刺目凸帯。	① ハケ(マメツ) ② ナデ→ハケ(マメツ) ③ マメツ(ハケ)	マメツ(ナデ・指環痕) 黄褐色 黄褐色	石・長(1-5) ○		41	
84	壺	口径(17.4) 残高 9.2	口縁部無文。頸部に斜格子目(押圧)の刺目凸帯。	ハケ(11本/cm)	① ヨコナデ(マメツ) ② ハケ(マメツ)	茶褐色 乳褐色	石(1-4)・ 長(1-2) ○		
85	壺	口径 15.0 残高 8.7	口縁部の一部に格子目をもつ。	① ハケ ② マメツ(ナデ) ③ ナデ(白マメツ) ④ ハケ(マメツ)	① ハケ(マメツ) ② マメツ(ナデ) ③ ハケ(マメツ)	黄褐色 黄褐色	石・長(1-3) ○		
86	壺	口径(15.0) 残高 9.0	口縁部に3条の沈線文。	① ヨコナデ ② ハケ	マメツ	褐色 淡褐色	石(1-3) ○		41
87	壺	口径(12.0) 残高 6.0	口縁部無文。	① マメツ(ヨコナデ) ② マメツ	① ナデ ② ハケ(マメツ)	茶色 茶色	石・長(1-4) ○		
88	壺	口径(17.2) 残高 5.1	口縁部櫛歯波状文3条。	① ハケ→ナデ ② ナデ ③ ハケ	マメツ	淡褐色 淡褐色	石(1-3) ○		
89	壺	口径(17.6) 残高 6.4	口縁部無文。	① ハケ→ヨコナデ ② ハケ	① ナデ ② ハケ	乳褐色 乳褐色	石(1-3) ○		
90	壺	残高 28.1	頸部に斜格子目の刺目凸帯。胴部に櫛歯3条の縦線文。	ハケ	① ハケ ② ナデ ③ ハケ ④ ハケ→ナデ上げ	褐色 褐色	石(1-5)多 ○		42
91	壺	口径(13.2) 残高 7.8	口縁部無文。	① ヨコナデ ② ハケ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石(1-5)多 ○		
92	壺	口径(16.0) 残高 7.3	口縁部無文。頸部に斜格子目文。	① ヨコナデ ② ハケ	① ヨコナデ ② ハケ ③ マメツ(ハケ)	褐色 褐色	石(1-3) ○		
93	壺	口径 13.8 残高 10.5	口縁部櫛歯波状文6条。	① ハケ→縦線ヨコナデ ② ハケ(11-13本/cm)	① ヨコナデ→縦線/m ② ヨコナデ ③ ハケ(11-13本/cm) ④ ナデ	褐色 褐色	石(1) ○		42
94	壺	口径 12.8 底高 9.0	口縁部無文。	① ヨコナデ ② ナデ(タタキ痕)	① ナデ ② ヨコナデ ③ ハケ	淡灰褐色 淡灰褐色	石(1-2) ○		42
95	壺	口径 10.8 残高 8.1	口縁部無文。	① マメツ(ヨコナデ) ② ハケ(マメツ)	① ヨコナデ ② ハケ(マメツ) ③ ナデ(指環痕)	黄褐色 灰黄褐色	石・長(1-6) ○		

遺物観察表

SB 5 出土遺物観察表 土製品

(6)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
96	壺	口径(11.7) 残高 8.9	口縁部無文。	① ヨコナデ ② ハケ(5本/cm)	④ ヨコナデ ⑤ ハケ(4本/cm) ⑥ ヨコナデ(部分) ⑦ ハケ	灰黄色 黄褐色	砂 ○		
97	壺	口径(12.0) 残高 6.7	口縁部無文。	① ヨコハケ ② 変ハケ→ヨコナデ ③ ハケ	④ ハケ→ヨコナデ ⑤ ナデ ⑥ ハケ(一部ナデ)	茶褐色 茶褐色	石(1-3)少 ○		
97	壺	口径 11.8 残高 7.8	口縁部無文。	マメツ(ナデ)	① ヨコナデ(一部ハケ) ② ハケ(一部ナデ)	茶褐色 茶褐色	石(2-5)多 全 ○		
99	壺	口径(10.6) 残高 6.2	口縁部無文。	① ハケ→ヨコナデ ② ハケ(6本/cm)	④ ハケ→ヨコナデ ⑤ ナデ ⑥ ハケ	褐色 褐色	石(1) ○	黒斑	42
100	壺	口径(10.1) 残高 27.5	口縁ヲ手織竹管2ヶ1組が4組以上。頸部刻文4段もしくは刻文2段+竹管、重丸4条。	① ヨコナデ ハケ	④ ヨコナデ ⑤ ハケ(一部ナデ) ⑥ ナデ	乳灰色 黒色	長(1-6) ○		42
101	壺	残高 8.7	水口押圧による頸部の「M」字状凸帯。凸帯下に本口押圧文。	ヨコナデ(一部 ハケ→ナデ)	ヨコハケ	靑緑色 黄褐色	石(長1-3) ○		
102	壺	残高 4.7	頸部に凸帯。	マメツ(ナデ)	ナデ	茶 色 黄褐色	石(長1-4) ○		
103	壺	口径(16.6) 残高 32.0	ゆるやかに外反する口頸部。口縁部には面をもつ。	① ヨコナデ ハケ	④ ヨコナデ マメツ	淡褐色 淡褐色	石(長1-3) ○	黒斑 塗付者	42
104	壺	口径(12.9) 残高 12.1	ゆるやかに外反する口頸部。口縁部には丸みをもつ。	① ハケ→ナデ ハケ(8本/cm)	④ ハケ→ナデ(部分) ハケ(1本/cm 部分)	黄赤灰色 灰茶色	石(長1-4) 全 ○		
105	壺	口径 14.4 残高 9.4	ゆるやかに外反する短い口頸部。口縁部には面をもつ。	① ヨコナデ ② ハケ→ヨコナデ ③ ハケ	④ ヨコナデ ⑤ ナデ ⑥ ハケ	褐色 褐色	曹(4-1) ○		
106	壺	口径 7.6 底高 2.4	縁をもって外反する短い口頸部。底部は上げ底で立ち上がりをもつ。	① ヨコナデ ② ナデ ③ ハケ(部分) ④ ナデ	④ マメツ(ナデ) ⑤ ナデ(部分) ⑥ ハケ(マメツ) ⑦ マメツ(ナデ)	茶褐色 黄褐色	石(長1-3) 全 ○	黒斑	
107	壺	口径(9.4) 底径 3.0 器高 18.5	筒状の口頸部。	ハケ(マメツ)	① ハケ(マメツ) ② ナデ→ハケ ③ ハケ ④ ナデ	淡黄褐色 茶褐色	石(長1-3) ○	黒斑	
108	壺	口径(11.2) 残高 15.0	筒状の口頸部。	① マメツ ② ハケ ③ マメツ	④ ハケ(マメツ) ⑤ ハケ→ナデ ⑥ ハケ ⑦ ナデ上げ	茶褐色 茶褐色	石(長1-3) ○		
109	壺	口径(9.8) 残高 8.8	細い筒状の口頸部。	ハケ(8-9本/cm、 一部ヨコナデ)	ハケ(8-9本/ cm、一部ナデ)	茶褐色 乳黄褐色	石(長1-4) ○		
110	壺	口径(10.0) 残高 9.6	細い筒状の口頸部。	① ナデ タタキ	ハケ(一部ナデ)	明褐色 明褐色	曹 ○		
111	壺	口径 8.4 底径 3.7 器高 19.4	完形品。筒状の口頸部。口縁部はわずかに外傾する。	① ハケ→ヨコナデ ② ハケ(11本/cm) ③ ハケ(7本/cm) ④ ハケ→ナデ(上げ)	④ ヨコナデ ナデ	褐色 褐色	石(1-6) 全 ○	黒斑 塗付者	43
112	壺	口径 9.6 器高 21.4	頸部を一部欠損。筒状の口頸部。口縁部はわずかに外傾する。	① ハケ→ヨコナデ ハケ(5-6本/cm) ② 未調整	④ ハケ→ナデ(部分) ⑤ 調整後口縁部 ⑥ ナデ	褐色 褐色	曹(石1-6) 全 ○	黒斑	43
113	壺	口径 11.5 底径 3.0 器高 22.7	筒状の口頸部。口縁部は外傾する。平底。	ハケ	① ハケ ② ハケ→ナデ ③ ハケ	茶褐色 茶褐色	石(長1-3) ○	黒斑	43
114	壺	口径(10.8) 底径 2.8 器高 23.8	筒状の口頸部。口縁部は外傾する。平底。	ハケ(一部ヨコナデ)	④ ヨコハケ→ヨコナデ ナデ	淡褐色 淡褐色	石(1-3)少 全 ○	黒斑	43

SB 5 出土遺物観察表 土製品

(7)

番号	器種	法量(cm)	形態・素文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
115	壺	口径(9.8) 底径 2.2 残高 11.7	口縁部の一部欠損。平底の底部は極小さい立ち上がりをもつ。	① マメツ ハケ	ナデ	明褐色 灰褐色	石(0.5)	黒斑	43
116	壺	口径 11.0 底径 1.6 残高 13.2	内湾して立ち上がる口縁部。平底の底部は極小さい立ち上がりをもつ。	② ナデ ③ マメツ ④ ハケ	ナデ	灰褐色 淡褐色・灰色	砂 金 ○	黒斑	43
117	壺	口径(9.5) 残高 10.5	柳指直線文14条→6条→10条。	ハケミガキ	⑤ ハケ(マメツ) ナデ	乳黄褐色 乳黄褐色	密 ○		44
118	壺	口径(12.8) 残高 15.0	柳指直線文3条以上(マメツ)→15条→3条以上。	ハケミガキ(一部マメツ)	マメツ	茶褐色 乳黄褐色	石・灰(1~2)		44
119	壺	残高 3.8	柳指直線文7条以上→平截竹筴2段→直線文7条以上。	不明	ナデ(一部ハケ)	乳白色 淡灰色	全 ○		44
120	壺	底径 1.4 残高 3.2	平底の底部は極小さい立ち上がりをもつ。	ハケ→ミガキ ⑥ ナデ	ハケ→ミガキ	褐色 褐色	石・灰(1~2)		
121	壺	口径 13.2 底径 2.2 器高 23.0	縁りの弱い頸部下溝。丸みをもつ平底。完成品。	⑦ 口縁上 人のハケ ⑧ 側下 漆喰ハケ	⑨ 口縁上 太めのハケ ⑩ 側下 漆喰ハケ	明褐色 明褐色	石(1~2)多 金 ○	黒斑	44
122	壺	口径(11.0) 残高 10.0	内縁の後、外反する口頸部。	マメツ(ハケ)	ナデ	白茶色 白茶色	石・灰(1~4)		
123	壺	口径(20.4) 残高 9.4	口縁端部に3条の沈線文をもつ。	⑪ マメツ ハケ→ナデか?	ヨコナデ マメツ(ハケ)	茶褐色 乳茶黄色	石・灰(1~4) 金 ○		
124	壺	口径(21.3) 残高 8.0	外縁外反する長い口頸部。	⑫ ⑬ ヨコナデ ハケ(8~9本/cm)→ナデ	ハケ(8~9本/cm)→ナデ	黄褐色 黄褐色	石・灰(1~2) 金 ○	シミ斑	
125	壺	口径(19.8) 残高 6.6	口縁端部に3条の沈線文+円形浮文2条以上。	⑭ ⑮ ヨコナデ ハケ	マメツ	茶 色 灰 色	石・灰(1~2) 金 ○		
126	壺	口径(12.3) 残高 3.3	口縁端部に刻目か(?)。形態がやや異なる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 茶褐色	石・灰(1) ○		
127	壺	残高 3.1	頸部片。一部に唇目をもつ凸帯。内傾する頸部。	ナデ	ナデ	茶 色 茶 色	石・灰(1~4) 金 ○		
128	壺	底径 12.1 残高 8.7	大型品。大きな平底。	ハケ(4~6本/cm)	マメツ	乳黄色 乳黄灰色	石・灰(1~7) 金 ○	黒斑	
129	壺	底径 7.0 残高 8.5	立ち上がりをもつやや厚い平底。	ハケ ⑯ 指頭痕顕著	ナデ(ナデ上打)	明褐色 淡灰褐色	石(3) ○	黒斑	
130	壺	底径 4.7 残高 11.7	直立する立ち上がり。厚い平底。	⑰ ⑱ タタキ→ナデ ⑲ ⑳ 工具痕 ㉑ タタキ?	ハケ→ナデ ⑳ ナデ	灰黄色 灰黄色	石(1~3) 金 ○		
131	壺	底径 7.7 残高 17.7	胴部下半がふくらむ。あいまいな立ち上がりをもつ平底。	㉒ ハケ(8本/cm) ㉓ ⑳ 工具痕 ㉔ ナデ	マメツ	乳褐色 乳茶色	石・灰(1~2) ○	黒斑	
132	壺	底径 8.0 残高 27.8	胴中位付近に張りをもつ刷部。大きい平底。	ハケ(7~8本/cm) ㉕ ナデ	⑳ ⑳ マメツ ㉖ ナデ	白茶色 灰 色	石・灰(1~5) ○	黒斑	44
133	壺	底径 7.5 残高 19.7	胴部下半にふくらみをもつ平底。	ハケ(8本/cm) ㉗ ナデ	ハケ(6本/cm)	黄茶色 灰黄色	石・灰(1~4) ○	黒斑	

遺物観察表

SB 5 出土遺物観察表 土製品

(8)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
134	壺	底径 4.8 残高 29.3	胴部に張りをもつ胴筋。平底。	ハケ→マメツ	①ハケ ②マメツ ③ナデ上げ	淡褐色 灰灰色	石(1-3)多 ○	黒炭	44
135	壺	底径 4.8 残高 20.4	丸みをもつ立ち上がり。平底。	ハケ→ミガキ (マメツ)	①ナデ(マメツ) ②ハケ(5本/cm) ③ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石(長1-3) ○		黒炭
136	壺	底径 4.8 残高 29.5	胴部上半にふくらみをもつ。あいまいな立ち上がりの平底。	ハケ	ハケ→ナデ	鮮紅色 灰黄色	石(長1-6) ○		黒炭
137	壺	底径 3.6 残高 29.0	胴部下半にふくらみをもつ。あいまいな立ち上がりの平底。	ハケ	ハケ ③ナデ	淡灰色 淡灰色	石(長1-6) ○		黒炭
138	壺	底径 2.5 残高 27.7	胴部全体にふくらみをもつ。小さい平底。器壁が薄い。	ハケ(6本/cm) ③ナデ	①ハケ ②ナデ(器壁あり) ③ハケ ④ハケ→ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石(長1-5) ○		
139	壺	底径(4.9) 残高 22.2	胴中位付近に張りをもつ。胴部付近に3本の波状文風の縷。	ハケ(4本/cmマメツ) ④ハケ・工具縷	ハケ→ナデ ③ナデ上げ(器壁)	黄褐色 灰黄色	石(長1-8) ○		黒炭
140	壺	底径 5.5 残高 12.2	小型品。胴部全体にふくらみをもつ。平底。	ハケ(9本/cm・ナデ) ③ナデ	ハケ(8本/cm・ナデ)	茶褐色 茶褐色	石(長1-2) ○		
141	壺	底径 3.2 残高 16.4	小型品。胴部上半に張りをもつ。厚い平底。	①ハケ ②ハケ ③ハケ	①ナデ(マメツ) ②ナデ上げ ③ハケ	淡茶褐色 淡褐色	石(長1-3) ○		黒炭
142	壺	底径 2.2 残高 9.2	小型品。扁平球状胴部。平底。	③ヨコナデ ハケ(一部ミガキ?)	④ヨコナデ ナデ上げ(一部 ハケか?)	淡灰褐色 淡褐色	石(長1-4) ○		黒炭
143	壺	底径 0.8 残高 8.2	小型品。扁平球状胴部。丸平底。	ハケ(6本/cm)	ハケ ③ナデ	灰褐色 茶褐色	石(1) ○		
144	壺	残高 11.4	細い沈線。絵柄風の縦刻。	ハケ(一部ナデ)	ハケ(4本/cm)	淡茶褐色 淡灰褐色	石(長1-3) ○		41
145	壺	口径(14.4) 残高 4.0	口縁端部に太沈線3条。異形。	ヨコナデ	マメツ	褐色 褐色	石(1) ○		44
146	壺	残高 4.8	胴部片。木葉文5条。	ナデ	ナデ?	乳褐色 暗褐色	石(長1-4) ○		44
147	壺	残高 4.0	胴部片。2条の沈線文。	マメツ(ナデ)	ナデ	淡茶褐色 淡褐色	石(長1) ○		
148	鉢	口径(26.4) 残高 7.7	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	①ヨコハケ ②ナデ	①ヨコハケ ②ナデ	白褐色 白褐色	石(長1-2) ○		
149	鉢	口径(15.1) 残高 7.9	ゆるやかに外反する口縁部。マメツ著しい。	ハケ(マメツ)	マメツ	白褐色 白褐色	石(長1-2) ○		
150	鉢	口径(19.0) 底径 4.1 器高 10.8	ゆるやかに外反する口縁部。あいまいな立ち上がりをもつ平底。	ハケ ④指痕痕跡者	①マメツ ハケ	淡褐色 淡褐色	石(1-2) ○		黒炭 45
151	鉢	口径 18.4 底径 4.6 器高 15.5	接をもつて外反する口縁部。あいまいな立ち上がりをもつ平底。	①ハケ→ヨコナデ ②ハケ ③ハケ(一部ミガキ)	マメツ	褐色 灰 色	石(1-2)多 ○		黒炭 45
152	鉢	口径 18.4 残高 14.6	接をもつて外反するやや長い口縁部。	①ヨコナデ ②ハケ	①ヨコナデ ②ハケ(一部ミガキ?)	淡褐色 淡褐色	石(長1-2) ○		45

筋道F遺跡

SB5出土遺物観察表 土製品

(9)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎土 (内面)	備考	図版
				外 面	内 面				
153	鉢	口径(22.4) 残高 9.7	縁をもって外反するやや長い口縁部。	①ヨコナデ ②ハケ→ヘラミガキ	①ハケ→ナデか? ②ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長(1-2) 金 ○		
154	鉢	底径(2.2) 残高 9.6	立ち上がりをもつ底部は、中央がやや凹む。大きく外反する口縁部。	①ハケ→ヨコナデ ②ハケ ③ナデ	①ヨコナデ ②ナデ ③ナデ	褐色 褐色	砂 ○	黒斑	45
155	鉢	口径13.5 底径 3.0 器高 11.5	ゆるやかに外反する口縁部。平底。	①ナデ ②ハケ ③ナデ	①ハケ ②ナデ	淡黄褐色 乳灰色	石(1-2) 金 ○	黒斑	
156	鉢	口径(14.0) 底径 2.4 器高 9.9	ゆるやかに外反する口縁部。わずかに凹む底部。	①ハケ→ヨコナデ ②ハケ→ヘラミガキ ③ヘラミガキ	①ヨコナデ ②ナデ	淡白褐色 灰白褐色	密 ○	黒斑	
157	鉢	口径(10.4) 残高 5.2	縁をもって外反する口縁部。肩部が強く張る。	マメツ	①マメツ ②ハケ	茶褐色 茶褐色	石・長(1-2) 金 ○		
158	鉢	口径(15.9) 底径 2.8 器高 10.4	縁をもって外反する口縁部。底部はわずかに凹む。	①ヨコナデ ②ハケ→ヘラミガキ ③マメツ	ヘラミガキ	乳白色 乳白色	密 ○	黒斑	45
159	鉢	口径(11.6) 残高 4.8	縁をもって外反するやや長い口縁部。	ヘラミガキ	①ハケ ②ナデ(一部ハケ)	茶色 茶色	石・長(1-3) ○		
160	鉢	口径(13.9) 底径 3.0 器高 8.1	縁をもって外反するやや長い口縁部。立ち上がりをもつ平底。	ナデ	①ハケ ②ハケ→ナデ	紫褐色・灰褐色 紫褐色・灰褐色	石(1-1)少 金 ○	黒斑	45
161	鉢	口径(9.8) 底径 3.4 器高 12.8	ゆるやかに外反する口縁部。底部はわずかに凹む。	①ナデ ②ハケ ③ナデ	①ナデ ②ハケ(8本/㎝)	淡褐色 黒色	砂(石・金)少 ○	黒斑	45
162	鉢	口径(11.0) 底径 1.8	ゆるやかに外反する口縁部。平底。	①ヨコナデ ②ハケ(10本/㎝) ③マメツ ④ヘラミガキ ⑤ナデ	①(裏)ナデ(マメツ) ②マメツ ③ナデ ④ハケ(10本/㎝)	紫褐色・灰褐色 紫褐色・灰褐色 紫褐色・灰褐色 紫褐色・灰褐色	石(1-2) 長(1-3) ○	黒斑	
163	鉢	底径 1.5 残高 4.7	鉢ないし短長楕圓の底部。扁平の肩部に突出する小さい平底。	ハケ→ヘラミガキ ①ナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1-3) ○		
164	鉢	口径(28.8) 底径(4.4) 器高 10.7	直口口縁。端部は間をもつ。丸みのある平底。	①ヨコナデ ②ナデ ③ナデ	①ヨコナデ ②ハケ ③ナデ	褐色 褐色	石(1-2)少 ○		46
165	鉢	口径15.2 底径 2.9 器高 10.2	直口口縁。端部は丸い。突出する平底。	①ナデ ②ヘラミガキ ③ナデか?	①ナデ ②ヘラミガキ	淡茶褐色 茶褐色	長(1) ○		
166	鉢	口径(15.0) 底径 4.6 器高 9.2	直門口縁。端部はいまいちな面をもつ。くびれをもって立ち上がる平底。	ハケ ①ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	砂(石・1) ○		46
167	鉢	底径 2.8 残高 8.3	立ち上がりをもつ上げ底。	①ナデ ②ナデ ③ナデ	①ナデ ②ナデ ③ナデ	淡褐色 灰色	石・長(1-6) ○	黒斑	
168	鉢	底径 6.1 残高 7.3	大きいくびれをもつあげ底。	①マメツ ②ヨコナデ	ナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	密 ○		46
169	鉢	底径 3.8 残高 9.2	くびれをもつ。立ち上がりの高い平底。	①ハ(10本/㎝) ②ヨコナデ(上げ) ③ナデ	①ハケ ②ナデ	淡褐色 黒灰色	石(1-2) ○		
170	鉢	口径10.7 底径 2.8 器高 6.6	直口口縁。端部は丸い。平底。	ハケ→ミガキ ①ナデ	ハケ ①ナデ	紫褐色・灰褐色 褐色	砂・金 ○	黒斑	
171	鉢	口径11.0 底径 2.5 器高 7.1	直口口縁。端部は面をもつ。平底。	ハケ(9本/㎝・ 一部ナデ)	ハケ(9本/㎝)	黄褐色 黄褐色	石・長(1-2) ○		

遺物観察表

SB 5 出土遺物観察表 土製品

00

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外型) 色調	胎土	備考	図版
				外 面	内 面				
172	鉢	口径 13.4 底径 2.3 器高 7.1	直口口縁。肩部はいまい な面をもつ。立ち上がりをも つ平底。	① ハケ ② 敷ナデ ③ ナデ	④ ヨコナデ マメツ	淡灰褐色 淡灰褐色	石(1)多 金 ○	黒灰	46
173	鉢	口径(14.5) 残高 18.7	直口口縁。肩部は丸い。	④ マメツ(ハクリ) ⑤ ヘラミガキ	① マメツ(ハクリ) ⑥ ヘラミガキ(マメツ)	黄褐色 黄褐色	石・長(1-3) 金 ○		
174	台付鉢	底径(16.6) 残高 5.0	脚部片。円孔(φ1.7cm大) 4ヶ。	ヘラミガキ	⑥ ヘラミガキ(マメツ) ⑦ ハケ	褐色 褐色	密		46
175	高坏	口径 28.8 底径 19.5	復元完形。脚部に2段の円 孔(φ1.8cm)。上段3ヶ、下 段4ヶ。光耀技法。	④ ハケ ⑧ ミガキ(マメツ)	① 口マメツ ⑤ ハケ ⑧ マメツ	淡灰褐色 淡灰褐色	砂 ○		46
176	高坏	口径(16.2) 残高 2.4	外反する口縁部。外側に沈 線状の2条。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1-2) 金 ○		
177	高坏	口径(23.8) 残高 2.8	外反する口縁部。	ヨコナデ	ハケ	乳白色 淡褐色	密(石・1-2) ○		
178	高坏	口径(19.8) 残高 3.4	外反する口縁部。	ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	黒色(一部) 淡褐色	石・長(1-2) 金 ○	黒灰	
179	高坏	口径(27.6) 残高 4.1	外反する長い口縁部。	ヘラミガキ(→ ヨコナデ)	ヘラミガキ→ヨコナデ	黒色 淡黄褐色	密(石・長1) 金 ○	黒灰	
180	高坏	口径(30.0) 残高 4.4	外反する長い口縁部。肩部 は隅丸形状。	① 口ヨコナデ マメツ	マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	密(砂) ○		
181	高坏	口径(34.8) 残高 4.2	外反する長い口縁部。	① 口ヨコナデ ハケ→ヘラミガキ	ハケ(マメツ)	褐色 淡褐色	石・長(1-2) 金 ○		
182	高坏	残高 3.1	外反する長い口縁部。	マメツ(ヘラミ ガキ→ヨコナデ) ① 口ヨコナデ	ヘラミガキ	赤褐色 黄褐色・黒褐色	密(砂) ○		
183	高坏	残高 3.3	外反する口縁部。	ヘラミガキ(一 部ヨコナデ)	マメツ	赤褐色 赤褐色	密 ○		
184	高坏	残高 3.4	外反する口縁部。	マメツ(ヘラミガキ)	ヨコナデ ① 口ヘラミガキ	胎土粘密 赤褐色	密 ○	黒灰	
185	高坏	底径(17.0) 残高 16.7	円孔2段、3ヶ(φ1.9cm)。 光耀技法。	④ 口マメツ ⑧ マメツ(ヘラミガキ)	④ 口マメツ(ヘラミガキ) ⑧ シボリ模 ⑨ ナデ ⑩ ヨコナデ	褐色 褐色	石(1-3) 金 ○		
186	高坏	残高 17.5	円孔3段、4ヶ(φ2.1cm)。 円孔は各段交互に配す。光 耀技法。	ハケ→ヘラミガキ	④ 口ナデ ⑧ カキ取り ⑨ ナデ ⑩ ハケ	褐色 褐色	砂 金 ○		
187	高坏	残高 18.7	円孔1段以上、3ヶ(φ1.8 cm)。光耀技法。	④ 口ヘラミガキ(マメツ) ⑧ ナデ→ヘラミガキ	④ 口マメツ(ハケ →ヘラミガキ) ⑧ ナデ(マメツ)	淡褐色 褐色	石(1-5) 石(1-2) 金 ○	黒灰	
188	高坏	残高 10.9	器内の可能性がある。円孔 3段以上。(φ2.1cm)。	マメツ	④ 口マメツ(ナデ) ⑧ ナデ ⑩ ハケ	赤色 茶色	石・長(1-2) 金 ○		
189	高坏	残高 8.5	器内の可能性がある。円孔 2段以上。(φ1.4cm)。	ナデ(マメツ)	マメツ	乳黄褐色 乳茶褐色	石・長(1-3) 金 ○		
190	高坏	底径(15.2) 残高 12.0	円孔1段、5ヶ(φ1.8cm)。 光耀技法。	ナデハケ→ヘラミガキ	④ ナデ ⑧ ハケ	淡褐色 淡褐色	石(1-2) 金 ○		

筋道 F 遺跡

SB5 出土遺物観察表 土製品

(11)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
101	高坏	底径(10.7) 残高 4.2	小型品。円孔2段、4ヶ(φ0.9cm)。円孔は上下交互に配す。	ハケ	①ナデ ②ナデ(シガリ遺物)	緑褐色 緑褐色	石・長(1-4) ○		
192	高坏	口径(23.6) 残高 1.5	坏部片。肩部に半截竹管上下2段と竹管付き円形浮文2ヶ1組。	①ナデ ②ナデ	ナデ	赤褐色 赤褐色	密 ○		
193	高坏	口径(25.0) 残高 1.5	坏部片。肩部に半截竹管上下2段。	ナデ	ハケか?	灰色・褐色 淡茶褐色	石・長(1-2) ○		
104	高坏	残高 10.5	脚柱片。中央部がふくらむ。円孔3ヶ(1.5cm)。	マメツ	ナデ(シガリ遺物)	赤褐色 淡褐色	石・長(1-4) ○	46	
105	高坏	残高 8.3	脚柱片。器壁厚い。	ナデかミガキか不明	ナデ(シガリ遺物)	茶色 茶色	石・長(1-2) ○		
196	高坏	残高 5.5	脚柱の可能性をもつが、明確ではない。器壁厚い。	ナデ	マメツ	乳褐色 乳褐色	密(石・長1-2) ○		
197	高坏	底径(19.8) 残高 3.0	脚柱片。有段の脚部。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 淡褐色	石・長(1-3) ○		
198	高坏	残高 2.5	脚柱片。有段の脚部。	マメツ	①ヨコナデ ②マメツ	明黄褐色 明黄褐色	密(長1-2) ○		
199	器台	口径(24.0) 残高 3.2	内面がミガキのための受部とした。器壁厚い。肩部はナデ凹む。	①ヨコナデ ②ハケ→ナデ(マメツ)	ヘラミガキ(マメツ)	灰黄色 灰黄色	石・長(1-2) ○		
200	器台	残高 1.6	肩部は垂下する。肩部に櫛状波状文3条と刻目付きの棒状浮文1ヶ以上。	①ヨコナデ ②ハケ	ハケ→ヘラミガキ	淡茶褐色 淡茶褐色	砂 ○	黒底	
201	器台	口径(35.8) 残高 1.5	肩部は垂下する。肩部に櫛状波状文10条以上と「S」字状の浮文。	①ヨコナデ ②ハケ(114/cm)	ハケ→ナデ(マメツ)	緑褐色 緑褐色	石・長(1-4) ○		
202	器台	口径 38.8 残高 28.9	肩部櫛状波状文4条2段と「S」字状浮文(8or9ヶ)。円孔6段、8ヶ(φ1.9cm)。	①ヨコナデ ②ハケ ③ハケ→ミガキ	ハケ(一部ナデ)	褐色 褐色	砂 ○	黒底	47
203	器台	残高 22.3	円孔5段以上、6ヶ(φ1.6cm)。	ヘラミガキ(マメツ)	ハケ(マメツ)	乳黄褐色 緑褐色	石・長(1-6) ○		
204	器台	残高 7.1	円孔と4条の沈線文。	①ハケ→ミガキ ②ハケ	ナデ	茶色 茶色	石・長(1-3) ○		
205	器台	残高 10.2	円孔2段以上、6ヶ(φ1.8cm)。	①ハケ→ミガキ ②ハケ	ナデ(マメツ) ③ヘラミガキ	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1-3) ○		
206	器台	残高 12.6	器壁厚い。太沈線6条。	①マメツ ②ナデ	ナデ	褐色 淡褐色	石・長(1) ○	47	
207	器台	底径 35.1 残高 10.2	円孔2段以上、3ヶ以上(φ1.7cm)。	①ヘラミガキ ②ハケ ③ナデ	①マメツ ②ヨコナデ(114/cm)	赤褐色 緑褐色	石(1-4) 長(1-2) ○		
208	器台	底径(21.8) 残高 6.7	円孔1段以上、2ヶ以上。	①ハケ(一部ナデ) ②ナデ	ハケ(4-5条/cm)	赤褐色 黄褐色	石・長(1-2) ○		
209	器台	底径 17.7 残高 4.0	円孔1段以上、7ヶ(φ1.4cm)。	①ハケ→ミガキ ②ハケ→ヨコナデ ③ヨコナデ	①ハケ→ヨコナデ ②ヨコナデ	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1-3) ○	黒底	

遺物観察表

SB5 出土遺物観察表 土製品

112

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		(外面) 色調	胎土	備考	図版
				外 面	内 面				
210	釜台	底径(17.2) 残高 3.1	円孔1段以上、1ヶ以上。	ハケ(マメツ)	マメツ	乳赤褐色 淡赤褐色	石(1-2) 表(1)		
211	釜台	底径(17.0) 残高 12.3	脚柱上部にしまりをもつ。 円孔2段以上、4ヶ(φ1.3 cm)。	① ハケ ② ハケ→ヨコナデ ③ ヨコナデ	④ ヨコナデ ⑤ ナデか?	褐色 褐色	密 ○		47
212	支脚	底径 14.0 器高 17.1	受部は「U」字状に傾斜する。	② ナデ(指頭痕多) ① ハケ	ナデ(ナデ上げ有)	褐色-淡褐色 淡褐色	石(1-3) 金 ○	黒斑	48
213	支脚	残高 17.5	受部は「U」字状に傾斜する。	ナデ(ハケ、ハ ケ使用痕)	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石(長1-4) 金 ○	黒斑	47
214	支脚	底径(12.9) 器高 19.0	受部は「U」字状に傾斜する。	② ナデ(指頭痕多) ① ハケ(跡/なし)	ナデ	淡黄褐色 淡茶色	石(長1-3) 金 ○		
215	支脚	底径 12.1 残高 10.6	脚部片。	④ ナデ(指頭痕多) ⑤ ナデ(指頭痕多) ⑥ ナデ(指頭痕多)	① ナデ上げ	黄茶色 灰黄色	石(長1-2) ○		
216	支脚	底径(13.0) 残高 7.3	脚部片。	ハケ→ナデ ⑥ ナデ	ナデ	乳灰色 乳白色	石(長1-4) 金 ○	黒斑	
217	支脚	底径 13.2 器高 19.9	受部は「U」字状に傾斜する。 底部に径2.2cmの貫通孔をも つ。	ハケ→ナデ(指頭痕多)	ナデ(指頭痕有)	淡褐色 淡褐色	石(1-2)少 ○	黒斑	47
218	紡錘車	直径(4.2) 厚さ 0.8	径7mmの貫通孔。	ナデ		褐色	密(石1-砂) ○		45
219	口ナデ	口径 6.2 底径 2.9 器高 5.5	直門口縁。立ち上がりをも つ平底。	ナデ(指頭痕) ハケ(10本/cm)	ナデ上げ・ハケ	茶色 茶色	石(長1-3) 金 ○	黒斑	48
220	口ナデ	口径 6.7 底径 2.2 器高 3.5	直門口縁。底部はわずかに 円心。	ナデ	ナデ(工具痕有)	乳白色 乳白色	石(長1-3) ○		48
221	口ナデ	口径 8.3 残高 3.6	外反する口縁部。	ナデ(指頭痕有)	ナデ(一部ハケ)	褐色-淡褐色 胎色 黒色	石(長1-6) ○		
222	口ナデ	残高 5.0	充実の柱部。	ハケ→ナデ(一部ナデ)	ナデ	乳黄褐色 灰黑色	石(長1-2) 金 ○		48
223	瓶	残高 3.6	古墳時代土師器。断面扁平 の把手部。	ナデ(ハケ)	マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石(長1) ○		
224	瓶	残高 5.5	古墳時代土師器。断面扁平 の把手部。	マメツ	マメツ	乳黄褐色 乳黄褐色	石(長1-2)少 ○		
225	碗	口径 15.7 底径 6.5 器高 6.7	白色土師器。底部回転糸切 り。口縁部わずかに外反す る。	回転ナデ ⑤ 回転糸切り痕顕著	回転ナデ	乳白色 乳白色	密(石長1-3) ○		48
226	碗	口径 15.5 底径 6.8 器高 6.1	白色土師器。底部回転糸切 り。口縁部わずかに外反す る。	回転ナデ ⑤ 回転糸切り痕顕著	回転ナデ	乳白色 乳白色	密(石長1-2) ○		48

前通F遺跡

SB5出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
227	石 匙 丁	完 存	片 岩	9.1	4.2	0.4	30.97		52
228	石 匙 丁	ほぼ完存	片 岩	7.5	4.3	0.5	26.78		52
229	石 匙 丁	完 存	片 岩	8.7	5.7	0.8	65.97		52
230	石 匙 丁	完 存	片 岩	10.2	4.6	0.7	44.98		52
231	石 鉢	完 存	片 岩	15.9	6.8	1.2	199.43		52
232	石 鉢?	ほぼ完存	片 岩	6.1	2.4	0.3	10.17		52
233	石 鉢	ほぼ完存 (一部欠く)	サヌカイト	2.2	1.8	0.2	1.18		52
234	用途不明		片 岩	6.5	1.3	0.5	9.43		52
235	石 鉢			3.7	2.3	0.4	4.22		52
236	門板状石製品	完 存	片 岩	6.0	6.2	1.1	72.09		52
237	用途不明			10.3	7.6	3.2	375.0		52

SB5出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	遺存状態	法 量				備考	図版
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
236	鉋	1/4	4.9	1.3	0.18	9.65	樹皮付着	

表19 SB7出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
239	壺	口径(12.4) 残高 4.2	“く”の字状口縁。内面に 横をもつ。	マメツ	マメツ	淡白黄褐色 黄赤褐色	石・長(1~3) ○	伊跡	
240	壺	口径(13.0) 残高 2.8	複合口縁蓋。肩自由部は横を もつ。	マメツ(ナデ)	ナデ(マメツ)	黄褐色 黄茶色	石・長(1~2) 金 ○	伊跡	
241	壺	口径(22.5) 残高 4.2	複合口縁蓋。上部にあいま いな波状文。下部に3条以 上の波状文。	㊦ヨコナデ ㊧マメツ	㊨ヨコナデ ㊩ナデ(ナメ)	黄褐色 黄茶色	石・長(1~4) ○	伊跡	
242	壺	口径(2.4) 残高 4.4	平底。	ハケ(マメツ) 一部ナデ	ハケ	赤褐色 黄茶色	石・長(1~5) ○	黒塚 伊跡	
243	壺	口径 2.8 残高 6.0	平底。極小さい立ち上り をもつ。	ハケ(6~7本/皿) ㊨ナデ	ハケ→ナデ	乳黄色 灰茶色	石・長(1~3) ○	黒塚 伊跡	

遺物観察表

SB7 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
244	鉢	底径 1.3 残高 1.7	小さく突出する底部は、凹みをもつ。	ミガキ(指痕痕有)	ミガキ	灰緑色・緑褐色 黄褐色	石・長(1-4)	印跡	
245	甕	口径(13.1) 残高 3.9	「く」の字状口縁。口縁端部はあいまいな面をもつ。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	緑色・緑褐色 緑色・緑褐色	石・長(1-3)	灰付き	
246	甕	口径(17.4) 残高 4.9	「く」の字状でやや長い口縁部。	①ヨコナデ ハケ	ハケ	黄褐色 黄褐色	石・長(1-3)	○	
247	壺	口径(16.3) 残高 4.3	複合口縁部。無文。	ナデ(マメツ)	ナデ(マメツ)	緑色・緑褐色 緑色・緑褐色	石・長(1-6)	○	
248	壺	底径(6.4) 残高 5.1	中形品。平底。	マメツ ②ナデ	ハケ	乳灰色 乳灰色	石・長(1-3)	○	
249	壺	底径(4.2) 残高 3.3	中形品。立ち上りをもつ平底。	マメツ ③ナデ	ナデ	緑色・緑褐色 乳灰色	石・長(1-5)	黒斑	
250	鉢	口径(17.8) 残高 7.9	「く」の字状口縁。内面にあいまいな面をもつ。	①ヨコナデ ②マメツ(ハナ) ③ハケ	ハケ(一部ハナリ)	茶褐色 黄褐色	石・長(1-3)	○	
251	鉢	口径(16.0) 残高 5.8	ゆるやかに外反する口縁部。	①ヨコナデ ②ハケ(マメツ)	③ヨコナデ ④ハ出射(am)+ナ	灰黄色 灰黄色	石・長(1-7)	○	
252	鉢	残高 4.4	「く」の字状で、著しく長い口縁部。内外に強い稜をもつ。	①ハケ→ヨコナデ ②ハケ ③ハケ→ヘラミダキ	④ヘラミダキ ⑤ハケ→ヘラミダキ	黄褐色 黄褐色	石・長(1-2)	○	
253	鉢	口径(16.7) 残高 4.2	直口口縁。端部は丸い。	マメツ(ナデ)	ハケ→ナデ	淡灰色 暗灰色	石・長(1-3)	○	
254	鉢	口径(19.2)	直口口縁。内湾ぎみに立ち上がる。	ハケ	ハケ(一部ナデ)	黄褐色 黄褐色	石・長(1-2)	○	
255	高坏	残高 8.4	光澤技法。円孔(φ1.6cm)1ヶ以上。	マメツ(ナデ)	マメツ(ナデ)	緑褐色・緑褐色 緑褐色・緑褐色	石・長(1-4)	○	

表20 SB1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
256	甕	口径(16.5) 残高 4.2	S字状に立ち上がる口縁部。口縁端部は内傾する。	マメツ(ナデ)	マメツ(ナデ)	黄褐色 灰黄色	石・長(1-3)		49
257	甕	口径(15.9) 残高 2.9	内湾して開く口縁部。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	密 ○		
258	高坏	口径(20.8) 残高 5.5	直線的に立ち上がる口縁部。肩曲部は段をもつ。	ナデ	ヨコナデ	淡黄褐色 黄褐色	密 ○		
259	高坏	残高 3.1	肩曲部は段となり、下部に凹みをもつ。	ナデ	ナデ	緑褐色・緑褐色 緑褐色・緑褐色	石・長(1-2)	密 ○	
260	鉢	口径(17.3) 残高 3.2	L字状の口縁部。器壁は薄い。	マメツ(ナデ)	マメツ(指痕痕有)	茶褐色 灰褐色	石・長(1-3)	密 ○	49
261	高坏	底径(10.1) 残高 6.4	脚内面に稜をもつ。器部は内湾して開く。	マメツ	マメツ(ナズミか?)	乳褐色 乳褐色	石・長(1-2)	密 ○	

SB1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
262	高坏	底径(8.7) 残高 4.6	脚内面に深い線をもち、	ナデ	ナデ	暗緑・緑釉 暗灰黄色	密 ○		
263	瓶	残高 1.3	焼成前穿孔3ヶ以上。			乳黄茶色	石・長(1) ○		
264	坏蓋	口径(11.3) 残高 3.0	内湾して下がる口縁部。口縁端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密(石・長1) ○	須恵器	49
265	鉢	残高 4.0	韓国系軟質土製か。斜格子印きに、細かい刷毛目をもつ。	マメツ	タタキ	灰黄色 淡黄褐色	石・長(1) ○	軟質土製か?	49
266	器台	口径(25.7) 残高 1.7	口縁端部は下方に拡張。端面に輪描波条文(5条以上)と円形浮文。	ナデ(マメツ)	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) ○		

表21 SB3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
267	高坏	残高 2.5	坏部片。屈曲部は線をもち、	ヨコナデ(マメツ)	マメツ	灰黄色 乳黄褐色	石・長(1) ○		
268	高坏	底径(10.7) 残高 7.0	短い裾部は大きく開く。	マメツ ④マメツ(ヨコナデ)	マメツ ④ナデ(マメツ)	黄褐色 黄褐色	石・長(1~4) ○		
269	高坏	残高 4.5	“ハ”の字状に外反する脚部。端部は線をなす。透しを看取。	②カキ口 ③ヨコナデ ④回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	須恵器	
270	器	口径(15.7) 残高 4.2	二重口縁。口縁外面に2条の沈線文。	ヨコナデ	ヨコナデ(工具痕有)	黄褐色 黄褐色	石・長(1~4) ○		49
271	鉢	口径(20.0) 残高 3.5	ゆるやかに外反する口縁部。	④ヨコナデ(マメツ) ハケ	④ヨコナデ(マメツ) ナデ(マメツ)	灰黄色 白黄色	石・長(1~3) ○		
272	鉢	口径(12.9) 残高 4.8	わずかに外反する口縁部。	④ヨコナデ・ハケ ④ハケ(16本/cm)	マメツ	茶褐色 淡黄褐色	石・長(1~2) ○		
273	鉢	残高 3.0	脚付鉢。脚部を欠損する。	ナデ	マメツ	黄褐色 灰黄色	石・長(1~2) ○		

SB3 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
274	砥石	約1/3		11.7	5.6	7.7	378		
275	割片		サヌカイト	2.2	1.1	0.2	0.39		

表22 SB4 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
276	坏蓋	口径(12.4) 残高 3.1	内湾して下がる口縁部。口縁端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 淡青灰色	密 ○	5末~6前	
277	坏蓋	口径(12.6) 残高 3.0	内湾して下がる口縁部。口縁端部は内傾する。	マメツ 回転ナデ	回転ナデ	淡茶灰色 淡青灰色	密 ○	5末~6前	

遺物観察表

SB4 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
278	蓋	残高 1.3	有蓋高杯の蓋。つまみ中央部はわずかに凹む。	マメツ	回転ナデ	乳灰色 青灰色	密 ○	5木-6前	
279	坏蓋	口徑(13.2) 残高 2.9	内湾して下がる口縁部。ややひずんでいる。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 乳灰色	密(長1) ○		
280	坏否	口徑(13.0) 残高 2.6	内湾して下がる口縁部。口縁端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ○	60後半	

表23 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
281	豆	底径(7.0) 残高 4.0	大豆品。立ち上りをもつ厚い底部。	①ハケ ②上)ココナデ ③下)ナデ	ハケ(4本/面)	黒灰色 黒灰色	石(長1-2) ○		

表24 SK2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
282	壺	口徑 22.9 残高 2.6	内湾して立ち上がる口縁部。口縁端部はわずかに内傾。	ココナデ	ココナデ(マメツ)	淡茶色 淡茶色	石(長1-2) ○		

表25 SK3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
283	甕	口徑(19.9) 残高 4.4	内湾して立ち上がる口縁部。口縁端部は面をなし内傾する。	①マメツ ②ナデ ③ハケ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石(1-4) 長(1-3) ○		
284	甕	口徑(17.8) 残高 3.9	内湾して立ち上がる口縁部。口縁端部は面をなし内傾する。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石(長1-5) ○		
285	甕	口徑(21.9) 残高 6.6	内湾して立ち上がる口縁部。口縁端部は丸い。	①ココナデ ②ハケ(マメツ)	①ココナデ ②ナデ(マメツ)	乳褐色 茶褐色	石(長1-2) ○		
286	甕	口徑(31.2) 残高 7.7	直線的に立ち上がる口縁部。口縁端部は面をなす。	マメツ	①マメツ(ココナデ) マメツ(ハケ)	黄褐色 黄褐色	石(長1-2) ○		
287	坏蓋	口徑(11.4) 残高 3.0	内湾して下がる口縁部。口縁端部は内傾する。	マメツ	回転ナデ	淡灰色 淡青灰色	密 ○	50後葉	
288	坏身	口徑(10.4) 残高 4.8	たちあがりは内傾し、端部は内傾。底形は丸みをもつ。	①回転ナデ ②同軸ハケナデ ③同軸ハケナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密(長1) ○	50後葉	
289	坏身	口徑 10.9 残高 5.9	定形品。たちあがりは内傾し、端部は丸い。底形も丸い。	①回転ナデ ②同軸ハケナデ	回転ナデ 同軸ナデ	淡灰色 淡灰色	石(長1-2) ○	60後葉	49
290	甕	口徑(11.6) 残高 2.2	口縁端部は内傾する。横置き波状文3条。	回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色 淡茶灰色	密(長1) ○		
291	甕	口徑(20.4) 残高 7.5	口縁端部に1条の凹みをもつ。口縁直下に1条の凸線。	①回転ナデ ②同軸ハケナデ ③同軸ハケナデ	回転ナデ	青灰色 乳灰色	密(石長1-3) ○	49	
292	甕	口徑(17.8) 残高 4.9	口縁端部は上方に立上がる。	回転ナデ		淡灰色 淡緑灰色	密(長1) ○	自然推	49

筋溝 F 遺跡

表26 SK 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
293	甕	口径(17.6) 残高 7.2	ゆるやかに外反する口縁部。 口縁端部は丸い。器壁が厚い。	①ヨコナデ	②ヨコナデ	黄茶褐色	石・長(1~2)		
				⑧ハケ	⑩ナデ	黄茶褐色			
294	坏蓋	口径(12.3) 残高 4.1	内湾して下がる口縁部。 口縁端部は内傾する。	①ケズリ	ヨコナデ	灰 色	密	6C前半	
				①ヨコナデ		灰 色			
295	坏身	口径 12.0 器高 4.4	完形品。たちあがりは内傾する。 口縁端部は内傾する。	②回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	密(石長1~3)	6C後半	49
				⑧ハケ・ヘラケズリ	④ナデ	淡青灰色			

SK 4 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
296	砥石	1/2	砂岩	9.1	4.2	4.1	167.77		

表27 SK 5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
297	坏身	口径 10.5 器高 5.1	完形品。内傾する直線的な たちあがり。口縁端部は内 傾する。	①ヨコナデ	①ヨコナデ	灰茶色	密(石長1~3)	50	
				⑧回転ヘラケズリ	⑧ナデ	淡青灰色			
298	高坏	底径(7.7) 残高 3.5	「ハ」の字状の脚部。溜部は ナデ凹みをもつ。透しを看 取。	⑧ナデ・回転ナデ?	回転ナデ	青灰色	密(長1)		
				⑧回転ナデ		青灰色			
299	高坏	底径(10.9) 残高 4.7	「ハ」の字状の脚部。透しを 看取。	回転ナデ	回転ナデ	乳灰色	密(長1)	6C初	
						暗灰色			

表28 SK 6 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
300	坏身	口径(12.2) 残高 3.0	内傾する口縁部。端部は内 傾する。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密(長1)	5C末 ~ 6C初	

表29 SK 8 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
301	高坏	残高 7.2	「ハ」の字状の脚部。弱内面 に稜をもつ。光澤技法か。	⑧ナデ (弱マメツ(細稜部)) ⑧ヨコナデ(マメツ)	⑧ヘラケズリ	黄茶色	石・長(1~2)		
302	高坏	残高 6.9	「ハ」の字状の柱部に、大き く開く溜部。弱内面に稜を もつ。光澤技法。	ナデ	⑧ヨコナデ	黄茶色			
303	高坏	残高 8.2	「ハ」の字状の柱部。光澤技 法か。	マメツ(ナデ)	⑧工部によるケズリ	褐色	石・長(1~2)		
					⑧ナデ	暗黄茶色			
304	瓶		断面が隅四角形を呈する把手 部。	ナデ(マメツ)	⑧マメツ(ナデ) ⑧ナデ・細稜 部?ハナシ・マメツ	黄茶色	石・長(1~2)		
						黄茶色			
						橙茶色	石長1~2少		
						橙茶色	○		

表30 SK 9 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
305	高坏	底径(10.1) 残高 6.7	歯きの大きい溜部。弱内面 に稜をもつ。	マメツ	マメツ	淡黄茶色 淡黄茶色	石長(1~2)少		

遺物観察表

表31 SK10出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
306	甕	底径(7.2) 残高 3.0	平底。	マメツ ㊸ ナデ	マメツ	暗褐色 黄褐色	石・長(2~4) ○		
307	甕	残高 1.5	口縁下部を削む。割口大きい。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) 全○		
308	甕	残高 2.0	口縁端部の割片は大きい。	ヨコナデ	マメツ	茶色 茶色	石・長(1~2) ○		

SK10出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
309	石器素材			9.1	10.2	1.1	118.46		50
310	石器素材	完存	緑泥片岩	14.5	6.6	1.4	205.00		50

表32 SK11出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
311	甕	残高 5.3	頸部片。ヘツ抜き沈楨文 2条。	マメツ	マメツ・ハクリ	乳褐色 乳褐色	石・長(2~3) ○		
312	甕	残高 3.0	頸部片。ヘツ抜き沈楨文 3条。	ナデ	ナデ	白茶色 白茶色	石・長(1~3) ○		

表33 SK12出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
313	甕	口径(10.7) 残高 2.8	内湾して立上がる口縁部。肩部は丸く内傾する。口縁部内面がナデ凹む。	ヨコナデ(彫イクリ)	ヨコナデ	暗茶褐色 暗褐色	石・長(1) 全○		
314	甕	口径(18.0) 残高 3.8	内湾して立上がる口縁部。肩部は丸い。内面がナデにより小さく凹む。	マメツ(ナデ)	マメツ(ナデ)	黄茶色 黄茶色	石・長(1~2) 全○		
315	甕	口径(14.2) 残高 3.8	内湾して立上がる口縁部。肩部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	赤茶褐色 赤茶褐色	石・長(1~2) ○		
316	甕	口径(11.6) 残高 4.2	内湾して立上がる口縁部。肩部は丸く内傾する。	㊸ ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄茶色 黄茶色	石・長(1) ○		
317	瓶		断面丸方形の把手部。	ナデ		茶褐色	長(1) 全○		
318	瓶		断面台形状の把手部。	ナデ		淡乳茶色	石(1~2) ○		
319	坏蓋	口径(14.8) 残高 3.6	内湾して下がる口縁部。口縁端部は内傾する。	㊸ 回転ヘラケズリ ㊸ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	甕(石・長1~2) ○		
320	坏蓋	口径(14.0) 残高 4.3	内湾して下がる口縁部。口縁端部は丸い。	㊸ 回転ヘラケズリ ㊸ ヨコナデ	㊸ ナデ ㊸ ヨコナデ	灰黄色 灰色	甕 ○		
321	坏蓋	口径(14.0) 残高 3.8	内湾して下がる口縁部。口縁端部は丸い。	㊸ 回転ヘラケズリ ㊸ 回転ナデ	㊸ ナデ ㊸ 回転ナデ	淡灰色 青灰色	甕(石・長1~2) ○		50

筋達F遺跡

SK12出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
322	坏身	口径(12.2) 残高 3.5	たちあがりは内傾する。端部は凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	青灰色 青灰色	密(石・長1) ○		
323	坏身	口径(11.6) 残高 2.8	たちあがりは内傾する。端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡灰色 淡灰色	密(長1) ○		
324	坏身	口径(9.6) 残高 3.6	たちあがりは内傾する。端部は丸い。	ヨコナデ (○)別紙ヘラケズリ	ヨコナデ	淡灰色 青灰色	密 ○		
325	坏	口径(11.3) 残高 3.8	内湾して立ち上がる口縁部。端部は細く丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	白灰色・淡色 白灰色・淡色	密(石・長1-3) ○		
326	皿	残高 7.2	2条の凹線間には、刺突文を施す。	(○)ヨコナデ (○)別紙ヘラケズリ	(○)シボリ痕 (○)ヨコナデ	淡灰色 灰褐色	密(石・長1) ○		50
327	器台	残高 4.8	刺突文間に2条の凹線。	ヨコナデ	ヨコナデ→ナデ	淡灰色 淡灰色	密(石・長1少) ○		50
328	器台	残高 6.3	2条の凹線下に、長い刺突文列。	ヨコナデ	ヨコナデ→ナデ	乳白色 乳白色	密(石・長1-2) ○		50
329	甕	口径(22.2) 残高 2.1	口縁端部は拡張され、下部に一条の内線をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳青灰色 乳青灰色	密 ○		50
330	碗	残高 4.7	長脚付碗。	回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰色 暗青灰色	密(石・長1-4) ○		50
331	壺	残高 4.2	肩上半部片。割口凸帯。胴横波状文3条。	マメツ(ナデ)	マメツ	緑色・緑褐色 緑褐色・緑褐色	石・長(1-7) ○		50
332	壺	残高 3.8	肩上半部片。胴横波状文3条。竹管文。	マメツ	マメツ(ナデ)	淡茶色 淡茶色	石・長(1-2) ○		50
333	器台	底径(12.0) 残高 5.8	端部に沈線3条。胴横沈線5条→間4条。	ナデ(一部マメツ)	マメツ	茶褐色 紅褐色	石・長(1-4) ○		

SK12出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
334	石器素材	1/2		8.2	4.4	2.95	181.32	
335	石器素材	完存	緑泥片岩	7.2	2.3	0.9	18.23	

表34 SK14出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
336	甕	口径(13.9) 残高 5.3	内湾して立ち上がる口縁部。端部は丸い。	ヨコナデ	(○)ヨコナデ (○)ナデ	茶色 茶色	石・長(1-2) ○		
337	甕	口径(16.8) 残高 3.1	内湾して立ち上がる口縁部。端部は面をもち、内傾する。	ヨコナデ(マメツ)	マメツ(ナデ) 一部ハクリ	灰黄色 灰黄色	石・長(1-2) ○		

遺物観察表

SK14出土土物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色質 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
338	碗	口径(13.2) 残高 4.1	内湾して立ち上がる口縁部。 肩部は細く丸い。	マメツ	ヨコナデ 一部ハクリ	茶褐色 茶褐色	密 ○		
339	高杯	残高 5.5	口縁部はわずかに外反する。 坏底部は丸みをもつ。肩直 部は段をもつ。	ナデ	ヨコナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	密(石・灰)3 ○		
340	高杯	残高 6.2	「ハ」の字状の脚部。脚 内面に稜をもつ。充塞技法。	マメツ	工具によるナデ	緑褐色 淡黄褐色	石・灰(1~4) 全 ○		
341	瓶		断面円形の把手部。	マメツ	ナデ	淡黄色 淡黄色	石・灰(1)少 ○		
342	不明	残高 3.3	胴部片。器種不明。茎生上 部。沈積3条。斜線2条。	ナデ	ナデ	暗褐色 暗黒褐色	石・灰(1) 全 ○		
343	坏蓋	残高 5.0	内湾して下がる口縁部。端 部は凹む。内面にあて具痕。	⑩ 回転ヘラケズリ ⑪ 回転ナデ	⑩ あて具痕 回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密(石・灰) ○	51	
344	坏蓋	口径(12.2) 残高 3.7	直立する口縁部。端部は内 傾する。	⑩ 回転ナデ	⑩ 回転ナデ	淡青灰色 淡青灰色	密(石・灰) ○		
345	坏蓋	口径(12.7) 残高 3.8	内湾して下がる口縁部。端 部はわずかに凹む。	⑩ 回転ヘラケズリ ⑪ 回転ナデ	⑩ 回転ナデ	淡茶灰色 淡青灰色	密(石・灰)2 ○		
346	坏蓋	口径(11.7) 残高 4.2	内湾して下がる口縁部。端 部は内傾する。	⑩ 回転ヘラケズリ ⑪ ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	密 ○		
347	坏蓋	残高 2.5	内面にあて具痕。	⑩ 回転ヘラケズリ	⑩ あて具痕 ⑪ 回転ナデ	茶灰色 淡灰色	密(石・灰) ○	51	
348	坏蓋	口径(15.8) 残高 4.8	内湾して下がる口縁部。端 部はあいまない内傾。	⑩ 回転ヘラケズリ ⑪ 回転ナデ	⑩ あて具痕 ⑪ 回転ナデ	茶灰色 青灰色	密(石・灰)4 ○	51	
349	坏身	口径(12.4) 残高 4.6	内傾するたちあがり。端部 は凹む。	⑩ 回転ナデ ⑪ 回転ヘラケズリ	⑩ 回転ナデ	緑褐色 青灰色	密(石・灰)2 ○		
350	坏身	口径(12.2) 残高 4.7	内傾するたちあがり。端部 は丸い。	⑩ 回転ナデ ⑪ 回転ヘラケズリ	⑩ 回転ナデ ⑪ ナデ	青灰色 淡青灰色	密(石・灰) ○		
351	坏身	口径(12.4) 残高 3.2	内傾するたちあがり。端部 は内傾する。	⑩ 回転ナデ	⑩ 回転ナデ	淡青灰色 淡青灰色	密(石・灰) ○		
352	高杯	底径(8.4) 残高 3.1	「ハ」の字状の脚部。端部 は段をもつ。透しを香取。	⑩ 回転ナデ	⑩ 回転ナデ	青灰色 青灰色	密(石) ○		
353	甕	口径(16.7) 残高 4.3	2条の凸線文間に横指波状 文14条。	⑩ 回転ナデ	⑩ 回転ナデ	淡灰色 淡青灰色	密(石・灰) ○	31	
354	甕	口径(37.1) 残高 1.9	凸線1条。端部は丸い。	⑩ 回転ナデ	⑩ 回転ナデ	暗灰色 茶灰色	密 ○	51	

表35 柱穴とその他の出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色質 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
355	高杯	口径(22.0) 残高 5.3	坏部。口縁部はわずかに外 反する。口縁端部は面をも つ。	マメツ	マメツ(ヨコナデかイ)	黄赤褐色 黄赤褐色	密(長) ○	SP150	
356	高杯	口径 17.2 底径(13.1) 器高 13.9	脚部を一段欠く。口縁部は 内湾して開く。充塞技法。	⑩ マメツ ⑪ ナデ(マメツ) ⑫ マメツ(ハク) ⑬ マメツ(ナデ)	⑩ マメツ(ヨコナデ) ⑪ ナデ上げ ⑫ マメツ(ナデ)	黄赤色 黄赤色	石・灰(1~2) 全 ○	SP150	51

柱穴とその他の出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (表面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
357	筒	口径(11.6) 残高 2.8	内湾して立ち上がる口縁部。 口縁端部は丸い。	ナデ	ナデ	濃赤褐色 淡黄褐色	石・長(1~2) ○	SP150	
358	高坏	残高 6.5	胴内面には稜をもつ。充填技法。	マメツ	マメツ	黄茶褐色 黄茶褐色	密(長1) ○	SP159	
359	高坏	底径(10.8) 残高 6.2	ゆるやかに開く脚部。	ハケナデ(マメツ)	シボリ肌 ハケナデ(マメツ)	乳灰黄色 乳灰黄色	石・長(1) ○	SP159	
360	高坏	底径(11.4) 残高 6.3	脚内面にあいまいな稜をもつ。	マメツ	⑧ シボリ肌 ⑨上 ナデ ⑨下 ハケ	暗灰色 淡茶色	石・長(1) 全 ○	SP155	
361	壺	残高 4.0	肩部片。貝殻ないし木板木口による押圧文。	マメツ	⑩上 ココナ(マメツ) ⑩下 ハケ(マメツ)	淡黄茶色 淡黄茶色	石・長(1~3) ○	SP236	51
362	壺	残高 3.7	361と同一体作か。肩部片。貝殻ないし木板木口による押圧文。	マメツ	マメツ(ハクリ)	淡黄茶色 淡黄茶色	石・長(1~3) ○	SP93	51
363	高坏	口径(27.3) 残高 1.3	口縁端面に4条の辻線文と刻目をもち棒状浮文(2ヶ1組)か。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) 全 ○	SP242	
364	坏	底径 5.4 残高 1.7	やや厚い口縁部。内湾して立ち上がる口縁部。	ヨコナデ	ナデ	灰茶色 茶色	石・長(1~2) ○	SP194	
365	坏蓋	口径(12.8) 残高 3.2	蓋ないし杯身。器縁割れつかず。内面に先みのある段をもつ。	⑪ 回転ナデ ⑫ 回転ナデ	⑬ 回転ヘラミズリ ⑭ 回転ナデ	乳灰色 乳灰色	密 ○	SP60	
366	坏身	口径(13.1) 残高 3.8	たちあがりは長く内傾。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	乳青灰色 乳青灰色	密 ○	SP60	
367	蓋	口径(11.9) 残高 5.8	天井部は丸みをもつ。つまみは凹み、中心部は小さく突出する。	⑮ 回転ナデ ⑯ 回転ヘラミズリ ⑰ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密(石・長1~3) ○	SP119	51
368	坏蓋	口径(13.2) 残高 3.3	口縁部は内湾して下り、端部は凹む。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密(石・長1~2) ○	SP93	
369	坏蓋	口径(12.2) 残高 2.9	口縁部は内湾して下り、端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	乳白色 乳白色	密(石・長1) ○	SP116	
370	高坏	底径(8.3) 残高 4.8	口縁端部は立ち上る。四角形造しは三方か。	回転ナデ(マメツ)	⑱ 回転ナデ ⑲ 回転ナデ(マメツ)	黒灰色 黄灰色	密(長1) ○	SP119	
371	壺	残高 2.5	肩部片。棒状条文(5条1組)。正橋子H叩き。	タタキーカキ目	ナデ	灰色 灰色	密 ○	SP61	51

柱穴とその他の出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
372	石包丁	1/3	緑泥片岩	4.8	3.8	0.6	16.59	SP51	52
373	銅片	定存	赤色チャート	2.5	1.5	0.1	1.72	表採	52

SP出土遺物観察表 鉄製品

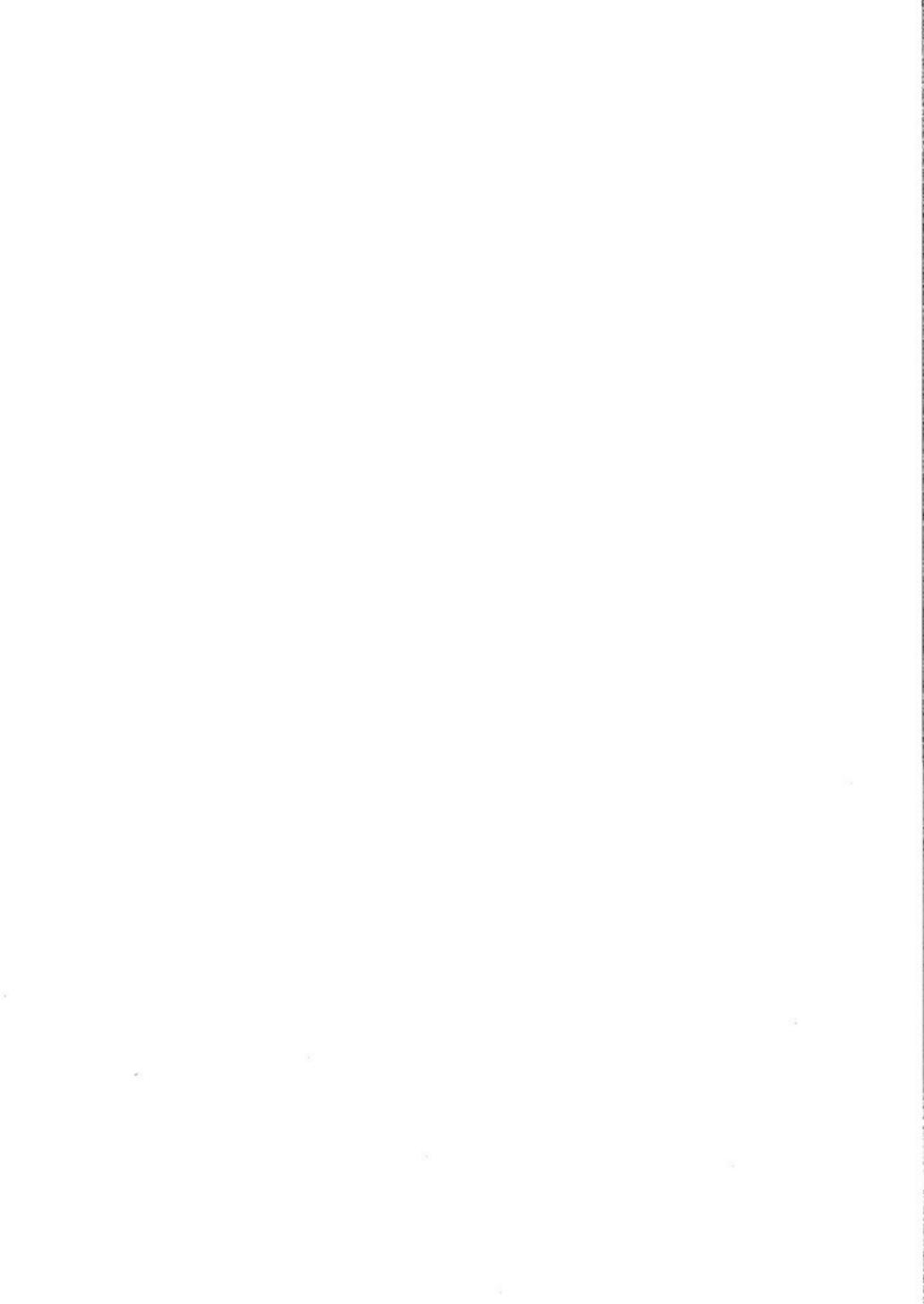
番号	器種	遺存状態	法量				備考	図版
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
374	刀子	約1/3	4.3	6.1	0.21	3.75	SP242	52

表36 表採品出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
375	ナイフ型石器	定存	サヌカイト	7.8	2.0	1.0			

第6章

³筋違⁴G遺跡



第6章 筋違G遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査の経緯

1989(平成元)年5月、柴田典子氏より、松山市福音寺町455-1、456の宅地開発にあたり、埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課に提出された。

当該地は松山市の指定する「116 川附遺物包含地」内にあり、また筋違遺跡として過去に6次の調査が実施されている地域内にあたる。

よって、文化教育課は申請地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲やその性格を確認するために平成元年度に試掘調査を実施した。調査の結果、当該地に遺跡が存在していることが明らかになった。この結果を受け、宅地開発に伴って消失する遺跡に対して記録保存を行うため、文化教育課は申請者の協力のもと、1989(平成元)年5月～7月の間に本格的な発掘調査を実施した。調査は、福音寺地区における古墳時代集落の構造解明を主目的としたものである。

(2) 調査組織

調査地	松山市福音寺455-1、456
遺跡名	筋違G遺跡
調査期間	1989(平成元)年5月24日～同年7月8日
調査面積	1,546㎡
調査協力	柴田典子
調査担当	山本健一



第123図 調査地位箇所図 (S=1:2,000)

2. 層位 (第124図)

筋違 G 遺跡は、標高27mにあり、調査前は水田であった。

昭和63年に調査された筋違 E 遺跡は本調査地の100m、昭和63年調査の筋違 F 遺跡は本調査地の170mにある。

土層は、第Ⅰ層灰色土 (水田耕作土)、第Ⅱ層黄褐色土 (水田床土)、第Ⅲ層暗褐色土 (遺物包含層)、第Ⅳ層黄色シルト (地山) である。調査地は既に近現代の土地開発に伴い、大きく改変されており、調査地南部では遺物包含層はなかった。

遺構の検出は第Ⅳ層上面で行い、弥生時代から中・近世の遺構があり、竪穴式住居址4棟、掘立柱建物址3棟、土坑5基、井戸2基、溝2条、礫石状遺構1基のほか柱穴や小穴を多数検出した。なお、本調査については『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』(松山市教育委員会1991年)に概要を報告しているが、整理の結果、遺構認定及び名称が若干異なり、取り扱いには注意していただきたい。

なお、調査にあたっては調査地を1区と2区に大別し、さらに3mのグリットを設け、北から南にA～E・・・、西から東に1～7・・・とし、呼称はA1、A2～E7区・・・とした。

3. 遺構と遺物

本調査では、弥生時代と古墳時代、中世の遺構が主要な検出遺構となる。以下、報告に際しては時代ごとに記述を行う。

(1) 弥生時代

弥生時代と考えられるものは竪穴式住居址1棟である。

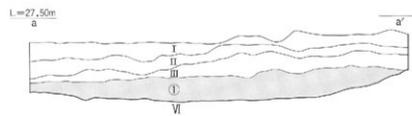
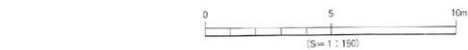
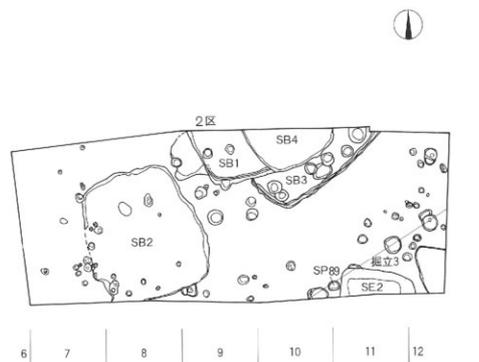
SB2 (第125図、図版55)

調査地2区、K7～M9区にある。平面形態は隅丸長方形で、4.5×5.2m、深さ約5cmを測る。室内施設には主柱穴、小穴、焼痕がある。主柱穴は4基が認められ、直径20～35cm、深さ12～15cmを測る。小穴は住居床面で検出した。径15～24cm、深さ8～13cmを測る。小穴については住居に伴うものかは不明である。焼痕は住居北側の主柱穴間の中央で検出した。楕円形で径45～55cm、深さ約3cmを測るもので炉址と考えられる。遺物は弥生土器片が少量床面より出土した。

出土遺物 (第125図)

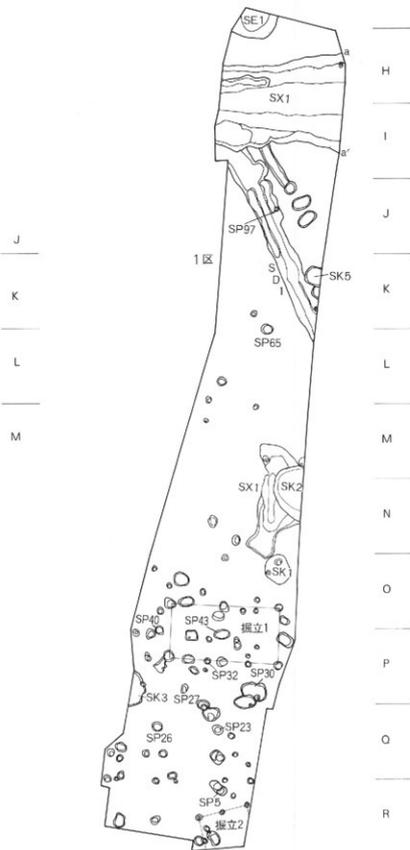
弥生土器 (1・2) 1は甕の底部である。平底のものでくびれを持つ。2は支脚の破片である。

時期：遺物の出土量は少ないが、弥生土器の出土により弥生時代後期と考えられる。



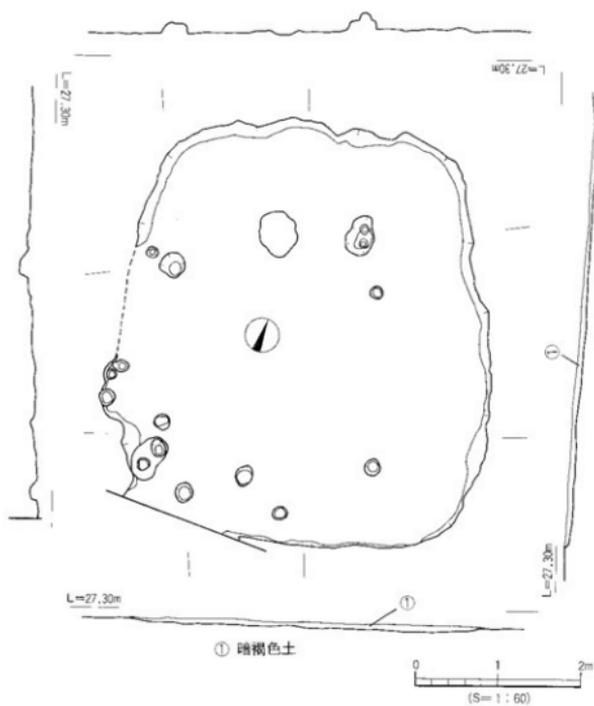
- I 灰色粘質土(耕作土)
- II 黄褐色土(床土)
- III 暗褐色土(包含層)
- IV 黄色シルト(地山)
- ① SX1

第124図 遺構配置図・基本方位図

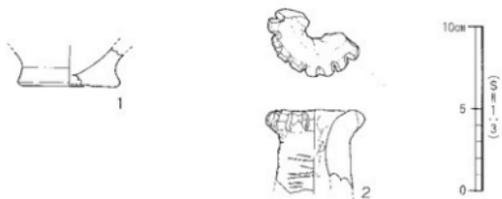


15 | 16 | 17 | 18

遺構と遺物



① 暗褐色土



第125図 SB2測量図・出土遺物実測図

(2) 古墳時代

SB1 (第126図、図版55)

調査地2区、K9区にある。本住居は西塚の一部と南西隅の検出で、SB3を切り、SB4に切られる。

平面形態は方形を呈するものと思われ、東西2.25m、南北2m、深さは7~14cmを測り、床面は北へ向かってやや傾斜している。

室内施設には、主柱穴、壁体溝がある。主柱穴は直径35cm、深さ35cmを測る。主柱穴の西にあるP1は本住居址に伴うものではない。壁体溝は部分的に南壁沿いで検出されている。

遺物は土師器片、須恵器片が少量出土した。

出土遺物

須恵器(3) 3は坯身片である。推定口径10.8cmを測る。内傾する立ち上がりの口縁端面に明瞭な段を有する。受部は上方向に延びる。

時期：出土須恵器から6世紀前葉と考えられる。

SB3 (第126図、図版55)

調査地2区、K10~K11区にある。SB1・4と柱穴数基に切られる。

平面形態は方形を呈するものと思われる。検出長5.0×1.7m、深さ約8cmを測る。室内施設には壁体溝がある。壁体溝は検出された周壁全体に見られ、幅11~22cm、深さ約5cm前後を測る。

遺物は土師器、須恵器の小片が少量出土しているが図化はしきれなかった。

時期：SB4に切られることから、5世紀末~6世紀前葉以前のものと考えられる。

SB4 (第126図、図版55)

調査地2区、K9~K10区にあり、SB1・3を切る。

平面形態は方形を呈するものと思われる。検出長は東西3.2m、南北2.15m、深さ約18cm前後を測る。この住居からは室内施設の遺構は検出されなかった。

遺物は、土師器、須恵器の小片が少量出土したが、図化はできなかった。

時期：SB1・3を切ることから、6世紀前葉以降のものと考えられる。

SD1 (第127図)

調査地1区、I17~K18区にあり、SK5とSX1(敷石状遺構)に切られる。

検出長は7.5mである。断面形態は舟底状を呈し、溝北部側では中段がみられる2段掘りになっている。深さは約22cm前後を測る。

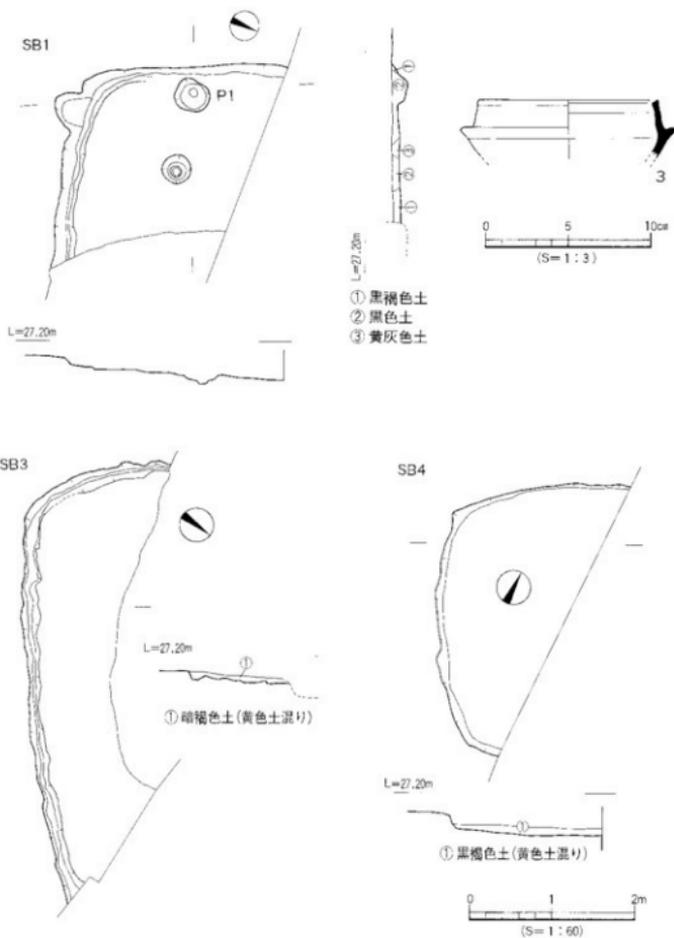
遺物は、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

出土遺物 (第127図)

須恵器(4~6) 4は復元口径13cmを測る坏蓋である。天井部はへら削り調整が広い範囲でみられ、天井部内面は仕上げナデが施してある。5は復元口径13cmを測る坯身である。やや内傾ぎみのたちあがりは端部を丸く仕上げる。内外面とも回転ナデ調整が施される。6は甕の頸部片である。

土師器(7・8) 7は高坏の脚柱部片である。8は甕の把手である。

遺構と遺物

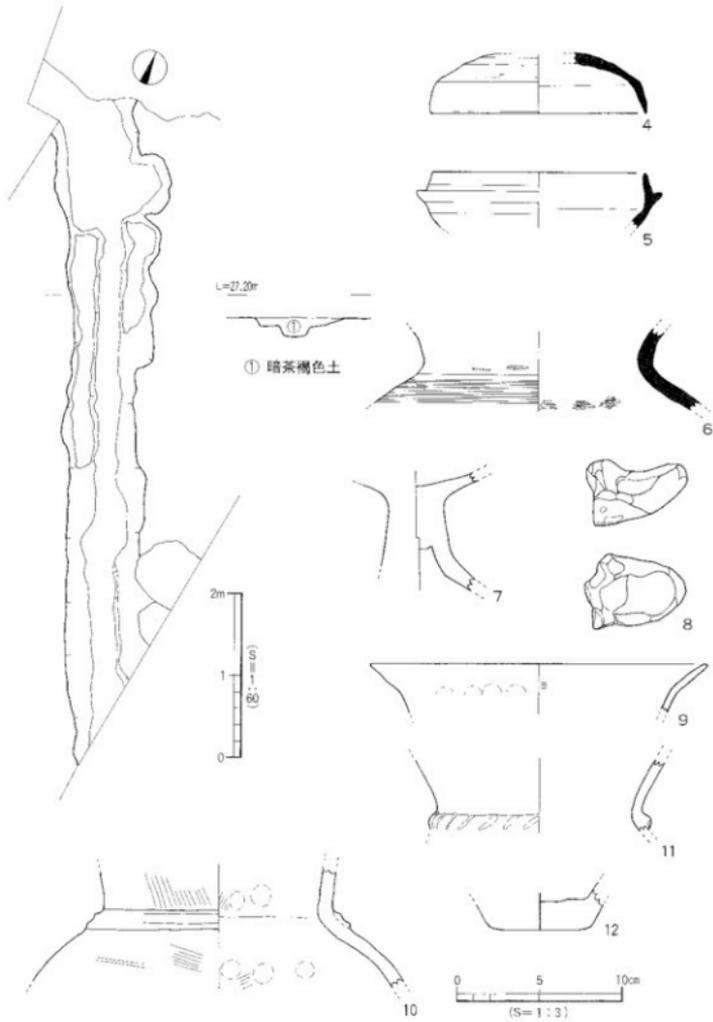


第126図 SB1・3・4測量図・出土遺物実測図

弥生土器(9~12) 9は外反する口縁部片で端部は尖り気味におさめる。10・11は壺頸部片である。10は頸部に断面台形状の先端部が凹む凸帯が巡る。11は頸部に断面三角形の斜めの刻目凸帯が巡る。12は壺の底部片である。

時期：出土した須恵器より埋没時期は、6世紀後葉と考えられる。

筋蓮 G 遺跡



第127圖 SD1測量圖・出土遺物実測図

(3) 中世

中世時代と考えられるものに掘立柱建物址3棟、井戸（SE）2基、土坑（SK）5基、柱穴130基がある。主な遺構について、遺構・遺物の説明を行い他は遺構一覧表に記す。

掘立柱建物址1（第128図、図版56）

調査地1区、O16～P17区にあり、他の柱穴を切る。

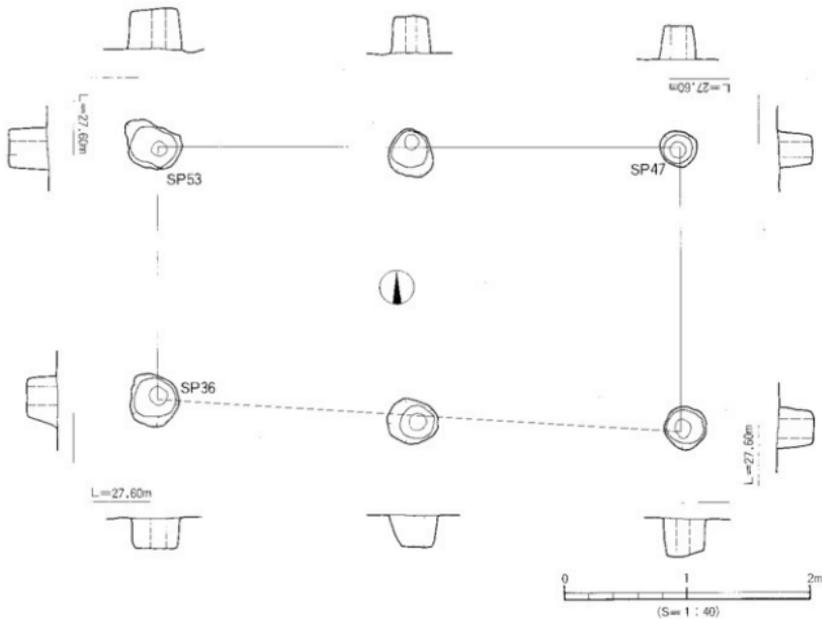
1×2間で、桁行長4.3m、梁行長2.2mを測る東西棟で、平均柱間は2.2mである。柱穴は円～楕円形を呈し、径33～44cm、深さ28～35cmを測る。柱穴からは、土師器片が出土している。

出土遺物（第129図）

土師環（13～15） 13～15は底部回転糸切りで、底部からやや直線的に外方向へ立ち上がる。15は口縁端部外面に面をもつ。

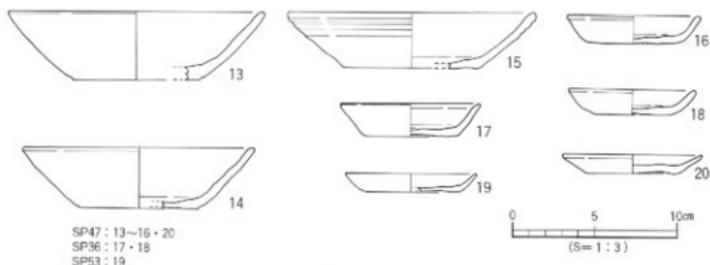
土師皿（16～20） 16～18は底部回転糸切りで、底部からやや内湾ぎみに上外方向へ立ち上がり、19・20よりは器高がやや高い。19・20は底部回転糸切りで直線的に上外方向へ立ち上がり、口縁端部は尖りぎみである。

時期：出土土師器より、13世紀の建物と考えられる。



第128図 掘立1測量図

筋違 G 遺跡



第129図 掘立1出土遺物実測図

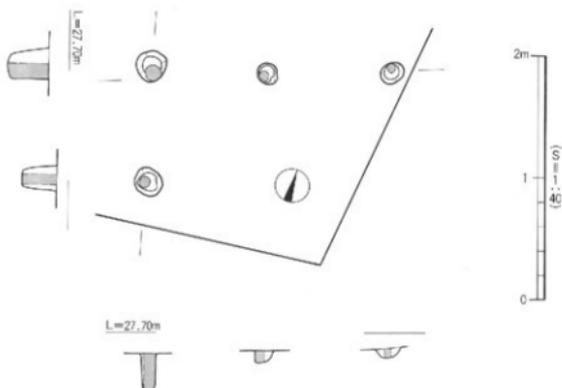
掘立柱建物址2 (第130図)

調査地1区南端、R16・17区にある。建物は調査区外へ続くものと思われる。

1×2間以上の東西棟と考えられ検出された規模は東西2.1m、南北1.3m、平均柱間は約90cmを測る。柱穴は円形の平面プランを呈し、径16~25cm、深さ8~28cmを測る。柱痕は直径7~9cmを測る。

遺物は土師器の小片が少量の出土であった。図化はできなかった。

時期：掘立柱建物1と埋土が同じため、13世紀と考えておく。



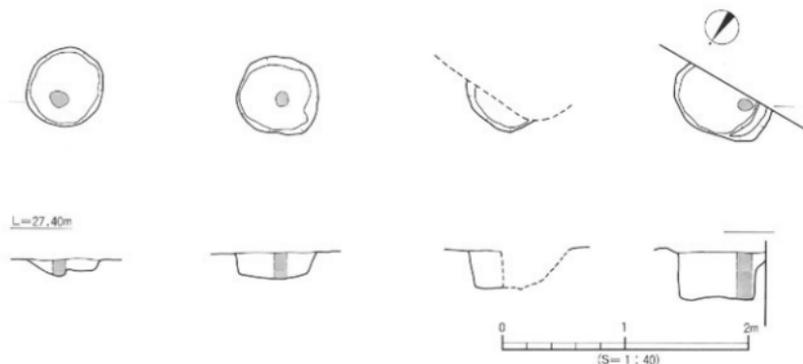
第130図 掘立2測量図

掘立柱建物址3 (第131図、図版56)

調査地2区、L12~M10区に位置し、SE2に切られる。他の掘立柱建物の柱穴の掘り方より規模が一回り大きいものである。

東西棟ではあるが、北に大きく偏る。桁行北辺の3間分を検出し、桁行長5.4m、平均柱間は約180cmを測る。柱穴は円形の平面形を呈し、直径60~70cm、深さ14~40cmを測る。柱穴からの遺物の出土はない。

時期：SE2に切られるため、13世紀以前である。



第131図 掘立3測量図

SE1 (第132図、図版57)

調査地1区北端のG17~H17区にある。全容は不明であるが、平面形態は楕円形を呈するものと思われる。検出された規模は、東西1.6m、南北1.1m、深さ1.7mを測る。基底部はやや円形に近い掘り方となっているが、曲げ物などの内部構造などの痕跡は確認されなかったため素掘りのものと考えられる。遺物は土師器片が礫石と混在して出土した。

出土遺物 (第132図)

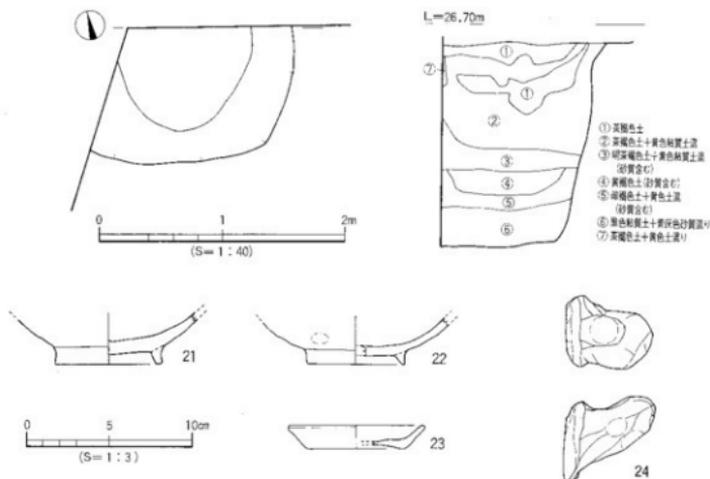
土師器碗 (21・22) 21・22は底部片である。21は長方形の断面の高台のもので端部はやや丸味で仕上げられている。底部外面は糸切り痕が見られる。この破片は焼成が良好と思われ、硬質で磨滅をほとんど受けていない。22は断面三角形の高台のもので底部との境は指頭痕が見られる。軟質で内外面とも磨滅を受けている。

土師器皿 (23) 23は底部からやや外反気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。底部は回転糸切りである。

土師器瓶 (24) 24は瓶の把手で混入遺物である。

時期：出土土師器より、13世紀代と考えられる。

筋違 G 遺跡



第132図 SE1測量図・出土遺物実測図

SE2 (第133図、図版57)

調査地2区、L・M11区で検出した。全容は不明であるが、平面形態は方形もしくは台形を呈するものと思われる。検出された規模は東西2.9m、南北0.9m、深さ2mを測る。埋土は3層に分解が可能で、上層の暗褐色土、中層の暗灰褐色土（礫混り）、下層の青灰色砂質土（礫混り）である。遺物は土師器片が上・中・下層より、板材及び角材が下層より出土した。この下層の板材は土層測量の時点では一部のみしか確認できていなかったが、その後、出水による下層の崩落により、方形と思われる井戸底枠が見られたが、危険なため発掘作業は中止した。

出土遺物 (第133図)

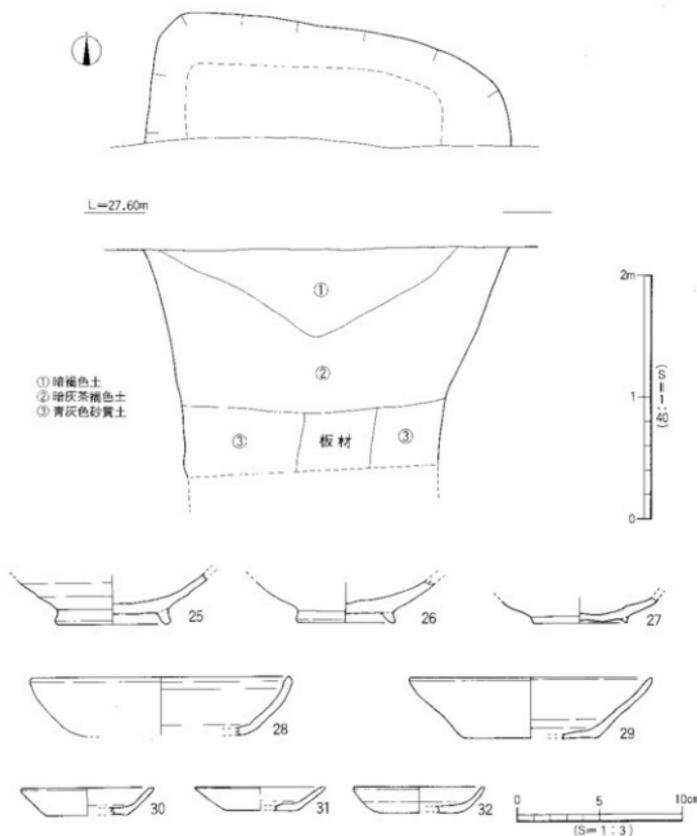
土師器碗 (25~27) 25~27は底部片である。25は断面長方形の高台で端部はやや丸めに仕上げられている。高台径は今回の出土中では最大のもので6.8cmを測る。26は断面がやや三角形の高台で比較的しっかりした作りである。27は断面三角形の高台で前者のものより高台も低く底部からの立ち上がりも外方へ開きみである。

土師器環 (28・29) 28・29は口縁部から底部にかけての破片である。28は底部からやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部内面に面をもつ。内外面ともナア調整が見られる。29は底部から直線的に外方へ立ち上がり端部付近でやや内傾する。端部は丸めに仕上げる。底部は回転糸切りである。

土師器皿 (30~32) 30~32は口縁部から底部にかけての破片で底部は回転糸切りである。30・31は底部から直線的に外方へ開き端部は尖りぎみに仕上げる。32は底部からやや内湾ぎみに立ち上がり、端部は丸くおさめる。

時期：出土土師器により13世紀代と考えられる。

遺構と遺物



第133図 SE2測量図・出土遺物実測図

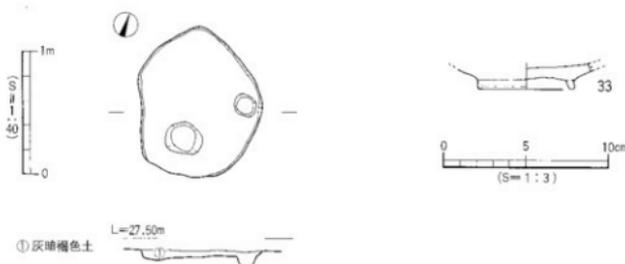
上 坑 (SK)

5基を検出している。ここでは遺物の出土をみた3基について説明を行う。

SK1 (第134図)

調査地1区、O17区で検出した。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸1.2m、短軸0.9m、深さ7cmを測る。埋土は灰暗褐色土である。遺物は土師器の小片が少量出土した。土坑基底面から径16~25cm、深さ10~26cmの小ピットを2基検出したが、遺構にともなうかどうかは分からない。この土坑の性格は不明である。

筋違 G 遺跡



第134図 SK1測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (第134図)

土師器碗 (33) 33は底部片である。断面長方形の薄手の高台である。

時期：遺物の出土は少ないが、12世紀代と考えている。

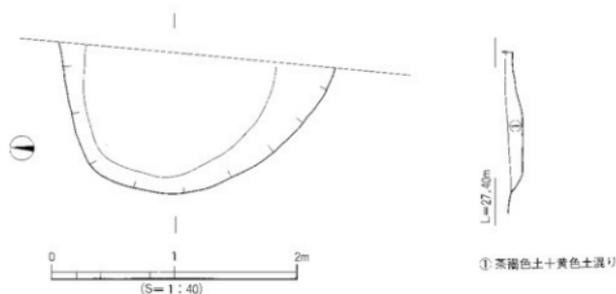
SK2 (第135図)

調査地1区、N17区で検出した。全容は不明であるが、平面形態は楕円形を呈するものと思われる。検出された規模は、南北2.2m、東西1.1m、深さ13cmを測る。埋土は茶褐色土(黄色土混り)である。遺物は土師器片が他の土坑よりはやや多く出土した。

この土坑の性格は不明である。

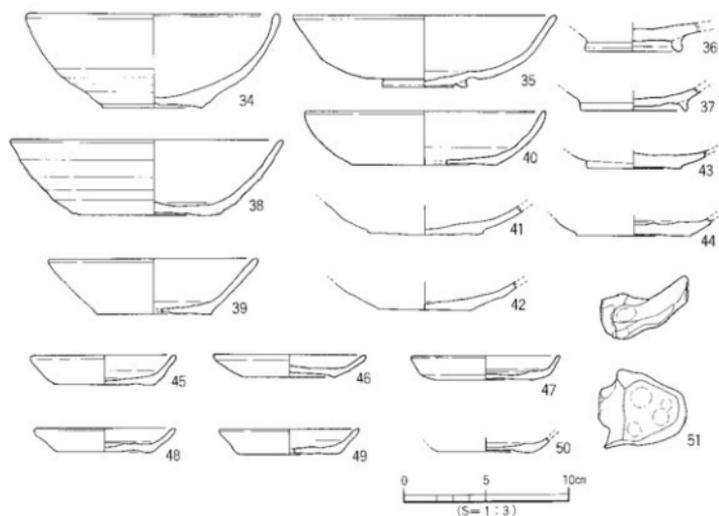
出土遺物 (第136図)

土師器碗 (34~37) 34は糸切りの平底で底部からやや上方で外面は多少くびれる。底部から内湾ぎみにたちあがり1線端部は肥厚し丸くおさめる。推定口径15.2cm、器高6.8cmを測る。35は断面三角形の高台で底部から弱干下方向へ垂れ気味になるが中位までは内湾ぎみに、端部へは直線的にたちあがる。端部は丸くおさめる。内面底部は指圧により下へ窪む。36は底部片で断面方形の高台臺部は丸くおさめる。底部外面は糸切りである。37は断面三角形の高台である。



第135図 SK2 測量図

遺構と遺物



第136図 SK2 出土遺物実測図

土師器坏(38~44) 38は底部から直線的に上外方向へたちあがり、端部はやや尖りぎみにおさめる。平底で回転糸切り、推定口径15.6cm、器高4.6cmを測る。39は回転糸切りの平底で、底部より直線的に上外方向へたちあがり端部はやや丸くおさめる。内外面とも回転ナア調整が施される。40は回転糸切りの平底で、底部よりやや内湾ぎみにたちあがり端部は尖りぎみにおさめる。推定口径14.6cm、器高3.3cmを測る。41~44は底部片で回転糸切りである。

土師器皿(45~50) 45・46・48・49は回転糸切りで底部から直線的に上外方向へたちあがり端部は尖りぎみにおさめる。47は回転糸切りで底部からやや内傾ぎみにたちあがる。50は底部片で板瓦痕が底部外面にみられる。51は瓶の把手である。

時期：出土土師器より12世紀代と考えられる。

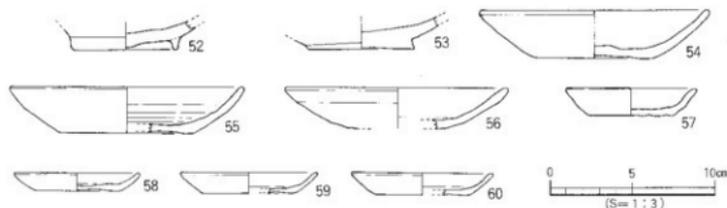
SK5

調査地1区K18に位置し、SD1を切る。全容は不明であるが平面形態は楕円形を呈する。検出された規模は東西60cm、南北75cm、深さ13cmを測る。埋土は暗褐色土である。遺物は土師器の破片が出土した。遺構の性格は不明である。

出土遺物(第137図)

土師器碗(52・53) 52は底部片で断面長方形の高台である。内外面とも磨減して調整は不明。53は平底の底部片で回転糸切りである。

筋違 G 遺跡



第137図 SK5 出土遺物実測図

土師器杯 (54~56) 54は底部より直線的に上外方向へたちあがり端部は丸くおさめる。底部は回転糸切りである。55は底部よりやや内湾ぎみに上外方向へたちあがる。56は底部より直線的に上外方向へたちあがり、口縁はやや肥厚し端部は尖りぎみにおさめる。

土師器皿 (57~60) 57は底部より内湾ぎみにたちあがり口縁付近でやや外反する。内外面とも磨減がはげしい。58は底部よりやや内湾ぎみにたちあがり器高は1.1cmを測る。底部は回転糸切りである。59・60は底部より直線的に上外方向へたちあがり口縁端部はやや尖りぎみにおさめる。59・60とも色調は灰白色を早し胎土もきめこまかいものであるため、同一個体と思われる。

時期：出土土師器から13世紀代と考えられる。

(4) 柱穴とその他の遺構・遺物

柱 穴

調査地内からは約130基の柱穴及び小穴が検出された。ここでは、時期が知りえる土器に限り資料提示を行う。

SP5

調査地1区、R16区に位置する。平面形態は楕円形を呈し長軸70cm、短軸35cm、深さ40cmを測る。遺物は土師器・瓦器が出土した。

出土遺物 (第138図)

土師器椀 (61・62) 61は断面三角形の高台で底部よりやや内湾ぎみにたちあがり口縁はやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。器高6.6cm、口径15.3cmを測り口縁部の一部のみを欠損する良品である。62は底部片で断面三角形の高台がつく。

土師器皿 (63) 63は底部より直線的に上外方向へたちあがり口縁端部は尖りぎみにおさめる。

瓦器椀 (64) 64は断面三角形の高台でしっかりした作りである。底部から内湾ぎみに立ちあがり口縁端部内面に面をもつ。器高5.1cm、口径15.4cmを測る完形品である。

時期：出土遺物から12世紀代と考えられる。

SP23

調査地1区、Q16区に位置する。平面形態は円形を呈し径38cm、深さ31cmを測る。遺物は土師器、瓦器が出土した。

出土遺物 (第138図)

瓦器碗 (65) 65は断面三角形の高台でしっかりした作りである。底部から内湾ぎみにたちあがり、口縁端部はやや丸くおさめる。器高4.5cm、口径14.9cmを測り口縁部の一部のみを欠損する良品である。

土師器皿 (66) 66は底部からやや内湾ぎみにたちあがり、口縁端部は尖りぎみにおさめる。

時期：出土遺物から13世紀代と考えられる。

SP26

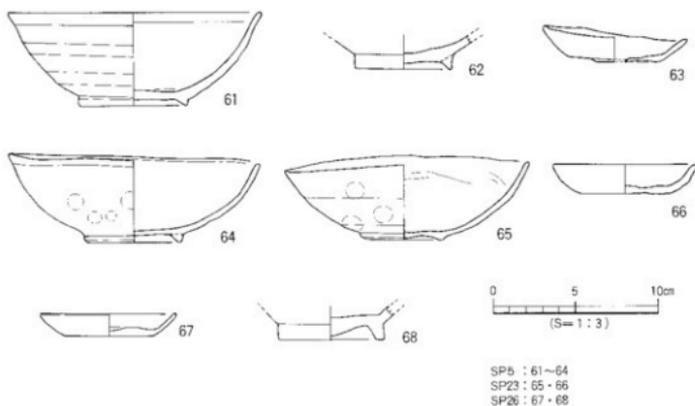
調査地1区、Q15・16区に位置する。平面形態は円形を呈し径38cm、深さ34cmを測る。遺物は土師器片、磁器片が出土した。

出土遺物 (第138図)

土師器皿 (67) 67は底部回転糸切りで、底部から直線的に上方向へたちあがり口縁端部は尖りぎみにおさめる。

青磁碗 (68) 68は底部片である。高台の外側は直立し、内側を斜行するように削り出している高台の内・外面とも施釉されない。内面見込みは軸ハギが施される。

時期：出土遺物から13世紀代と考えられる。



第138図 SP出土遺物実測図(1)

SP27

調査地 1 区、P16区に位置する。平面形態はダルマ形を呈し、長軸40cm、短軸18~23cm、深さ12cmを測る。遺物は土師皿3枚、瓦器皿1枚の完形品が重なった状態で柱穴検出レベル直下から出土した。

出土遺物 (第139図)

土師器皿 (69~71) 69~71は底部から直線的に上外方向へたちあがり口縁端部は丸くおさめらる。69と71は底部回転糸切りで、71は敷仕痕が見られる。

瓦器皿 (72) 72は口径8.6cm、器高2cmの完形品で、口縁部は横ナデされ底部外面に指頭痕が残る。

時期：出土遺物から13世紀代と考えられる。

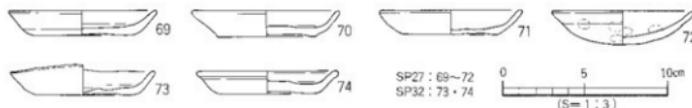
SP32

調査地 1 区、P16区に位置する。平面形態は楕円形を呈し径は最大で26cm、深さ24cmを測る。遺物は土師器が出土した。

出土遺物 (第139図)

土師器皿 (73・74) 73・74とも底部回転糸切りで、73は底部より直線的に上外方向へ立ち上がる。口径8.8cm、器高1.7cmを測り、わずかに欠損する良品である。74は底部からやや外反しながらたちあがる。口径8.6cm、器高1.35cmを測り、完形品である。

時期：出土遺物から13世紀代と考えられる。



第139図 SP出土遺物実測図(2)

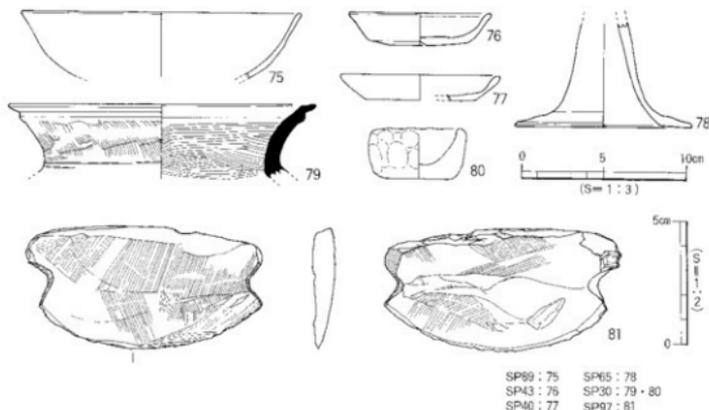
その他の柱穴出土遺物 (第140図)

土師器 (75~77) 75はP89出土の碗の口縁片である。やや内湾しみにたちあがり口縁端部は丸くおさめらる。76はS P43出土の皿で底部より直線的にたちあがり、口縁はやや外反気味である。77はS P40出土の皿で底部より直線的にたちあがり口縁はやや肥厚する。(時期：12~13世紀)

土師式土器 (78) 78はS P65出土の高坏の脚部片である。脚柱は円錐状に広がり、屈曲して裾部へつづく。裾底部はほぼ水平になる。

須恵器 (79) 79はS P30出土の壺で口縁内・外面ともハケ調整後ナデ調整されている。頸部内面は横方向にハケ調整が、外面は斜め方向にハケ調整が施されている。器種は壺と考えている。(時期：5世紀)

土師器 (80) 80はS P30出土の手捏土器である。平底の底部で器壁は厚い。外面は指頭痕が顕著にみられる。(時期：5世紀)



第140図 SP出土遺物実測図(3)

その他の遺構

性格不明遺構(SX) 1

調査地1区北部のH17~18に位置しSD1を切る。全容は不明であるが、検出された規模は、東西5m、南北約3.2m、深さは約30cmを測る。この遺構は基底部に3~8cm前後の河原石が全面に敷きつめられていた。この敷石面には東西方向に帯状に延びる浅い溝が検出された。この2本の溝は平行しており、また溝中では敷石は少ない。平行する溝の間隔は、1~1.2mを測る。遺構埋土は暗褐色土である。遺物は埋土中より土師器の他、混入品である須恵器、弥生土器、土師式土器が礫石と混在して出土した。

出土遺物(第141図)

土師器(82~85) 82~85は碗である。82は口縁部の一部分を欠損する良品である。断面三角形の高台で高台高は0.3cmを測る。底部から内湾ぎみに上外方向へたちあがり口縁端部は丸くおさめる。口径15.2cm、器高5.6cmを測る(瓦器碗か)。83・84は底部片で断面三角形の高台である。83は高台径6.6cm、84は高台径6.2cmを測る。85は平高台の底部片で高台径7cmを測る。

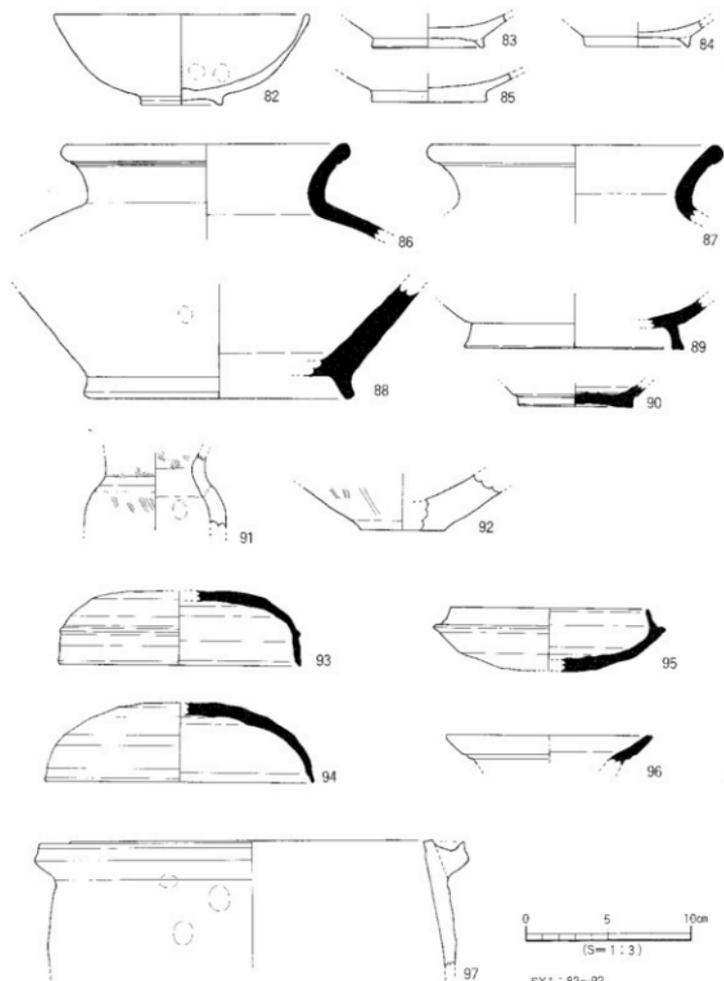
須恵器(86~90) 86・87は壺の口頸部片である。ともに口縁端部は玉縁状におさめられる。86は推定口径17.1cm、87は推定口径17.4cmと考えられる。88は底部片で断面長方形の高台は「ハ」の字状に開く。器種は鉢と考えられる。89は壺の底部片で断面長方形の高台は端部が外方へ肥大する。内外面とも回転ナデ調整が施される。90は坏の底部片で円盤高台で回転ヘラ切り雑し。底部内面は回転ナデ調整が施されている。

土師式土器(91) 91は小型壺の頸部片で器壁は厚い。内・外面ともハケメ調整が見られる。胎土はきめこまかく、微小片の金雲母が多量に混入している。

弥生土器(92) 92は壺の底部片である。

時期：出土した土師器より埋没時期は13世紀と考えられる。

筋透 G 遺跡



第141図 SX1他出土遺物実測図

その他の遺物

今回の調査では調査地北部において包含層を検出した。基本層位の第Ⅲ層である。出土遺物は土師器の他、混入遺物である須恵器であるが、いずれも小片のもので図化できたものについて説明を行う。なお包含層の時期は13世紀代と考えられる。

第Ⅲ層出土遺物（第141図）

須恵器（93～96） 93・94は坏蓋である。93はやや平らな天井部に、直線的に外傾する口縁部で、天井部と口縁部の境に稜を残す。口縁端部は内傾する段を残す。口径14.6cmを測る。94は縦やかに弧を描く天井部に口縁がやや外傾している。口径16.3cmを測る。口縁端部は内傾する段を残す。内・外面とも横ナデ調整、天井部外面に回転ヘラ削り痕が残る。95は坏身である。たちあがりは内傾し、端部は尖りぎみにおさめる。内・外面とも横ナデ調整、底部は回転ヘラ削りである。96は甕の口縁片である。推定口径12cm、口縁端部は水平な面をもつ。

羽釜（97） 口縁部片で推定口径22cm。口縁やや下に鈎をもつ。

4. 小 結

本調査では、弥生時代、古墳時代、中世の遺構と遺物を確認した。以下、時代ごとにまとめをおこなう。

1 弥生時代

弥生時代の遺構は後期の竪穴住居址（SB2）がある。平面形態は隅丸方形を呈するもので、4本の主柱穴、和址は検出したが、塼体溝は未検出である。福音寺地区での当該期の隅丸方形プランを呈する住居は確認事例はなく、稀少な資料である。

2 古墳時代

竪穴住居址3棟は、3棟とも全容は不明であるが、平面形態は隅丸四角形を呈するものであることは確かである。SB1・3・4は切り合い関係より、SB3→1→4と時間的変化がみられる。また、時期はいずれの住居址も須恵器を出土し、SB1からは5世紀末～6世紀初頭の上器が出土していることより、SB3は5世紀後半、SB1は5世紀末～6世紀初頭、SB4は6世紀前葉以降に比定される。

3 中 世

掘立柱建物3棟、井戸2基、多数の柱穴群の検出により当地には中世集落が存在していたといえる。1区南部で集中して検出された柱穴群には柱痕が確認されたものも多く、建物址の柱穴と考えられるが、構造が復元できたものは2棟であった。2区で検出した掘立柱建物址は、柱穴の掘り方が大きいことや、井戸（SE2）に切られる事などから、中世以前のものとも考えられる。

竪石状遺構（SX1）は溝の基底部に円礫石が敷かれており、この円礫石上面には2条の凹地が見られた。この凹地はワダチとも考えられるもので、道路の可能性もある。性格については今後の周辺地での調査による資料の増加により検討してゆきたい。

遺物はすべて遺構中からの出土である。土師器碗・坏・皿、瓦器碗・皿の器種である。時期は12世紀～13世紀代のもので土師器と瓦器が完形品で出土した遺構もあり、一括性の高い資料が得られている。当地及び周辺地域の土師器・瓦器編年を考えるうえでの資料となるものである。

以上、今回の調査結果を簡単にまとめた。福音寺地区の北西部域が弥生時代後期、古墳時代後期、中世においていたる居住区域であったことが明らかとなった。さらには福音寺地区では検出例が稀薄な中世の井戸を確認したことで、当地域の中世集落の様相がより明らかとなった。これ等の資料は、福音寺地区の古代集落の構造を分析するには大きな成果といえる。なお、報告に際して中世の遺物については栗田正芳氏に分析と助言をえた。末尾ではあるが、記して感謝申し上げる。

表37 竪穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時 期	平面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	床面積 (㎡)	主柱穴 (本)	内 部 施 設				周壁溝	備 考
						高床	土坑	炉	カマド		
1	古 墳	方 形	2.5×2.2×0.06	5.5						○	SB-3を切り SB-4に切られる。
2	弥 生	方 形	5.2×4.6×0.10	23.9	4			○			
3	古 墳	方 形	5.9+a×1.7+a×0.10	(8.5)						○	SD-1, 4に切られる。
4	古 墳	方 形	1.7×3.8×0.08	6.46							SB-1, 3を切る。

表38 掘立柱建物址一覧

堀立	方位	規 模 (間)	桁 行		梁 行		床面積 (㎡)	備 考	時 期
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)			
1	東西	1×2	4.23	2.07, 2.16	2.31	2.31	9.77		中世
2	東西	1×2	1.95	0.93, 1.02	0.96	0.96	1.87		中世
3	東西	×3	5.55	1.80, 1.71, 2.04	—	—	—		中世以前

表39 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
2	M-O 17	方 形	皿状	4.5×1.75×0.462	茶褐色土 灰色泥り	土師器	中 世	
3	P-Q 15	方 形	皿状	1.39×0.6×0.068	暗褐色土 灰色泥り		中 世	
4	L-M 12	方 形	皿状	1.8×1.25×0.061	黒褐色土		中 世	
5	K 18	楕円形	皿状	0.74×0.63×0.016	茶褐色土	土師器	中 世	SD1を切る。

表40 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
2	I 17	逆台形	1.8×0.4×0.12	暗茶褐色土			SX1に切られる。

表41 井戸一覧

土坑 (SE)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
2	L-M 11	方 形	逆台形状	1.04×2.94×0.52	暗褐色土	土師器	中 世	掘立3を切る。

遺物観察表

表42 SB2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外置) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	底径(5.8) 残高 2.5	平底のくびれをもつ底部。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	灰褐色 に白い斑	石・長 (0.5-1.5) ○		
2	支脚	残高 5.1		叩き	しぼり痕	に白い褐色	灰(0.5-2.5) ○ 砂		

表43 SB1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外置) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
3	坏身	口径(10.8) 残高 3.5	内縁する立ち上がりの口縁 溝面に明瞭な段を有する。 受部は上方向にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(0.5) ○		

表44 SD1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外置) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
4	坏蓋	口径(13.0) 器高 3.7	口縁部はやや外反して下がり 端部は尖る。	回転ヘラ削り ⓐ 回転ナデ	ナデ(指頭痕有) ⓑ 回転ナデ	灰 色 灰 色	長(1) ○		
5	坏身	口径(13.0) 残高 3.4	立ち上がりはやや内傾する。 受部は上方向にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色・浅黄色 灰 色	長(0.5-1.5) ○		
6	甕	残高 5	肩部にカキメ痕。	ハケ後ナデ カキ目	ナデ 叩き	灰 色 灰 色	微砂 ○		
7	高坏	残高 7.2	三角錐の柱部にゆるやかに 開く菊部。柱部部長の後は 弱い。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	橙 色 橙 色	石・長(1) ○		
8	甕	残高 6.2	把子。上外向へのびる。	ナデ	ナデ	に白い黄褐色	石・長(0.5-2) ○		
9	高坏	口径(20.6) 残高 3.0	外反する口縁部。端部は尖 り反珠。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	灰茶褐色 灰茶褐色	石・長(0.5-2) ○		
10	蓋	残高 7.8	頸部に凸帯を貼り巡らせる。	ハケ口	ハケ後ナデ	灰茶褐色 黒褐色	石(0.3-1.5) 長(0.3-2) ○		
11	甕	残高 4.5	頸部に筋目凸帯が巡る。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	明淡肌色 明淡肌色	石・長(0.5-6) ○		
12	甕	底径(2.4) 残高 3.0	平底。	ナデ	磨滅のため不明	黒 色 黄褐色	石・長(1-3) ○		

表45 掘立1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外置) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
13	坏	口径(17.6) 底径 9.8 器高 4.2	直線的に外向へ立ち上る。 底部回転糸切り痕。	磨滅のため不明 ⓐ 回転糸切り痕	磨滅のため不明	浅黄褐色 浅黄褐色	長(1-3) ○	SP47	
14	坏	口径(14.2) 底径 7.4 器高 3.7	直線的に外向へ立ち上る。 底部回転糸切り痕。	横ナデ ⓐ 回転糸切り痕	横ナデ ⓑ ナデ	灰白色 灰白色	長(0.5-1) ○	SP47	
15	坏	口径(14.2) 底径 8.2 器高 3.4	直線的に外向へ立ち上る。 端部外面に面をもつ。 底部回転糸切り痕。	ⓐ 多段横ナデ ⓑ 横ナデ、ナデ ⓐ 回転糸切り痕	磨滅のため不明	浅黄褐色 浅黄褐色	長(0.5-2) ○	SP47	

筋違 G 遺跡

表41 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
16	皿	口径(8.2) 底径 5.4 器高 1.7	やや内湾ぎみに上外方向へ立ち上がる。底部回転糸切り痕。	横ナデ ⑤ 回転糸切り痕	横ナデ ⑤ ナデ	灰白色 淡黄褐色	長(0.5) 雲		SP47
17	皿	口径(8.0) 底径 5.4 器高 2.0	やや内湾ぎみに上外方向へ立ち上がる。底部回転糸切り痕。	横ナデ ⑤ 回転糸切り痕	横ナデ ⑤ ナデ	灰白色 明灰茶褐色	長(0.5) 雲		SP36
18	皿	口径(7.8) 底径 4.8 器高 1.5	やや内湾ぎみに上外方向へ立ち上がる。	磨減のため不明	磨減のため不明	灰白色 灰白色	長(0.5) 雲		SP36
19	皿	口径(8.0) 底径 5.6 器高 1.1	直線的に上外方向へ立ち上がる。底部回転糸切り痕。	磨減のため不明 ⑤ 回転糸切り痕	磨減のため不明	橙 色 橙 色	石長(0.5~1) 雲		SP53
20	皿	口径(8.4) 底径 5.6 器高 1.1	直線的に上外方向へ立ち上がる。底部回転糸切り痕。	磨減のため不明 ⑤ 回転糸切り痕	磨減のため不明	灰白色 灰白色	長(0.5~1) 雲		SP47

表46 SE1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
21	碗	高台径(5.8) 高台高 0.7 残高 3.2	高台は断面長方形。	回転ナデ ⑤ ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	細砂 雲		
22	碗	高台径(6.0) 高台高 0.6 残高 2.9	高台は断面三角形。	磨減のため不明	磨減のため不明	灰白色 灰白色	石長(0.5~2) 雲		
23	皿	口径(8.1) 底径 5.9 器高 1.45	やや外反気味に立ち上がる。底部回転糸切り痕。	ナデ ⑤ 回転糸切り	ナデ	淡黄色 淡黄色	細砂 雲		
24	瓶	瓶口径 5.4	把手。上方向へのびる。	ナデ	ナデ	橙 色 橙 色	長(0.5) 雲		

表47 SE2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
25	碗	高台径(6.8) 高台高 0.7 器高 3.1	高台は断面長方形。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	長(0.5) 雲		
26	碗	高台径(5.8) 高台高 0.65 残高 2.4	高台は断面三角形。	磨減のため不明 ⑤ 回転ナデ	ナデ	乳白褐色 乳白褐色	長(0.5~1) 雲		
27	碗	高台径(5.6) 高台高 0.2 残高 1.6	高台は低く断面三角形。	磨減のため不明 ⑤ ナデ	ナデ 指頭痕有り	灰白色 灰白色	長(0.5~1) 雲		
28	坏	口径(16.5) 残高 3.6	内湾ぎみに立ち上がり、口縁肩部内面に面をもつ。	ナデ	ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	長(1) 雲		
29	坏	口径(14.8) 底径 8.0 器高 3.7	直線的に上外方向へ立ち上がり肩部付近でやや内湾する。底部回転糸切り痕。	回転ナデ ⑤ 回転糸切り痕	回転ナデ ナデ	灰白色 灰白色	長(0.5~1) 雲		
30	皿	口径(8.0) 底径 4.8 器高 1.7	直線的に外方へ開き、端部は実りき。底部回転糸切り痕。	ナデ ⑤ 回転糸切り	磨減のため不明	灰白色 淡黄褐色	長(0.5) 雲		
31	皿	口径(8.0) 底径 4.2 器高 1.4	直線的に外方へ開き、端部は実りき。底部回転糸切り痕。	磨減のため不明 ⑤ 回転糸切り	磨減のため不明	灰白色 灰白色	長(0.5) 雲		
32	皿	口径(8.0) 底径 4.8 器高 1.6	内湾ぎみに立ち上がり、端部は丸くおさめる。	ナデ ⑤ 回転糸切り痕 板状痕	ナデ	淡黄褐色 淡黄色	長(0.5~1) 雲		

遺物観察表

表48 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色質 (外)面 (内)面	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
33	碗	高台径 (5.9) 新台径 0.5 残高 1.6	高台は薄手で断面長方形。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	灰白色 灰白色	長(1) ○		

表49 SK2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色質 (外)面 (内)面	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
34	碗	口徑(15.2) 底径 6.1 器高 6.8	内湾きみに立ち上がり口縁 端部は肥厚し丸くおさまる。 底部は平底。糸切り痕。	① ナデ ② 磨滅のため不明 ③ 糸切り痕	④ ナデ 磨滅のため不明	灰白色 灰白色	微砂 ○		59
35	碗	口徑(16.0) 底径 4.2 高台径 0.2 器高 4.4	内湾きみに体部中位まで立ち 上がり、口縁は直線的に開く。 高台は低く断面三角形。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	乳白色 乳白色	長(1) ○		
36	碗	新台径 5.8 高台径 0.7 残高 1.8	高台は断面長方形。底部回 転糸切り痕。	ナデ 回転糸切り痕	ナデ	浅黄褐色 灰白色	長(0.5~1) ○		
37	碗	新台径 (6.2) 高台径 0.5 残高 1.4	高台は断面三角形。	磨滅のため不明	ナデ	灰白色 灰白色	長(2) ○		
38	坏	口徑(15.6) 底径 7.2 器高 4.6	直線的に上外方向へ立ち上 がり端部はやや実る。底部 回転糸切り痕。	磨滅のため不明 ④ 回転糸切り痕	磨滅のため不明	灰白色 灰白色	長(0.5~1) ○		
39	坏	口徑(12.8) 底径 7.0 器高 3.35	直線的に上外方向へ立ち上 がり端部はやや丸くおさめ る。底部回転糸切り痕。	横ナデ ナデ ④ 回転糸切り痕	横ナデ ④ ナデ	灰白色 灰白色	長(1)少 ○		
40	坏	口徑(14.6) 底径 8.8 器高 3.3	内湾きみに立ち上がり端部 は尖りきみにおさまる。	磨滅のため不明 ④ 回転糸切り痕	磨滅のため不明	灰白色 灰白色	長(0.5~1) ○		
41	坏	底径 7.2 残高 2	底部回転糸切り痕。	磨滅のため不明 ④ 回転糸切り痕	ナデ	灰白色 灰白色	素 ○		
42	坏	底径 (5.6) 残高 1.8	底部回転糸切り痕。	磨滅のため不明 ④ 回転糸切り痕	磨滅のため不明	灰白色 灰白色	微砂 ○		
43	坏	底径 5.8 残高 1.1	底部回転糸切り痕。	回転ナデ ④ 回転糸切り痕	磨滅のため不明	灰白色 浅黄褐色	長(1) ○		
44	坏	底径 (7) 残高 1.1	底部回転糸切り痕。	回転ナデ ④ 回転糸切り痕	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1~1.5) ○		
45	皿	口徑 8.9 底径 6.0 器高 1.8	直線的に上外方向へ立ち上 がる。底部回転糸切り痕。	① 横ナデ ② ナデ ③ 回転糸切り痕	横ナデ ④ ナデ	灰白色 灰白色	長(0.5) ○		
46	皿	口徑 (9.2) 底径 5.6 器高 1.4	直線的に上外方向へ立ち上 がる。底部回転糸切り痕。	ナデ ④ 回転糸切り痕	ナデ	灰白色 灰白色	長(0.5) ○		
47	皿	口徑 (9) 底径 7.8 器高 1.5	やや内傾きみに上外方向へ 立ち上がる。底部回転糸切 り痕。	磨滅のため不明 ④ 回転糸切り痕	磨滅のため不明	灰白色 灰白色	○		
48	皿	口徑 (8.6) 底径 5.8 器高 1.4	直線的に上外方向へ立ち上 がる。底部回転糸切り痕。	磨滅のため不明 ④ 回転糸切り痕	磨滅のため不明	灰白色 灰白色	長(0.5) ○		
49	皿	口徑 (8.5) 底径 6.0 器高 1.6	直線的に上外方向へ立ち上 がる。底部回転糸切り痕。	① 回転ナデ ナデ ④ 回転糸切り	② 回転ナデ ③ ナデ	灰白色 灰白色	微砂 ○		
50	皿	底径 5.8 残高 0.9	底部板圧痕。	磨滅のため不明 ④ 板圧痕	磨滅のため不明	灰白色 灰白色	長(1~1.5) ○		
51	瓶	残高 4.9	把手。上外方向へのびる。 上面は中窪み。	ナデ	ナデ	橙 色	長(0.5~2.5) ○		

筋流 G 遺跡

表50 SK5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
52	碗	高台径 3.4 高台径 残高 1.8	高台は断面長方形。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	明灰茶褐色 ○ 明灰茶褐色	石・長(2-3)		
53	碗	高台径 6.4 高台径 4.5 残高 2.0	平底。底部回転糸切り痕。	磨滅のため不明 ⑤ 回転糸切り痕	磨滅のため不明 ⑤ 回転糸切り→ナデ	灰白色 ○ 灰白色	石・長(0.5-1)		
54	坏	口径(14) 底径 7.2 器高 2.0	直線的に上外方向へ立ち上がり端部は丸くおさめる。底部回転糸切り痕。	ナデ ⑤ 回転糸切り痕	ナデ	灰白色 ○ 灰白色	長(0.5)		
55	坏	口径(14.2) 底径 8.0 器高 2.8	やや内湾きみに立ち上がる。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	淡灰茶褐色 ○ 淡灰茶褐色	石・長(1)		
56	坏	口径(13.6) 底径 5.1 残高 2.5	直線的に上外方向へ立ち上がり端部は肥厚し尖りぎみにおさめる。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	灰白色 ○ 灰白色	石・長(1-2)		
57	皿	口径(8) 底径 5.1 器高 1.65	内湾きみに立ち上がり口縁部直でやや外反する。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	橙 ○ 明灰茶褐色	石・長(1)		
58	皿	口径(7.6) 底径 5.0 器高 1.1	やや内湾きみに立ち上がり。底部回転糸切り痕。	磨滅のため不明 ⑤ 回転糸切り痕	磨滅のため不明	緑褐色 ○ 緑褐色	石・長(0.5-1)		
59	皿	口径(8.3) 底径 5.5 器高 1.3	直線的に上外方向へ立ち上がり。端部は尖りぎみ。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	灰白色 ○ 灰白色	微砂		
60	皿	口径(8.6) 底径 5.8 器高 1.8	直線的に上外方向へ立ち上がり。端部は尖りぎみ。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	灰白色 ○ 灰白色	微砂		

表51 SP出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
61	碗	口径 15.3 高台径 6.6 高台径 0.4 器高 6.6	やや内湾きみに立ち上がり口縁部はやや外反する。端部は丸い。高台は断面三角形。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	灰白色 ○ 灰白色	長(0.5) 微砂	SP5	59
62	碗	口径(6.0) 高台径 0.9 残高 2.1	高台は断面三角形。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	淡黄褐色 ○ 淡黄褐色	石・長(2)	SP5	
63	皿	口径(8.8) 底径 5.4 器高 1.7	直線的に上外方へ立ち上がり端部は尖りぎみ。底部回転糸切り痕。	磨滅のため不明 ⑤ 回転糸切り痕	回転ナデ ⑤ ナデ	灰白色 ○ 灰白色	長(0.5-1)	SP5	
64	碗	口径 15.4 高台径 5.5 高台径 0.5 器高 5.1	内湾きみに立ち上がり端部内面に凹をもつ。高台は断面三角形。	ナデ	磨滅のため不明	灰白色・褐色 ○ 灰白色・褐色 ○ 淡褐色	石・長(0.5-3) 微砂	SP5	59
65	碗	口径 14.9 高台径 0.5 高台径 0.3 器高 4.5	内湾きみに立ち上がり端部はやや丸い。高台は断面三角形。	① 横ナデ ⑤ ナデ	① 横ナデ ⑤ ナデ	灰白色 ○ 灰白色	長(1)	SP23	59
66	皿	口径(8.7) 底径 5.3 器高 1.3	やや内湾きみに立ち上がり端部は尖りぎみ。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	灰茶褐色 ○ 灰茶褐色	長(0.5)	SP23	

遺物観察表

SP 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	量量(cm)	形 態 ・ 描 文	調 整		色調 (外面)	胎 土 (内面)	備考	図版
				外 面	内 面				
67	皿	口径 5.2 底径 5.3 器高 1.35	直線的に上外方向へ立ち上がり肩部は尖りきみ。底部回転糸切り痕。	磨減の為不明 ◎回転糸切り痕	磨減の為不明 ◎ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	長(0.5~2) ○	SP 26	
68	青磁	口径 6.5 底径 6.0 器高 2.0	高台残り出し見込み輪ハギ	回転ヘラ削り	見込み輪ハギ	明灰青褐色 明灰青褐色	密 ○	SP 26	
69	皿	口径 9.0 底径 6.0 器高 1.5	直線的に上外方向へ立ち上がり口縁は丸い。底部回転糸切り痕。	◎横ナデ ◎回転ナデ ◎回転糸切り痕	横ナデ ◎ナデ	灰白色 灰白色	長(0.5~1) ○	SP 27	
70	皿	口径 9.0 底径 6.0 器高 1.6	直線的に上外方向へ立ち上がり肩部は丸い。	磨減の為不明	磨減の為不明 ◎ナデ	灰白色 灰白色	不長(0.5~1) ○	SP 27	
71	皿	口径 8.5 底径 5.7 器高 1.45	直線的に上外方向へ立ち上がり口縁は丸い。底部回転糸切り痕。散灰痕。	磨減の為不明 ◎回転糸切り痕 ◎散灰痕	磨減の為不明 ◎ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○	SP 27	
72	皿	口径 8.6 器高 2.0	内湾きみに上外方向へ立ち上がる。底部外面に指痕。	◎横ナデ ナデ	ナデ	暗灰白色 灰白色 暗灰褐色	長(0.5) ○	SP 27	59
73	皿	口径 8.8 底径 3.8 器高 1.7	直線的に上外方向へ立ち上がり。底部回転糸切り痕。	磨減の為不明 ◎回転糸切り痕	磨減の為不明	橙 色 橙 色	長(0.5~2) ○	SP 32	
74	皿	口径 8.6 底径 6.0 器高 1.35	やや外反しながら上外方向へ立ち上がる。底部回転糸切り痕。	◎横ナデ ◎ナデ ◎回転糸切り痕	◎横ナデ ◎ナデ	灰白色 灰白色	長(0.5~1) 金 ○	SP 32	
75	碗	口径(17.0) 残高 4.0	やや内湾きみに立ち上がり口縁は丸い。	磨減の為不明	磨減の為不明	灰白色 灰白色	石(0.5~2) ○	SP 89	
76	皿	口径(8.6) 底径 3.0 器高 2.0	直線的に上外方向へ立ち上がり口縁はやや外反きみ。底部に板圧痕。	磨減の為不明 ◎板圧痕	磨減の為不明	明灰赤褐色 明灰灰褐色	石・長・砂 雲 ○	SP 43	
77	皿	口径(10.5) 底径 6.5 器高 1.6	直線的に上外方向へ立ち上がり口縁はやや肥厚する。	磨減の為不明	磨減の為不明	灰白色 灰白色	微砂 ○	SP 40	
78	高杯	底径(10.8) 残高 6.4	脚柱は円錐状。水平に開く唇部。	磨減の為不明	磨減の為不明	橙 色 浅黄褐色	長(0.5) ○	SP 65	
79	甕	口径(18.8) 残高 46	外反しながら立ち上がった口縁の端部はほぼ水平方向に突る。頸部は内・外反ともハケ調整。	◎ナデ ハケ目	◎ナデ ハケ目	明白色 明白色	石・長(4) ○	SP 30	59
80	柱状器	口径 5.9 底径 4.0 器高 3.1	平突の底部から上方向へ立ち上がり口縁はやや内反。外周指痕。	指痕痕	ナデ上げ	明乳白色 明乳白色	石・長 少 ○	SP 30	

SP 出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	遺存状態	石 材	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
81	石版丁	完形品	黒色片岩	5.0	9.6	0.95	62.23	SP 97	59

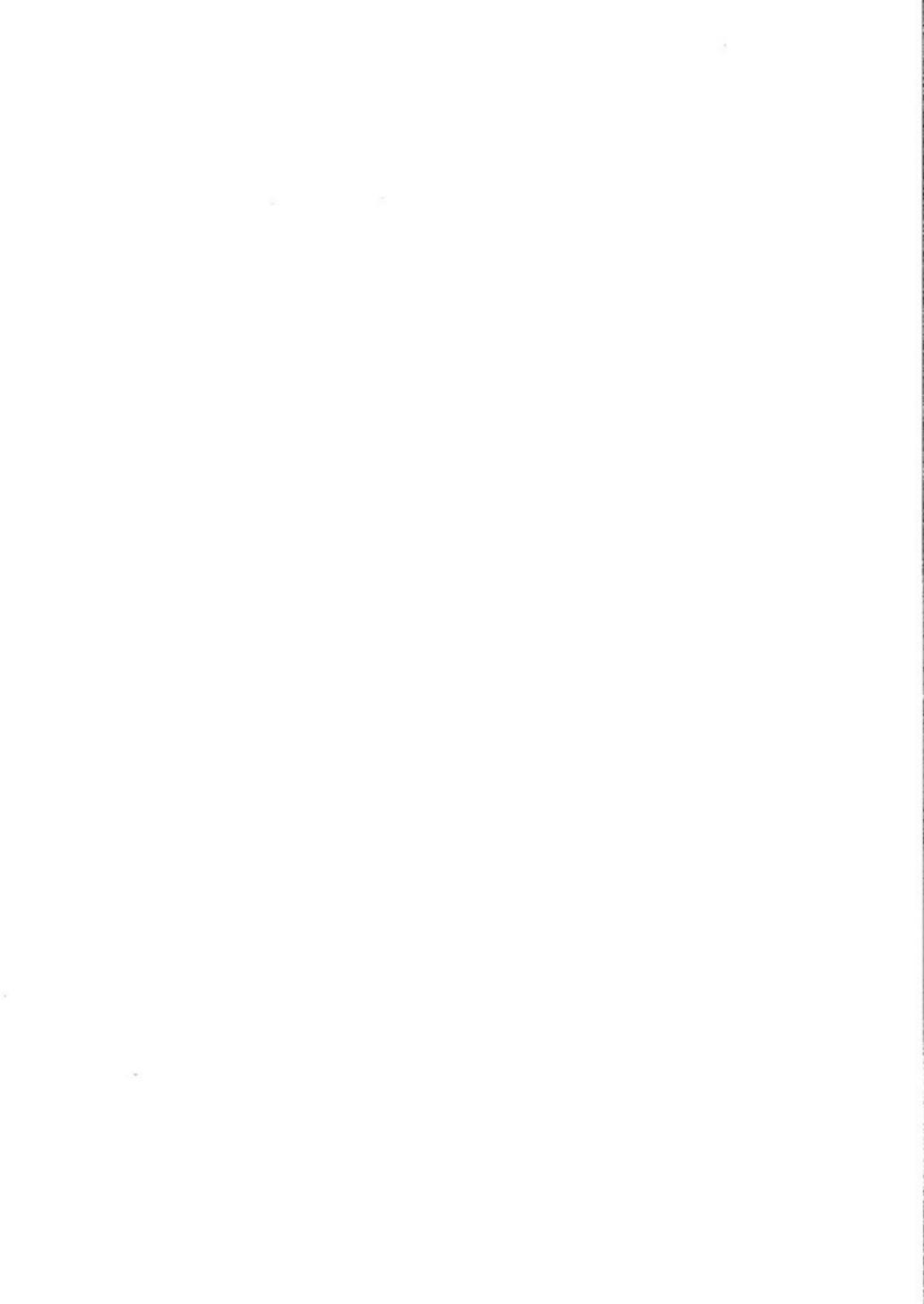
筋違 G 遺跡

表52 SX1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	罫 整		色顔 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
82	碗	口径(15.2) 高内径 5.0 高台高 0.3 残高 3.6	内湾ぎみに立ち上がり端部 は丸い。 高台は断面三角形。	磨減の為不明	磨減の為不明	灰白色 灰白色	長(0.5-2) ○	SX 1	59
83	碗	高台径(6.6) 高台高 0.4 残高 2.1	高台は断面三角形でやや細 い。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	長(0.5-2) ○	SX 1	
84	土師碗	高台径(6.2) 高台高 0.45 残高 1.65	高台は断面三角形。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	長(0.5-1.5) ○	SX 1	
85	碗	高台径 7.0 高台高 0.7 残高 1.8	底部は円盤高台。	磨減の為不明	磨減の為不明	淡灰褐色 明灰褐色	帯 ○	SX 1	
86	甕	口径(17.1) 残高 5.75	外反ぎみに立ち上がる口縁 で端部は下縁状。	カキ目	ナデ	明灰色 明灰色	長(0.5-2) ○	SX 1	
87	甕	口径(17.4) 残高 4.0	直線的に上外方向へ立ち上 がる口縁で端部は下縁状。	回転ナデ	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(0.5-1.5) ○	SX 1	
88	鉢	高内径(15.4) 高台高 1.3 残高 7.9	高台は人の平杖に似る短方形。 底部より残部は上外方向へ立ち 上がる。	ナデ	ナデ 磨減の為不明	灰白色 灰白色	長(0.5-2.5) △	SX 1	
89	蓋	口径(13.4) 高台高 1.4 残高 3.2	前面長方形の高台は端部が 外方へ膨大する。	回転ナデ	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(0.5-2) ○	SX 1	
90	坏	底径(7.0) 残高 1.4	円盤高台。 底部回転へ切り。	回転ナデ	回転ナデ	明灰色 明灰色	長(1) ○	SX 1	
91	蓋	底径(6.2) 残高 4.6	器蓋は短い。 小型品(手取か)。	ハケ後ナデ	ハケ目 ナデ	に灰褐色 に灰褐色	長さ(0.5-1.5) 帯多 ○	SX 1	
92	蓋	底径(5.0) 残高 3.5	平底。 器蓋は厚い。	ハケ目	磨減の為不明	灰白色 灰白色	長(0.5-1.5) ○	SX 1	
93	坏蓋	口径(14.6) 残高 4.5	天井部は扁平。 縁は外方へのびる。 口縁端部は内傾する段をもつ。	回転へり削り	回転ナデ	灰白色 に灰褐色	長(0.5-2) △	K 11	
94	坏蓋	口径(16.3) 器高 4.8	弧を描く天井部。 口縁端部はやや外傾し内面 に段をもつ。	回転へり削り	回転ナデ	暗灰色 灰 色	長(0.5-3) ○	K 8	
95	坏蓋	口径(12.0) 器高 3.8	立ち上がりは内傾し端部は 尖りぎみ。	回転ナデ	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(0.5-2) ○	K 7	
96	瓶	口径(12.0) 残高 1.9	口縁端部は上方に面をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰 色 灰白色	微砂 ○	内二 面焼成 目撃 S10	
97	羽釜	口径(22.0) 残高 7.8	胴上面は凹む。	付横ナデ	横ナデ	灰白色 に灰褐色	長(0.5) 帯多 ○	I 18	59

第7章

ス
イ
筋違H遺跡



第7章 筋違H遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1989(平成元年)年3月9日、栗田恒忠氏より松山市福音寺町4929-2地内における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された(第142図)。

当地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「114 松末遺物包含地」内にあたる。当地を含む筋違・福音寺地区はこれまでも数多くの調査が実施されており、周知の遺跡地帯として知られている。同包含地南側の「116 川付遺物包含地」内では国道11号バイパス工事に伴う発掘調査が数次にわたって行われている。また、南東の「124 北久米遺物包含地」内では北久米浄蓮寺遺跡3次調査(橋本雄一1994)などの調査が行われており、弥生時代から中世にかけての集落が存在していたことが明らかにしつつある。

周辺には、北は東本遺跡4次などを含む桑原地区遺跡群(高尾和長1996)が、東は弥生時代から中世まで断続して営まれた大集落址の福音小学校構内遺跡(梅木謙一1995)、南は米住庵寺跡(小笠原好彦1979)や久米高畑遺跡(西尾幸則1989)などを含む久米地区がある。

これらのことから当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1989(平成元年)年3月25日に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、土師器・須恵器を含む遺物包含層と柱穴数基を検出し、当該地に集落関連遺構があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課・栗田恒忠氏の両者は遺跡の取扱いについて協議を重ね、宅地開発によって失われる遺構・遺物について記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は古墳時代以降の当該地及び周辺地域の集落構造や占地形の解明を主目的とし、文化教育課が主体となり栗田恒忠氏の協力のもと1989(平成元年)年、7月4日に開始した。

(2) 調査の経緯

1989(平成元年)年7月4日より重機により表土剥ぎ取り作業を開始した。試掘結果から、地表下約30cmまで剥ぎ取りを行い、排土は調査地内に土盛りしたため表土剥ぎ取りに2日間を費やした。その後、調査地内に仮設事務所を設置し、作業用具等を搬入した。

7月6日より作業員を増員し本格的な発掘調査を開始した。7月14日より遺物包含層である第VI層の掘り下げ及び遺構検出を行う。7月31日、第VI層上面にて遺構検出を行い堅穴式住居址や土坑、溝、柱穴等数多くの遺構を検出する。8月1日から遺構の掘り下げ及び遺構内遺物検出を中心に行い、並行して遺構・遺物の測量・取り上げを行う。9月14日、調査区南側の完掘写真を撮影した。9月15日から重機により調査区北側(土盛り下)の表土剥ぎ取り作業を開始した。9月22日、遺構の測量図が完了する。9月23日、出土遺物、調査用具等を撤去する(野外調査終了)。なお、野外調査期間中に下條信行先生、栗田正芳氏、梅木謙一氏、重松佳久氏に調査指導を乞う。

筋違H遺跡



第142図 調査地位置図 (S=1:1500)

調査組織

(3) 調査組織

- 調査地 松山市福音寺町1929-2
 遺跡名 筋違H遺跡
 調査期間 野外調査 1989(平成元年)年7月4日～同年9月23日
 調査面積 1,540㎡
 調査委託 栗田 恒忠氏
 調査担当 宮崎 泰好(平成3年退職)・武正 良浩
 調査作業員 加島 次郎、波多野恭久、酒井 直哉、小坂ゆかり、今井 芳美、玉出 勝彦、吉浦 正浩、宮脇 和人、荒川 和哲、三好 正規、塚原 竜一、大廻 誠、盛山 守、肌野 祐治、首藤 成吾、菱川 敏夫、川野 稔、松原 寛之、副田 昌宏、松本 剛、丹生谷道代、丹生谷康恵、藤井 宏枝、緑 尚美、吉中美也子、亀山 健一、早瀬 征敏、保島 秀幸、白石 克志、後藤 公克、中村 猛彦、村上真由美、木下 奈緒美、岩本 美保ほか(順不同)



第143図 調査地区割図



第144図 遺構配置図

2. 層 位 (第145図)

本調査地の基本層位は、第Ⅰ層灰色土、第Ⅱ層黄灰色土、第Ⅲ層暗褐色土、第Ⅳ層灰褐色土、第Ⅴ層灰茶褐色粘質土、第Ⅵ層黒灰色粘質土、第Ⅶ層黄褐色シルトである。

第Ⅰ層 — 耕作土。本調査地は調査以前は耕地整備された水田であった(厚さ15~20cm)。

第Ⅱ層 — 水田耕作に伴う床土である(厚さ5~8cm)。

第Ⅲ層 — 旧耕作土で調査地南側半分に堆積(厚さ6~10cm)。

第Ⅳ層 — 旧水田耕作に伴う床土で調査地南側半分に堆積(厚さ6~10cm)。

第Ⅴ層 — 第Ⅵ層の漸次層で調査地南側半分に堆積(厚さ8~15cm)。

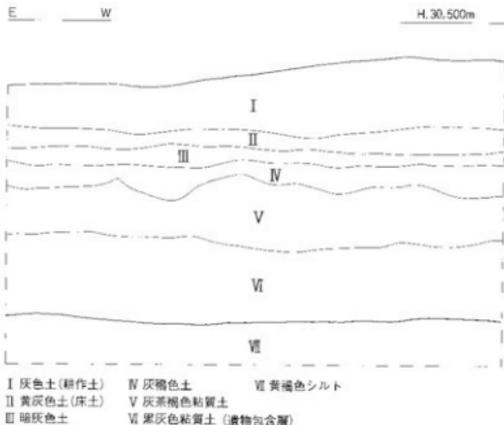
第Ⅵ層 — 遺物包含層で調査地南側半分に堆積(厚さ15~25cm)。

第Ⅶ層 — 地山と呼ばれるものである。

遺構は第Ⅶ層上面での検出である(第144図)。第Ⅶ層上面では堅穴式住居址12棟、独立柱建物址11棟、土坑27基、溝3条、柱穴400基余りである。ただし、第Ⅶ層上面検出の遺構は、その深さなどから考えると本来は第Ⅵ層以上の層から掘り込まれた可能性が高いものばかりである。なお、本調査については『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』(松山市教育委員会1989年)に概要を報告しているが、整理の結果、遺構認定及び遺構数が異なっており、取り扱いに注意していただきたい。

遺物は遺構内及び第Ⅲ、Ⅵ層からの出土である。第Ⅲ層からは、中近世の土師質土器・須恵質土器等が出土した。第Ⅵ層からは、弥生土器・土師器・須恵器のほか、石製品としては石斧、石鏃他が混在して出土した。注目すべきものとしては、この第Ⅵ層中出土のナイフ形石器がある。

第Ⅶ層上面の標高を測量すると、調査区北部が高く、南部に向けて傾斜をなしている。なお、調査にあたり6m四方のグリッドに分けた(第143図)。



第145図 基本層位図 (S=1:20)

3. 遺構と遺物

本調査では、弥生時代後期と古墳時代の遺構が主要な検出遺構となる。検出遺構は、少なくなく、さらに時期決定が難しいものが大半を占めるため、報告に際しては時代ごとに記述を行わず、遺構ごとに記述するものとする。

(1) 竪穴式住居址 (SB)

弥生時代後期 1 基、弥生時代と考えられるもの 1 基、古墳時代後期 10 基である。

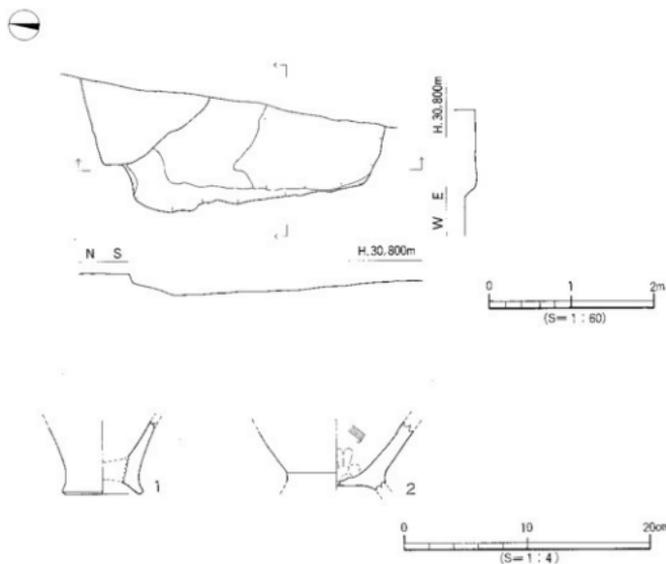
SB1 (第146図)

調査区東端、B 2 区にある。平面形態は隅丸方形を呈すると思われ、長さ 3 m、幅 1.5 m、深さ 20 cm を測る。住居内施設は未検出である。埋土は黒褐色土である。

遺物は、弥生後期土器がある。出土量は少なく完形品はない。

出土遺物 (第146図)

甕形土器 1、2 は甕形土器の底部片である。共にくびれの上げ底を呈する。1 の底部の器壁はやや厚いものである。端面はやや丸く仕上げられる。



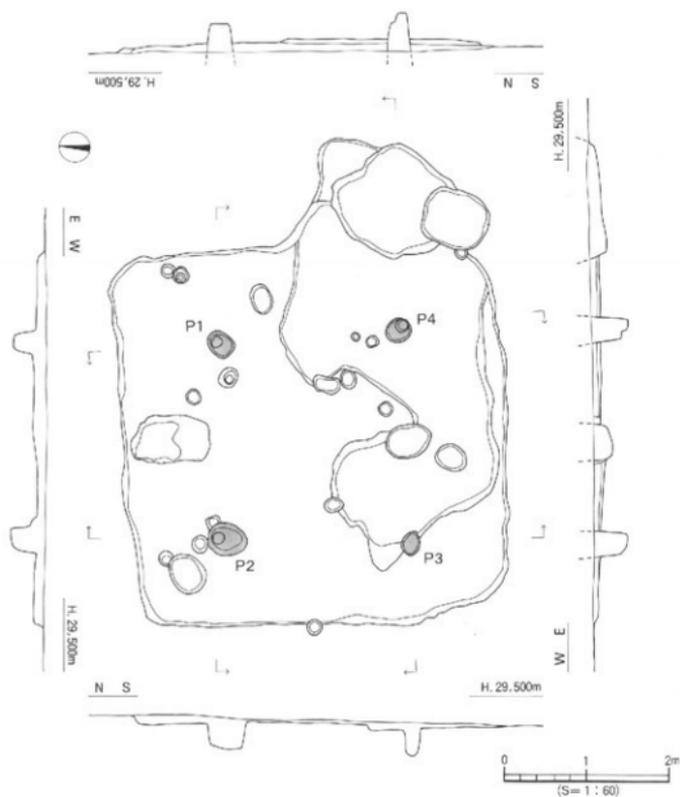
第146図 SB1測量図・出土遺物実測図

遺構と遺物

SB2 (第147図、図版61)

調査区の中央東、C3区にある。平面形態は方形を呈し、長軸6.3m、短軸6.2m、深さ20cmを測る。住居内施設には、支柱穴、カマドがあり、住居址床には小穴が数基検出されている。支柱穴は4基が認められ、直径30~50cm、深さ30~45cmを測る。カマドは北側中央にある。長方形を呈する。長軸1m、短軸0.6mを測る。カマド内の床面では焼土と炭を検出した。埋土は黒灰色土である。

遺物は、住居址全体に少量の土器が散布する状況で出土している。遺物には土師器と須恵器、土製品がある。



第147図 SB2 測量図

出土遺物 (第148図、図版63)

3～6は土師器の甕の口頸部である。3と4は口縁部の内外面に横方向の指撫でによる段が認められる。やや内湾気味に立ち上がる。5の口縁端部は水平な面をもつように仕上げられている。6の口縁端部はやや下方に拡張される。

7は土師器の小型丸底甕である。口縁部を一部欠損するもののは完形品である。口縁部は直立気味に立ち上がらせ口縁端は細く丸く仕上げられる。胴体部は内外面共に指頭圧痕が顕著に看取される。

8は土師器の高坏脚部片。柱部は三角錐状を呈する。裾部は短く外反して開く。

9は土製の紡錘車である。中央に焼成前穿孔が施されている。

10は須恵器の坏蓋である。11～13は須恵器の坏身である。16・17は須恵器の高坏の脚部である。14は須恵器の甕の底部である。15は須恵器の甕の口縁部である。

時期：出土遺物から古墳時代中期～後期の範囲に入るものである。

SB3 (第149図、図版62・63)

調査地の南側中央、D2・E1・E2区にある。坏面を検出するにとどまる。平面形態は方形を呈し、一辺5.6×4.8m、深さ10cmを測る。住居内施設には主柱穴がある。柱穴は4基あり、直径17～35cm、深さ22～33cmである。南東部にあるP4には切り合う柱穴がある。遺物は土師器、須恵器、石製品が少量出土している。住居址内埋土は黒灰色土である。

出土遺物 (第149図)

18は須恵器の坏身である。口縁端部は丸く仕上げられる。19は須恵器の坏蓋である。

20はメノウ製の小丸玉である。色は赤橙色で穿孔された両面に一見擦り磨いたような平坦面を持つ。

時期：出土遺物より古墳時代後期に比定される。

SB4 (第150図、図版64)

調査地の中央、D4区にある。平面形態は方形を呈し、一辺4.5×4.3m、深さ6cmを測る。住居内施設は不明である。遺物は土師器、須恵器がある。埋土は黒灰色土である。

出土遺物 (第150図)

21は土師器の甕の上半部である。口縁部の内外面には、横方向の指撫でによる段が認められる。

22・23は須恵器の坏身である。

時期：出土遺物より古墳時代後期に比定される。

SB5 (第151図、図版64)

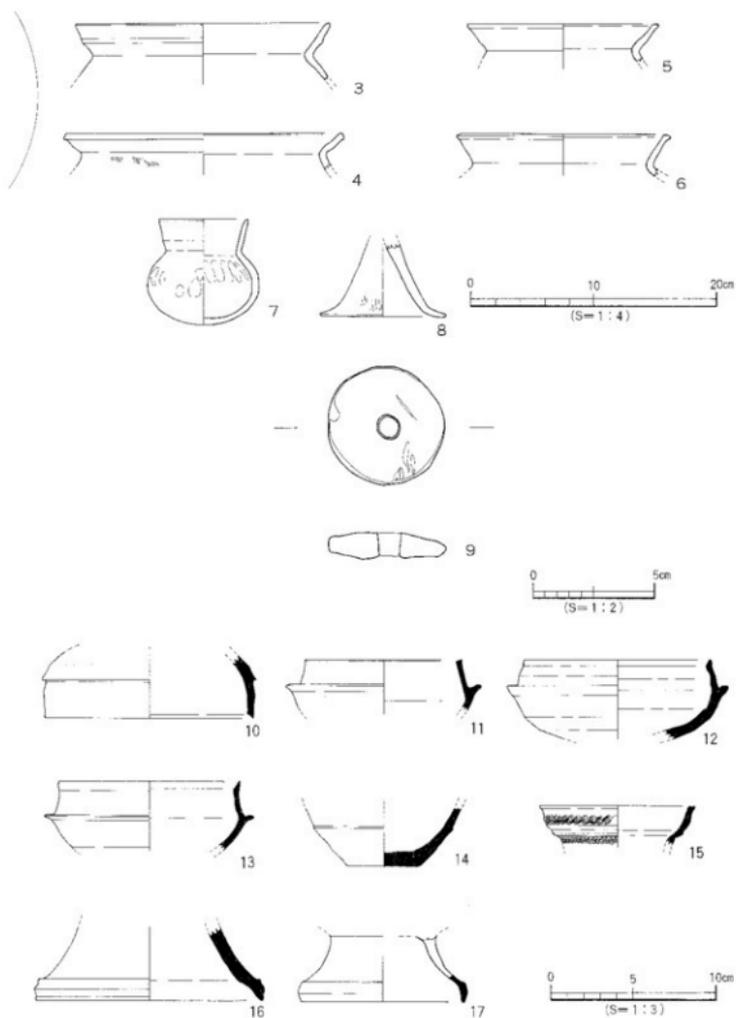
調査地の中央やや西寄り、E3区にある。平面形態は方形を呈すると考える。一辺4.5×4.5m、深さ20cmを測る。住居内施設には主柱穴があり、住居址床には小穴が数基検出されている。主柱穴は2基が認められ、P1は直径41cm、深さ34cm、P2は直径35cm、深さ10cmを測る。遺物は土師器、須恵器がある。住居址内埋土は、暗茶褐色土である。

出土遺物 (第151図)

24・25は土師器の甕の口頸部である。26・27は須恵器の坏蓋である。28は須恵器の坏身である。

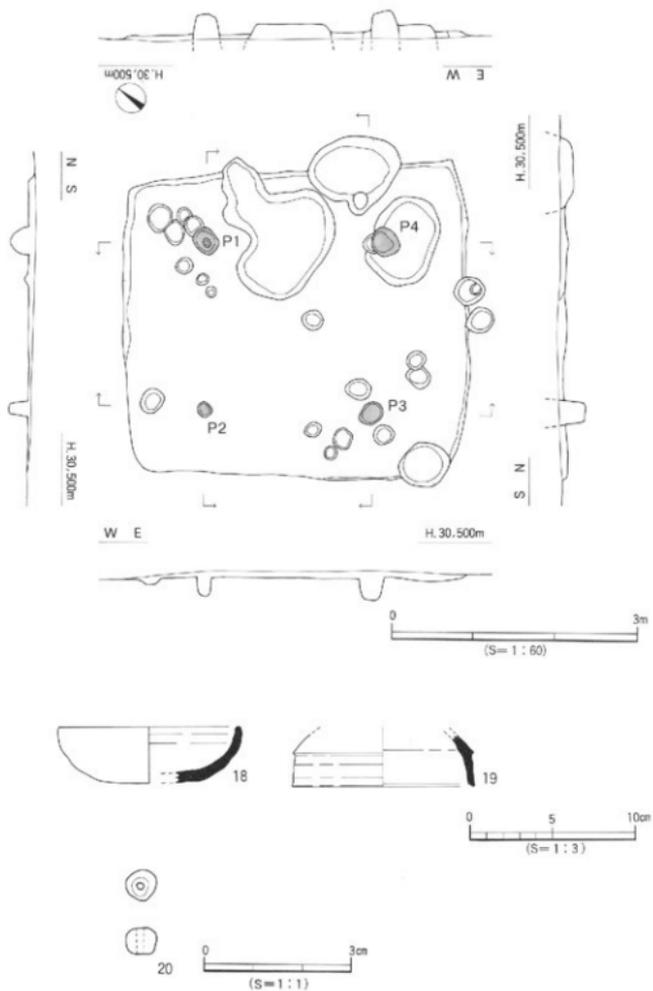
時期：出土遺物より古墳時代後期に比定される。

遺構と遺物



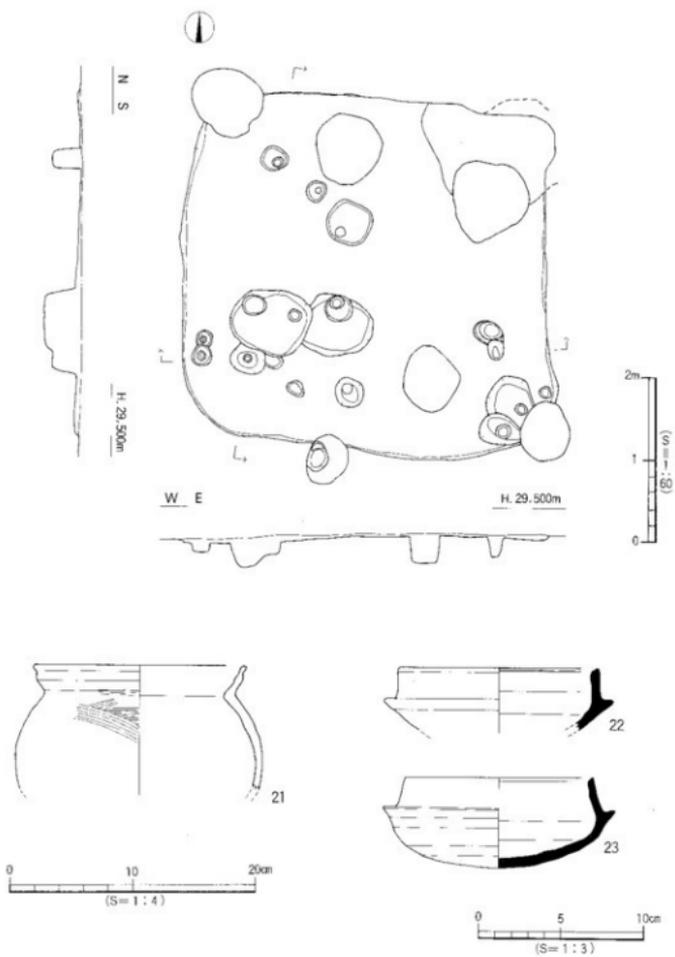
第148図 SB2出土遺物実測図

筋違日遺跡



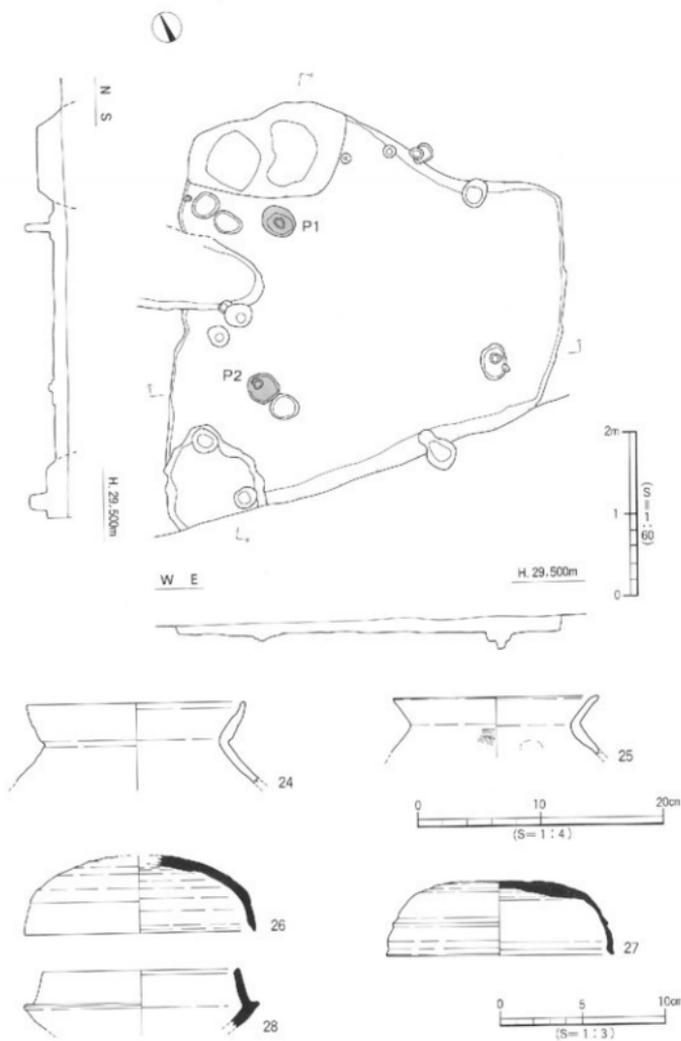
第149図 SB3測量図・出土物実測図

遺構と遺物



第150図 SB4測量図・出土遺物実測図

筋造H遺跡



第151図 SB5測量図・出土遺物実測図

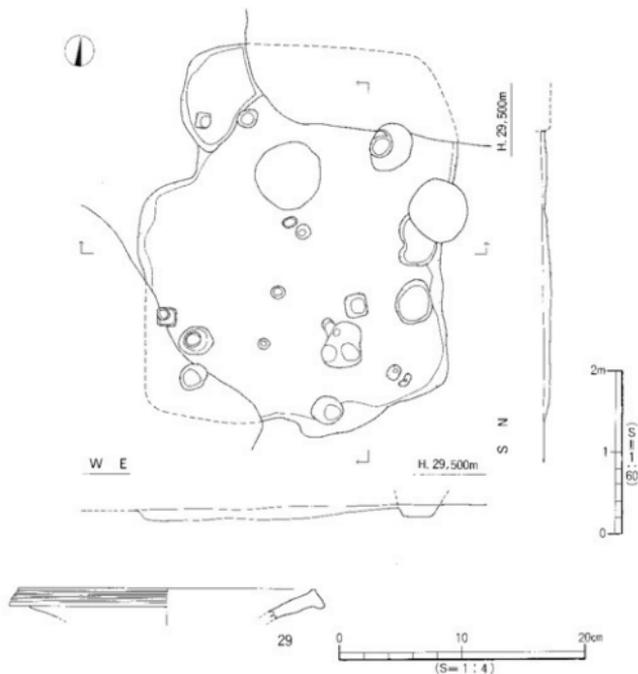
SB6 (第152図)

調査地の中央、D3、D4、E3、E4区にある。SB4、SB5に先行する。平面形態は隅丸長方形を呈する。長軸4.7m、短軸3.7m、深さ10cmを測る。住居址床には小穴が数基検出されているが、住居址に伴うものかは不明である。遺物は弥生土器の小片が出土している。埋土は黒色土である。

出土遺物 (第152図)

29は壺の口縁部になるものである。端面に4条の凹線文が施される。

時期：出土遺物は弥生後期に比定されるものであるが、混入品の可能性も考えられる。本住居址とSB4、SB5との切り合い関係より弥生後期～古墳時代後期の間とする。



第152図 SB6測量図・出土遺物実測図

SB7 (第153図、図版64)

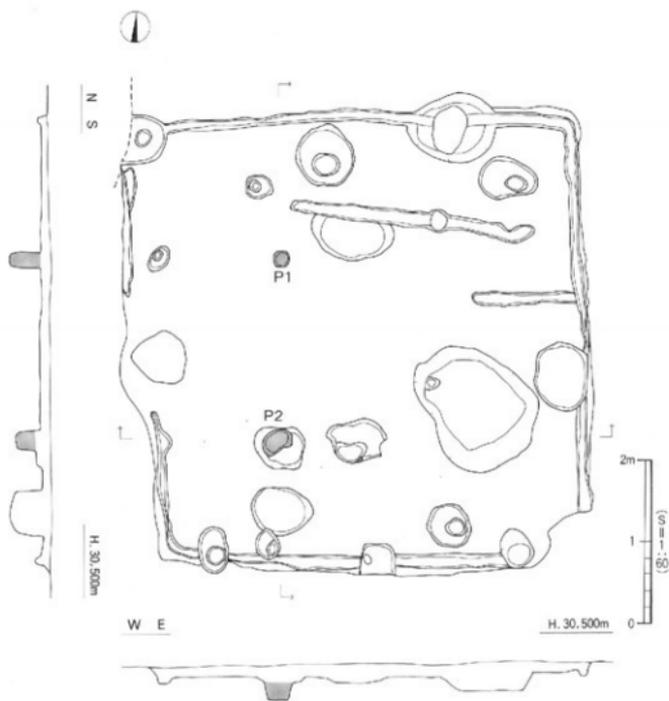
調査地の西側中央、F4、F5、G4、G5区にある。8号掘立柱建物址に先行する。平面形態は方形を呈する。一辺5.6×5.4m、深さ10cmを測る。主柱穴は2基を検出している。P1は直径20cm、深さ37cm、P2は直径38cm、深さ30cmを測る。また、住居址床面にて間仕切りと考えられる小溝が検出された。遺物は土師器、須恵器、ガラス製品が出土している。住居址内埋土は黒灰色土である。

出土遺物 (第154図)

30は土師器の壺の口頸部である。内面肩部に接合痕、指頭痕を看取する。31は土師器の壺の口頸部である。口縁中位に屈曲部をもち上位は直立気味に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。32は土師器の高坏の受部である。口縁部はやや外反し、口縁端部は細くおさめる。33は高坏の脚部である。中位に焼成前の円孔が穿たれる。

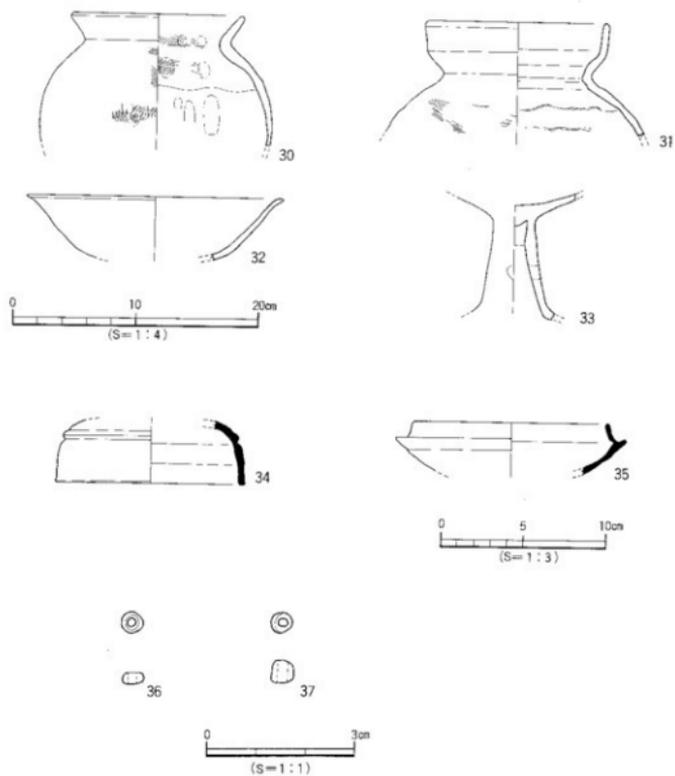
34は須恵器の坏蓋である。35は須恵器の坏身である。36・37はガラス小玉である。

時期：出土遺物より古墳時代後期に比定される。



第153図 SB7 測量図

遺構と遺物



第154図 SB7出土遺物実測図

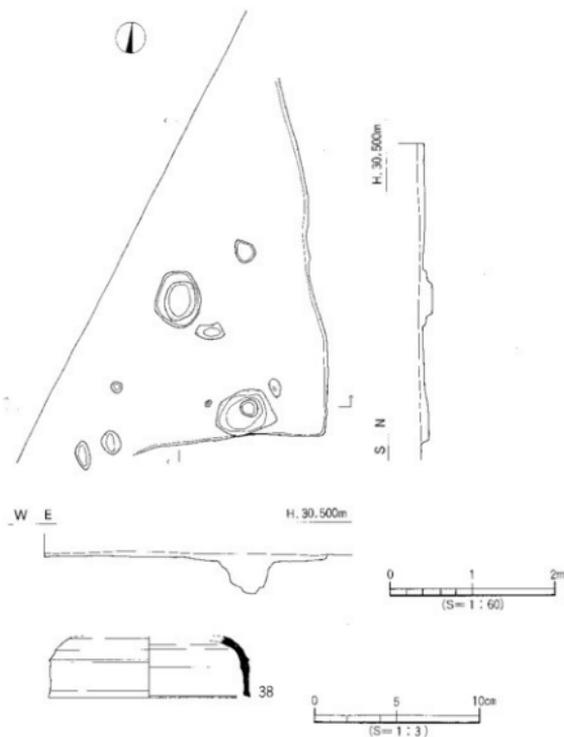
SB8 (第155図)

調査地の西側やや北寄り、F 5、F 6、G 5区にある。長軸4.4m、短軸2.4m、深さ8cmを測る。平面形態は方形を呈すると考える。住居址床には小穴が数基検出されているが本住居址に伴うものかは不明である。遺物は須恵器が出土している。住居址内埋土は黒灰色土である。

出土遺物 (第155図)

38は須恵器の坏蓋である。

時期：出土遺物より古墳時代後期に比定される。



第155図 SB8 測量図・出土遺物実測図

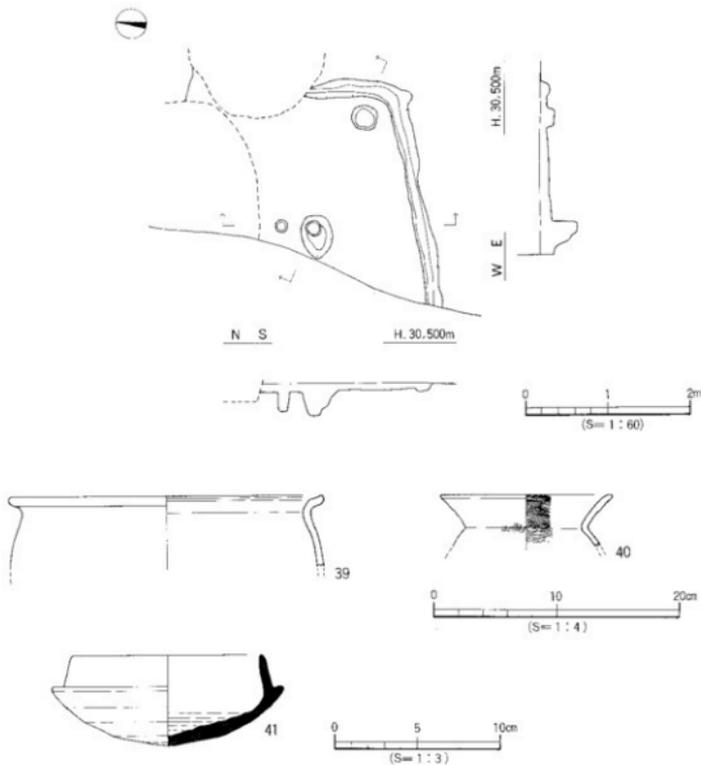
SB9 (第156図、図版65)

調査地の西側やや南寄り、G3、G4にある。長軸2.7m、短軸1.3m、深さ10cmを測る。平面形態は方形を呈すると考える。住居址床にて周壁溝を検出した。また小穴が数基検出されているが本住居址に伴うものかは不明である。遺物は土師器、須恵器が出土している。埋土は黒灰色土である。

出土遺物 (第156図)

39・40は土師器の甕の口頭部である。41は須恵器の坏身である。

時期：出土遺物より古墳時代後期に比定される。



第156図 SB9測量図・出土遺物実測図

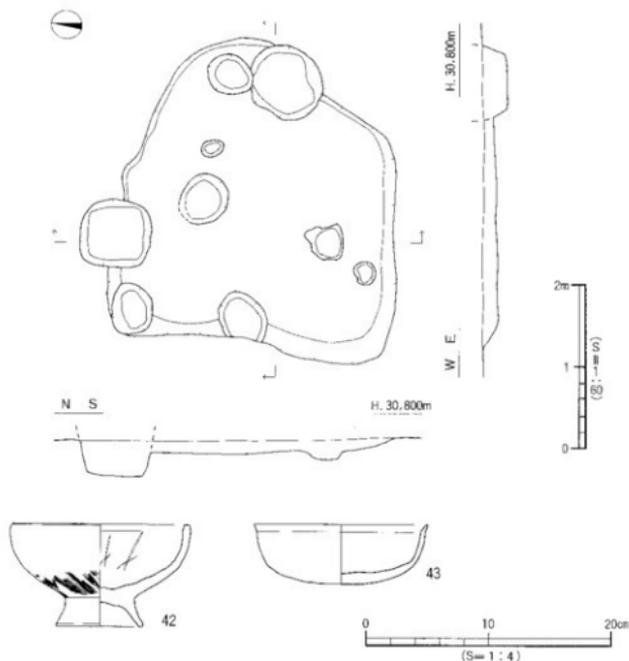
SB10 (第157図、図版65)

調査地の南側、E 1、F 1区にある。後世の削平を受けているが平面形態は方形を呈すると考える。一辺3.5×3.5m、深さ16cmを測る。埋土は黒灰色土である。遺物は土師器が出土している。

出土遺物 (第157図)

42は土師器の短脚付埴である。口縁端部の端面は水平に仕上げられる。43は土師器の坏である。口縁端部は短く外反し細く仕上げられる。

時期：出土遺物より古墳時代後期に比定される。



第157図 SB10測量図・出土遺物実測図

SB11 (第158図、図版65)

調査地の南西、G 2区にある。一辺3×3 m、深さ8 cmを測る。平面形態は方形を呈すると考える。遺物は土師器が出土している。住居址内埋土は、黒色土である。

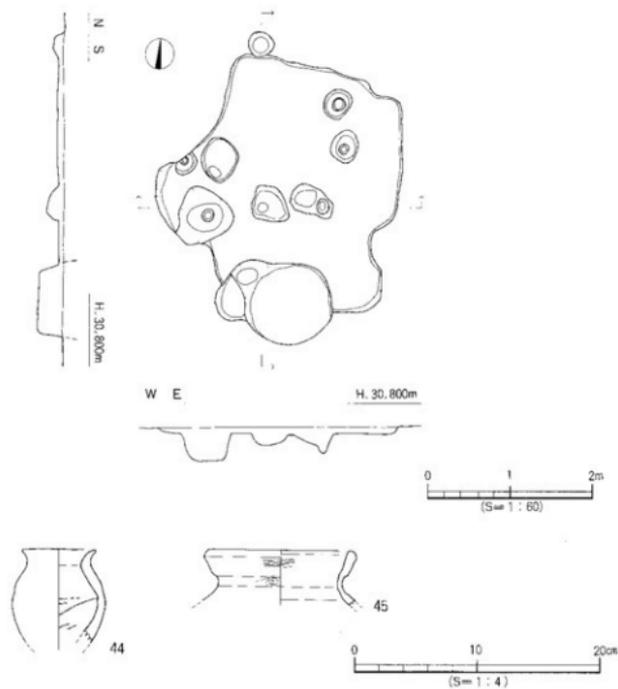
出土遺物 (第158図)

44は土師器の小型壺である。45は土師器の壺の口頸部である。口縁部は肥厚され、やや外反する。

時期：出土遺物より古墳時代後期に比定される。

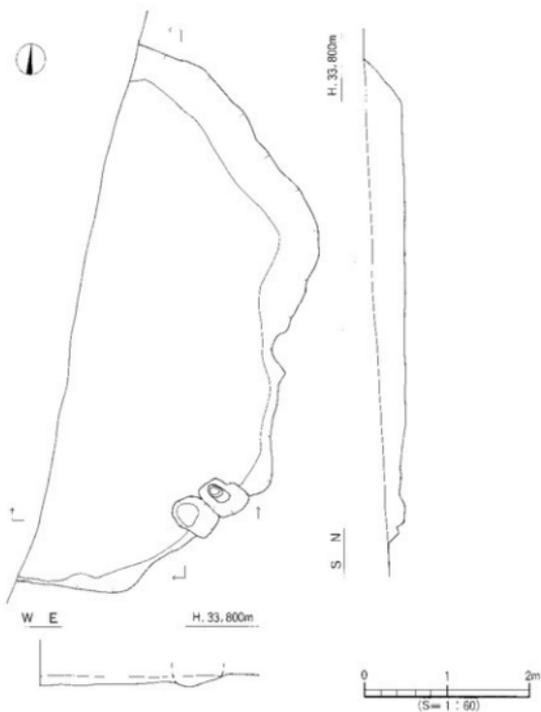
SB12 (第159図、図版65-67)

調査地の南西、G 2、G 3区にある。調査区西壁に接するため、長さ6.8 m、幅2.7 m、深さ46 cmの検出であった。平面形態は隅丸方形を呈すると考える。住居内施設は不明である。遺物は土師器、須恵器、ガラス製品が出土している。埋土は黒灰色土である。



第158図 SB11測量図・出土遺物実測図

筋違H遺跡



第159図 SB12測量図

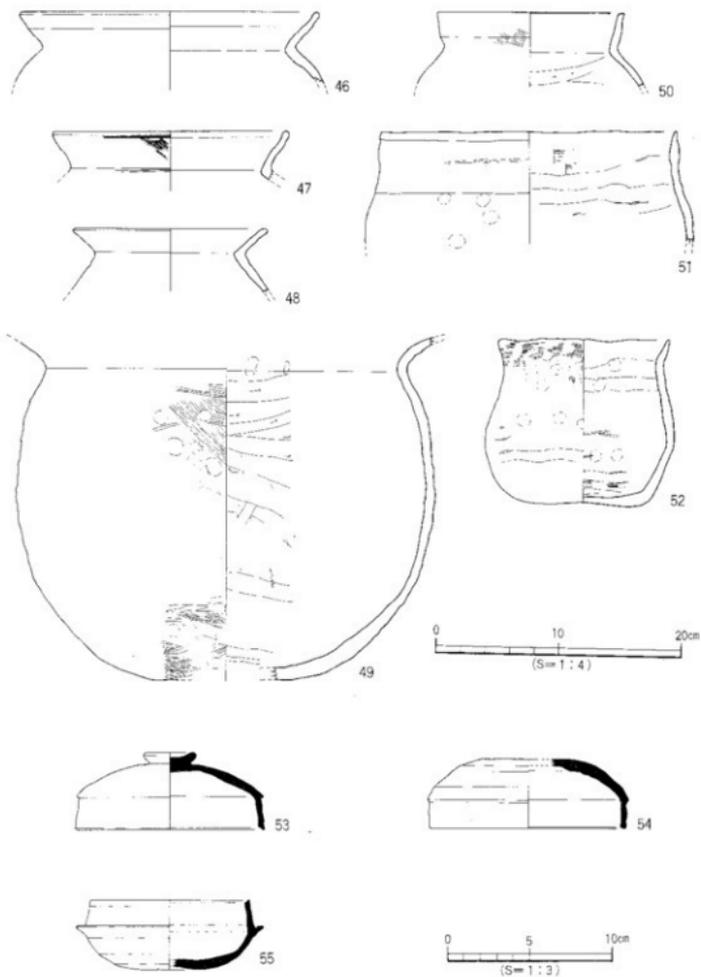
出土遺物 (第160・161図)

土師器・甕 (46~50) 46・47は、ともに口縁部の内外面には、横方向の指撫による浅い段が認められる。48は口縁部が「く」字状を呈する。口縁端部は丸く仕上げられる。49は口縁端部と底部を欠損する。器高と胴部幅がほぼ同一である。口縁部は外反する。50は外面に横方向の指撫により段をもつ。口縁端部は面をもつ。

土師器・鉢 (51・52) 51は内面に接合痕が顕著に看取できる。口縁部は直立し、口縁端部は先細りする。52は内外面に接合痕が顕著に看取できる。口縁部は外反しながら先細りする。

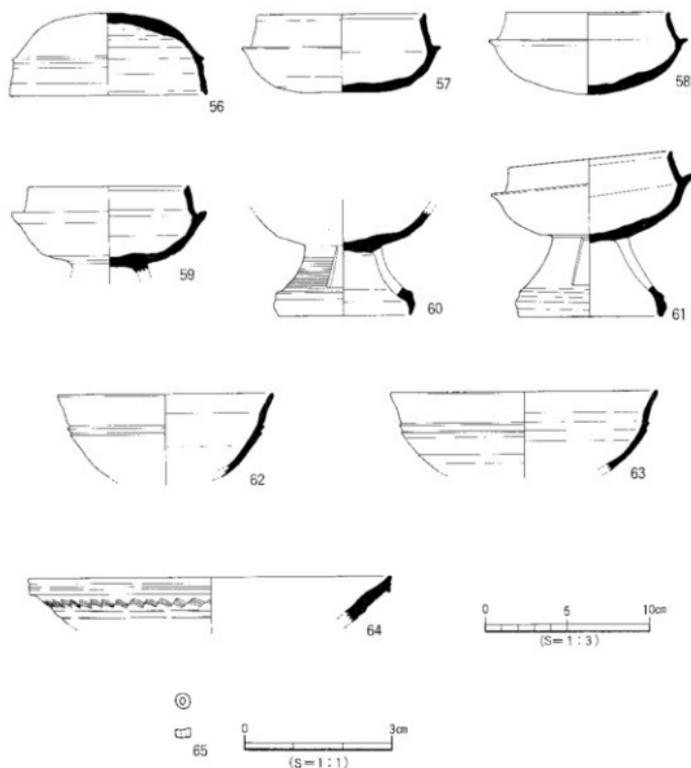
須恵器 (53~64) 53は甕である。53は器高の低い中央が凹形をなす、つまみが付されている。

遺構と遺物



第160図 SB12出土遺物実測図(1)

弥生 H 遺跡



第161図 SB12出土遺物実測図(2)

54は天井部が平坦をなす坏蓋である。55は口縁端部が内傾する段を有する坏身である。56は坏蓋で天井部が丸みを帯び、口縁端部に内傾する段を有する。57・58は坏身である。59～61はともに有蓋高坏である。60と61は脚部に台形状の透かしをもつ。なお、61は完形品である。62・63は無蓋高坏である。ともに外面中位に凸帯状の段を2条有する。64は甕の口縁部である。口縁端部に2条の四縁が巡る。65はガラス小玉である。

時期：出土遺物より古墳時代後期に比定される。

(2) 掘立柱建物址

掘立柱建物址は11棟を検出している。

1号掘立柱建物址 (第162図)

調査地の北東、B 6、C 6区にある。北側は調査区壁であるため1×2間のみの検出で、桁行2.31m、梁行3.33mを測る。南北棟で、平均柱間は東西1.67m、南北2.31mである。柱穴は円形を呈し、径45~92cm、深さ26~40cmを測る。柱痕径は17~19cmを測る。遺物は土師器、須恵器の小片がある。柱穴埋土は黒褐色土である。

時期：出土遺物より古墳時代とする。

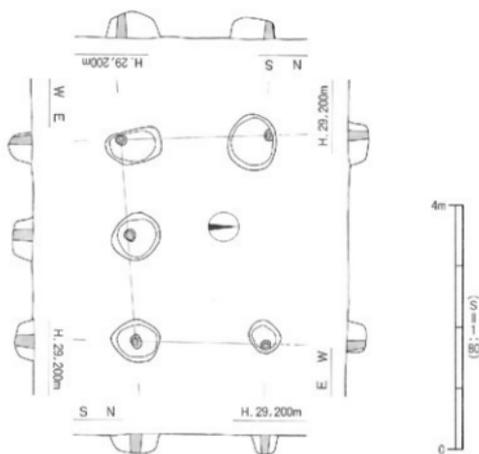
2号掘立柱建物址 (第163図)

調査地の北側、C 5、D 5区にある。3×2間で、桁行5.49m、梁行5.04mを測る。東西棟で、平均柱間は東西1.83m、南北2.34mを測る。柱穴は円形を呈し、径60~72cm、深さ18~37cmを測る。柱痕径は15~19cmを測る。遺物は勾玉1点 (S P 430) が出土している。柱穴埋土は黒灰色土である。

出土遺物 (第163図、図版67)

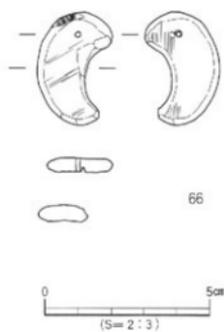
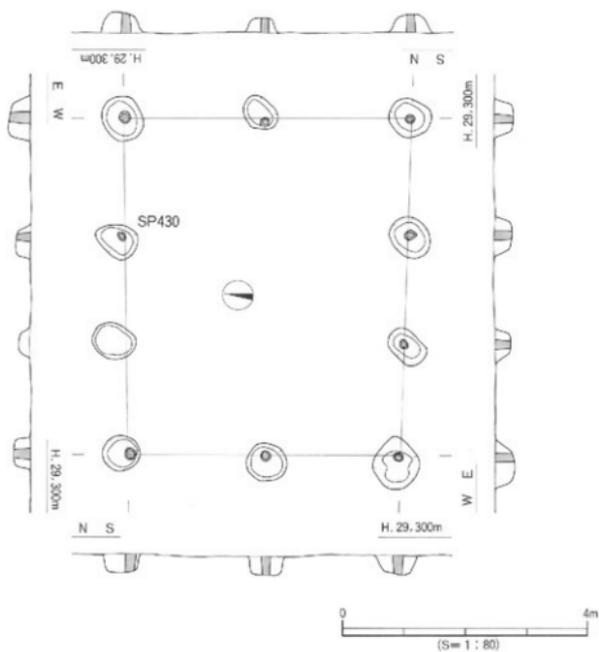
66は深い緑色の滑石製偏平勾玉である。全長3.3cm、厚さ0.5cmを測る。穿孔は両面からである。

時期：出土遺物より古墳時代とする。



第162図 掘立1測量図

筋流目遺跡



66

第163図 掘立2測量図・出土遺物実測図

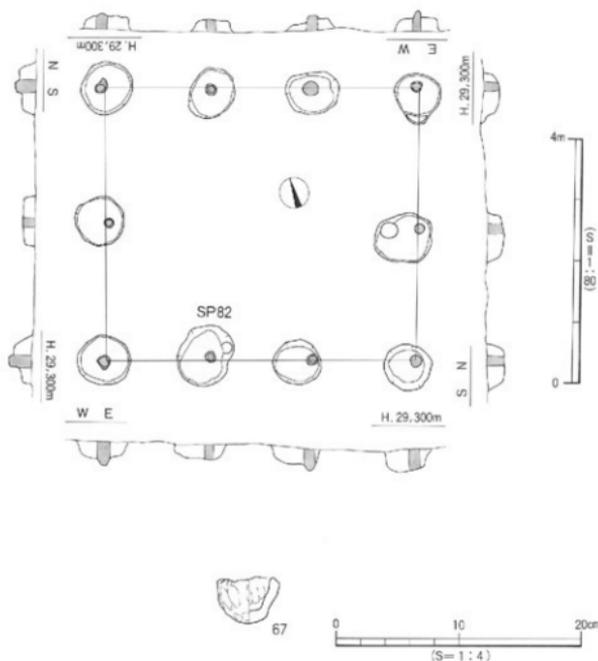
3号掘立柱建物址 (第164図)

調査地の中央やや西寄り、E 4、5区にある。3×2間で、桁行5.1m、梁行4.44mを測る。東西棟で、平均柱間は東西1.7m、南北2.22mを測る。柱穴は円形を呈し、径80~100cm、深さ20~38cmを測る。柱痕径は15~24cmを測る。遺物は土師器、須恵器の小片がある。柱穴内埋土は黒色土である。

出土遺物 (第164図)

SP82出土の67は鉢のミニチュア品で指頭圧痕が顕著である。器壁が厚い。

時期：出土遺物より古墳時代とする。



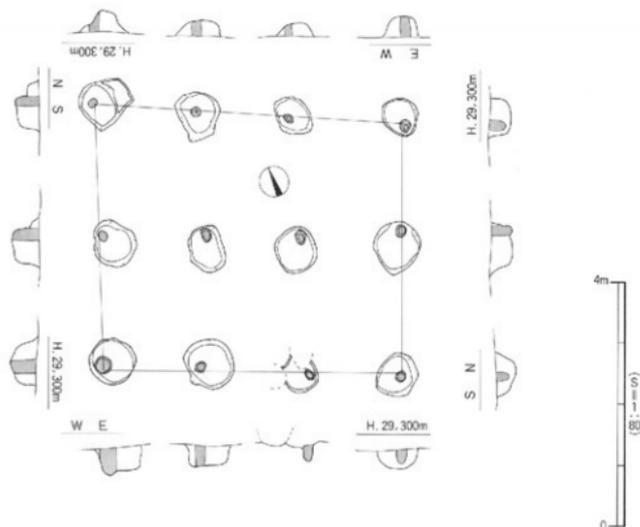
第164図 掘立3測量団・出土遺物実測図

筋違 H 遺跡

4号掘立柱建物址 (第165図)

調査地の中央、C4、D4区にある。3×2間の竈柱建物址で、桁行4.95m、梁行4.29mを測る。東西棟で、平均柱間は東西1.65m、南北2.15mを測る。柱穴は円形を呈し、径58~82cm、深さ20~42cmを測る。柱痕径は15~25cmを測る。遺物は土師器、須恵器の小片がある。埋土は黒灰色土である。

時期：出土遺物より古墳時代とする。

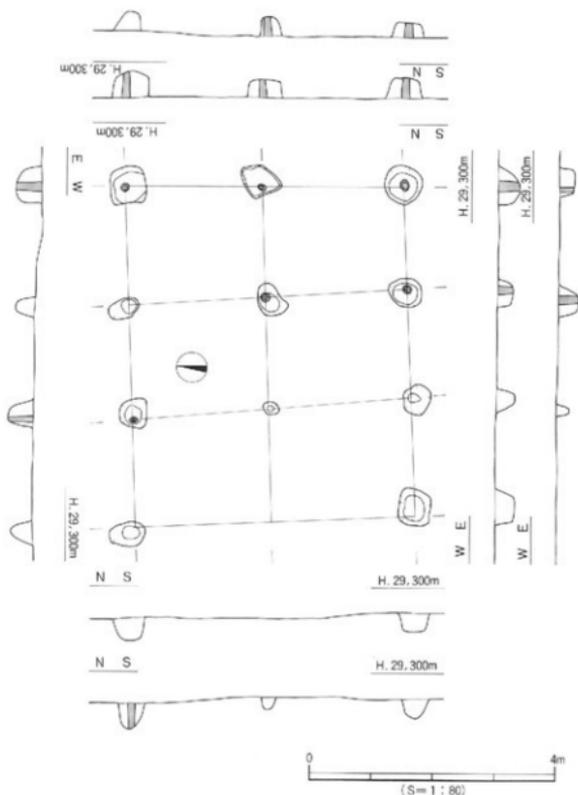


第165図 掘立4測量図

遺構と遺物

5号掘立柱建物址 (第166図)

調査地の西側、F 3、F 4、G 3、G 4区にある。3×2間で、桁行5.52m、梁行4.56mを測る。東西棟で、平均柱間は東西1.84m、南北2.28mを測る。柱穴は円形を呈し、径28~60cm、深さ20~43cmを測る。柱痕径は12~18cmを測る。遺物は土師器、須恵器の小片がある。埋土は暗灰色土である。
 時期：出土遺物より古墳時代とする。

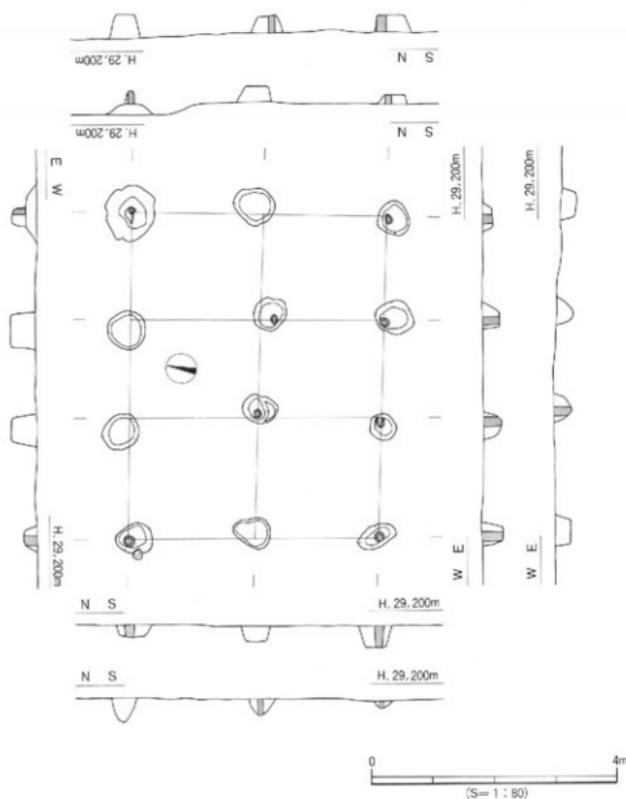


第166図 掘立5測量図

6号掘立柱建物址 (第167図)

調査地の南東、C2区にある。3×2間で、桁行5.4m、梁行4.08mを測る。東西棟で、平均柱間は東西1.8m、南北2.04mを測る。柱穴は円形を呈し、径42~68cm、深さ17~40cmを測る。柱痕径は10~17cmを測る。遺物は土師器、須恵器の小片がある。柱穴内埋土は、黒灰色土である。

時期：出土遺物より古墳時代とする。

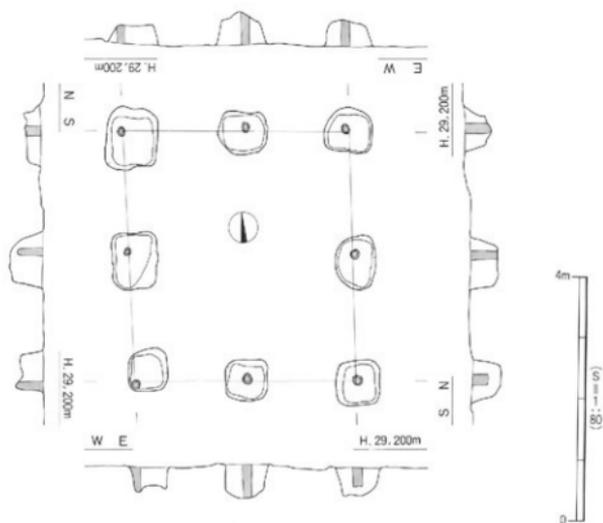


第167図 掘立6測量図

7号掘立柱建物址 (第168図)

調査地の南西、F2区にある。2×2間で、桁行4.08m、梁行3.66mを測る。南北棟で、平均柱間は東西1.83m、南北2.04mを測る。柱穴は隅丸方形を呈し、径64~103cm、深さ22~56cmを測る。柱痕径は12~16cmを測る。遺物は土師器、須恵器の小片がある。柱穴内埋土は、暗茶褐色土である。

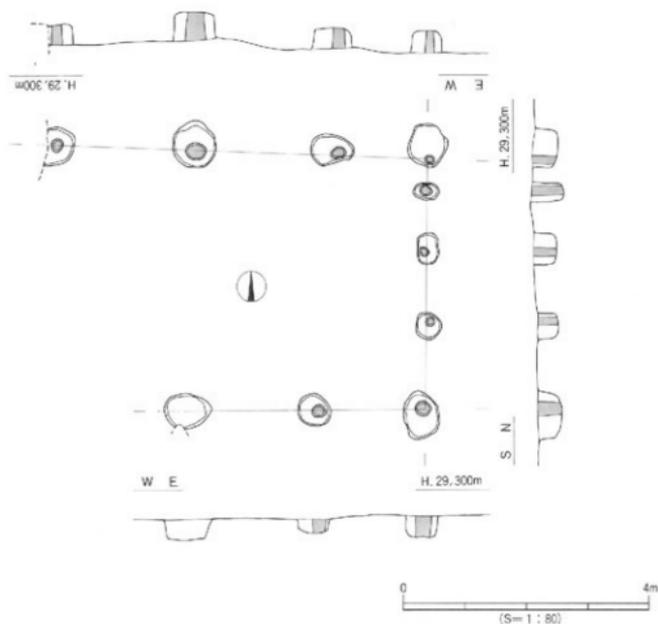
時期：出土遺物より古墳時代とする。



第168図 掘立7測量図

8号掘立柱建物址 (第169図)

調査地の西側中央、F 4、F 5、G 4、G 5区にある。3×3間で、桁行6.06m、梁行4.17mを測る。東西棟で、平均柱間は東西2.02m、南北1.39mを測る。柱穴は円形を呈し、径42~76cm、深さ20~47cmを測る。柱痕径は16~30cmを測る。遺物は土師器、須恵器の小片がある。埋土は、黒灰色土である。時期：出土遺物より古墳時代とする。



第169図 掘立柱 8 測量図

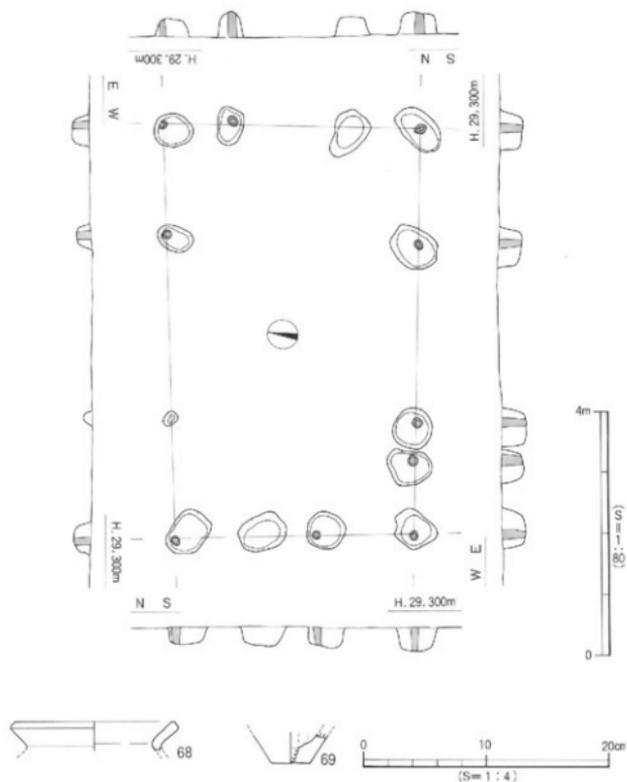
9号掘立柱建物址 (第170図)

調査地の北西、E 5、E 6、F 5、F 6区にある。3×3間で、桁行6.78m、梁行4.14mを測る。東西棟で、平均柱間は東西2.26m、南北1.38mを測る。柱穴はやや不整形な円形を呈し、径20~80cm、深さ15~40cmを測る。柱痕径は12~18cmを測る。遺物は弥生後期土器が出土している。埋土は黒色土。

出土遺物 (第170図)

68は寛形土器の口縁部である。口縁端部は面をもつ。69は小型壘形土器の底部である。平底を呈す。

時期：出土遺物に弥生土器があるが、混入の可能性も考えられるため弥生時代後期以降とする。



第170図 掘立柱9測量図・出土遺物実測図

10号掘立柱建物址 (第171図)

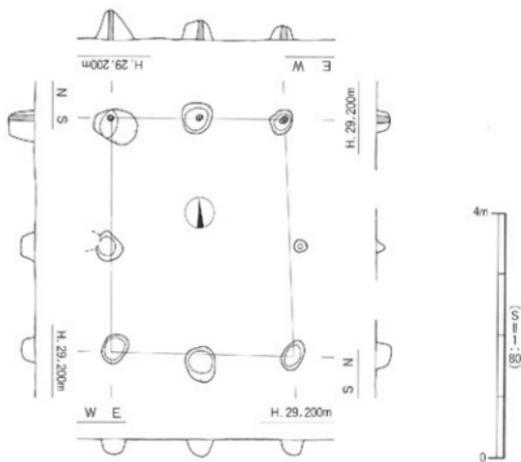
調査地の南側、D 2、3区にある。2×2間で、桁行3.87m、梁行2.97mを測る。南北棟で、平均柱間は東西1.49m、南北1.94mを測る。柱穴は円形を呈し、径20~72cm、深さ12~50cmを測る。柱痕径は12~17cmを測る。遺物は土師器、須恵器の小片がある。柱穴埋土は、暗灰色土である。

時期：出土遺物より古墳時代とする。

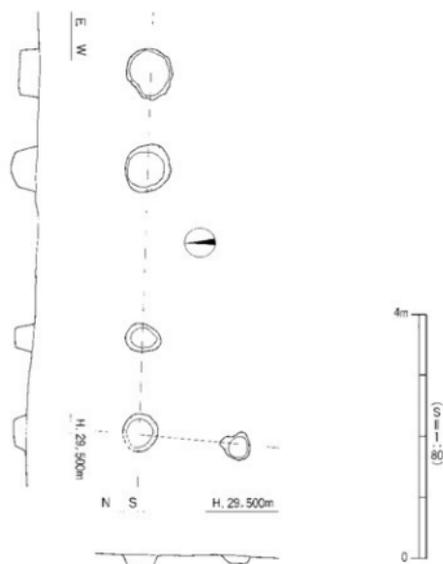
11号掘立柱建物址 (第172図)

調査地の南側中央、E 1区にある。南側は調査区南壁に接するため3×1間分の検出であった。規模は、桁行6.03m、梁行1.53mを測る。東西棟で、平均柱間は東西2.01m、南北1.53mを測る。柱穴は円形を呈し、径30~70cm、深さ16~40cmを測る。柱痕径は12~16cmを測る。遺物は土師器、須恵器の小片がある。柱穴埋土は、黒灰色土である。

時期：出土遺物より古墳時代とする。



第171図 掘立10測量図



第172図 掘立11測量図

(3) 溝 (SD)

溝は3条が検出されている。

SD1 (第144・173図、図版62)

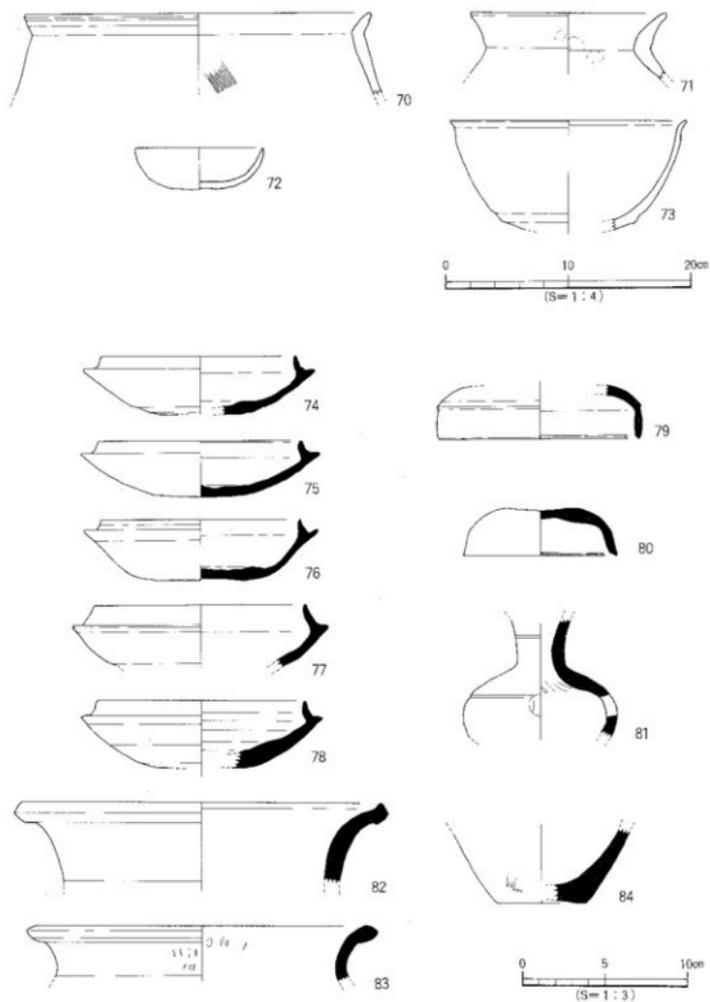
調査区南東部から湾曲して南西部に走る溝である。SB12に先行し、SB5に切られる。断面「U」字状で規模は幅48～136cm、深さ22～38cm、検出長29mを測る。南東から南西に向けてわずかに傾斜をなす(比高差20cm)。溝床は比較的平坦で、埋土は黒灰色土であるが、地点によっては溝床直上に砂の堆積がみられた。よって溝の性格は水利に伴うものとして考える。遺物は埋土中から土師器、須恵器が出土した。

出土遺物 (第173図、図版67)

土師器 (70～73)

70・71は甕形土器の口頸部である。ともにL1縁部に横方向の指撫によりわずかに段をもつ。72は坏である。口縁端部は細く仕上げる。73は高坏形土器の坏部である。口縁端部は短く外反する。

筋逸H遺跡



第173図 SD1出土物実測図

須恵器 (74~84)

坏身 (74~78) 74~76の立ち上がりは短く内傾し、端部は尖り気味に丸く仕上げる。77・78は底部立ち上がり部分にわずかに段をもつ。

坏蓋 (79) やや中厚された口縁部の端部は、わずかに段をもつ。

壺 (80) 口縁部は若干「ハ」字状にひろがる。端部は内面に鈍い段をもつ。

甕 (81) 横に強く張り出した体部と細い頸部をもつ。頸部中位と体部上位に浅い1条の凹線。

壺 (82~84) 82はゆるやかに外反し、口縁端部は上下方に肥厚している。83は口縁部は外反し、口縁端部は珠玉状におさめる。内外面共に回転ナデ調整を施す。84は底部片である。

(4) 土坑 (SK)

土坑は35基を検出しているが、記載以外の土坑については表55に記す。

SK3 (第174図)

調査地中央やや西寄り、E3、F3区にあり、SB5に切られる。平面形態は楕円形を呈すると考える。規模は長軸1.4m、短軸1m、深さ15cmである。埋土は茶褐色土である。出土物には土師器、勾玉がある。85~87は土師器である。85は高坏形土器の受部で、口縁端部は短く外反し細くなりながら丸く仕上げられる。86は高坏形土器の脚部である。87は甕形土器の口縁部である。88は硬玉製の勾玉である。時期は出土物より6世紀前半~6世紀後半に比定する。

SK30 (第175図)

調査地南西部、G1、G2区にあり、SB11を切る。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸1.4m、短軸1m、深さ24cmである。埋土は暗灰褐色土である。出土物には土師器、須恵器がある。89は土師器の甕形土器である。90は非陶器系須恵器の壺形土器である。口縁部及び頸部外面の断面三角形の凸帯が特徴である。また体部外面に叩き目が看取される。時期は出土物より6世紀以降に比定する。

(5) その他の遺構内出土遺物 (第176図)

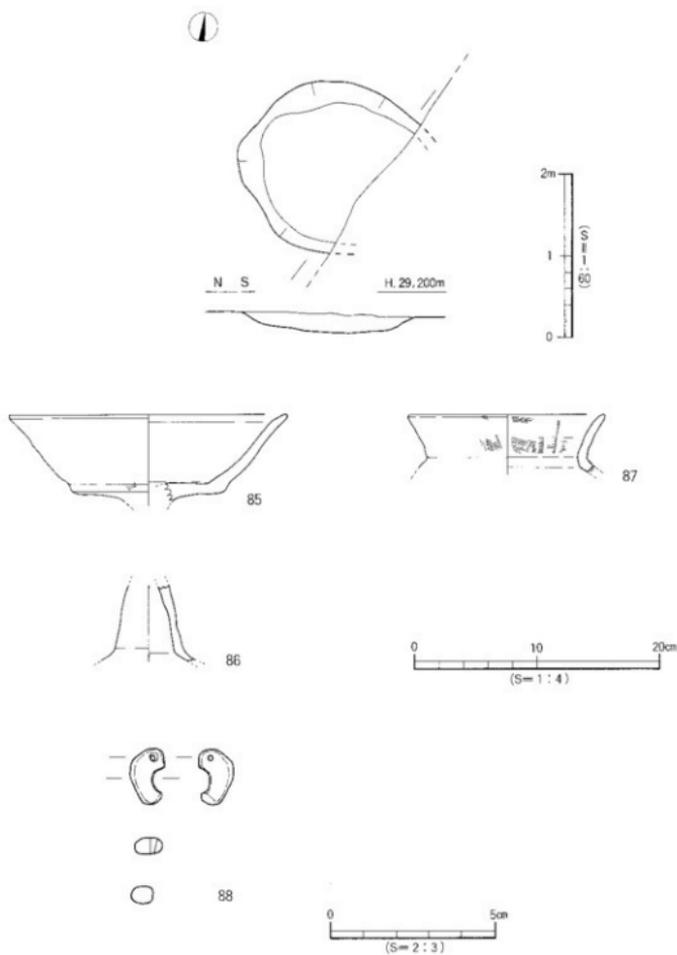
調査地内からは約400基の柱穴及びその他の遺構が検出された。ここでは、資料提示のみを行う。

土師器 (91~99) 91・92はSK12出土品で高坏形土器の坏部片である。93~96はSK25出土品である。93・94は高坏形土器の坏部片である。95・96は高坏形土器の脚部片である。97はSP327出土品で坏である。98はSP170出土品で甕形土器である。99はSP245出土品で高坏形土器の坏部片である。

弥生土器 100はSP250出土品で甕形土器の口縁部である。端面に2条の沈線が施される。

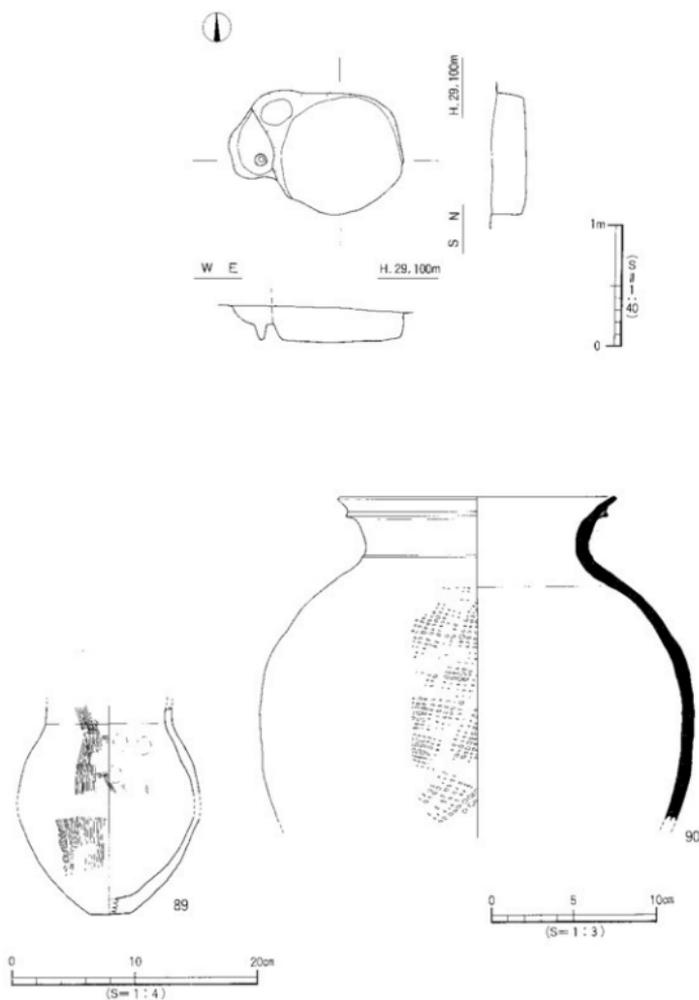
須恵器 (101~104) 101はSP128出土品で甕形土器の口縁部である。口縁端部は下方に拡張される。102はSP343出土品で甕形土器である。口縁部外面に2段の波状文が施される。103はSP12出土品で甕形土器である。104はSP120出土品で甕形土器の口縁部である。

前遺日遺跡



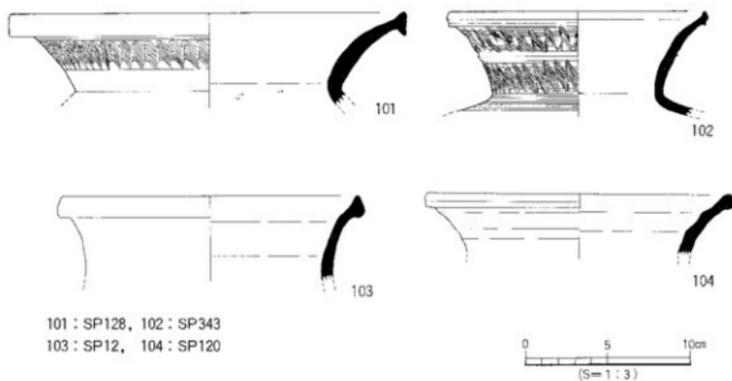
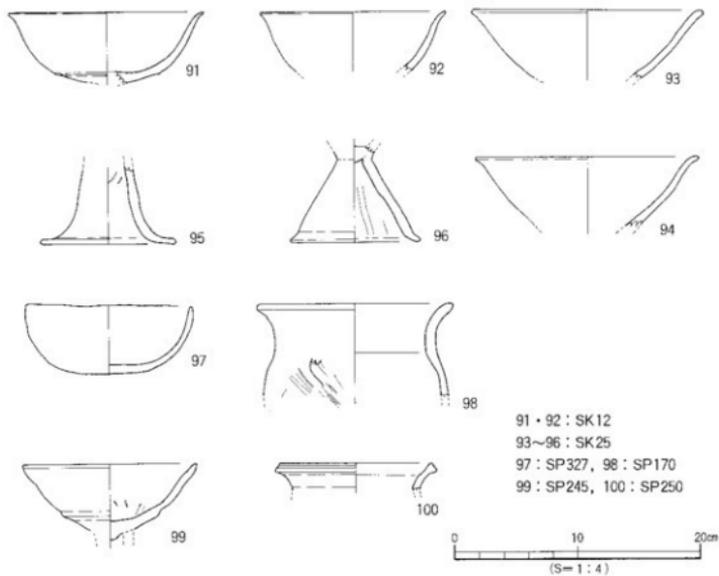
第174図 SK3測量図・出土遺物実測図

遺物出土区



第175図 SK30測量図・出土遺物実測図

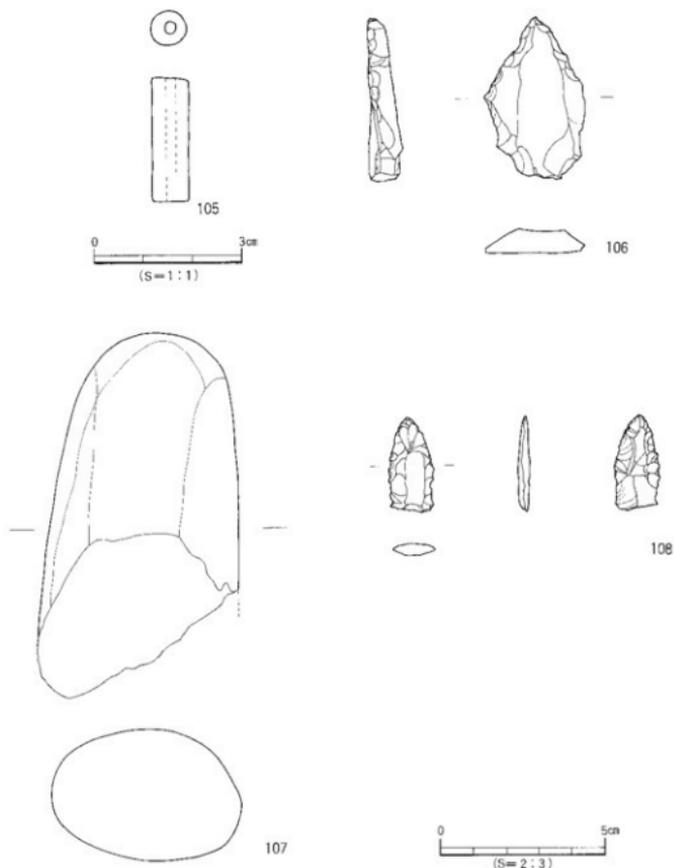
筋違日連跡



第176図 SK・SP出土遺物実測図

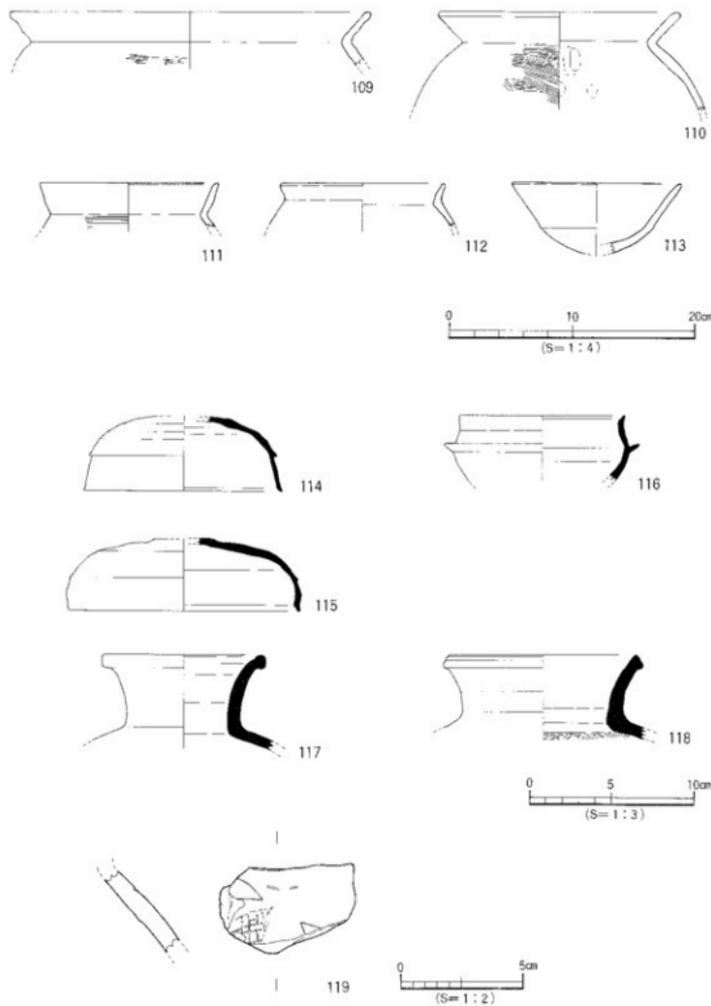
(6) 包含層出土遺物 (第177図)

105は淡緑色の碧玉製の管玉である。106はサヌカイト製のナイフ型石器である。107は緑泥片岩製の伐採斧である。刃部を欠損している。108は打製の石鏃である。



第177図 包含層出土遺物実測図

杨凌 H 遺跡



第178图 崖不明出土遺物实测图

(7) 層不明出土遺物 (第178図)

土師器 (109~113) 109~112は壺形土器の口頸部である。113は高環形土器の坏部片である。
須恵器 (114~118) 114・115は坏蓋である。116は坏身である。117・118は壺形土器の口頸部である。
絵画土器 (119) 119は壺形土器の肩部片である。弥生土器片と考える。

4. 小 結

本調査では、弥生時代、古墳時代の遺構と先土器時代から古墳時代までの遺物を確認した。以下、時代ごとにまとめをおこなう。

先土器時代

包含層からの出土であるが、瀬戸内地域特有の横長剥片素材のナイフ形石器ではなく、縦長の剥片素材の基部にブランディングが施された剥片尖頭器的様相を持つナイフ形石器 1点がある。松山平野においては先土器時代の出土物は少なく貴重な資料となるものである。

弥生時代

後期の遺構を検出している。

後期に比定されるSB1は、隅丸方形を呈すると考えられ、後期土器の破片が含まれている。また、調査地内においても散布的な出土状況ではあるが後期土器の破片が検出されている。よって調査地一帯には後期の集落遺構が展開していたものと推測できる。

古墳時代

古墳時代後半の竪穴式住居と掘立柱建物、土坑がある。

竪穴式住居SB2・7は、方形で、規模と方位がほぼ一致する。SB7からは主柱穴が2基のみの検出ではあるがSB2同様、4基の主柱穴をもっていたと考える。よって同時期に存在した可能性がある。また、SB8・9は共に部分的な検出にとどまったが方形で、規模と方位がほぼ一致する。よって同時期に存在した可能性が高い。さらにSB8・9とSB7は近接するため同時期の存在は考えにくい。SB3・5は規模は異なるものの方位はほぼ一致する。以上のことより竪穴式住居群に關して言及するならば、少なくとも3群（時期差）を考えることができる。

掘立柱建物址は竪穴式住居址との切り合い関係より古墳時代以降であることが分かるにとどまる。なお2号掘立柱を構成する柱穴内から「C」形の偏平勾玉（滑石製）が出土した。掘立柱建物建立時の祭祀の可能性も考えている。

以上、今回の調査結果を簡単にまとめた。本調査により古墳時代後半の居住区域がより明らかになったことは、大きな成果である。なお、報告に際しては重松佳久氏に助言をえた。記して感謝申し上げる。

〔文献〕

- 高尾和長 1996『東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査』松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター
- 梅木謙一・武正良浩 1995『福音小学校構内遺跡－弥生時代編－』松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター
- 栗田正芳・河野史知 1994『柳林高木遺跡2次調査地』『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター
- 梅木謙一 1994『松山平野における非陶器系須恵器に関する一考察』『東山古墳群－4・5次調査－』松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター
- 橋本雄一 1994『北久米浄蓮寺遺跡－3次調査地－』松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター
- 栗田茂敏 1993『影浦谷古墳』松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター
- 重松住久 1992『小野川水系における旧石器文化』『来住・久米地区の遺跡』御松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター
- 西尾幸剛 1989『久米高畑遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会
- 栗田茂敏 1991『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会、松山市立埋蔵文化財センター
- 山本健一 1995『筋違J遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ』松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター

遺構・遺物一覧

－凡例－

- (1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

遺構は武正、酒井、後藤、遺物は武正、木下、岩本、村上が作成した。

- (2) 遺物観察表の各記載について

法量欄 ()：復元推定値

形態・施文 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中部、柱→柱部、胴底→胴部底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。()の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1～4)多→「1～4mm大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

遺構一覧表

表53 竪穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時期	平面形	規 模		床面積 (m^2)	主柱穴 (本)	内部施設				周壁溝	備 考
			長さ×幅×深さ(m)				高床	土杭	伊	カマド		
1	弥生	隅丸方形	3.0×1.5×0.2		4.5							調査区東端に接する
2	古墳中期	方 形	6.3×6.2×0.2		39.06	4				○		
3	古墳	方 形	5.6×4.8×0.1		26.88	4						
4	古墳	方 形	4.5×4.3×0.06		19.35							
5	古墳	方 形	4.5×4.5×0.2		20.25							
6	古墳	隅丸長方形	4.7×3.7×0.1		17.39							
7	古墳	方 形	5.6×5.4×0.1		30.24	2 (4)						間仕切りの溝
8	古墳	方 形	4.4×2.4×0.08		10.56							
9	古墳	方 形	2.7×1.3×0.1		3.51							調査区西端に接する
10	古墳	不整方形	3.5×3.5×0.16		12.25							
11	古墳	不整方形	3.0×3.0×0.08		9.0							
12	古墳	隅丸方形	6.8×2.7×0.46		18.36							調査区西端に接する

表54 掘立柱建物址一覧

掘立	方位	規 模 (間)	桁 行		梁 行		床面積 (m^2)	備 考	時 期
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)			
1	南北	1+ α ×2	2.31+ α	2.31· α	3.33	1.59・1.74	7.69+ α		一部未検出
2	東内	3×2	5.49	1.83・1.77・1.89	5.04	2.37・2.31	27.67		
3	東西	3×2	5.10	1.71・1.65・1.74	4.44	2.25・2.19	22.64		
4	東西	3×2	4.95	1.77・1.5・1.68	4.29	2.07・2.22	21.24		
5	東西	3×2	5.52	1.89・1.83・1.8	4.56	2.22・2.34	25.17		
6	東西	3×2	5.40	2.0・1.62・1.78	4.08	2.06・2.02	22.03		
7	南北	2×2	4.08	2.1・1.98	3.66	1.71・1.96	14.93		
8	東西	3×3	6.06	1.47・2.31・2.28	4.17	1.5・1.14・1.53	26.27		
9	東西	3×3	6.78	1.83・3・1.95	4.14	1.17・1.8・1.17	28.06		
10	南北	2×2	3.87	1.77・2.1	2.97	1.44・1.53	11.49		
11	東西	3×1+ α	6.03	1.62・2.79・1.62	1.53+ α	1.53· α	9.23+ α		一部未検出

筋違H遺跡

表55 土坑一覧

(1)

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C2	不整円	舟底形	0.9×0.8×0.2	暗灰色土	炭化物		
2	D2	楕円	舟底形	1.5×0.95×0.35	黒色土			
3	E3 F3	半楕円	舟底形	1.4×1×0.15	赤褐色土	勾玉		
4	B3 C3	楕円	逆台形	1.1×0.9×0.28	暗褐色土	炭化物		焼土
5	B3	円	舟底形	1.1×1.1×0.15	暗褐色土	環形器 十坪瓦十器		
6	C4	円	皿状	1.1×1.1×0.1	黒色土			
7	C4	不整楕円	舟底形	1.1×1×0.15	黒色土			
8	D2	楕円	皿状	1.4×1×0.1	黒灰色土			
9	D2 E2	不整楕円	皿状	2.2×1.9×0.1	黒色土			
10	F4	楕円	逆台形	1.7×1.1×0.2	黒色土			
11	E3 F3	不整楕円	舟底形	1.4×1.2×0.1	暗灰色土			
12	G4	楕円	皿状	2.5×1.7×0.25	黒色土	土師質土器		
13	F4	不整楕円	逆台形	1.6×1.3×0.23	黒灰色土			
14	F5	楕円	舟底形	1.6×1.3×0.2	黒灰色土			
15	B3 C3	楕円	皿状	2×1.85×0.13	黒灰色土			
18	B4	楕円	舟底形	1.1×0.85×0.1	黒褐色土			
19	B4	不整楕円	舟底形	1×0.8×0.08	黒灰色土			
20	G4	半楕円	皿状	2.2×1.6×0.32	黒灰色土			
24	F2	楕円	皿状	1.3×1.1×0.14	暗褐色土			
25	F5 F4	楕円	皿状	1×0.55×0.15	暗褐色土			
26	F4	楕円	逆台形	0.8×0.6×0.19	暗褐色土			
27	F5	不整円	皿状	1.3×0.9×0.11	暗灰色土			
30	G1 G2	楕円	レンズ状	1.4×1×0.24	暗灰褐色土	陶質土器	古墳	第175図No.90

遺物観察表

土坑一覧

(2)

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
31	C2	円	舟底形	1.2×1.2×0.16	暗灰色土			
32	F2	楕円	逆台形	1×0.85×0.13	暗灰色土			
34	D1	半楕円	レンズ状	1.2×0.6×0.5	暗灰色土			
35	F2	不整楕円	皿状	1×0.55×0.15	暗灰色土			

表56 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B1・B2・C2 C3・D3・E3 F3	逆台形状	29×1×0.3	黒灰色土	土師質土器	古墳	
2	B4	皿状	4.8×0.5×0.1	黒褐色土			
3	B2・B3・C2	皿状	3.3×0.8×0.1	黒灰色土			

表57 SB 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径 (6.6) 残高 7.0	くびれの上げ底。 底部内面に指頭+灰取	マメツ	マメツ	赤褐色	石長・金ツボ (1-3) ○		
2	甕	残高 5.6	小さいくびれの上げ底。	磨滅の為不明	◎刷毛 ◎ナデ	浅黄褐色	密 ○		

表58 SB 2 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
3	甕	口径 (20.8) 残高 4.4	口縁部わずかに内湾。 口縁部には丸みのある凹。	マメツ	マメツ	淡黄灰色	石長・金ツボ (1-2) ○		
4	甕	口径 (22.4) 残高 3.0	口縁部わずかに内湾。 口縁部には「コ」字状におさめる。	◎ナデ ◎ハケ	マメツ	淡灰褐色	石長・金ツボ (0.5-1) ○		
5	甕	口径 (15.5) 残高 3.1	やや内湾する口縁部。 底部はわずかに水平面をなす。	マメツ	マメツ	淡白灰褐色	石長・金ツボ (1-1.5) ○		
6	甕	口径 (16.8) 残高 3.4	口縁部には横ナデによりわずかに拡張。	マメツ	マメツ	黒褐色	石長 (1-3) ○		63
7	小型 丸底壺	口径 (7.2) 器高 8.6	口縁部はやや内湾気味。 体部には内外面とも指頭+灰取	◎横ナデ ナデ	◎横ナデ ナデ	黄褐色	密 ○		63
8	高坏	口径 (10.0) 残高 6.0	体部は内側に広がりが、裾部は外反。	ハケメ	マメツ	明灰褐色	密 ○		

筋違H遺跡

SB2 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図様
				外面	内面				
9	十鉢	口径 4.8 径幅 4.8 厚み 1.1	焼成前びり孔。内径径9.5mm、 中央がやや突出する。	ナア		橙 色	石・長ウツモ (0.5-3) ○		63
10	環蓋	口径(12.8) 残高 4.9	口縁部は内径気味に下がり、 口縁部は内傾する。	回転ナア	回転ナア	灰 色	麻粒の灰石		
11	坏身	口径(9.6) 残高 3.0	立ち上がりは内傾し、肩部は 面をなす。	回転ナア	回転ナア	暗青灰色	長石 (-0.5) ○		
12	坏身	口径(11.4) 残高 4.8	立ち上がりは内傾し、肩部は 尖り気味。	ナア	ナア	青灰色	長石 (1) ○		
13	坏身	口径(11.0) 残高 4.2	立ち上がりはやや外傾し、肩 部は尖る。	回転ナア	回転ナア	青灰色	密 ○		63
14	皿	底径(4.2) 残高 3.5	平底を呈し、中心に線跡をも つ。	回転ナア	ナア	回転ナア	淡灰褐色	長・金ウツモ (-1)	63
15	皿	口径(9.4) 残高 2.4	外反する口縁部。口縁部と頸 部に流状文を施す。	回転ナア	回転ナア	回転ナア	暗青灰色	石・長 (-1) ○	63
16	高坏	口径(13.8) 残高 4.5	脚部は凡の字状に外反して下 がり、肩部には、上外方にの びる凸縁がある。	回転ナア	回転ナア	回転ナア	青灰色	石・長 (-1) ○	
17	高坏	底径(8.4) 残高 3.8	脚部は凡の字状に外反して下 がり、肩部付近で段をなし内 傾、スカシを取。	回転ナア	回転ナア	回転ナア	白灰色	石・長 (-1) ○	

表59 SB3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図様
				外面	内面				
18	坏身	口径 11.0 径高 3.4	口縁部は内径しながら立ち、 肩部は丸くおさめる。	回転ナア	回転ナア	灰白色	密 ○		63
19	環蓋	口径(11.1) 残高 3.2	口縁部は外反気味に下がり、 口縁部は反く開く。	マメツ	回転ナア	明灰色	密 △		63

SB3 出土遺物観察表 装飾品

番号	品 種	遺存状態	材質・色	法 量				備考	図様
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
20	玉	完形	メノウ 赤褐色	0.6	0.6	0.5	0.3		63

表60 SB4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図様
				外面	内面				
21	甕	口径(17.0) 残高 10.1	内湾する口縁部。口縁部中部 にわずかに凸部をもつ。 口縁部は丸い。	刷毛目	マメツ	淡灰黄褐色	石・長ウツモ (0.5-6) ○		64
22	坏身	口径 12.0 残高 3.8	立ち上がりは、やや内傾気味。 肩部はやや深い。	ナア	回転ナア	淡灰色	密 (散砂粒) ○		施軸
23	坏身	口径 11.4 器高 5.5	口縁部は内傾し、立ち上がる。 肩部は内傾。	回転ナア (刷毛目ヘラナズリ)	回転ナア 回転ナア	灰 色	密 ○		64

遺物観察表

表61 SB 5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
24	甕	口径(19.6) 残高 6.7	口縁部は内傾し丸くおさめる。	マメツ	①ナデ マメツ	淡黄灰褐色	石・長(0.5-1.5) △		64
25	甕	口径(16.7) 残高 4.9	口縁部は短く、外反。端部は丸くおさめる。	①横ナデ ②ハケメ	ナデ	暗灰赤褐色	石・長(1-4) △		64
26	坏蓋	口径(14.0) 残高 5.7	天井部は丸く、縁は浮かび上がる程度。	①回転ナデ	①回転ナデ	暗灰色	石英(1-2) ○		
27	坏蓋	口径(13.8) 残高 4.5	天井部はやや平坦。縁は段差によって浮かび上がる。	①回転ナデ	①回転ナデ	淡青乳白色	石・長(1-2) △		64
28	坏身	口径(11.8) 残高 3.6	立ち上がりは内傾。端部は丸くおさめる。	①回転ナデ ナデ	①回転ナデ	乳白色	石・長(1-2) △		64

表62 SB 6 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
29	甕	口径(24.0) 残高 2.5	口縁端面に沈線4条。下方に拡張される。	ナデ	ナデ	①橙色 ②黒褐色	石・長(1-3) ○		

表63 SB 7 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
30	甕	口径(14.2) 残高 10.6	外反する口縁部。口縁部は丸くおさめる。内面は折返し裏が露出される。	①ナデ ②ハケメ	ハケメ	明淡茶褐色	石・長(0.5-1) ①クワンモ(4) △		64
31	甕	口径(14.6) 残高 9.2	段を有する口縁部。肩部は細く丸くおさめる。	ハケ→ナデ	①回転ナデ ②ナデ	淡茶褐色	石・長(1-2.5) △		64
32	高坏	口径(21.0) 残高 5.1	外傾外反する口縁部。端部は丸くおさめる。	マメツ	マメツ	明粉褐色	石・長(1) ○		
33	高坏	残高 10.4	脚部片。充填技法。内孔はφ11mm。	マメツ	マメツ	明淡茶褐色	石・長(1-3) △		
34	坏蓋	口径(10.6) 残高 3.8	縁はわずかに突出する。口縁部は内傾。	①回転ナデ ②回転ヘラケズリ	①回転ナデ	淡灰色	長石(1) ○		
35	坏身	口径(11.9) 残高 3.1	立ち上がりは内傾する。端部は丸い。	ナデ	ナデ	淡青灰色	石・長(0.5-2) ○		

SB 7 出土遺物観察表 ガラス製品

番号	品 種	遺存状態	材質・色	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
36	ガラス玉	完形	ガラス 薄青色	0.45	0.4	0.24	0.06		64
37	ガラス玉	完形	ガラス 青色	0.45	0.13	0.45	0.1		64

表64 SB 8 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
38	坏蓋	口径(12.2) 残高 3.7	口縁部はやや内傾気味に下がる。端部は内傾。	①回転ナデ	①回転ナデ	灰淡青色	長(1-3) 微砂粒 ○		

筋違日遺跡

表65 SB 9 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
39	甕	口径(23.3) 残高 5.9	短く外反する口縁部。肩部はやや上方を向く。	マメツ	マメツ	浅黄褐色	密 ○		65
40	甕	口径(14.0) 残高 4.2	外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	ハケメ	ハケメ	明茶褐色	密 ○		
41	坏身	口径(11.5) 残高 5.5	直線的に内傾する立ち上がり。端部は丸く、受部は外方向。	回転ハケズリ	ナダ	灰色	密 ○		65

表66 SB 10 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
42	短頸付甕	口径(14.6) 唇高 8.4	受部は、内傾して立ち上がる。脚部はやや外湾気味。	ナダ	ナダ	茶褐色	密 ○		65
43	坏身	口径14.2 唇高 4.9	口縁端部は短く外反する。	ナダ	ナダ	暗灰茶褐色	密 ○		

表67 SB 11 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
44	短頸付甕	口径(6.0) 残高 7.7	口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。	マメツ	マメツ	褐色	石・長・ウソキ (1-5) ○		65
45	甕	口径(11.8) 残高 4.4	外傾する口縁部の外傾が、やや肥厚される。	ハケメ	ハケメ	淡灰赤褐色	石・長(1) ○		65

表68 SB 12 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
46	甕	口径(24.0) 残高 5.8	口縁部はわずかに内湾する。	マメツ	マメツ	灰茶褐色	石・長 (1-3) ○		
47	甕	口径(19.4) 残高 4.0	口縁部はわずかに内湾する。肩部は丸く仕上げられる。	ハケメ	ハケメ	淡灰黄褐色	石・長・ウソキ (1-3) ○		
48	甕	口径(16.0) 残高 5.0	口縁部は「く」字状を呈する。端部は丸くおさめる。	ナダ	ナダ	赤褐色	石・長・ウソキ (1-2) ○		65
49	甕	口径(14.8) 残高 28.0	外反して立ち上がる口縁部。唇部の傾きが直立つ。	ハケメ→ナダ	ナダ	浅黄褐色	石・長・ウソキ (0.5-2) ○		66
50	甕	口径(15.4) 残高 6.1	口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。肩部にわずかな凹み。	ハケメ	ナダ	明茶褐色	石・長(1) ○		65
51	甕	口径(24.0) 残高 9.0	先細りしながら立ち上がる口縁部。唇部は丸くおさめる。	マメツ	ハケメ	淡灰黄褐色	石・長(1) 金 ○		65
52	甕	口径 14.0 器高 13.5	器内外ともに指頭圧痕を有取。底部はわずかに凹む。	回転ハケメ 密ナダ	ナダ	淡茶褐色	石・長(1) ○		66
53	坏蓋	口径 11.5 残高 4.7	有蓋高杯の蓋。つまみ中央部は凹む。	回転ナダ 密ナダ	回転ナダ	明灰色 (黒灰色)	密 ○		66
54	坏蓋	口径(12.0) 残高 4.2	天井部は平坦。縁はわずかに突出する。	密ハケズリ 回転ナダ	回転ナダ	灰色	長(0.5-1) ○		66
55	坏身	口径(9.7) 残高 4.2	立ち上がりは内傾し、端部はわずかに凹む。	密ハケズリ 回転ナダ	回転ナダ	灰白色	密 ○		66

遺物観察表

SB12出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
56	土甕	口径 12.0	天井部は丸く、後は段差により浮かび上がらせている。口縁部は凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密		66
		残高 5.0		① 回転ヘラケズリ					
57	坏身	口径 10.2	立ち上がりは内傾する。口縁部は凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密		石・長(1~2)
		残高 4.8		② 回転ヘラケズリ					
58	坏身	口径 10.0	立ち上がりは内傾しつつ、やや外反。一部自然種付着。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密		66
		器高 5.0		③ 回転ヘラケズリ					
59	高坏	口径 9.8	立ち上がりは内傾し、肩部は段を有す。	ナデ	回転ナデ	青灰色	密		
		残高 5.3							
60	高坏	口径(8.0)	肩部はハの字状に外反して下がる。三方にスカンあり。	回転ヘラケズリ	ナデ	灰白色	密		
		残高 6.4		回転ナデ					
61	高坏	口径 10.0	完形品。立ち上がりは内傾する。三方にスカンあり。	回転ナデ	ナデ	青灰色	密		長(0.5~2)
		底径 8.8		④ ヘラケズリ					
62	高坏	口径(13.2)	内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。2条の凸帯。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色	密		長(0.5~1) 微砂粒
		残高 5.2							
63	高坏	口径(16.2)	外反する口縁部。肩部は丸くおさめる。2状の凸帯有り。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色	密		67
		残高 4.9							
64	壺	口径(22.0)	口縁部は外方にひらき、肩部は下方に拡張される。波状文が施される。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰褐色	密		67
		残高 2.8							

SB12出土遺物観察表 ガラス製品

番号	器種	遺存状態	材質・色	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
65	ガラス土	完形	ガラス 薄青色	0.3	0.3	0.2	0.03		67

表69 掘立2出土遺物観察表 石製品

番号	器種	遺存状態	石材	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
66	勾玉	完形	滑石	3.3	2.3	0.5	5.2		67

表70 掘立3出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
67	鉢	口径 4.2	手づくね品。内外面共に指痕を顕著に残す。	ナデ	ナデ	淡茶褐色	密		67
		器高 3.6							

表71 掘立9出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
68	壺	口径(13.0)	外傾する口縁部。肩部は「コ」字状を呈す。	横ナデ	マメツ	暗赤褐色 明茶褐色	密		石・長・金フ ンモ(1~3)
		残高 2.3							
69	壺	口径(3.2)	ほぼ平底を呈す。	マメツ	ナデ	暗赤褐色	密		
		底径(3.2)							
		残高 2.3							

筋違H遺跡

表72 SD1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
70	甕	口径(28.0) 残高 6.8	外反する口縁部。肩部は丸く細くなる。	マメフ	ハケーナデ	茶褐色	密 ○	石・長・金ウソ モ(1~2.5) △	67
71	甕	口径(16.0) 残高 5.5	頸部は肥厚される。口縁部は細く丸く仕上げられる。	ナデ	ナデ	褐色	石・長(0.5-1) 金ウソモ(1-5) ○		67
72	坏	口径 10.4 器高 3.4	立ち上がりは内湾する。肩部は細く丸くなる。	マメフ	ナデ	淡茶褐色	密 ○	豊神 石・長 ○	67
73	高坏	口径(19.2) 残高 8.9	坏部曲部はわずかに段となる。短く外反する肩部は丸くおさめる。	マメフ	マメフ	淡明茶褐色	密 ○	石・長・金ウソ モ(0.5-2)	
74	坏身	口径(11.9) 底径 4.6	内傾する立ち上がりの肩部は丸く仕上げられる。	回転ナデ ⑧ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色	密 △		
75	坏身	口径 12.3 器高 3.4	短く内傾し、わずかに外反する立ち上がり。	ヘラケズリ	ナデ	灰色	密 ○		67
76	坏身	口径 12.2 底径 4.0	立ち上がりは、内傾かつ短く外反する。肩部は細くなる。	回転ナデ ⑧回転ヘラケズリ	回転ナデ	淡灰色	石・長(1~2.5) ○		67
77	坏身	口径(13.0) 残高 3.8	立ち上がりは、内傾する。肩部は細く丸く仕上げられ、わずかに外反する。	ヘラケズリ	ナデ	淡灰色	石・長(1) ○		
78	坏身	口径(12.7) 残高 4.1	外反する立ち上がり。肩部は丸く細く仕上げられる。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	淡灰色	石・長(1~3) △		
79	坏蓋	口径(12.2) 残高 3.0	ほぼ垂直に下がる口縁部。肩部は段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・長(3) ○		
80	坏蓋	口径(9.4) 残高 2.7	天井部はわずかに凹む。過部はわずかに段をなす。	回転ナデ ⑧回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	石・長(1~1.8) △		
81	瓶	残高 7.2	頸部と体部に1条の沈線が施される。体部には1.3cmの円孔が穿れる。	回転ナデ ⑧回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色	石・長(1~2) ○		68
82	壺	口径(22.0) 残高 5.1	口縁部は傾にわずかに肥厚され、上下に拡張される。	ナデ	ナデ	灰白色	密 ○		68
83	壺	口径(20.0) 残高 3.4	外反する口縁部。肩部は段状に仕上げられる。内外面に棒状工具による刺突痕がわずかに残る。	横ナデ	横ナデ	灰色	密 ○		68
84	壺	口径(10.2) 残高 4.5	ほぼ平底を呈す。	ハケーナデ	マメフ	淡紫褐色	石・長・金ウソ モ(1~3) ○	煤付着	

表73 SK3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
85	高坏	口径(22.8) 残高 7.1	坏部の屈曲部は段をなす。外反する口縁部の端はわずかに外反する。	ハケーナデ	横ナデ	灰黄褐色	密 ○		68
86	高坏	残高 6.4	三角錐状の柱部。柱と帯部に稜あり。	マメフ	マメフ	明灰茶褐色	密 ○		
87	壺	口径(15.8) 残高 4.8	外反する口縁部。肩部は丸くおさめる。内外面ハケメ。	ハケーナデ	ハケーナデ	灰白色	密 ○		

遺物観察表

SK 3 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存状態	石 材	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
88	勾玉	完形	硬玉製	1.7	1.1	0.6	1.7		68

表74 SK 30 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
89	罌	底径 (3.0) 残高 16.8	平底を呈す。外面はハケメが顕著に看取される。	ハケメ	ナデ ハケメ	橙 色	菅石長(1-3) ○ ソノモ		68
90	罌	口径(16.8) 残高 19.8	外反する口縁部に断面三角形の凸帯が1条走る。	回転ナデ 磨リタキ=回転ナデ 磨リタキ	回転ナデ	灰 色	菅 ○		68

表75 SK・SP 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
91	高杯	口径(15.8) 残高 5.8	立ち上がりは内湾する。口縁端部は原く外反し、細く丸く仕上げられる。	マメツ	ナデ	明赤茶褐色	菅 ○	SK12	69
92	高杯	口径(15.1) 残高 5.9	内湾する立ち上がり。口縁端部は原く外反する。	マメツ	マメツ	明茶褐色	菅石長(1-5) ○	SK12	
93	高杯	口径(19.0) 残高 5.5	わずかに内湾する立ち上がり。口縁端部は短く外反し、丸く仕上げられる。	マメツ	マメツ	橙 色	長(0.5-1) ○	SK25	
94	高杯	口径(18.0) 残高 5.7	立ち上がりは、わずかに内湾。口縁端部は短く外反し、丸く仕上げられる。	マメツ	マメツ	淡赤褐色	菅石長(1-2) △	SK25	
95	高杯	底径(11.0) 残高 6.4	唇部はゆるやかに開く。端部は丸く仕上げられる。	マメツ	ナデ	橙 色	菅石長(1-2) ○	SK25	69
96	高杯	底径(10.7) 残高 7.8	短い唇部。端部は丸く仕上げられる。充塞技法。	マメツ	マメツ	明茶褐色	菅石長(1-3) ○	SK25	69
97	罌	口径(13.5) 器高 6.2	立ち上がりは内湾する。端部は丸く仕上げられる。	マメツ	マメツ	明茶褐色	長(0.5) △	SP327	
98	罌	口径(16.0) 残高 7.6	外反する口縁部はわずかに肥厚される。	ナデ 磨ハケメ	横ナデ	淡橙褐色	菅石長(1-1) ○	SP170	
99	高杯	口径(14.2) 残高 5.6	杯部の側面部分が欠をなす。内面にはへら状工具によるかき取り痕。充塞技法。	ナデ	ナデ	黄灰褐色	菅石長(1-1) ○	SP245	69
100	罌	口径(12.4) 残高 2.2	外反する口縁部。わずかに拡張される。表面には2条の波線が施される。	マメツ	マメツ	暗茶褐色	菅石長(1-2.5) △	SP250	
101	罌	口径(24.0) 残高 5.0	外反する口縁部に波状文が施される。端部は下方に拡張される。	カキメ	回転ナデ	黒灰色	長(1) ○ カウラ 磨製	SP128	69
102	三角口罌	口径(15.6) 残高 6.0	外反する口縁部に二段の波状文が施される。口縁部と口縁部に一条ずつ凸帯が走る。	カキメ	回転ナデ	暗灰色	菅石(0.5) ○ 磨製	SP343	69
103	罌	口径(18.0) 残高 5.0	外反する口縁部。端部は下方に拡張される。	回転ナデ ハケメ	回転ナデ	暗灰色	石(1-4) ○	SP12	
104	罌	口径(18.4) 残高 3.5	外反する口縁部。端部は下方にわずかに拡張される。	回転ナデ	回転ナデ	淡黄灰色	長(1-3) ○	SP120	

表76 包含層出土遺物観察表 石製品

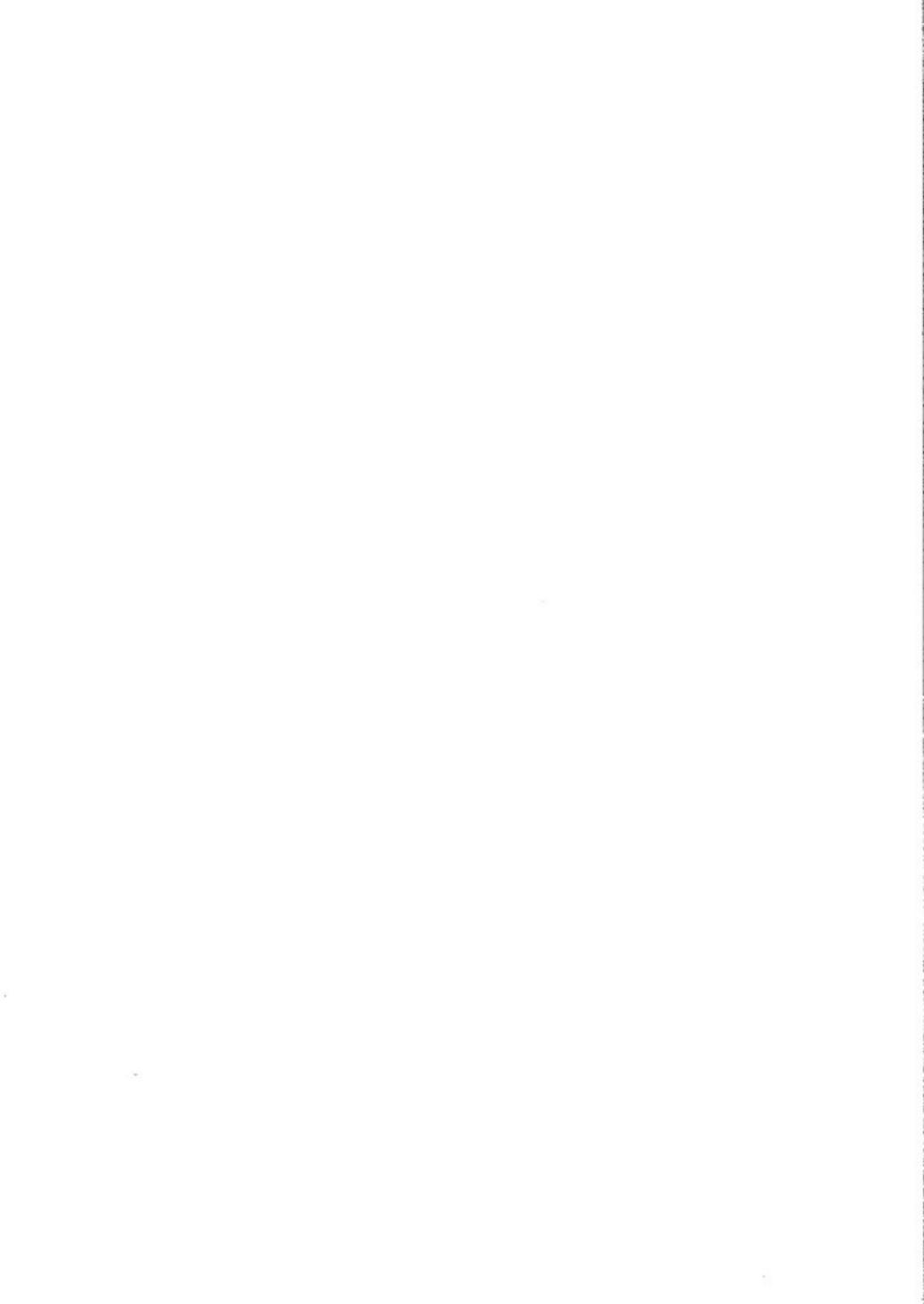
番号	器種	残存状態	石 材	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
105	管 玉	完 形	碧玉製	2.4	0.73	0.21	2.4		69
106	銅片尖頭器 (ナイフ形石器)	ほぼ完形	サヌカイト	5.0	3.1	1.0	13.2		69
107	石 斧	1/2残	緑泥片岩	11.2	6.05	4.05	405		69
108	石 鏃	ほぼ完形	サヌカイト	3.0	1.4	0.35	1.6		69

表77 出土地点不明遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		(外面 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
109	壺	口径(29.2) 残高 4.4	外傾する口縁部は、横ナデによりゆるやかな段をもつ。	ハケメ	マメツ	暗茶褐色	石・長直ウソモ (0.5-4) ○		
110	壺	口径(19.8) 残高 8.1	直線的に外傾する口縁部。外面にハケメを看取。	ハケメ	ナデ	淡茶褐色	石・長(1-2) ○		
111	壺	口径(14.5) 残高 3.7	ゆるやかに内湾する口縁部。肩部は丸く仕上げられる。	ナデ ◎ハケメ	ナデ	暗灰褐色	石・光金ウソモ (1) ○		
112	壺	口径(13.4) 残高 3.5	短く外反する口縁部。肩部は丸く仕上げられる。	マメツ	マメツ	淡明茶褐色	石・長・砂粒 (1-2) ○		
113	高杯	口径(13.6) 残高 5.7	杯部の唇部から直線的に外傾する口縁部。肩部は丸く仕上げられる。	マメツ	マメツ	淡明茶褐色	長(0.5) △		
114	坏壺	口径(12.0) 残高 4.5	口縁部は外反して下る。断面三角形の稜をもつ。	ナデ ◎回転ヘラケズリ	ナデ	淡青灰色	石・長(1-4) ○		
115	坏壺	口径(14.0) 残高 4.4	口縁部はゆるやかに内反して下る。	◎ナデ 回転ナデ	ナデ	淡黄色 明褐色	石・長(1-2) 黄砂粒 △		
116	坏身	口径(10.0) 残高 4.0	内傾し、ゆるやかに外反する口縁部。肩部は段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	明灰色	長(1.5) ○		
117	壺	口径(10.0) 残高 5.8	外反する口縁部の唇は平線状になる。丸く仕上げられる。	◎回転ナデ ナデ	◎回転ナデ ナデ	淡灰色	密 (微砂粒) ○		
118	壺	口径(11.5) 残高 4.5	ゆるやかに外反する口縁部。頸部内面にタタキ痕を看取。	回転ナデ	タタキ 回転ナデ	淡灰色	石・長(1) ○		
119	壺	残高 3.4	瀬川遺土器片。線刻内容については不明。	マメツ	マメツ	褐色	石(1-2) 長(1-3) ○		69

第8章

筋違^ス I ^{カイ}遺跡



第8章 筋違 I 遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査の経緯

平成元年8月、松本和夫氏より、松山市福音寺町429-1の宅地開発にあたり、埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課に提出された。

当該地は松山市の指定する「114 松木遺物包含地」内にあり、また筋違遺跡として過去に8次の調査が実施されている地域内にあたる。

よって、文化教育課は申請地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲やその性格を確認するために平成元年9月に試掘調査を実施した。調査の結果、当該地に遺跡が存在していることが明らかになった。この結果を受け、宅地開発に伴って消失する遺跡に対して記録保存を行うため、文化教育課は松本氏の協力のもと、平成元年10月～11月の間に本格調査を実施した。調査は、福音寺地区における古墳時代集落の構造解明を主目的としたものである。

(2) 調査組織

調査地 松山市福音寺町429-1

遺跡名 筋違 I 遺跡

調査期間 平成元年10月2日～平成元年11月11日

調査面積 462㎡

調査協力 松本 和夫

調査担当 宮崎 泰好 (平成3年退職)

武正 良浩

調査作業員 吉浦 正浩、玉出 勝彦、荒川 和哲、三好 正規、副田 昌宏、宮本 理、

松本 剛、小坂ゆかり、丹生谷道代、白石 聖子、藤原利江子ほか (順不同)

(3) 調査工程

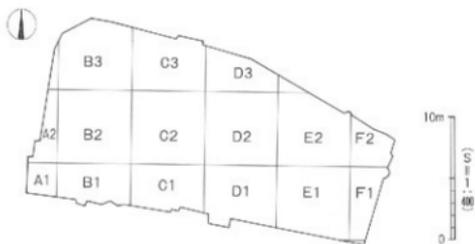
1989(平成元年)年10月2日より重機により表土剥ぎ取り作業を開始した。排土は調査地内に上盛りしたため表土剥ぎ取りに2日間を費やした。調査地内に仮設事務所を設置し、作業用具を搬入した。

6日より作業員を増員し本格的な発掘調査を開始した。9日、第Ⅲ層上面にて遺構検出を行い堅穴式住居址や溝、土坑、柱穴等の遺構を検出する。13日から遺構の掘り下げ及び遺構の測量を行う。11月10日、完掘写真を撮影した。11月11日、出土遺物、調査用具等を撤去する (野外調査終了)。

筋違 I 遺跡



第179図 調査地位位置図 (S=1:1500)



第180図 調査地区割図

2. 層位 (第181図)

筋違I遺跡は、標高29.5mにあり、調査前は水田であった。

昭和63年に調査された筋違F遺跡は本調査地の西20m、平成元年調査の筋違H遺跡は本調査地に西接するものである。

土層は、第I層耕作土、第II層水田床土、第III層黄褐色土（黄灰色の礫含む）である。調査地は既に近現代の土地開発に伴い、大きく改変されており、遺物包含層はなかった。

遺構検出は第III層上面で行い、弥生時代から中・近世の竪穴式住居址1棟、掘立柱建物址1棟、溝3条、土坑6基ほか柱穴や小穴を検出した。なお、本調査については『松山市埋蔵文化財調査年報II』（松山市教育委員会1989年）に概要を報告しているが、整理の結果、遺構認定及び遺構数が異なっており、取り扱いに注意していただきたい。

なお、調査にあたっては調査地に6mのグリットを設け、西から東に、A～D、南から北に1～3とし、呼称はA1、A2～D3区とした。

3. 遺構と遺物

本調査では、弥生時代中期～後期と古墳時代後半の遺構が主要な検出遺構となる。検出遺構は、少なく、さらに時期決定が難しいものがあるため、報告に際しては時代ごとに記述を行わず、遺構ごとに記述するものとする。

(1) 竪穴式住居址 (SB)

弥生時代中期と考えられるもの1棟である。

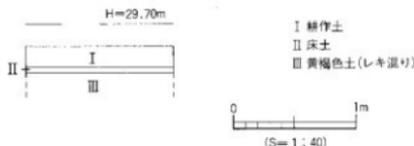
SB1 (第183図、図版71・72)

調査区南西隅、A1区にある。部分検出であるが平面形態は方形を呈すると考える。長さ2m、幅1.8m、深さ8cmを測る。住居内施設には厨壁溝がある。主柱穴は未検出である。SD1に切られる。遺物には弥生中期土器、石砲丁1点が出土している。

出土遺物 (第183図)

1は壺形土器の口頭部片である。頸部には鋭い断面三角形の突帯が付く。2は緑泥片岩製の石砲丁である。打製の刃部をもち、両側に弱い抉りが入る。

時期：出土遺物より弥生時代中期以降に比定する。



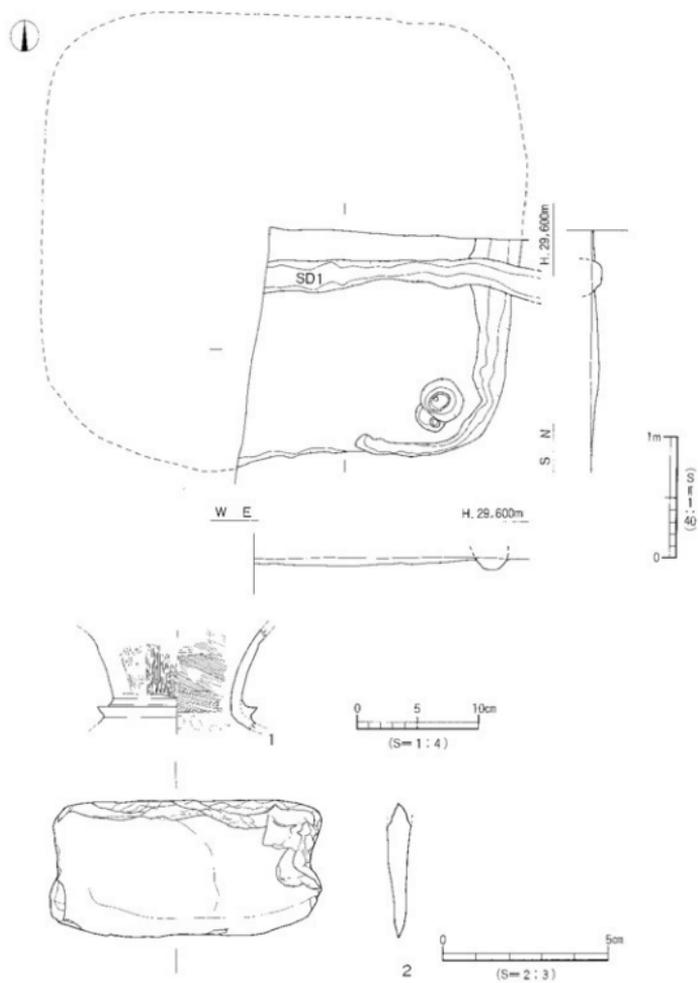
第181図 基本層位図

筋違 I 遺跡



第182図 遺構配置図

遺構と遺物



第183図 SB1測量図・出土遺物実測図

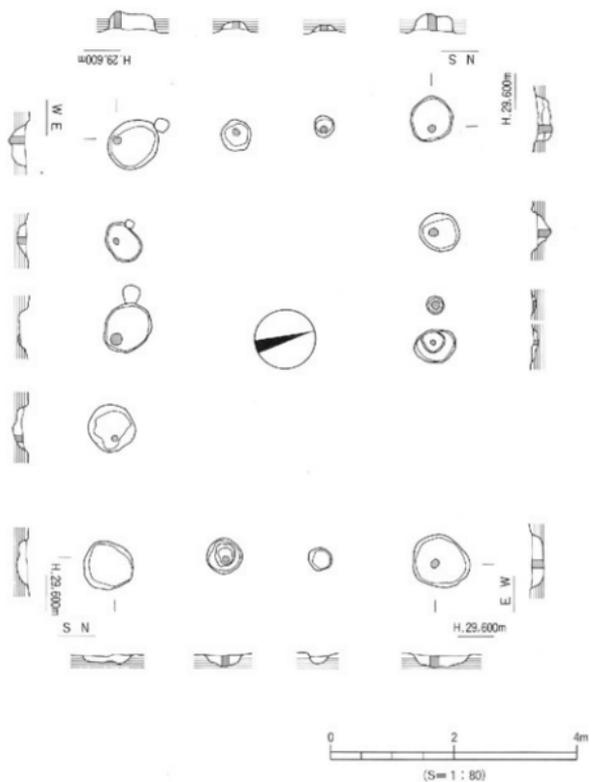
(2) 掘立柱建物址

本調査において掘立柱建物址 1 棟を検出した。

1号掘立 (第184図、図版71)

調査区東側にある。4×3間で、桁行7m、梁行5mを測る。東西棟で、平均柱間は東西1.75m、南北1.67mである。柱穴は円形を呈し、径40~83cm、深さ10~30cm、柱痕径9~17cmを測る。柱穴からは土師器、須恵器の小片が出土している。

時期：柱穴の規模及び出土遺物より古墳時代後半以降と考える。



第184図 掘立1測量図

(3) 溝 (SD)

本調査において3条の溝が検出された。

SD1 (第182図)

調査区西側にある。長さ8.7m、幅0.3m、深さ7cmを検出した。埋土は暗褐色土である。断面形態は皿状を呈し、溝底はほぼ平坦である。遺物は土師器、須恵器の小片が出土している。SB1を切っている。

時期：SB1との切り合い関係より弥生中期以降とする。

本調査地において検出された他の溝については表80に記す。

(4) 土坑 (SK)

本調査において6基の土坑が検出された。

SK2 (第185図、図版72)

調査区中央南側、C1区にある。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸1.6m、短軸0.6m、深さ25cmを測る。埋土は暗褐色土である。出土物には弥生後期土器、石庵丁1点、ガラス製品がある。

出土遺物 (第185図)

3は弥生後期の壺形土器の底部片である。平底を呈すると思われる。4は緑泥片岩製の石庵丁である。弱い抉りが入る。5は濃青色のガラス小玉である。

時期：出土遺物より弥生時代後期以降と考える。

(5) その他の遺構・遺物 (第185図)

各々の遺構については、表81に記す。ここでは、遺物の資料提示のみを行う。

須恵器 (6~9)

6はSK1出土の坏身である。口縁部内面に段をもつ。7はSK5出土の甕の口縁部である。口縁部中位に断面三角形の凸帯をもち、その下に波状文が施される。8はSP12出土の坏身である。9はSP40出土の坏蓋である。

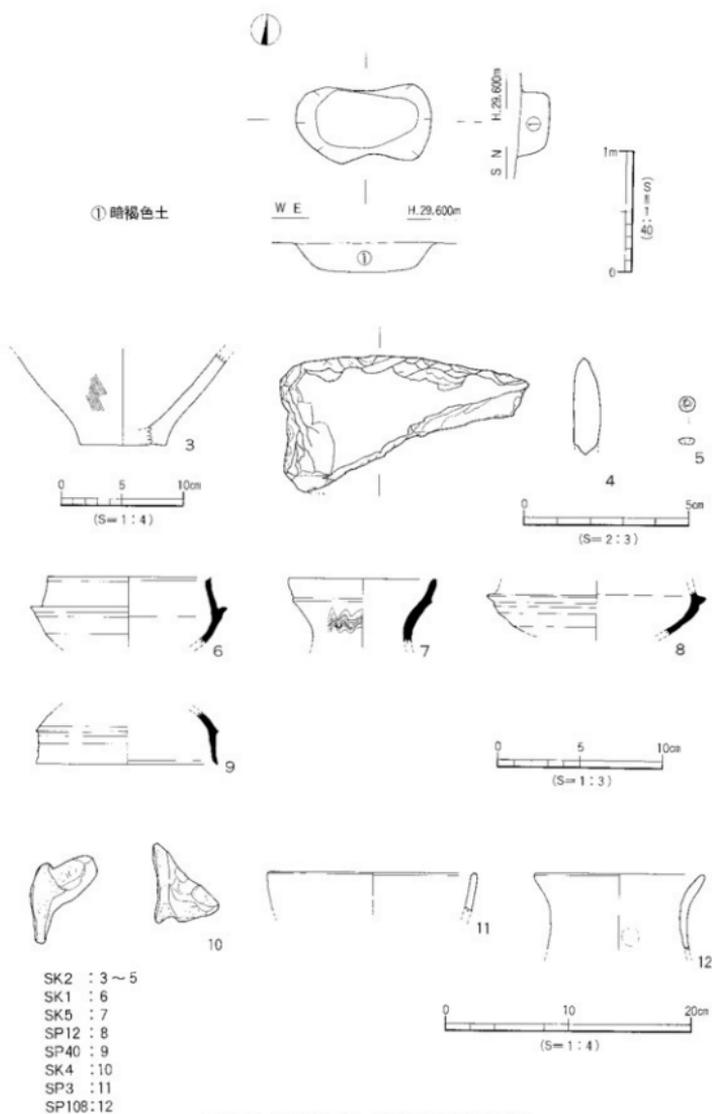
土師器 (10~12)

10はSK4出土の甕の把手である。11はSP3出土の甕の口縁部である。12はSP108出土の甕形土器の口縁部である。

(6) 表採遺物 (第186図)

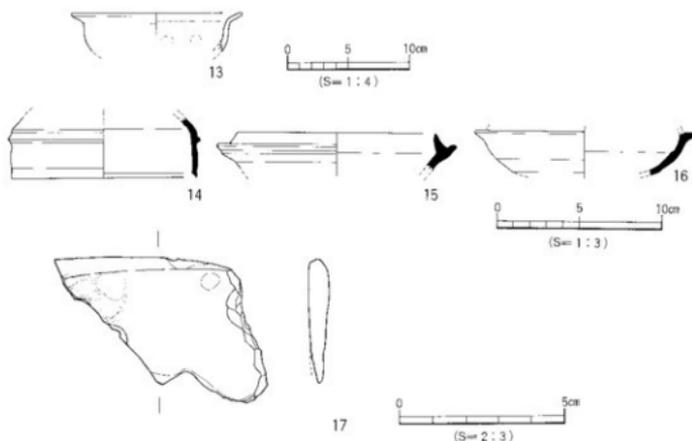
13は土師器の鉢形土器である。直傾する口縁部の襷部は丸くおさめる。14は須恵器の坏蓋である。15・16は須恵器の坏身である。17は緑泥片岩製の石庵丁である。

筋道 I 遺跡



第185図 SK2測量図・SK・SP出土遺物実測図

小 結



第186図 出土地点不明遺物実測図

4. 小 結

本調査では、弥生時代、古墳時代の遺構と弥生時代から古墳時代までの遺物を確認した。以下、時代ごとにまとめをおこなう。

弥生時代

中期と後期の遺構を検出している。

中期に比定されるSB1は、部分的な検出ではあったが方形を呈すると考える。また、SK2には後期土器の破片が含まれている。さらに本調査地周辺においても弥生前期～後期の遺構・遺物が検出されている。よって本調査における出土資料は、調査地一帯に弥生前期～後期の集落遺構が展開されていたとされる推測を補充するものである。

古墳時代

1号掘立柱建物址が古墳時代後半以降であることが分かるにとどまる。しかし本調査地周辺においては多数の掘立柱建物址が検出されている。したがって福音寺地区の北西部域における集落群を考える上では好資料となるものである。

〔文献〕

- 梅本謙一・武正良浩 1995 『福宮小学校構内遺跡—弥生時代編—』松山市教育委員会、部松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
- 橋本雄一 1994 『北久米浄蓮寺遺跡—3次調査地—』松山市教育委員会、部松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財
センター
- 梅本謙一 1991 『松山大学構内遺跡—第2次調査—』松山大学、松山市教育委員会、松山市立埋蔵文化財センター
- 西尾幸則編 1987 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会
- 西尾幸則編 1989 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
- 栗田茂敏編 1991 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会、松山市立埋蔵文化財センター
- 芳賀章内編 1990 『季刊 考古学 第32号』郷山閣出版
- 松山市史料編集委員会 1987 『松山市資料集 第2巻 考古2他』

遺構・遺物一覧

— 凡例 —

- (1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
遺構は武正、酒井、後藤、遺物は武正、木下、岩本、村上が作成した。
- (2) 遺物観察表の各記載について

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文 土器の各部位名称を略記。

例) L→L縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1~4)多→「1~4mm大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

遺物観察表

表78 竪穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時期	平面形	規模		床面積 (m ²)	主柱穴 (本)	内部施設			周壁溝	備考
			長さ×幅×深さ(m)	柱間寸法(m)			竪床	土坑	炉		
1	弥生	方形	(2-e) × (1.8-e) × 0.06		3.6+e					○	一部未検出

表79 掘立柱建物址一覧

掘立	方位	規模 (間)	桁行		梁行		床面積 (m ²)	備考	時期
			家長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)			
1	東西	4×3	7	1.6・1.6・1.7・ 2.1	5	1.7・1.5・1.8	35		古墳後半以降

表80 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A1、2	皿状	8.7×0.3×0.07	暗褐色土	土師・須恵	弥生中期以降	
2	A2	皿状	1.9×0.4×0.07	暗茶褐色土			
3	C1	皿状	2.5×0.25×0.05	暗褐色土			

表81 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)		埋土	出土遺物	時期	備考
				長さ	幅				
1	D1	楕円	皿状	1.6×0.85×0.25	暗褐色土	須恵	古墳時代		
2	C1	楕円	舟底状	1.6×0.6×0.25	暗褐色土	弥生・石造丁 ガラス製品	弥生後期以降		
3	B1	不整楕円	舟底状	1.5×1.4×0.4	茶褐色土				
4	C1	不整形	舟底状	1.3×0.95×0.75	暗褐色土	土師	古墳時代		
5	C1	不整楕円	舟底状	1.5×0.9×0.36	暗褐色土	須恵	古墳時代		
6	C3	不整楕円	皿状	1.05×0.35×0.1	茶褐色土				

表82 SB 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		外面 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	空	胴径 10.5 残高 8.4	外反して立ち上がるに似 る。胴部には断面三角形の凸 帯が貼り付けられる。	ハケメ	ハケメ	黄褐色	密 ○		72

SB 1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
2	石瓶丁	完形	緑泥片岩	8.3	4.2	0.7	49.5		72

表83 SK 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		外面 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
3	甕	底径 7.0 残高 7.5	平底を呈する。中形品。	ハケメ	マメツ	黄灰色 褐色	密 ○		

SK 2 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
4	石砥丁	1/2	緑泥片岩	3.0	7.5	0.9	27.3		72

SK 2 出土遺物観察表 装飾具

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
5	ガラス玉	完形	ガラス 透青色	0.45	0.42	0.23	0.06		72

表84 SK・SP出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		外面 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
6	坏身	口径(10.0) 残高 4.0	内傾し立ち上がる口縁部の先端はわずかに外反する。	回転ナデ	回転ナデ	灰 色	密 ○	SK1	
7	甕	口径(9.0) 残高 3.9	ゆるやかに内湾して立ち上がる口縁部。肩部は丸く仕上げられる。液状文あり。	回転ナデ	横ナデ	灰 色	密 ○	SK5	72
10	瓶	残高 6.5	把手。上外方向へのびる。	ナデ		黄褐色	密 ○	SK4	
8	坏身	残高 2.8	小片。受部は短く横方向へのびる。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色	密 ○	SP12	
9	坏蓋	口径(11.0) 残高 3.2	わずかに外反しつづつ下る口縁部。肩部は外方向に細く仕上げられる。	ナデ	ナデ	灰 色	密 ○	SP40	
11	埴	口径(17.0) 残高 3.3	ゆるやかに内湾する口縁部。肩部は丸く仕上げられる。	マメフ	マメフ	橙 色	密 ○	SP3	
12	壺	口径(13.8) 残高 6.8	外反する口縁部。先端はわずかに肥厚される。	マメフ	ナデ	橙 色	長(0.1-0.3) ○	SP108	

表85 層不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		外面 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
13	鉢	口径(14.0) 残高 3.1	屈曲部から外方向に直線的にのびる口縁部。肩部は丸く仕上げられる。	マメフ	マメフ	灰白色 淡黄色	密 ○		
14	坏蓋	口径(11.2) 残高 3.7	断面三角形状の様が突出する。口縁部は段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	密 ○		
15	坏身	口径(12.0) 残高 2.3	わずかに外反する短い立ち上がり。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	密 ○		
16	坏身	口径(13.4) 残高 2.6	小片。	ヘラ刮り 回転ナデ	回転ナデ	灰 色	密 ○		

層不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
17	石砥丁	3/7残存	緑泥片岩	3.8	6.7	0.65	20.9		62

第9章

川^ノ附^ク遺跡



第9章 川附遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1988(昭和63)年4月、株式会社恵比壽より、松山市福音寺567-11の土地造成及び住宅建設にあたり、当該地における埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課に提出された。当地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地「116 福音寺川附遺物包含地」内にある。周辺地域には訪連遺跡、小坂釜ノ口遺跡、天山遺跡など、弥生時代から古墳時代、更には古代に至る集落遺跡が認められる。また、当該地は昭和50年に調査を実施した福音寺遺跡竹ノ下地区に近接している。福音寺遺跡竹ノ下地区では、5世紀代の須恵器や漆塗獣面玉杖、木製農具類が出土しており、松山平野の古墳時代中期の主要な遺跡となっている。

これらより関係者は協議を行い、埋蔵文化財の有無及び遺跡の範囲確認のために1988(昭和63)年8月に試掘調査を実施することとした。試掘調査では、溝状遺構や柱穴が確認された。これに基づき両協議の末、本格的な調査を1988(昭和63)年11月14日より実施することとなった。

(2) 調査組織

調査地	松山市福音寺567-11
遺跡名	川附(かわつけ)遺跡
調査期間	野外調査1988(昭和63)年11月14日～同年12月14日 室内調査1988(昭和63)年12月15日～同年12月26日
調査面積	495.45㎡
調査協力	株式会社 恵比壽
調査担当	調査員 松村 淳 調査補助員 山本健一、大森一成
調査協力者	近藤茂、松友利夫、松岡欣弘、松本正義、森 隆、藤家厚美ほか

(註) 本文の執筆は、松村 淳と梅木謙一が共同で行い、須恵器の執筆については平岡直美が行った。

(3) 調査工程

1988年11月14日(月)～19日(土) 重機により耕作土の剥ぎとりを行う。グリット設定のための基準杭を打込む。南城では土管の排水溝を検出する。17日(木)北城東部で柱穴2基(S P 1-2)、土坑1基(S K 1)、北城中央西寄りで礎群を検出する。また南城と北城の境にて、溝を検出(S D 5)する。南城東部でも礎群を検出する。

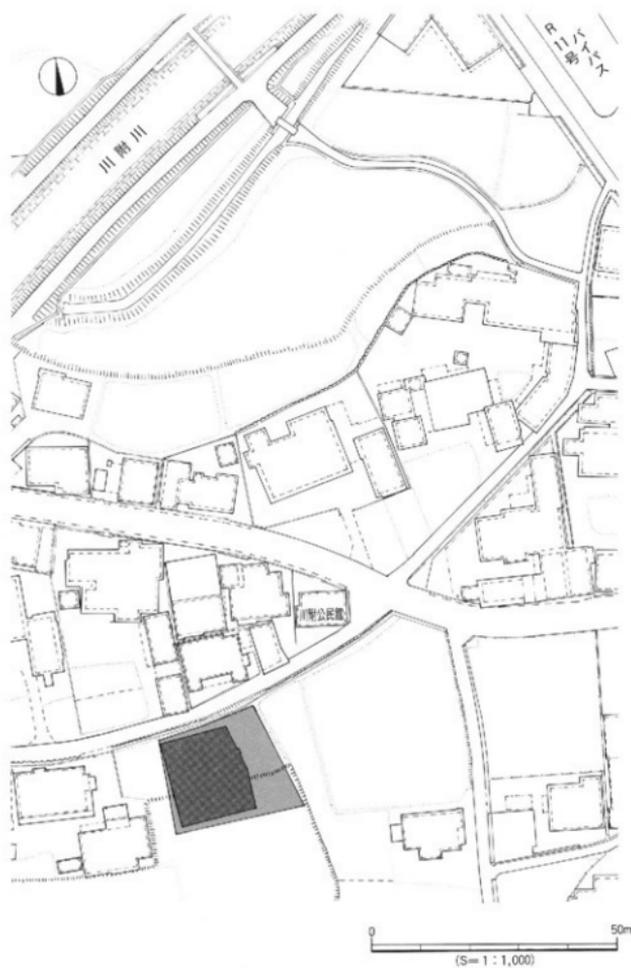
11月21日(月)～26日(土) 排水溝の測量をし、撤去する。北城西部で遺物をもたない溝4条(S D 1-4)を検出する。S D 5の掘下げを行う。

11月28日(月)～12月3日(土) 排水溝東端部でT字形の石組みを検出する。南城東部で壺棺S K 5、土坑S K 10・11を検出し、掘下げを行う。

12月5日(月)～12月14日(木) S D 5の遺物の測量と、取り上げを行う。北城で幅棺S K 1を検出し、掘下げを行う。検出遺構の測量を終了する。

12月15日(木)～12月26日(月) 室内にて遺物の洗浄など、整理作業を実施する。

川 附 遺 跡



第187図 調査地位圖

2. 層位 (第188図)

調査においては、調査区を方位に関係なく任意にグリット (4 m) を設定した。グリット名は北から南へ A・B・C・・・F、西から東へ 1・2・・・5 とし、A1・A2・・・と呼称した。

調査区は、北が高く、南が低い二面からなる畑地である。北域 (A-D区) は高く、台状を呈し、緩く西に傾斜する。一段低い南域 (E・F区) は湿地帯で、南西が低くなる地形である。

〔北域の層位〕

北域の層位は、第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層床土、第Ⅲ層灰褐色砂質土、第Ⅳ層褐色砂質土、第Ⅴ層地山となる。

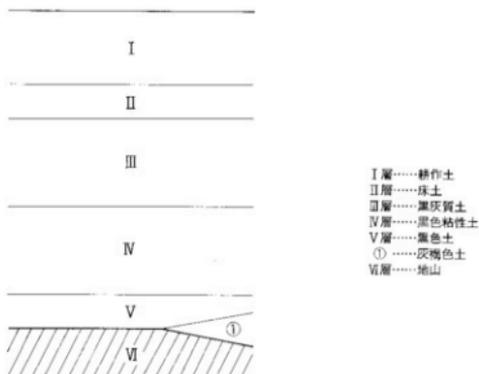
第Ⅲ・Ⅳ層は、東に薄く西に厚く堆積する。第Ⅴ層地山直上には、いわゆるクサレ礫 (礫群) が検出されている。遺構は第Ⅴ層上面で桶棺墓1基 (SK1)、溝1条 (SD1)、掘り込み1条 (SX1)、溝内で土坑2基 (SK2・3) と溝内で小穴6基 (SP6~11)、柱穴5基 (SP1~5) を検出した。

〔南域の層位〕

南域は、第Ⅰ層耕作土15cm、第Ⅱ層床土7cm、第Ⅲ層黒灰質土18cm、第Ⅳ層黒色粘性土18cm、第Ⅴ層黒色土に褐色混入の粘性土7cm、第Ⅵ層地山が基本層位であり、西端では第Ⅴ層と第Ⅵ層の間に①層灰白色粘性土が堆積する。また南西部では、第Ⅴ層下に灰褐色土15cmがみられる。したがって南域東部は6層、西部では7層の堆積となる。

南域は北域より河川氾濫が著しい。第Ⅲ層黒灰質土と第Ⅳ層黒色粘性土は一様な堆積状況ではない。第Ⅲ層黒灰質土では、酸化土や褐色粘質土が部分的に混入し、第Ⅳ層黒色粘性土にも黒褐色と褐色の粘性土が第Ⅲ層と同様に混入している。これを見る限り、氾濫は数次に亘ったことが判断される。

H=24.0m



第188図 南域基本層位図 (S=1/10)

3. 遺構と遺物

(1) 弥生時代 (第190図)

弥生時代の遺構は、南城に限り検出された。遺構には遺物を伴うものと、遺物を伴わず時期や性格が推定の域をでないものが存在する。D5区～F1区検出の溝SD5、E3区検出のI3基SK5・10・11は遺物を伴出し、D3～4区検出の土坑3基SK6～8は遺物が伴わないものである。後者の遺構は、近接する遺構との位置関係や埋土の観察等から時期を弥生時代と推定するものである。

(1) 溝 (SD)

SD5 (第190・191図、図版73)

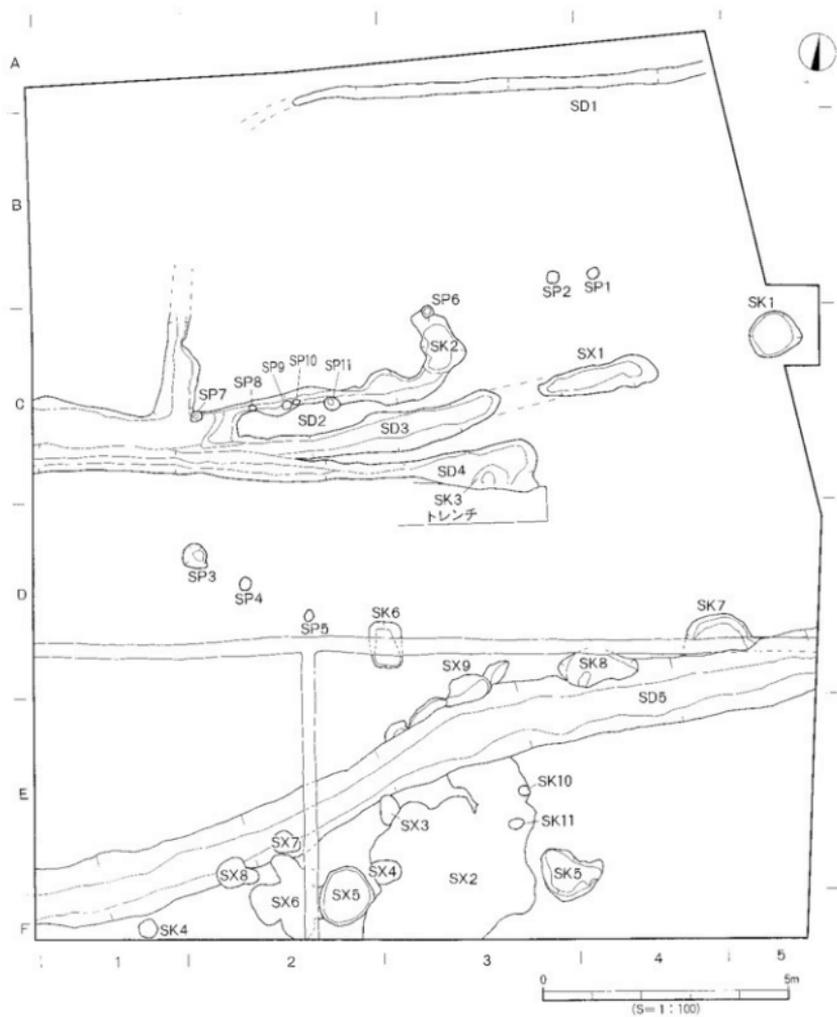
SD5は南城を東西に走る。検出長16.5m、幅1.5～0.9m、最深部40cmを測る。断面形は舟底状を呈し、堆積土は2層がみれる。ただし、埋土上層は全域にみられるが、下層は地点により土質がやや異なる。東部は上層黒色粘性土25cm、下層黒灰質土13cm、中央部は上層黒褐色粘性土15cm、下層黒色と暗褐色混りの粘質土24cm、西部は上層黒灰質土22cm、下層黒色と暗褐色混りの粘性土16cmとなる。基底面は東が高く、北高は東・西端部で20cmを測る。遺物は中央部に多く、東部と西部は少ない出土状況にある。特にE3区では甕形土器、壺形土器、高坏形土器、鉢形土器、支脚形土器が集中して出土している。出土土器は、図示するように弥生土器に限られ、かつ完形品はなく、細片の出土量が多数を占める。

出土遺物 (第192～196図、図版75・76)

甕形土器 (1～16) 1～11は「く」の字状の口縁部を呈するものである。I口縁部はナデにより弱干外方に曲がり、面をもっている。内面にはあいまいな稜をもつ。11はやや古い時期(後期前半)のもので、口縁端面に2条の沈線文をもつ。12～16は底部片である。12は上げ底、13～16は平底となる。

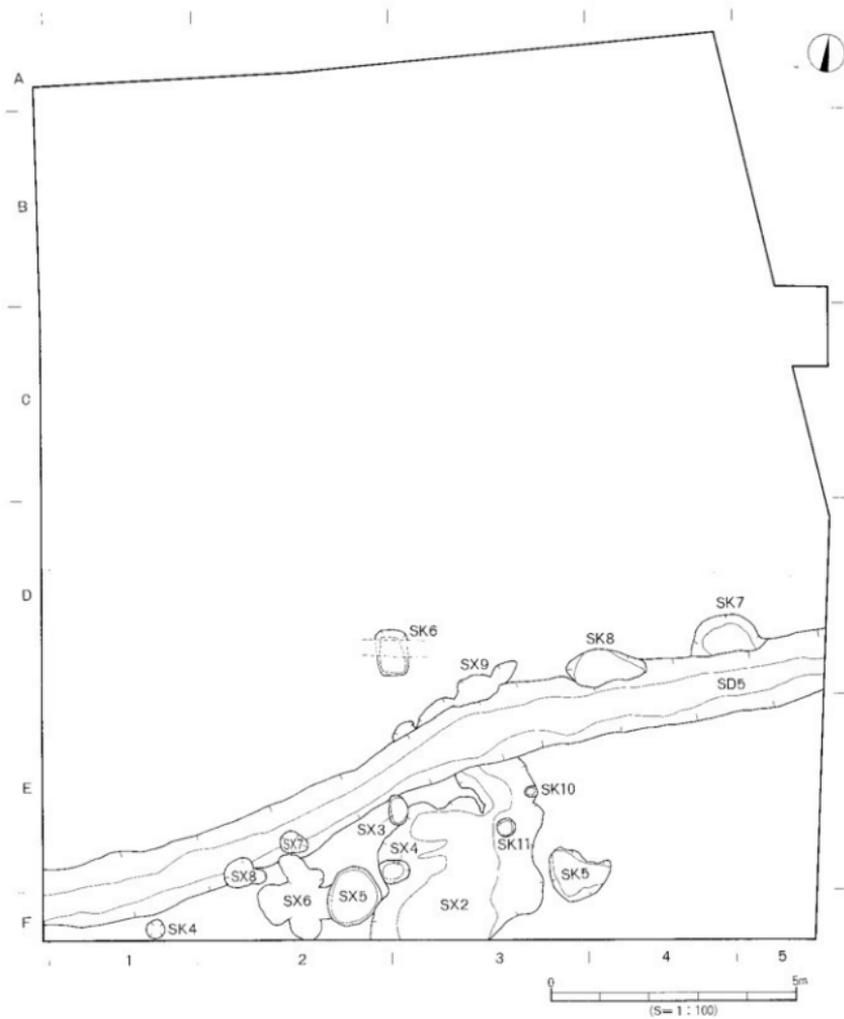
壺形土器 (17～48) 17～25は複合口縁壺である。17～19・22は複合口縁接合部は面をもち、「コ」字状となるものである。口縁部には櫛描きの斜格子目文17、波状文18・22を施している。22は頸部下端に木口押圧による刻目凸帯文をもつ。20・21は複合口縁接合部が稜をもち、「く」の字状となるものである。20は櫛描き波状文をもつ。23～25は口縁部片である。24・25は櫛描き波状文をもつ。26・27は広口蓋である。26は器壁が厚く、口縁端部に幅広いのナデ凹みをもつ。27は口縁内面に段をもつ。口縁上面には刻目浮文を、I口縁端面には1条の波状文を施す。平野内での出土例が少ないものである。28は長頸直口壺である。口縁端部がわずかに外反して立ち上がる。29～40は頸部～胴上半部の破片である。30～34は頸部に1条の凸帯文をもつものである。32は凸帯上と凸帯下部に木口押圧による刻目を施す。35・36は頸部に刺突文列をもつものである。35は刺突文列上に沈線文を施していた可能性がある(マメツして明確ではない)。36と37は同一體体と考えられるものである。円形の縞刺文を施している。38は絵画的、39は波状文的文様をもつ櫛描きの加飾體である。40は刺突文により文様ないし絵面を現したものである。41～48は底部片である。41は底部片でヘラによる「X」字状の線がみられる。42は扁平球の胴部で、底部が著しく大きいものである。43～45は立ち上がりをもつ平底、46～48は立ち上がりをもたない平底となる。

遺構と遺物



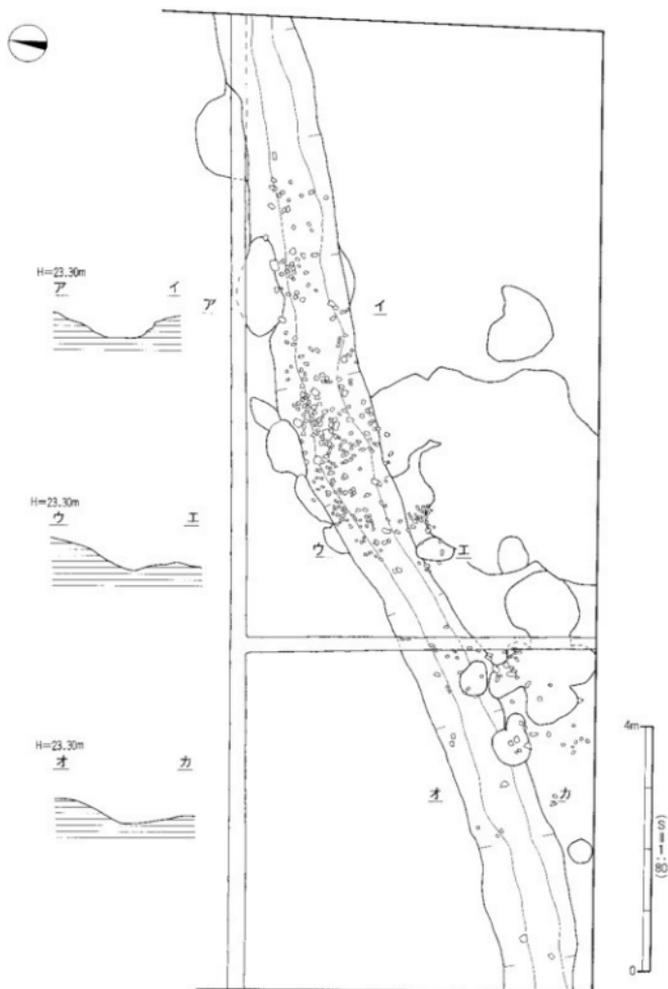
第189図 遺構配置図

川 附 遺 跡



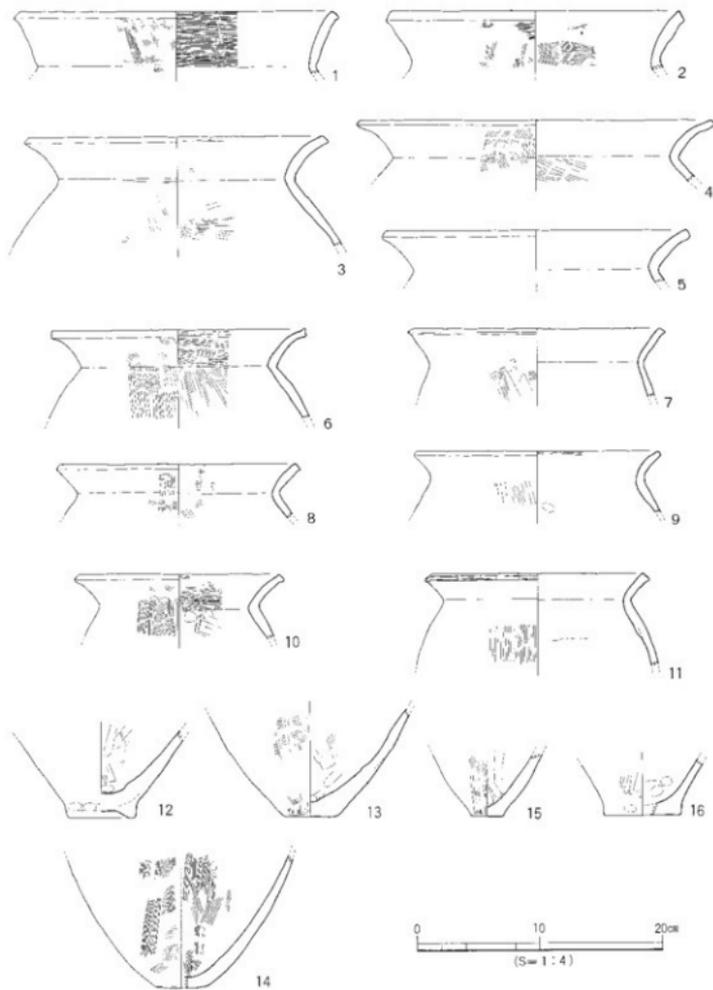
第190図 弥生時代の遺構配置図

遺構と遺物

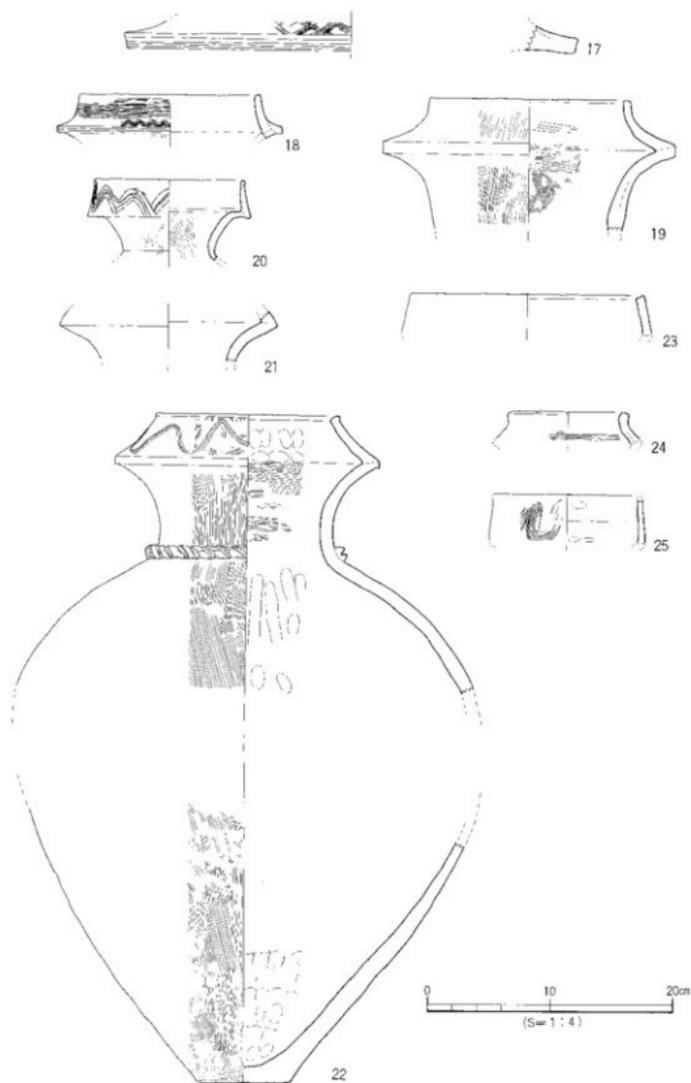


第191図 SD5 測量区

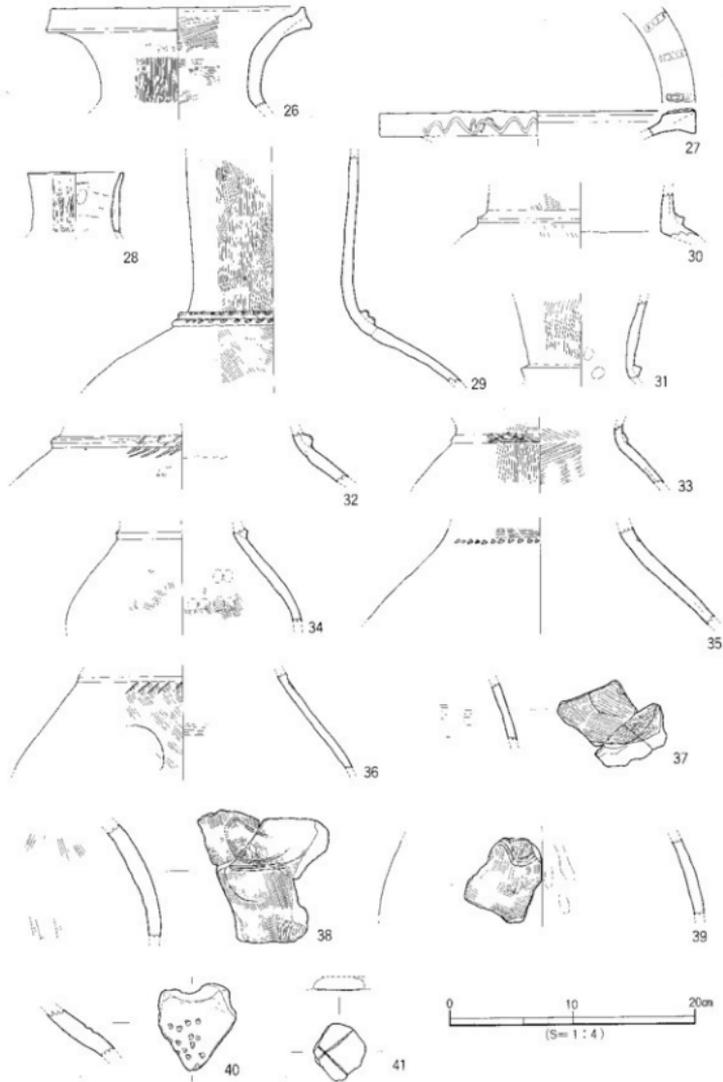
川 附 遺 跡



第192図 SD5出土物実測図(1)

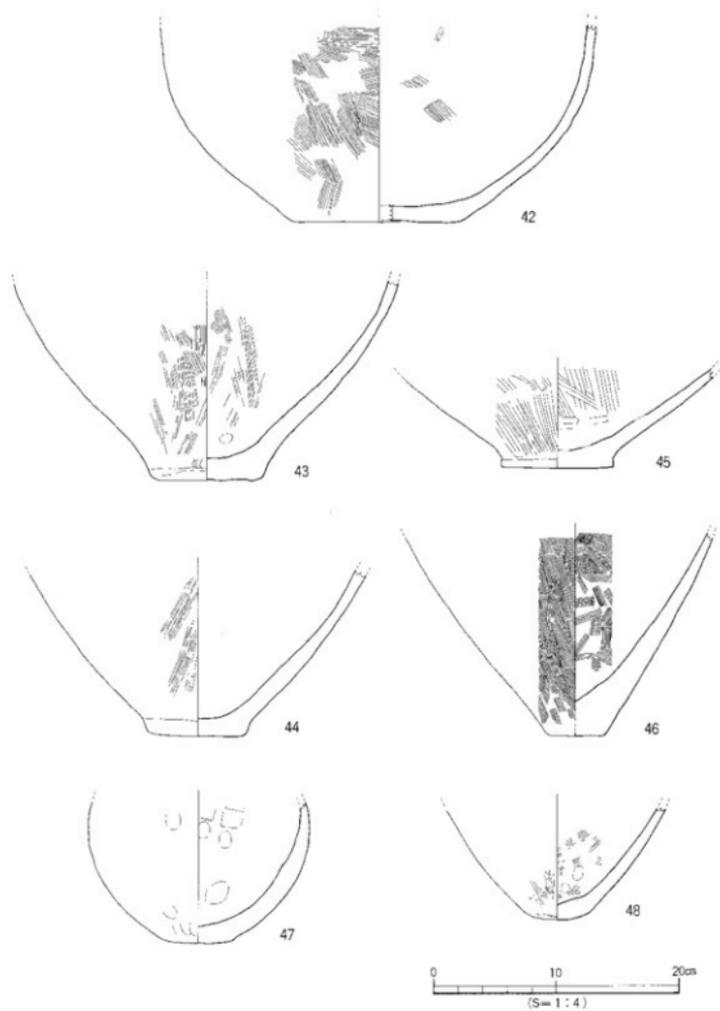


第193図 SD5出土遺物実測図(2)



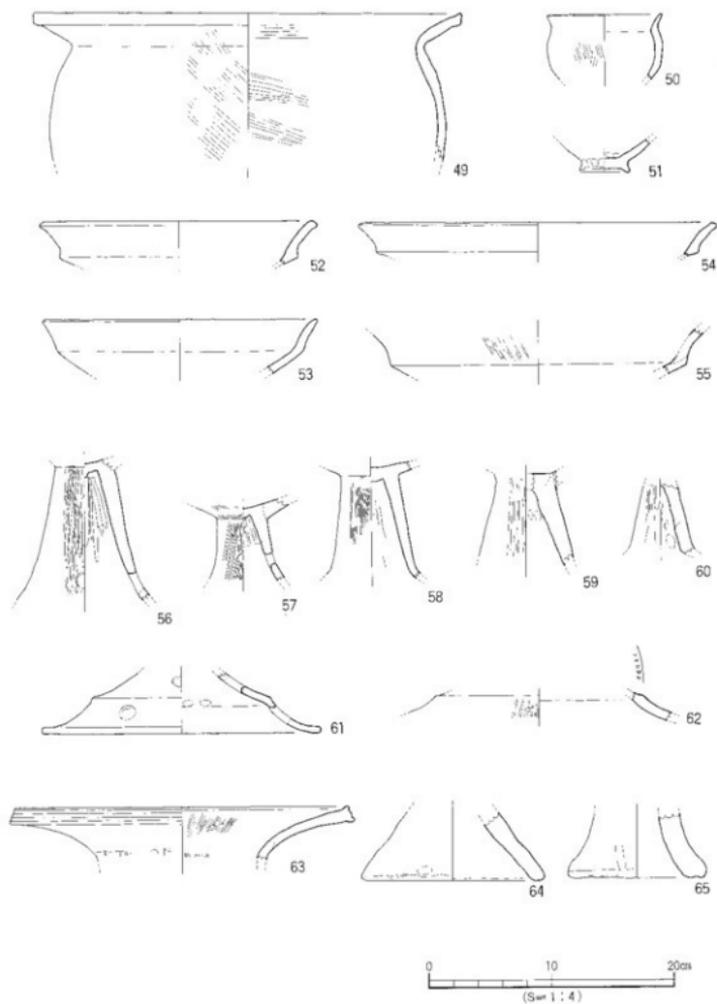
第194图 SD5出土遺物実測图(3)

遺構と遺物



第195図 SD5 出土遺物実測図(4)

川 附 遺 跡



第196図 SD5出土遺物実測図(5)

鉢形土器(49-51) 49は大型品である。器壁が厚く、口縁端部はナデによりやや広い面をもつ。50は小型品である。口縁部は上方に立ち上がる。51は底部である。くびれの上げ底となる。

高坏形土器(52-62) 52-55は坏部である。上外方に開く口縁部をもつ。56-62は脚部である。56・57は円孔をもつ。58-60は破片であり円孔の有無は判断できない。61・62は裾部に段をもつものである。61は上・下段に円孔をもつ。62は小片で、半截竹管文が施されている。

器台形土器(63) 63は上・下が判断しがたいものであるが、ここでは受部としておく。口縁端面には2条の沈線文をもっている。

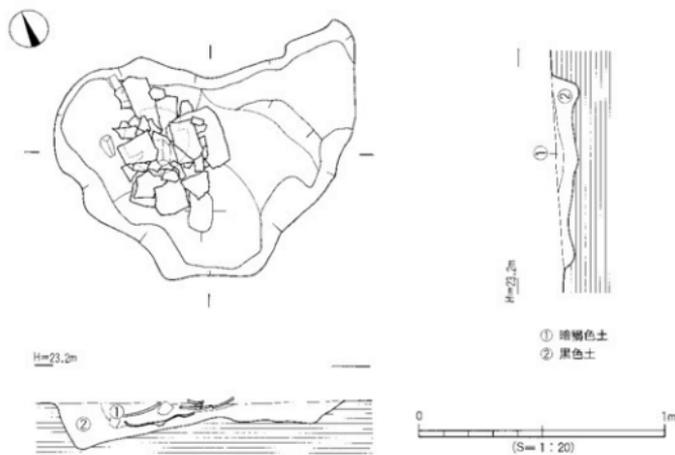
支脚形土器(64・65) 64・65は脚部片である。65は器壁が著しく厚いものである。

時期：出土土器より、弥生時代後期後葉に時期比定する。

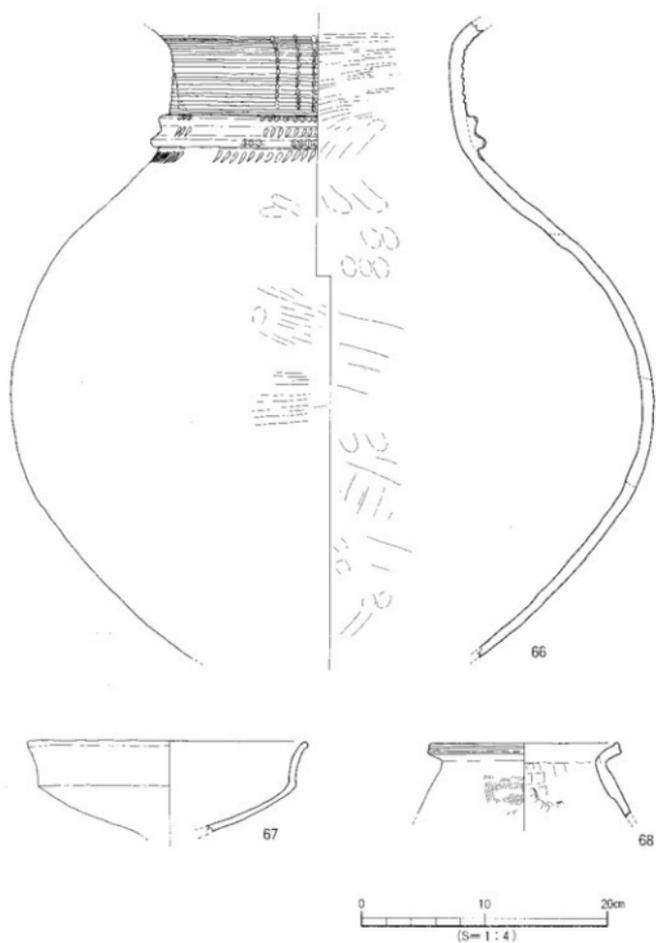
(2) 墓・土坑 (SK)

土器棺墓SK5 (第197図)

SK5は、南城E3・4区にて検出された。第VI層黒色土上面より掘り込まれている。大型の甕形土器を棺身とし、高坏形土器の坏部を棺蓋とする組み合せ式の土器棺である。粗土は黒色土と褐色土が混じる暗褐色土である。平面形は三角形を呈し、1辺が約1mである。土壌は上部がすでに削平され、西壁は20cm、東壁は8cmが残存するにすぎない。基底面は凹凸面が多い。遺物は土坑内より、口縁部欠如の壺形土器が、頸部を東位にして出土した。蓋となる高坏は、最下位より出土している。



第197図 SK5 測量図



第198図 SK5出土遺物実測図

出土遺物 (第198図、図版76) 66は棺身、67は棺蓋である。66は複合口縁蓋と思われるもので、口縁部を打ち欠いて棺身としたものである。底部は整理作業中に紛失したもので調査時には存在していた。頸部には多条の沈線文と刻目を施した「M」字状の凸帯をもつ。頸部には3列を1組とした刺突文列がみられ、特異な施文手法となっている。67は棺蓋で高坏形土器の坏部を利用したものである。ゆるやかに立ち上がり、外反する特徴をもつ。なお、整理中に遺物を紛失している。68は甕形土器の小片である。埋土に混入していたものである。口縁端面に2条の沈線文をもつ。

時期：出土土器より、弥生時代後期中葉に時期比定する。

SK7 (第199図)

SK7はD4・5区で、SD5に接し検出された。平面形態は半円形を呈し、南はSD5に切られる。規模は東西1.3m、南北0.9m、深さ0.4mを測る。埋土は褐色と黒色の混合土である。遺物は基底面より浮いた状態で、高坏形土器脚部片と鉢形土器が出土している。

出土遺物 (第199図) 69は大型の鉢形土器としたが、甕形土器の可能性もある。頸部に刻目凸帯文をもつ。口縁端面はナデにより凹む。70は高坏形土器の脚部片である。円孔をもっている。

時期：出土土器より、弥生時代後期後葉に時期比定する。

SK10 (第200図)

SK10はE3区で検出された。上面は、氾濫による凹地SX2により切られる。平面形は円形で、直径24cm、深さ28cmを測る。断面形は「U」字状で、埋土は暗褐色土1層である。内部からは、口縁部を斜め下にした鉢形土器が1点出土している。

出土遺物 (第200図、図版77) 71は小型の鉢形土器である。約3分の2が残存する。ゆるやかに曲がる口縁部は、口縁端面がナデにより面をなす。底部は平底になるものと思われる。

時期：出土土器より、弥生時代後期前半に時期比定する。

SK11 (第201図)

SK11はE3区で、SK10の南70cmにある。土坑の上部は削除されている。平面形態は楕円形で、規模は南北68cm、東西82cm、深さ17cmを測る。断面形状は南側が深いものとなっている。埋土は暗褐色土1層で、内部からは口縁部を東位にした、横倒れの甕形土器1点が出土している。

出土遺物 (第201図、図版77) 72は中型の甕形土器である。口縁端面はナデにより凹む。肩部に刺突文列をもつ。

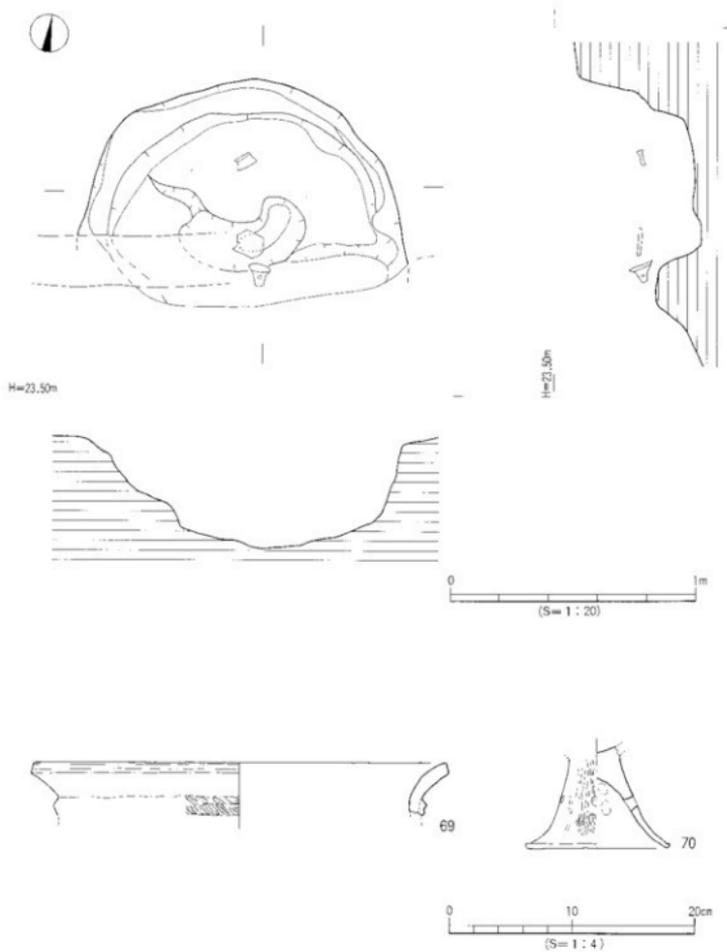
時期：出土土器より、弥生時代後期前半に時期比定する。

SK4 (第190図)

SK4は、F1区にある。平面形態は円形を呈す。直径40cmを測る。出土遺物はない。

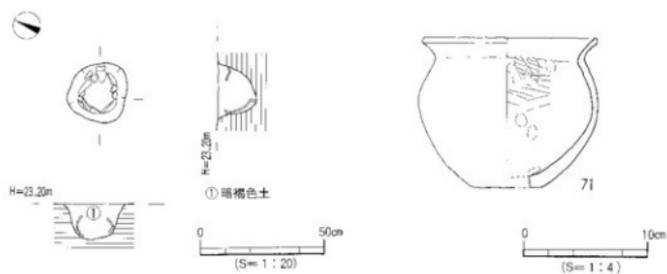
時期：出土遺物がないため特定はできない。ただし、調査地からの出土遺物には弥生時代中期以前のものがいないため、弥生時代後期のものと考えておく。

川 附 遺 跡

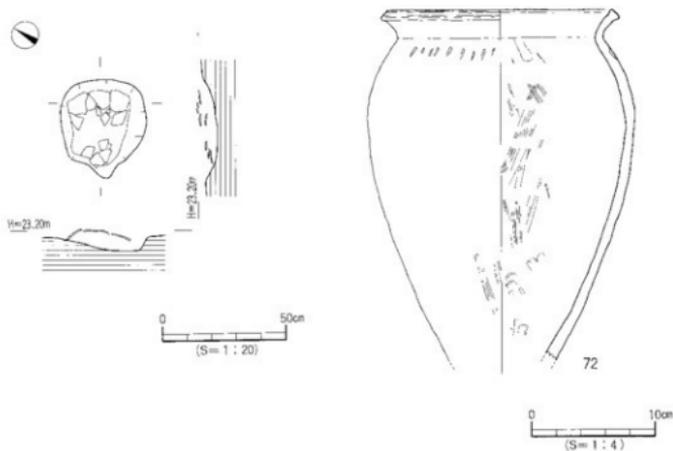


第199図 SK7測量図・出土遺物実測図

遺構と遺物



第200図 SK10測量図・出土遺物実測図

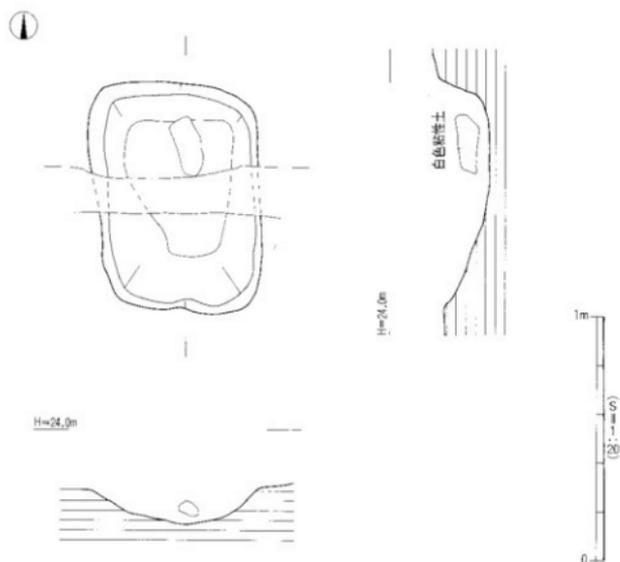


第201図 SK11測量図・出土遺物実測図

SK 6 (第202図)

SK 6はD2-D3区で検出された。平面形態は長方楕円を呈し、南北95cm、東西70cm、深さ20cmを測る。上面中央を近代の排水溝によって切られる。埋土は褐色土1層である。内部からは、10×20cm大の灰白色粘土が、基底面よりやや上位で出土している。出土遺物はない。

時期：出土遺物がないため特定はできない。ただし、調査地からの出土遺物には弥生時代中期以前のもがないため、弥生時代後期のもと考えておく。



第202図 SK6 測量図

SK 8 (第190図)

SK 8はD3・4区で、SD5に切られる。平面形態は不整な楕円形を呈す。東西1.6m、南北0.6m、深さ0.2mを測る。出土遺物はない。

時期：出土遺物がないため特定はできない。ただし、調査地からの出土遺物には弥生時代中期以前のもがないため、弥生時代後期のもと考えておく。

(3) その他の遺構 (SX)

SX2~8 (第190図)

平面形態は円形と楕円形が多く、特異な形状を呈するものもある。これらは形状や発掘時の観察などから、SX2・6は汎蓋による凹み、SX3~5・7・8の5基は人為的工作によるものと判断されるが、立証できないため、現時点では凹みとして記述する。

SX2は、E3区にある。平面形態は不定形で、東西3.3m、南北3.5m、深さ50cmを測る。北端はSD5により削除された様相が残される。埋土は粘質の黒色土と暗褐色土が入り混じる1層をなす。底面は凹凸で、南へ緩傾斜する。出土遺物は細片2点があり、うち1点はSK11出土の甕形土器と接合されている。

SX6はE・F2区にある。平面形態は4つ葉状で、南北1.8m、東西1.3m、深さ13cmを測る。上面を近世の排水溝で削平される。埋土は、暗褐色と灰白色の粘性土が入り混じる1層として堆積する。底面は西が僅かに高い。出土遺物はない。

SX3~5・7・8は円形や楕円形の平面形態をなす。SX5は平面円形で、直径約1.2m(東西1.1m)、深さ27cmである。断面形は円筒形を呈する。埋土は暗褐色土である。基底面は灰白色粘土層に達し、湧水がみられる。したがって表掘りの井戸を想定するが、内部からの出土物はなく、断定には至らない。なお、湧水点の標高は22.67mである。

(4) 包含層出土遺物 (第203・204図、図版77)

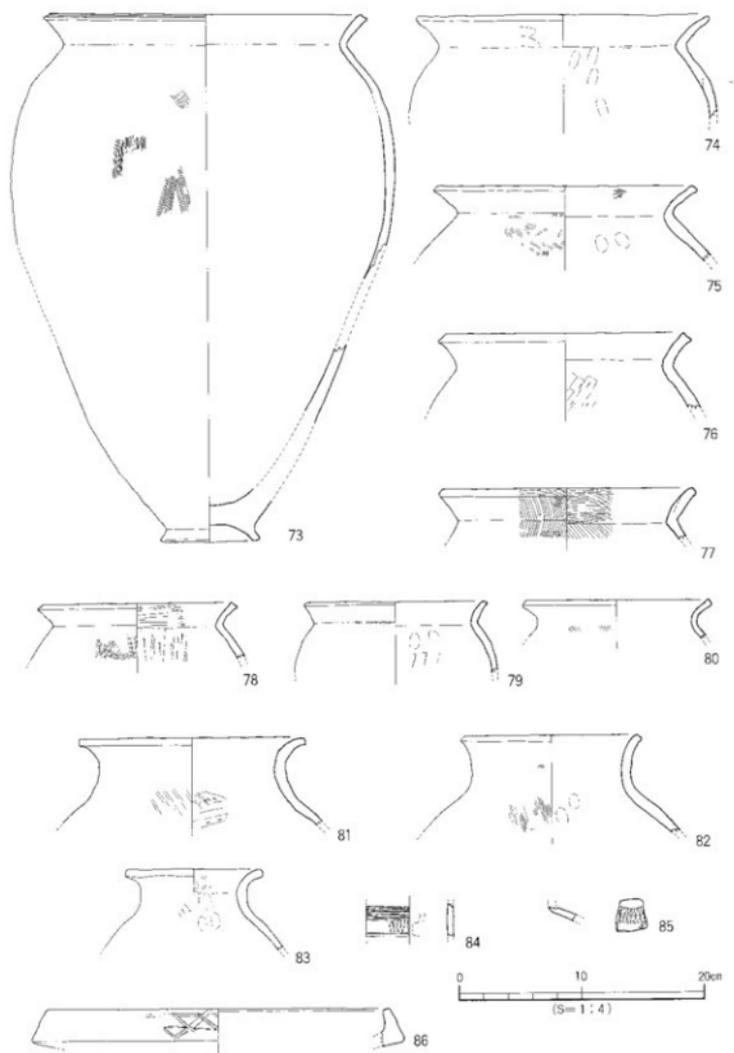
甕形土器 (73~80) 73は大型品である。胴部を一部欠損している。「く」の字状口縁部に、上げ底の底部をもつ。口縁端面はナデ凹む。74~77は中~大型品、78は小型品である。76・78は内面にケズリ痕がみられる。

甕形土器 (81~86) 81~83は短く立ち上がる頸部に、外反する口縁部をもつものである。84・85は細長頸壺である。84は頸部片で櫛掻き沈線文と半載竹管文をもつ。半載竹管文は3段で、方向は交互になっている。85は頸部の小片で半載竹管文が4列以上施されており、84と同じく方向は交互になる。86は広口壺と思われるものである。口縁部は上方に拡張され、斜格子目文が施されている。

高環形土器 (87~90) 87は環部で、外傾する口縁部をもつ。88・89は脚部で、円孔をもっている。90は裾部が有段となる高環形土器の口縁部片である。口縁部は拡張され、端面に櫛掻き波状文、上面に半載竹管文をもつ。

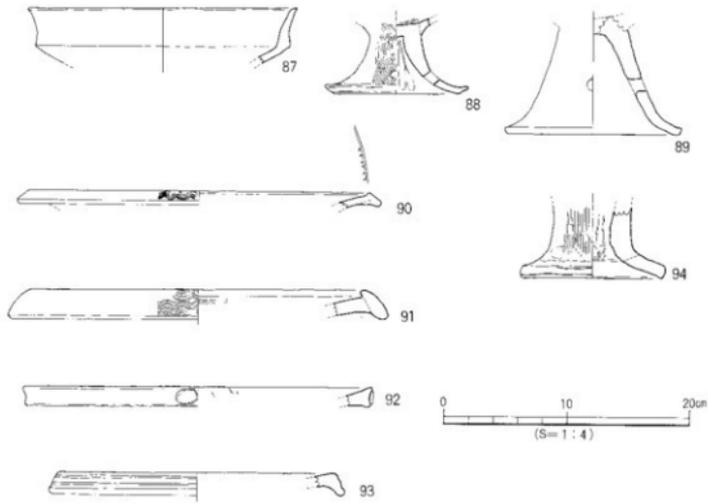
器台形土器 (91~93) 91~93は受部片である。91は大型品で、口縁部は拡張し、櫛掻き波状文をもつ。92は口縁部部に円形浮文をもつ。93は口縁部部が垂下し、端面に2条の沈線文をもつ。

支脚形土器 (94) 94は脚部である。器壁が厚く、作りは雑となる。



第203図 包含層出土遺物実測図(1)

遺構と遺物



第204図 包含層出土遺物実測図(2)

〔2〕古墳時代以降の遺構

古墳時代以降の遺構は、時代や時期特定が可能なものは、C5区検出の近世桶棺墓SK1に限られる。そのほかの遺構は、出土品や埴土、周辺地の調査を参考にして時代や時期を想定したものである。溝4条(SD1~4)、土坑2基(SK2・3)ほかがある。

(1) 溝(SD)

SD1 (第205図)

SD1は、調査地北城のA1~A2区で検出され、西は南折しB~C区につづくと思われる。A4~A2区間は検出長8.5m、幅25cm、深さは5cmを測る。B~C1区にある溝は、北から南、更に西へと曲がる。西方向へ曲がる地点では、東からの溝と切り合い、流路を切っている。B1~C1区間の検出長は4.5m、幅は北部で30cm、西部は80cmを測る。

SD2 (第205図)

SD2は検出長6.5m、幅40~25cm、深さ8cmを測る。西端は狭く、南北にやや広い段をもって消滅する。基底面は凹凸を呈し、小穴6基(SP6~11)が検出された。また、北端部では土坑SK2が検出された。

SD3 (第205図)

SD3はSD2に接し、両者間には低い台状の高まりが残される。西端はSD4に切られる。検出長6.35m、最大幅85cm、深さ8cm、東西北高差9cmを測る。基底面は平滑で、僅かに西傾斜する。

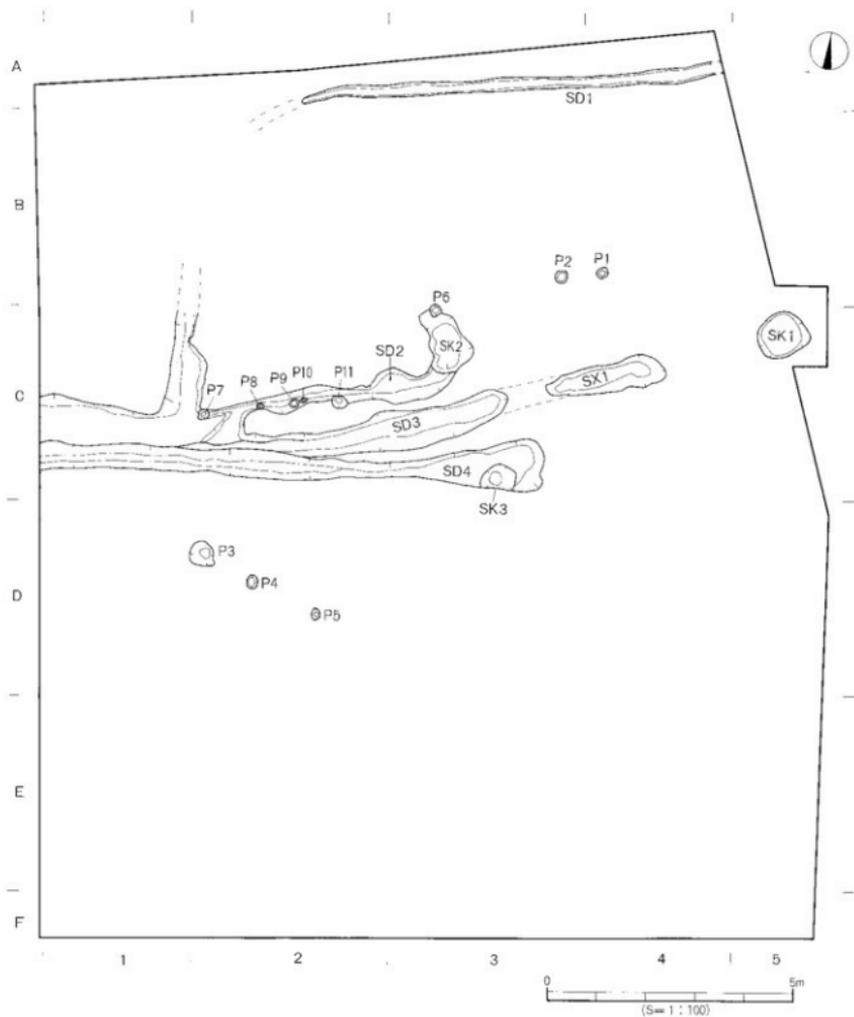
なお、東に80cm離れた地点には長楕円形のSX1が検出された。SX1はSD3の延長線に位置するところから、SD3につづくものと判断したいが、立証に欠ける。

SD4 (第205図)

SD4はSD3の南にあり、SD3を切る。検出長10.3m、最大幅45cm、深さ4cmを測り、東西北高差は2~3cmを測る。東端では土坑SK3が検出された。

SD2~4は、埋土はいずれも褐色砂質土1層で、遺物がなく、基底面が若干東に傾斜しているという共通性をもっている。切り合い関係も認められるものの、時期差は余りないものと判断され、強いてあげるとSD2・3が先行し、SD4後出のものとなる。

遺構と遺物

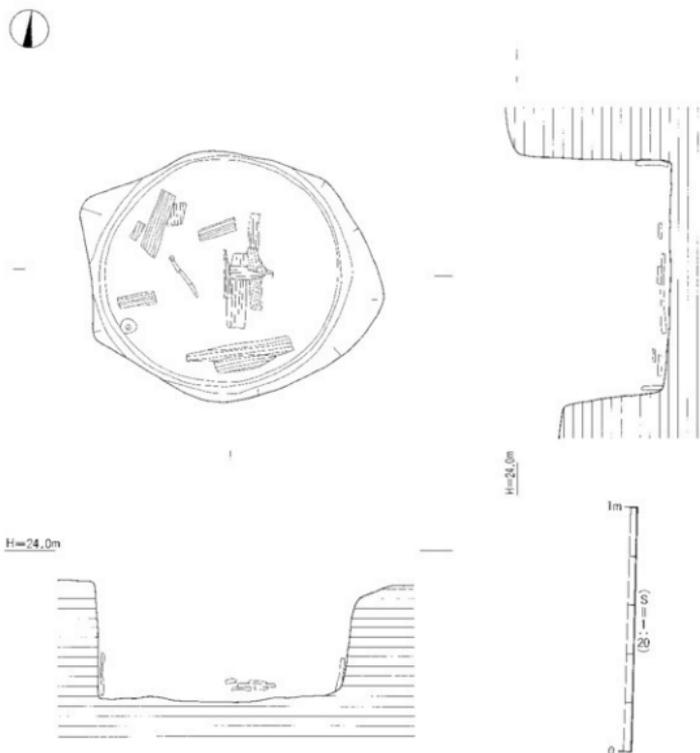


第205図 中近世の遺構配置図

(2) 墓・土 墳 (SK)

桶棺墓SK1 (第206図、図版74)

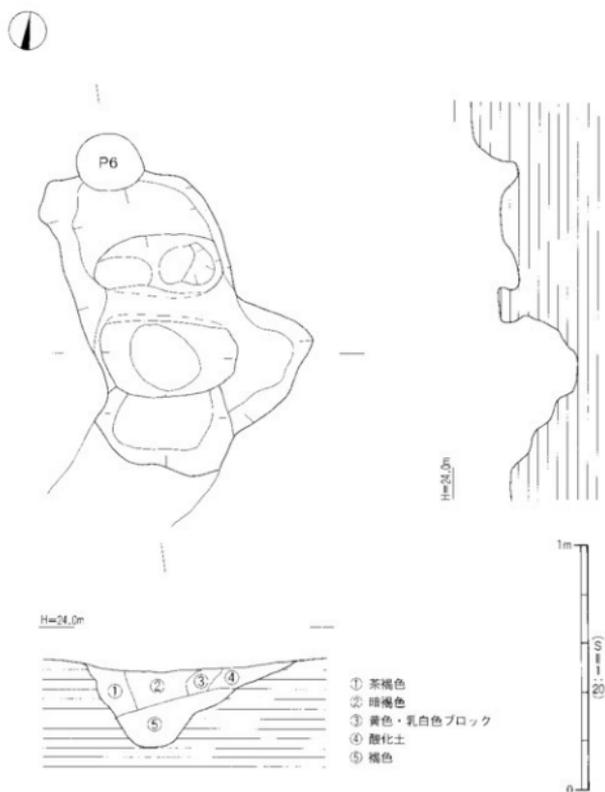
SK1は、C5区で検出された木製丸桶を棺体とする桶棺墓である。墓壇は直径1m前後、深さ70cmを測る。上部はすでに削平されている。基底面からは桶枠部20cmが出土したが、底板は原形をとどめない。埋土は粗砂混りの褐色土1層である。遺骸は確認されず、埋葬形態は不明で、副葬品として漆器碗と真金具が出土した。



第206図 SK1 測量図

SK2 (第207図)

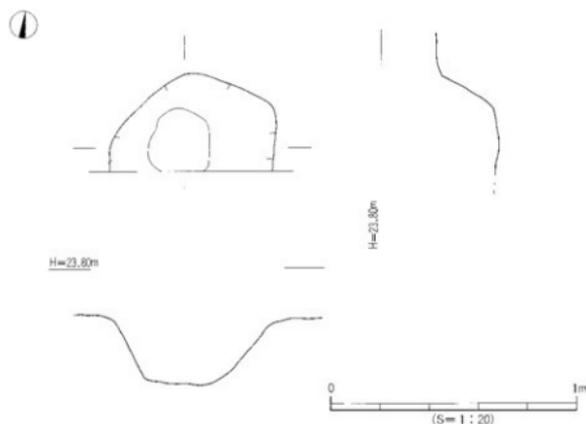
SK2はSD2の東端内部に位置し、平面形態は不整楕円形を呈し規模は南北1.5mである。内部に2つの掘り込みがみられる。掘り込みは北が浅く、南が楕円状に深い。2つの掘り込みの境界には壁体状の突出部分がみられる。北の掘り込みは径65cm、深さ10cm、南の掘り込みは径80cm、深さ35cmを測る。なお北端は直径20cmの円形の柱穴SP6により切られている。遺物の出土はない。



第207図 SK2 測量図

SK3 (第208図)

SK3はSD4の内部の東端に位置し、南半部分の1/2は削平されている。平面形態は半円を呈するが、削平部分を想定すると円形が考えられる。東西68cm、南北40cm、深さ20cmが測られる。遺物の出土はない。



第208図 SK3 測量図

(3) 柱穴・小穴 (SP)

SP1~11 (第205図)

柱穴状掘り込みは、B4区で1基 (SP1)、B3区で1基 (SP2)、C3区で1基 (SP6)、SD2内で5基 (SP7~11)、D2区で3基 (SP3~5) の11基が認められる。

(4) 近世排水溝 (第189図)

排水溝は、調査着手当初に検出され、陶管、枝米、栗石で設備される。T字形を示し、東西二流を集めて南流させる方法がとられる。東流のものは西下りの地形に逆行するかたちとなる。U字形の掘り込み基底には円筒管を据え、周囲に円礫をつめ、灰白色粘土で被覆される。シダは東部に使用され、集水効果が計られている。

(5) 包含層出土遺物 (第209図、図版77)

①古墳時代・土師器 5世紀後半～6世紀前半の遺物が出土している。

壘形土器 (95・96) 95は口縁端部が内側に小さく突出するものである。器壁が薄く、コシキ形土器になる可能性をもつ。96は口縁部に段をもつものである。

高坏形土器 (97～103) 97～100は坏部である。口縁部は内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反するものである。口縁部と坏底部との境には弱い段をもつ。101～103は脚部である。101・102は充填技法がみられる。103は柱上部が中実となる。

コシキ形土器 (104～110) 104は口縁部、105・106は底部となる。105は多孔孔で、中央に1ヶ、外周に6ヶの孔がみられる。106は小片で、半円球状の孔が2ヶみとめられる。107～110は把手部である。107～109は中実で棒状の把手となる。110は把手部の内側が中空となり、上面に溝をもつ。110は把手の特徴より韓式土器とみられる。

②古墳時代・須恵器 (図版78)

坏身 (111) 立ち上がりは直立する。口縁端部は内傾し、わずかに段をなす。受部はやや上外方へ伸び、立ち上がりとの境は凹む。体部は丸味をもつ。体部外面の調整は自然釉の付着とその剥離のため不明であるが、回転ヘラ削り調整が施されたと思われる。

高坏 (112～114) 112は坏部。底部から体部にかけて丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。体部には6条の波状文が施され、その文様帯上には断面が円形のつまみか貼付されているが、欠損している。波状文の上方には断面が三角形の凸帯が1条巡る。113・114は脚部である。ハの字形に外反し、114はさらに端部付近で下方へ屈曲する。脚柱部には、113は円孔、114は長方形透かしをもつが、どちらも一部しか残存していないため、円孔あるいは透かしの大きさは不明である。脚柱部には113は回転ナデ、114はカキ目調整を施す。

甕 (115～119) 口頸部は外反し、116・117は端部付近で水平近く屈曲する。115～117は口縁端部付近あるいは直下に断面三角形の凸帯が巡り、その下に波状文を施す。115・116はさらにその下に凸帯と波状文が巡る。118は口縁端部が欠損するが、口頸部には波状文が巡り、体部は平行叩きの後、カキ目調整される。119の口頸部にもカキ目調整が施される。

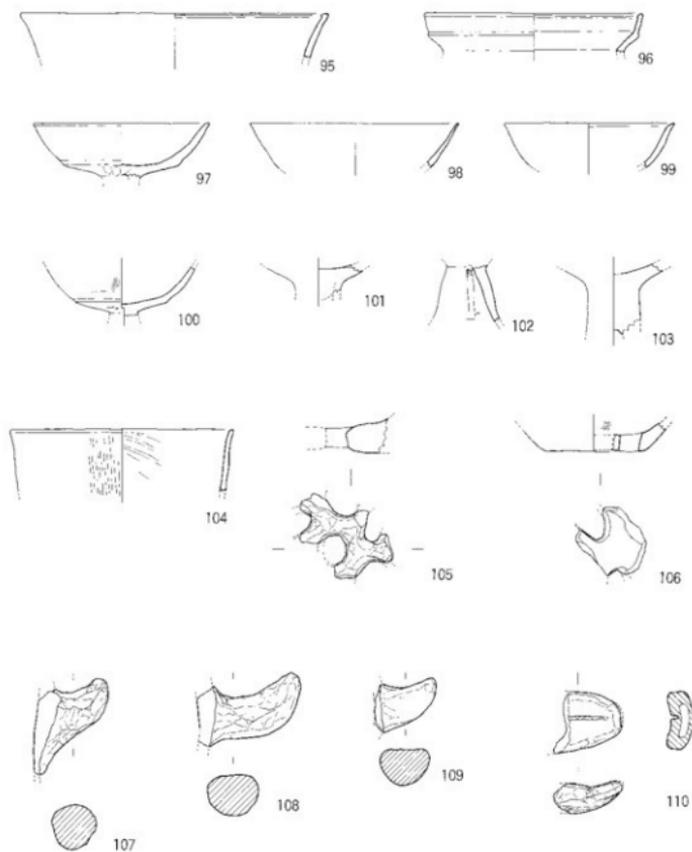
以上の111～119はI型式の形態をもつものである。

坏身 (120～124) 立ち上がりは短く内傾する。121は端部が欠損するが、他は端部をやや尖り気味に丸くおさめる。120・123は受部が水平に伸び、121は立ち上がりとの境が凹む。121～124は体部の丸味はあまりないが、底部は丸味をもつものと思われる。120は体部外面にカキ目調整を施し、断面は淡い小豆色をするなど、他の121～124とは異なる様相をみせる。また123ははずみがある。

高坏 (125・126) 脚基部は細く、125は基部からすぐ柱部が外反する。126は長脚で、裾部にかけてラッポ状に外反して開く。2段の透かしをもっているが、断面しか残存しておらず、下段の透かしの下端は不明である。脚柱部の中央付近に、やや不明瞭な2本の沈線が巡っている。内面には、しほり痕が顕著に残る。

鉢 (127) 搦鉢。底部は厚い円盤状を呈する。底部内面には貫通しない小孔が多数あり、外面には工具痕が残る。内外面とも自然釉が付着するため、調整は不明。

川 附 遺 跡



第209図 包含層出土遺物実測図(3)

甕 (128) 口頸部は上外方へ直線的に伸び、端部付近で外方へ屈曲する。端部は丸い。体部は張り出し、外面は平行叩きの後カキ目、内面は円弧叩きがみられる。

以上の120-128はⅡ型式の形態をもつ。

111-128は古墳時代の須恵器であり、5世紀後半-6世紀末頃のものと思われる。

③古代・須恵器 (図版78・79)

坏壺 (129-133) 129-131は擬宝珠様つまみ、132・133のつまみは逆台形を呈している。つまみ部分しか残存していないため、その他の形状は不明。

坏身 (134-147) 134・146は底部が欠損。134の口径は小さく、高さもさほど高くない。口縁部は直立する。146は体部が上外方へ直線的に伸び、端部付近でわずかに外反する。135・136は底端部よりかなり内側に高台が直立して貼付されている。高台の端部は内傾する。また136の底部と体部の境には工具痕が残る。137-139、141-145、147はハの字形に、140は直立して高台が底端部、あるいは端部付近に貼付されている。138・139・142は高台の接地面が凹面をなし、137・140・141・143・144の高台は端部にやや丸味をもっている。145・147の端部は凹面状で段をなし、内端面が接地している。147は体部から口縁部にかけて直線的に伸び、端部はやや内湾気味である。高台は全て回転ナデ調整されており、底部はヘラ切り未調整、またはヘラ切り後ナデ調整をしているものが多い。

高坏 (148・149) 脚基部は細く、柱部は外反して開く。148・149の両者とも回転ナデ調整を施し、149の内面にはしほり痕が顕著に残る。

壺 (150-153) 150は長頸壺の口頸部である。頸基部から口頸部中央までやや内傾して立ちあがり、端部付近までは直立する。そして端部付近ではほぼ水平に屈曲し、さらに端部は上方へ折り曲げる。外面はナデ調整を施す。内面には粘土痕がある。151・152は高台付の壺。底端部にハの字形の高台が貼付されている。体部は、底部から肩部にかけて直線的に上外方へ伸び、肩部は張っている。体部外面は回転ヘラ削り調整の後、回転ナデ調整。高台は回転ナデ調整を施す。153は短頸壺。口頸部は短く内傾し、肩部は張る。肩部に自然釉が付着する。内外面とも回転ナデ調整を施す。

平瓶 (154) 口縁部は、体部の上面の中心から外して上外方へと開く。端部はやや内湾する。体部は扁球形をしているが、口縁部の接合されていない側は大部分が欠損する。底部も欠損する。口縁部から体部上半へかけては回転ナデ調整、体部下半から底部へかけては回転ヘラ削り調整を施している。

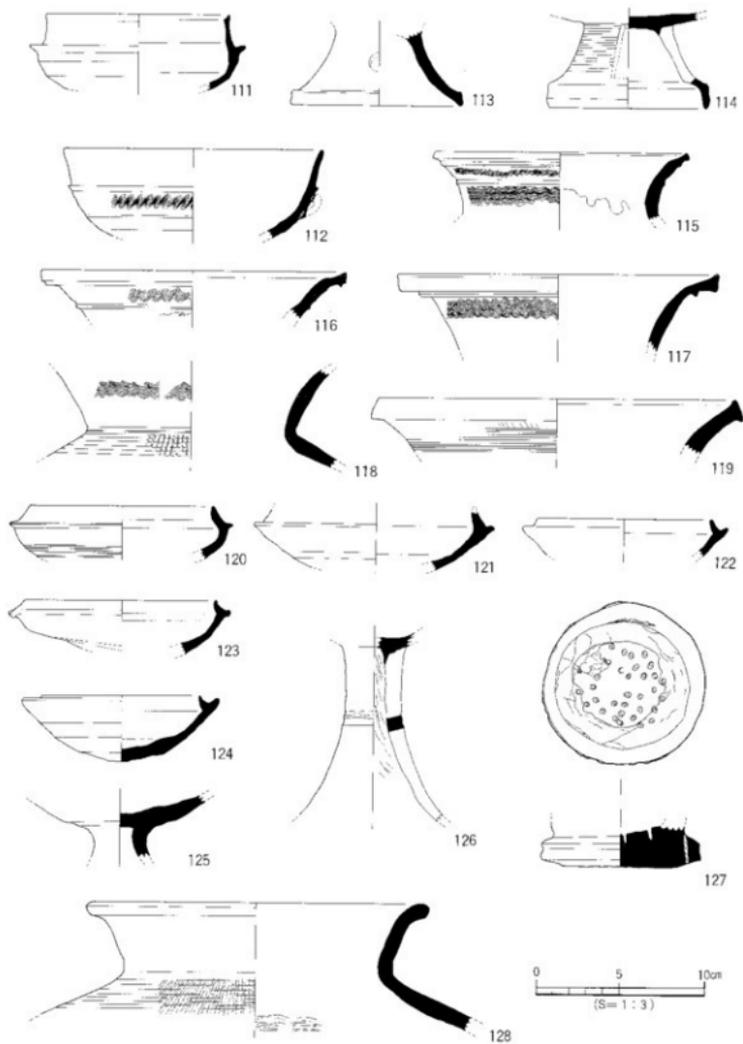
皿 (155) 非常に浅い。口縁部は外反し、端部は内傾して平坦な面をなす。口縁部は回転ナデ調整をし、底部内面は丁寧にナデられている。

鉢 (156) 鉄鉢形。体部から口縁部にかけて内湾し、端部は内傾する。底部は丸く、やや尖っており安定性を欠く。外面は丁寧な回転ヘラ削り調整が施されている。

甕 (157・159) 157の口頸部は外反し、端部はやや尖り気味に丸くおさめる。体部には内外面とも叩きがみられ、外面は叩きの後、回転ナデ調整を施している。159の口頸部は直立気味に伸び、端部付近ではほぼ水平に大きく外反する。外面には粘土無痕が残っている。

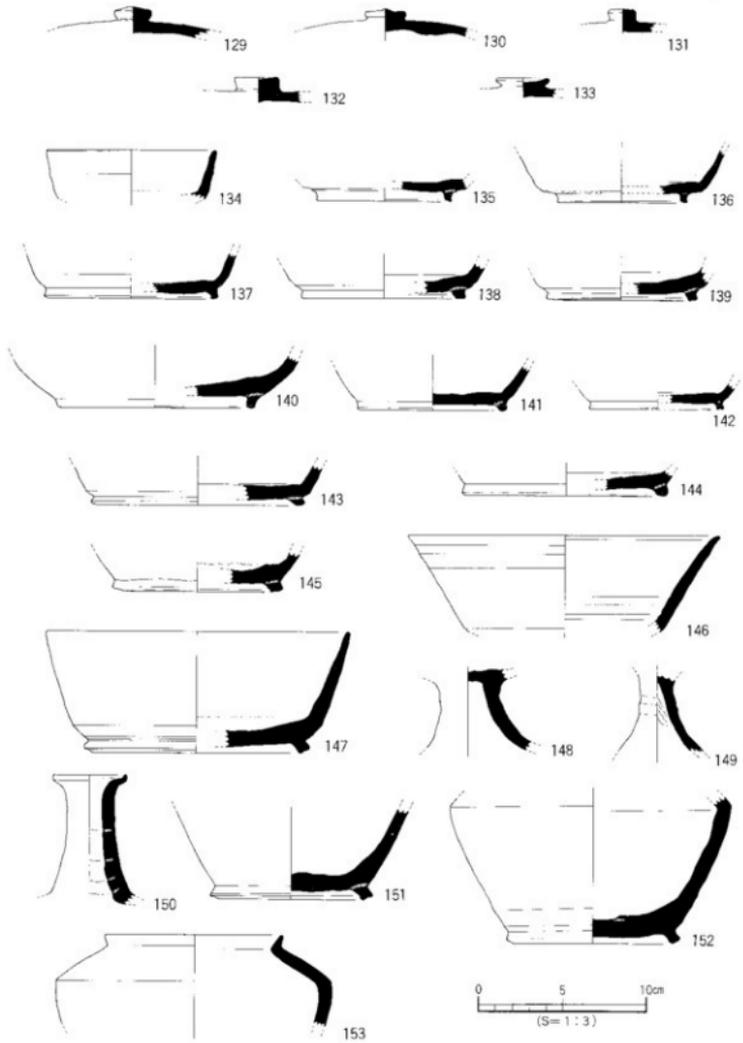
不明品 (158) 器種不明である。器壁はわりと薄く、体部はやや内湾気味に上外方へ開く。底部は接合部で剝離している。外面はナデ、内面は回転ナデ調整を施している。

川 附 遺 跡



第210図 包含層出土遺物実測図(4)

遺構と遺物

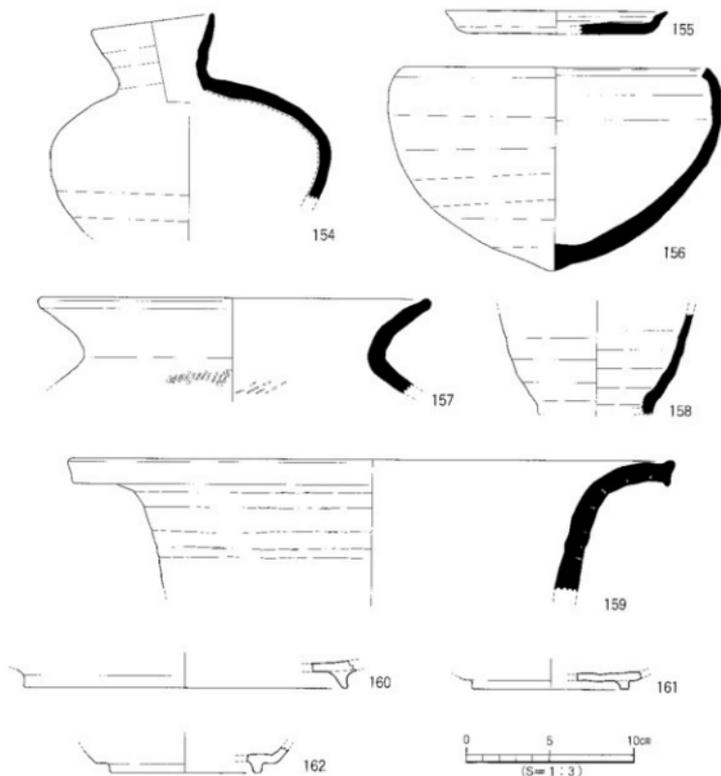


第211回 包含層出土遺物実測図(5)

以上の129～159はIV型式以降の要素をもつ古代の須恵器である。ただし明確にIII型式といえるものは高坏2点(148・149)だけであり、その他はほとんどがIV型式以降の8世紀前半～後半までのものである。また159の甕は成形、形態等から、他のものより新しくなる可能性もある。

④古代・土師器 (図版78)

坏身(160～162) 底端部よりやや内側に、高台が160はやや開き気味に、161・162は直立して貼付される。また161の接地面は、わずかに凹面をなす。



第212図 包含層出土遺物実測図(6)

⑤石器 (第213図、図版79)

包含層からは弥生時代以降の石器が10点余り出土している。

石庖丁 (163-165) 163-165は結晶片岩を材質とする。163は刃部をもっており製品と思われる。両端に挟りの一部がみとめられる。164と165は未整品である。刃部のトギはみとめられない。165は孔を穿ったあとがみられる。

敲打具 (166) 166は敲打具の完形品である。重量は241.8gである。

砥石 (167) 167は砂岩製である。使用面が2面みられる。

用途不明石製品 (168・169) 扁平で棒状の石製品である。

石器素材 (170-175) 170-175は磨製石器の素材で、全て結晶片岩である。170は扁平な板状のもので、47.0gを計る。171-174は棒状で表面は丸みをもったものである。175は粗削り状態のもので、柱状の素材である。37.5gを計る。

⑥中近世 (第214図、図版80)

中-近世の遺物が50点余り出土している。遺物はいずれも小片である。

10世紀後半-11世紀後半 (176-181) 176は須恵器の坏である。低い円板状の高台をもつ。177-180は土師器の坏である。177-179は円板高台をもつ。180は器壁が厚い平底である。181は緑釉陶器の口縁部片である。

11世紀後半-12世紀 (182-189) 182は内黒の碗である。輪高台をもつ。内面には工具痕がみられる。183-187は碗である。底部はいずれも輪高台で、183は回転糸切り、185はヘラ切りがみられる。186は体部下半から高台までの部分に回転のナデあとがみられる。188・189は厚い円板高台をもつもので、回転糸切り痕がみられる。

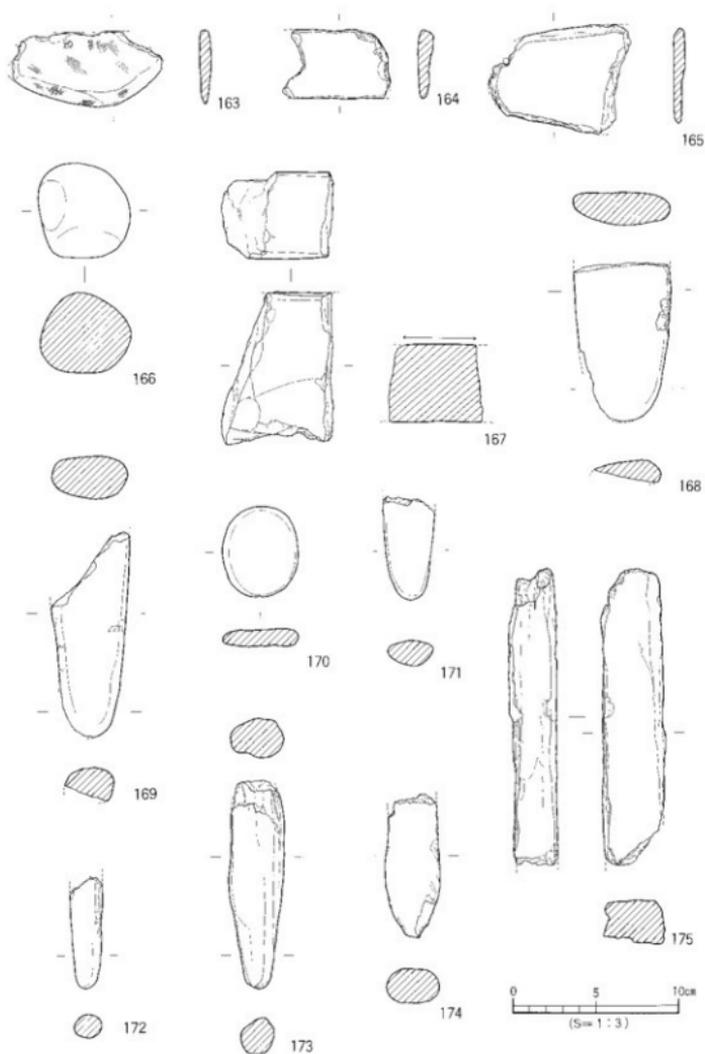
13世紀 (190-195) 190・191は和泉型瓦器碗である。192-195は貿易陶磁器片で、192の器種及び形態は特定できなかった。

15-16世紀 (196・200) 196は15-16世紀の坏部で、底部には回転糸切りがみられる。200は15世紀の釜の脚部である。

17世紀 (198・199) 198はナベの口縁部である。小片のため口径は定かではない。199は備前系のスリ鉢である。

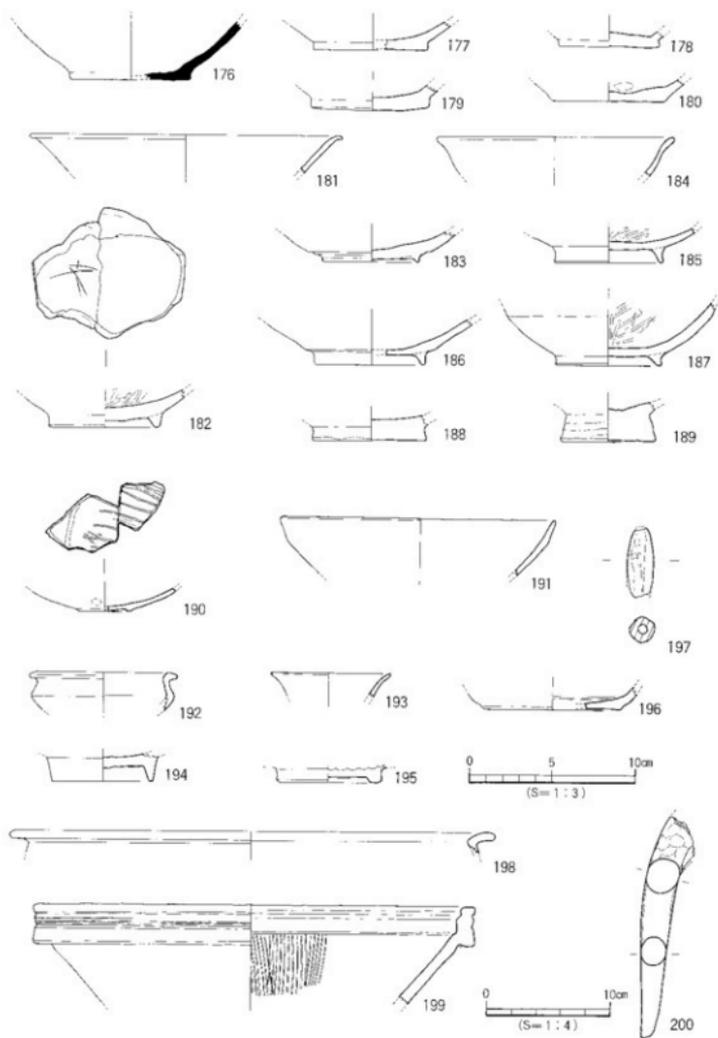
時期不明 (197) 197は土錘である。直径6mmの穴をもつ。

川 附 遺 跡



第213図 包含層出土遺物実測図(7)

遺構と遺物



第214図 包含層出土遺物実測図(8)

4. 小 結

本調査では、弥生時代後期の遺構と10～13世紀、及び15～17世紀の遺物を主に検出した。

弥生時代後期 調査地の南坡では、弥生時代後期の遺構が集中して検出された。SD5、SK5・7・11は遺物を出土しており、主要な遺構と言える。そのほかの遺構は切り合いや埋土等より弥生時代後期と推定したものであり、その性格は明らかにはできなかった。

SD5は、埋土に砂礫土を含まないために恒常的に流水があった溝とは認めがたいものである。また、出土遺物は出土量は多いが破片ばかりであり、二次的に堆積したものと見える。よって溝の性格は特定することはできなかった。

SK5は、壺棺墓である。複合口縁壺の口縁部を打ちかいたものを棺身とし、高坏部を棺蓋としていた。時期は、後期中葉と考えられるものである。松山平野の弥生時代後期墓には土器棺墓が使用される例が多い。この場合、朝美澤遺跡、福音小学校構内遺跡、水満田遺跡等では、土器棺墓は複数検出されており、松山平野の一つの傾向性を示したものと見える。よって、本調査において検出されたSK7・8などはSK5と近接するうえ、同規模を測ることより墓の可能性のあるものといえる。

SK10・11は、当初より完形の鉢形土器と甕形土器が埋没していたものと思われる。土器棺にしては土器の法量が小さく、性格づけは難しい。

古墳時代 出土物のなかで注目されるのは、110の韓式系土器である。松山平野でも出土例は少なく貴重な資料である。

10～13世紀 土師器の資料が少量であるが出土している。

土師器は円板高台のものはヘラ切りと糸切りのものがあり、輪高台のものは回転糸切りのものがある。希少例としては須恵器の坏があげられる。このほかには黒色土器碗と和泉型瓦器碗、白磁、龍泉窯系青磁、緑釉陶器碗の破片が出土している。以上の土器は包含層であり出土状況に難があるが、松山平野では未だ量的に多くない土器資料であり、その意味は大きいといえる。

今回の調査では、福音寺地区の弥生集落が筋違遺跡よりも西部に展開していることが明らかとなった。ただし、弥生時代後期以降中世までの間において当地が川附川の氾濫地帯であったことも判明し、福音寺地区西部の集落は川附川の河川移動によりその範囲が規制されていたことが分かるものであった。当地が本格的に生産地及び居住地となるのははやくとも15世紀以降である。

なお、古墳時代遺物については宮内慎一氏、古代以降の遺物については栗田正芳氏、石器については加高次郎氏の指導と助言を得、整理及び報告が円滑に進んだ。末尾になったが、記して感謝の意を表するものである。

(註)

朝美澤遺跡1次 松村淳・梅木謙一 1994「朝美澤遺跡1次調査地」「人峰ヶ台丘陵の遺跡」、松山市教育委員会、

御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

福音小学校構内遺跡 梅木謙一・武正良清 1995「福音小学校構内遺跡」松山市教育委員会、御松山市生涯学習振

興財団埋蔵文化財センター

水満田遺跡 岡田敏彦 1980「一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書」財団法人埋蔵文化財調査会

センター

遺構一覧表

表86 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規 模		埋 土	出土遺物	時 期	備 考
				長さ	幅×高さ (m)				
5	E3-4	三角形	段 状	1.16	0.82×0.18	暗褐色土	弥 生	弥生後期	土器残基
7	D4-5	半円形	U字状	1.3	0.9×0.4	褐色+黒色	弥 生	弥生後期	SD5に切られる。
10	E3	円 形	U字状	0.25	0.24×0.28	新褐色土	弥 生	弥生後期	SX21に切られる。
11	E3	楕円形	皿 状	0.82	0.68×0.17	暗褐色土	弥 生	弥生後期	
4	F1	円 形		0.40	0.40×*			弥生後期	
6	D2-3	隅丸長方形	U字状	0.95	0.70×0.20	褐色土		弥生後期	
8	D3-4	楕円形		1.60	0.6×0.20	褐色+黒色		弥生後期	
1	C5	円 形	方 形	1.17	1.05×0.70	褐色土	虚器検	近 世	雑物基
2	C3	不定形	段 状	1.20	0.80×0.35	褐色土			SP6に切られる。
3	C3	半円形	U字状	0.68	0.40×0.20	褐色土			

表87 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規 模		埋 土	出土遺物	時 期	備 考
			長さ	幅×深さ (m)				
5	F1~E5	舟底状		16.50	1.50×0.40	黒色+暗褐色	弥 生	弥生後期
1	A2~A4	皿 状	8.50	0.25×0.05	褐色砂質土			
2	C2-3	皿 状	6.50	0.40×0.08	褐色砂質土			
3	C2-3	皿 状	6.35	0.85×0.08	褐色砂質土			SD4に切られる。
4	C1-3	皿 状	10.30	0.45×0.04	褐色砂質土			

表88 性格不明遺構一覧

SK	地区	平面形	断面形	規 模		埋 土	出土遺物	時 期	備 考
				長さ	幅×深さ (m)				
2	E・F3	不定形	段 状	3.50	3.30×0.50	黒色-暗褐色	弥 生		SD5に切られる。
3	F3	楕円形	レンズ状	0.60	0.40×0.10				
4	E2-3	楕円形	レンズ状	0.60	0.50×0.25				
5	E・F2	円 形	円筒形	1.20	1.10×0.27	暗褐色土			
6	E・F2	不定形	段 状	1.80	1.30×0.13				
7	E2	楕円形	レンズ状	0.56	0.40×0.25				
8	E・F2	楕円形	レンズ状	0.85	0.6×0.20				

表89 SD5 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (on)	形 態 ・ 施 文	調 整		(外面 色調 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	壺	口径(25.4) 残高 5.1	口縁端部は面をなす。内面に 弱い稜をもつ。器壁が厚い。	①ヨコナデ ②ハケ→ヨコナデ	③ヨコハケ ④ヨコナデ	淡茶色 灰黄色	石・長(1-3) ◎		
2	壺	口径(23.6) 残高 4.5	口縁端部は面をなす。器壁が 厚い。	①ヨコナデ ②ハケ→ヨコナデ	ハケ ヨコナデ	灰・白灰色 暗灰色 淡灰色	石・長(1-4) ◎		
3	壺	口径(23.6) 残高 9.1	口縁端部は面をなす。内面に 弱い稜をもつ。	①ヨコナデ ②ハケ→ヨコナデ ③ハケ(マメツ)	④ハケ→ヨコナデ ⑤ハケ(マメツ)	乳茶褐色 乳茶紫色	石・長(1-3) ◎		
4	壺	口径(22.0) 残高 5.0	口縁端部は外反が強く、面を なす。内面に弱い稜をもつ。	①ヨコナデ ②ハケ(木/a)	③ヨコナデ ④ハケ(木/a)	黄茶色 黄茶色	石・長(1-3) ◎		
5	壺	口径(21.4) 残高 4.3	口縁端部は面をなす。内面に 弱い稜をもつ。	マメツ	マメツ	淡褐色 茶褐色 灰褐色	石・長(1-3) ◎		
6	壺	口径(20.8) 残高 7.3	口縁端部はナデ凹む。内面に 稜をもつ。	①ナデ ②ハケ→ヨコナデ ③ハケ(木/cm)	④ハケ→ヨコナデ ⑤ハケ(木/cm) ⑥ハケ(木/cm)	黄茶色 黄茶色	石・長(1-3) ◎		
7	壺	口径(20.1) 残高 5.5	口縁端部は面をなす。	①ナデ ②板ナデ	ナデ	淡茶色 乳茶色	石・長(1-3) ◎		
8	壺	口径(19.4) 残高 4.1	口縁端部は面をなす。	①ハケ→ヨコナデ ②ハケ	ハケ(マメツ)	灰灰色 黄灰色	石・長(1-3) ◎		
9	壺	口径(19.7) 残高 3.0	口縁端部はあいまいな面をな す。	①ヨコナデ ②ハケ	③ハケ→ヨコナデ ④ヨコナデ ⑤ナデ	乳灰褐色 乳灰褐色	石・長(1-4) ◎		
10	壺	口径(16.0) 残高 5.2	口縁端部は面をなす。内面に 稜をもつ。	①マメツ ②ナデ(一部ハケ) ③ハケ	④ハケ(一部ナデ) ⑤ハケ・ケズリ	淡褐色 淡黄褐色	石・長(1-2) ◎		
11	壺	口径(17.3) 残高 7.6	口縁端部には2条の細比線文 を施す。	①マメツ(ヨコナデ) ②マメツ(ハケ)	③マメツ(ヨコナデ) ④マメツ(ハケ)	淡茶色 黄灰色	石・長(1-6) ◎		
12	壺	底径 5.1 残高 7.2	直立して立ち上がる底部は上 げ底となる。	マメツ	ハケ→ナデ	暗茶褐色 灰褐色 暗黄灰色	石・長(1-5) ◎		
13	壺	底径(3.7) 残高 8.8	平底、やや厚い底部。	①マメツ(薄ハケ) ②ハケ ③ナデ	④ハケ ⑤ナデアゲ	灰黄茶色 灰黄茶色	石・長(1-6) ◎		黒灰
14	壺	底径(4.5) 残高 10.9	丸みをもつ平底。底部端はあ いまい。	ハケ(タタキ→ ハケの可能性有)	ハケ	乳黄色・ 暗灰色 暗灰色	石・長(1-1) ◎		黒灰
15	壺	底径(2.4) 残高 5.5	わずかに突出する平底。	ハケ ①ナデ	ナデアゲ	灰黄茶色 灰黄茶色	石・長(1-2) ◎		黒灰
16	壺	底径(6.2) 残高 4.6	直立して立ち上がる平底。	①マメツ(薄ハケ→ナデ) ②ナデ ③ナデ	ナデアゲ(板状)	茶褐色 茶褐色	石・長(1-5) ◎		黒灰
17	壺	残高 2.3	複合口縁部。接合端部に2条の 沈線文。拡張部に帯摺(4 ~5条)斜格子文。	①マメツ ②ハケ(工具痕有)		灰黄色 灰黄色	石・長(1-4) ◎		75
18	壺	口径(14.8) 残高 3.6	帯摺点線文10条(5条×2組) か、波状文4条(4条×1 組)。	①マメツ ②ハケ→ナデ	③ハケ ④ヨコナデ	黄灰色 暗色暗褐色	石・長(1-3) ◎		
19	壺	口径(15.4) 残高 10.7	複合口縁部。接合端部は面と なる。	①ハケ→ヨコナデ ②ハケ(木/a) ③ハケ	④ヨコナデ ⑤ハケ(木/a) ⑥ハケ(木/a)	乳灰茶色 乳黄茶色	石・長(1-3) ◎		

遺物観察表

SD5出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側)色調(内面)	胎土	備考	図版
				外面	内面				
20	壺	口径(12.2) 残高 6.6	複合口縁壺。拡張部に磨指波状文4条(2条×2組)。	○ヨコナデ ◎ハケ→ナデ	○ヨコナデ ◎ハケ(一部ナデ)	灰青色 灰黄色	石長(1-6) ◎		75
21	壺	残高 4.0	複合口縁壺。複合端部は後となる。	ヨコナデ ◎マメツ	マメツ	乳灰色 灰灰色	石長(1-2) ◎		
22	壺	口徑(14.8) 底径 7.6	複合口縁壺。複合端部は面をなす。拡張部に磨指波状文2条(2条1組)	○ナデ ◎ハケ ◎ナデ	◎ナデ ◎ハケ (裏)ナデ(7本/㎝) (裏)ナデトげ	乳褐色 乳灰色	石長(1-5) ◎		75
23	壺	口徑(19.0) 残高 3.3	複合口縁壺。拡張部は無文。	マメツ	ヨコナデ	淡黄色 淡黄色	石長(1-3) ◎		
24	壺	口徑(8.9) 残高 2.5	複合口縁壺。拡張部に磨指波状文3条以上。	ヨコナデ	マメツ(ヨコナデ) 1.貝痕有	乳茶色 乳茶色	石長(1-3) ◎		
25	壺	残高 3.8	複合口縁壺。拡張部に磨指波状文5条1組。	ヨコナデ(マメツ)	ヨコナデ	乳褐色 乳白色	石長(1) ◎		
26	壺	口径 20.8 残高 8.2	口縁端部は相広ろのナデ凹みをもつ。	○ヨコナデ (口)ハケ→ナデ ◎ハケ(7本/㎝)	◎ヨコナデ ◎ハケ(8本/㎝)	黄茶色 黄茶色	石長(1-6) ◎		75
27	壺	口徑(26.0) 残高 2.2	口縁部内面に段をもつ。上面に刻目浮文5ヶ以上。瀧面に1条の波状文。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	石長(1-4)多 ◎		黒塚
28	壺	口径 7.3 残高 5.0	長頸直口壺。口縁端部は丸い。	(口)ヨコナデ ◎ハケ→ミガキ	(口)ヨコナデ ◎ナデ(1.貝痕有)	暗茶灰色 茶灰色	石長(1-2) ◎		
29	壺	残高 18.6	長頸壺。頸部下端に「M」字状の刻目凸帯。	◎ハケ(5-6本/㎝) ◎ハケ(6-7本/㎝)	マメツ(ナデ)	灰黄褐色 黒灰色	石長(1-7) ◎		
30	壺	残高 3.7	頸部下端に三角形の凸帯。	ハケ	マメツ	淡白褐色 暗灰茶褐色	石長(1-6) ◎		
31	壺	残高 6.4	頸部下端に三角形の凸帯。	ハケ(一部ナデ) ヨコナデ	ナデ	乳黄灰色 乳黄灰色	石長(1-3) ◎		
32	壺	残高 4.0	頸部下端に三角形の刻目凸帯。凸帯下にも刻目。刻目は木口押止。	マメツ(一部ハケ)	ナデ	淡灰色 暗灰色	石長(1-3) ◎		
33	壺	残高 4.9	頸部下端に斜格子目文の刻目凸帯。	ハケ(5本/㎝)	ハケ	茶 色 灰茶色	石長(1-2) ◎		
34	壺	残高 6.9	頸部下端に三角形の凸帯1条。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ (指頭痕有)	茶褐色 茶褐色	石長(1-4) ◎		
35	壺	残高 8.2	頸部下端に三角形の磨指波文。マメツのため中央で細かい磨指波文上に、乳濁を施していたようにも見える。	マメツ	マメツ	橙茶色 淡灰黄色	石長(1-3) ◎		黒塚 75
36	壺	残高 8.0	頸部下に木口押止文列。胴部に円形状の刻目文。	マメツ(ハケ)	マメツ(ハケ)	明褐色 黄灰色	石長(1-3) ◎		75
37	壺	残高 4.8	胴部に向心門状の線刻文。36と同一体か。	ハケ	マメツ(ハケ)	淡茶色 灰黄色	石長(1-3) ◎		75
38	壺	残高 9.4	磨指波(3条1組)の線刻文。	ハケ(7本/㎝)	マメツ(ハケ)	淡茶色 淡灰黄色	石長 ◎		75

SD5 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
39	壺	残高 6.3	胸飾文3条1組の波状文。	ハケ	ナデ	灰茶色 茶褐色	石・長(1-3) ◎		75
40	壺	残高 6.2	判突文による施文がみられる。	マメツ	マメツ	淡茶色 乳白色	石(1-3) ◎		75
41	壺		底部片。「X」字状の模刻文。	マメツ(一部ハケリ)	ナデ	淡茶色	石・長(1-3) ◎		75
42	壺	底径(13.4) 残高 16.2	底部中央が極わずか上がる平底。	ハケ(一部マメツ)	ハケ→ナデ(マメツ)	淡茶褐色 淡赤色 灰褐色 白灰色	石・長(1-6) ◎	黒斑	76
43	壺	底径(7.6) 残高 16.4	立ち上がりをもつ平底。	ハケ ◎マメツ	ハケ ◎ナデ	灰褐色 乳白色	石・長(1-2) ◎		
44	壺	底径 7.5 残高 13.6	立ち上がりをもつ平底。	ミガキ ◎マメツ	マメツ	茶褐色 灰色	石・長(1-2) ◎		
45	壺	底径 9.0 残高 8.2	立ち上がりをもつ平底。底部はひろい。	◎上ハケ→ミガキ ◎下ハケ ◎ナデ(一部ヨコナデ)	◎下ハケ ◎ナデ(ハケリ)	黄茶色 黄茶色	石・長(1-4) ◎	黒斑	
46	壺	底径 4.2 残高 16.6	平底。厚い器壁。	ハケ(11本/cm)	◎ナデ	白茶色 黒灰色	石・長・全 ◎	黒斑	
47	壺	底径 5.0 残高 11.5	丸みのある平底。底部境はあいまい。	マメツ(器底痕有)	マメツ [工具痕・指痕痕有]	乳茶色 灰色	石・長(1-5) ◎	黒斑	
48	壺	底径(1.4) 残高 9.0	丸みのある平底。	マメツ(ハケ) ◎工具痕有	ハケ	淡桃褐色 灰白色	石・長(1-5) ◎	黒斑	
49	鉢	口径(31.8) 残高 12.1	口縁肩部は面をなす。	◎ヨコナデ(マメツ) ◎マメツ(一部ハケリ)	◎ハケ→ヨコナデ ◎ハケ	白黄茶色 白黄茶色	石・長(1-3) ◎		
50	鉢	口径(9.4) 残高 5.4	口縁端部は丸い。内奥にあいまいな模様をもつ。	◎ヨコナデ ◎ハケ(マメツ)	マメツ	淡黄茶色 淡黄茶色	石・長(1)少 ◎		
51	鉢	底径(3.9) 残高 2.7	「ハ」の字に立ち上がる上げ底の底部。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄茶色 黄茶色	石・長(1-4) ◎		
52	高杯	口径(21.4) 残高 3.5	口縁端部は面をなす。	ナデ	ナデ(マメツ)	赤褐色 暗赤褐色	石・長(1-5) ◎		
53	高杯	口径(18.3) 残高 4.5	口縁端部は丸みをもつ。	ヨコナデ(マメツ)	ヨコナデ(マメツ)	乳茶色 乳黄茶色	石・長(1-5) ◎		
54	高杯	口径(28.6) 残高 2.7	口縁端部は面をなす。肩按部は明瞭な稜。	マメツ(一部ヨコナデ)	マメツ(ヨコナデ)	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長(1-4) ◎		
55	高杯	残高 3.7	肩按部は明瞭な稜。	◎上ミガキ(マメツ) ◎下ヨコナデ	マメツ(一部ヨコナデ)	暗褐色 暗褐色	石・長(1-3) ◎		
56	高杯	残高 11.6	円孔3ヶ以上(想定4ヶ、 ϕ 1.6cm)。円板充填。	ハケ→ミガキ	ナデ(工具痕有)	淡褐色 淡褐色	石・長(1-3) ◎		
57	高杯	残高 6.7	円孔2ヶ以上(ϕ 1.1cm)。円板充填。	ハケ→ミガキ	ヨコナデ(工具痕有)	淡黄褐色 淡白茶色	石・長(1-3) ◎		

遺物観察表

SD5 出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外内)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
58	高坏	残高 9.3	円板充填。円孔の有無不明。	ナデ ハタ→ミガキ(マメツ)	ナデ(しほり痕有)	淡赤褐色・ 淡白粉色 薄肉紅色	石・長(1-3) ◎		
59	高坏	残高 7.8	円板充填。円孔の有無不明。	ミガキ(マメツ)	指頭痕(マメツ)	紫灰茶褐色 白灰色・ 口黄褐色	石・長(1-4) ◎		
60	高坏	残高 5.2	円孔の有無不明	ミガキ(マメツ)	ナデ(しほり痕有)	淡灰茶色 黄灰色	石・長(1-3) ◎		
61	高坏	底径(22.5) 残高 5.0	円孔φ1.7cm入、ト・下段。円孔既不明。	ナデ (裏)ヨコナデ	ナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	石・長(1-2) ◎		原痕
62	高坏	残高 2.3	半截竹管1列(φ3mm)。	(裏)ナデ (裏)ミガキ	(裏)ナデ (裏)ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1-2) ◎		
63	器台	口径(27.4) 残高 4.4	口縁端面に2条の沈線文。	ヨコナデ マメツ(一部ハケ)	ナデ ハケ	黄褐色 黄褐色	石・長(1-4) ◎		
64	支脚	底径(14.4) 残高 5.7	脚部片。脚端部はあいまいな面をなす。器壁が著しく厚い。	ナデ(マメツ)	ナデ	淡灰黄色 淡灰黄色	石・長(1-2) ◎		
65	支脚	底径(10.4) 残高 5.3	脚部片。脚端部はあいまいな面をなす。器壁が著しく厚い。	ナデ(マメツ)	マメツ	淡灰黄色 淡灰黄色	石・長(1-3) ◎		

表90 SK5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外内)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
66	盃	頸部 25.1 残高 51.5	沈線12条+3列1斜の利突文列。*斜:字状内帯+肩目。凸帯下に肩目。	替ミガキ	替ミガキ 替ナデ	黄茶褐色 暗黄灰色	石・長(1-5) ◎		76
67	高坏	口径(24.2) 残高 8.4	肩接部に横をもつ。ゆるやかに外反する口縁部。	マメツ	マメツ	不明	不明		遺物 不明
68	壺	口径(13.3) 残高 6.2	口縁端面に2条の沈線文。	◎ヨコナデ ◎ハタ→ヨコナデ ◎ハケ(6本/cm)	◎ヨコナデ ◎ハケ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1-4) ◎		

表91 SK7 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外内)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
69	鉢	口径(34.4) 残高 4.3	大型鉢。肩目凸帯。肩目は本口押印。	ヨコナデ	マメツ(ハケ)	黄褐色 灰黄色	石・長(1-4) ◎		原痕
70	高坏	口径 11.5 残高 8.3	円孔4ヶ(φ8mm)。	(裏)ハタ→ハケ(斜) ◎ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 乳黄褐色	石・長(1) ◎		

表92 SK10 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外内)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
71	鉢	口径 14.1 底径 (5.6) 器高 12.2	「く」の字状沈線。平底。口縁端面は面をなす。	マメツ(ナデ)	◎ナデ(肩接部有) (裏)ハケ(ラクスリ) (裏)ナデ	灰黄茶色 灰黄茶色	石・長(1-3) ◎		77

表93 SK11 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外内)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
72	壺	口径(17.3) 残高 28.8	口縁端面はナデ凹む。利突文列。	◎マメツ(ヨコナデ) ◎マメツ(ハケ)	◎ヨコナデ ◎ナデ(肩接部有) ◎ハケ(ラクスリ) ◎ナデ	黄茶色 黄茶色	石・長(1-5) ◎		原痕 77

表94 包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版	
				外 面	内 面					
73	煎	口径(25.1) 底径(8.0) 残高 43.1	「く」の字状口縁。口縁部はナデ囲む。「ハ」の字状に立ち上る上げ底の底部。	◎ヨコナデ ◎ハケ→ナデ ◎ヨコナデ	○ヨコナデ ナデ	淡黄褐色・ 白灰色・ 淡灰褐色・ 灰褐色	石・長(1-5) ◎	出洋	77	
74	甕	口径(23.6) 残高 8.5	肩部の張りが多い。口縁部はあいまない面をもつ。	マメツ(振盪痕有)	マメツ(振盪痕有)	茶褐色 乳黄茶色	石・長(1-10)多 ◎		煎	
75	煎	口径(20.8) 残高 6.1	口縁部は面をなす。	○ナデ ◎ハケ	マメツ	淡黄褐色 明褐色	石・長(1-4) ◎			
76	甕	口径(19.5) 残高 6.2	口縁部はナデ囲む。	◎ヨコナデ ◎マメツ(ナデ)	◎ヨコナデ ◎ヘラケズリ	灰黄茶色 灰黄茶色	石・長(1-4) ◎			
77	煎	口径(20.4) 残高 4.2	口縁部はあいまない面をなす。	○◎ヨコハケ ◎ナデハケ(5本/面)	◎ハケ(5本/面) ◎ハケ(5本/面)	灰黄色 灰黄色	石・長(1-4) ◎			
78	甕	口径(15.3) 残高 4.6	口縁部はナデ囲む。	◎ヨコナデ ◎ハケ→ヨコナデ ◎ハケ	○ハケ ◎◎ヘラケズリ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1-5) ◎			
79	甕	口径(14.3) 残高 5.9	口縁部は短かい。口縁部は面をなす。	ハケ(マメツ)	マメツ(上只痕有)	淡褐色 淡褐色・ 暗灰色	石・長(1-4) ◎			
80	煎	口径(14.9) 残高 3.2	ゆるやかに外反する。口縁部は面をなす。	ヨコナデ ◎ハケ	ナデ	乳黄灰色 乳黄灰色	石(5系3-3) ◎			
81	壺	口径(18.4) 残高 7.2	直立する頸部。短かい口縁部。口縁部はあいまない面をなす。	○マメツ(ヨコナデ) ◎ハケ(マメツ)	◎マメツ ◎ヘラケズリ(マメツ)	白黄色 白黄色	石・長(1-4) ◎			
82	壺	口径(12.2) 残高 8.1	口縁部は面をなす。	◎マメツ ◎ハケ	マメツ	乳黄白色 乳黄色	石・長(1-5) ◎			
83	壺	口径(10.9) 残高 6.6	口縁部は丸みのある面をなす。	◎マメツ(ヨコナデ) ◎マメツ(ナデ) ◎ナデ(上只痕有)	◎マメツ(ハケ) ◎マメツ(ナデ) ◎マメツ	黄茶色 黄茶色 黄茶色	石・長(1-4) ◎			
84	甕	残高 2.7	長頸壺。細沈線文9条、半截竹管3段、細沈線文3条以上。	ナデ	ヨコナデ(ハケか?)	乳茶色 乳茶色	密 ◎			77
85	壺	残高 1.3	長頸甕形部片。半截竹管文4段以下。	ナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 黒 色	密・全 ◎			77
86	甕	口径(27.9) 残高 3.1	木口押印による斜格子目文。	マメツ	ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1-5) ◎			77
87	高坏	口径(22.0) 残高 1.5	肩部は稜となる。口縁部は面をなす。	マメツ	マメツ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1-3) ◎			
88	高坏	底径 10.1 残高 6.2	円孔1ヶ(φ9mm)。	ハケ→ミガキ ◎ナデ	ナデ(上只痕有)	茶褐色 茶褐色	石・長(1-4) ◎			
89	高坏	底径(14.1) 残高 9.7	円孔2ヶ以上(φ1.0cm)。	マメツ(ナデ)	ナデ(マメツ)	黄褐色 黄褐色	石・長(1-4) ◎			
90	高坏	口径(27.7) 残高 1.3	口縁部面に指掻き波状文(3条1組)。上面に半截竹管文列。	ナデ	ナデ	写茶褐色・ 黄褐色・ 暗灰色	石・長(1-4) ◎			77
91	甕台	口径(26.8) 残高 2.4	口縁部面に指掻き波状文9条以上。	ナデ(マメツ)	ナデ(一部ミガキ)	茶褐色 茶褐色	石・長(1-2) ◎			77

遺物観察表

包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
92	部弁	口径(28.5) 残高 1.6	口縁端面はナデ凹む。 内形径又1ヶ以上(1.4× 1.7cm)。	ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	茶褐色 緑褐色	石・長(1-2) ◎		77
93	器台	口径(22.5) 残高 1.8	口縁端面は垂下する。口縁端 面に2条の太い沈線文。	ナデ	マメツ	白茶色 白茶色	石・長(1-3) ◎		77
94	支脚	底径(11.6) 残高 5.8	脚部片。短かく深く割部。脚 端部は丸みをもった面をな す。	ハケ(一部ナデ)	しほり痕 ◎ヨコナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1-3) ◎		
95	壺	口径(25.0) 残高 3.7	口縁端面は内側に突出する。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1-2) ◎		
96	甕	口径(17.9) 残高 3.3	右径口縁。口縁端面は内傾す る。口縁外面はナデ凹みが著 しい。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰色 暗灰色	石・長(1-2) ◎		77
97	高坏	口径(14.2) 残高 4.5	あいまいな段をもつ。口縁端 部はわずかに外反する。	ヨコナデ (凹)ナデ	ナデ	暗灰色 淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1-3) ◎		
98	高坏	口径(17.0) 残高 3.6	口縁部はわずかに外反す る。端部は粗く丸い。	マメツ(ハケリ)	マメツ(ハケリ)	橙茶色 橙茶色	密 ◎		
99	高坏	口径(14.2) 残高 3.3	口縁部はわずかに外反す る。	マメツ(器ヨコナデ)	マメツ	淡茶色 乳茶色	密 ◎		
100	高坏	残高 4.0	わずかに段をもつ。	ナデかミガキか? (凹)ヨコナデ	ミガキか?	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長(1-2) ◎		
101	高坏	残高 2.4	充墳技法。器壁は厚い。	マメツ	マメツ(工具痕有)	淡橙茶色 淡橙茶色	密 ◎		
102	高坏	残高 4.1	短かい脚柱部。	マメツ	マメツ(上具痕)	淡灰褐色 淡黄褐色	石・長(1) ◎		
103	高坏	残高 5.8	脚柱部は中央。	マメツ	マメツ	灰黄色 赤茶色	密 ◎		
104	瓶	口径(17.2) 残高 5.2	わずかに外反する口縁部。	マメツ(ハケか?)	マメツ(ハケ)	乳褐色 淡桃茶色	密 ◎		
105	甌	残高 2.9	多孔。円形。中央1ヶ、外6 ヶ。	ナデ	ナデ	黄灰褐色 灰灰褐色	石・長(1-3) ◎		
106	瓶	底径(8.0) 残高 2.3	多孔。半円形。外2ヶ以上。	マメツ	マメツ(ハケ)	乳黄茶色 乳黄茶色	密 ◎		
107	甌	残高 7.7	把手部。断向円形。	ナデ(マメツ)	マメツ	乳白色 乳白色	滑 ◎		
108	甌	残高 6.0	把手部。断向やや扁平。	マメツ(ナデ)	マメツ	淡茶色 淡黄色	石・長(1-2)少 ◎		
109	甌	残高 4.5	把手部。断向三角形。	ナデ(マメツ)		暗褐色	石・長(1)多 ◎		
110	瓶	残長 5.4	輪式土器軟質。把手部。上部 に溝。	ナデ(指環痕有)		灰茶色	石・長(1-2) ◎		77

包含層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
111	坏身	口径(10.9) 残高 4.6	立ち上がりは直立する。口縁 端面は内傾し、わずかに段を なす。	○回転ナデ ◎マメツ	回転ナデ	青灰色	密 ○		
112	高坏	口径(15.6) 残高 5.4	体部外面に波状文を施す。そ の文様帯上につまみを附け するが、欠損。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 淡灰色	密 ○		78
113	高坏	底径(9.8) 残高 4.6	脚部は「ハ」の字形にゆるや かに外反し、口孔を穿つ。	回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色 孔灰色	密 ○		
114	高坏	底径(9.4) 残高 5.8	脚部は「ハ」の字形に外反し、 端部で下方へ屈曲させる。ス カシの形は長方形。	◎回転ナデ ◎カキ目	回転ナデ	暗灰色 淡青灰色	密 ○		
115	壺	口径(15.2) 残高 4.1	口縁部外面に波状文を2段施 し、その上方にそれぞれ凸帯 を巡らせる。	回転ナデ	不明	茶灰色 黒灰色	密 ○	自然釉	78
116	壺	口径(18.2) 残高 2.9	口縁端部直下と、口縁部外面 に凸帯を巡らせ、凸帯間に波 状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 淡青灰色	密 ○		78
117	壺	口径(19.2) 残高 4.7	口縁端部付近に凸帯を巡ら せ、その下に波状文を施す。	回転ナデ	マメツ	淡青灰色 灰色	密 ○		78
118	壺	残高 5.9	口縁部外面には波状文を施 す。	◎マメツ ◎呼び→カキ目	回転ナデ	淡青灰色	密 ○		
119	壺	口径(21.4) 残高 3.3	口縁部は外反気味に開き、端 部はわずかに下方へ肥厚させ る。	◎回転ナデ ◎カキ目	回転ナデ	暗灰色 淡灰色	密 ○		
120	坏身	口径(11.0) 残高 3.2	立ち上がりは内傾し、受部は 短く水平。	○回転ナデ ◎カキ目	回転ナデ	茶灰色 淡灰色	密 ○		78
121	坏身	残高 3.6	立ち上がりは内傾するが、端 部は欠損する。受部との境が わずかに凹む。	○回転ナデ ◎回転ヘラ削り	回転ナデ	白灰色	密 ○		
122	坏身	口径(10.5) 残高 2.3	立ち上がりは短く内傾し、受 部は下方へのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰 色	密 ○		
123	坏身	口径(11.3) 残高 3.3	立ち上がりは短く内傾する。 受部はほぼ水平にのびる。ひ ずみあり。	○回転ナデ ◎回転ヘラ削り	回転ナデ	灰 色	密 ○		78
124	坏身	口径(9.5) 器高 4.0	立ち上がりは短く内傾し、受 部は上方へのびる。	○回転ナデ ◎回転ヘラ削り ◎回転ヘラ切り	回転ナデ	灰 色 青灰色	密 ○		78
125	高坏	残高 3.8	脚部は細い。	◎回転ナデ ◎回転ナデ	◎回転ナデ	乳黄灰色	密 ○		
126	高坏	残高 11.5	脚部は細く、裾部にかけて ラッパ状に開く。2段のスカ シあり。	回転ナデ	◎回転ナデ ◎回転ナデ	茶灰色 淡灰色	密 ○		78
127	すり鉢	底径 9.5 残高 2.6	底部は厚い円盤状を呈する。 底部内面には小孔が多くみら れる。	「具痕	不明	淡灰色	密 ○	自然釉	78
128	壺	口径(19.8) 残高 7.7	口縁部は上方へのび、端部 付近で下方へ屈曲する。端部 は丸い。	○回転ナデ ◎呼び→カキ目	○回転ナデ	暗灰色 淡灰色	密 ○		
129	坏蓋	口径 2.3 口径 0.8 残高 1.8	擬宝珠様つまみが付される。	回転ナデ	ナデ	淡灰色	密 ○		

遺物観察表

包含層出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
130	坏蓋	口径 2.4 口径 残高 0.7 1.7	擬宝珠様つまみが付される。	回転ナデ	回転ナデ	淡茶灰色 淡青灰色	密 ○		
131	坏蓋	口径 1.7 口径 残高 0.8 1.4	擬宝珠様つまみが付される。	㊦つまみナデ ㊦回転ナデ	ナデ	青灰色	密 ○		
132	坏蓋	口径 2.8 口径 残高 0.8 1.5	断面が逆台形つまみを付す。	回転ナデ	ナデ	淡灰色	密 ○		
133	坏蓋	口径 3.1 口径 残高 0.5 1.2	つまみは低く、中央が凹む。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡青灰色	密 ○		
134	坏身	口径(10.0) 残高 3.0	口縁端部付近でわずかに外反する。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	密 ○		
135	坏身	底径(8.0) 残高 1.4	底端部よりやや内側に高台を付す。	㊦回転ナデ ㊦へう削り	回転ナデ	黄灰色 淡灰色	密 ○		
136	坏身	底径(7.0) 残高 3.2	底部の中央寄りに高台を付す。	㊦回転ナデ ㊦へう削り	回転ナデ	茶灰色 淡青灰色	密 ○		
137	坏身	底径(9.8) 残高 2.7	底端部付近に、「ハ」の字形の高台を付す。	㊦回転ナデ ㊦へう削り	㊦回転ナデ ㊦ナデ	白灰色	密 ○		
138	坏身	底径(9.6) 残高 2.1	底端部付近に高台を付す。高台の横地面は、わずかに凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	密 ○		
139	坏身	底径 8.2 残高 1.8	底端部付近に高台を付す。高台の横地面は凹面をなす。	㊦回転ナデ ㊦ナデ	回転ナデ	乳灰色	密 ○		
140	坏身	底径(11.4) 残高 3.1	底部から体部にかけてなだらか。底端部に、直立に高台を付す。	マメツ	回転ナデ	乳灰色	密 ○		
141	坏身	底径(8.7) 残高 2.7	底端部に「ハ」の字形の高台を付す。	㊦回転ナデ ㊦へう切り	㊦回転ナデ ㊦ナデ	淡青灰色	密 ○		
142	坏身	底径(8.1) 残高 1.6	底端部に直立気味に高台を付す。	㊦回転ナデ ㊦へう削り	回転ナデ	青灰色	密 ○		
143	坏身	底径(12.6) 残高 2.5	底端部付近に、「ハ」の字形の高台を付す。	㊦回転ナデ ㊦ナデ	回転ナデ	白灰色 乳黄灰色	密 ○		
144	坏身	底径(12.0) 残高 1.5	底端部に、高台を付す。	㊦回転ナデ ㊦回転へう削り	回転ナデ	淡灰色	密 ○		
145	坏身	底径(10.2) 残高 2.4	底端部に、「ハ」の字形の高台を付す。	㊦回転ナデ ㊦回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	密 ○		一五 図版
146	坏身	口径(18.6) 残高 5.9	体部から口縁部にかけて、直線的に上外方へのびる。	回転ナデ	回転ナデ	茶灰色 淡灰色	密 ○		
147	坏身	口径(18.0) 底径(12.6) 器高 7.4	口縁部は直立気味にのびる。底端部付近に「ハ」の字形の高台を付す。	㊦回転ナデ ㊦ナデ	㊦回転ナデ ㊦ナデ	淡灰色	密 ○		78
148	高坏	残高 4.9	脚柱部は、ゆるやかに外反して開く。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色	密 ○		

川 附 遺 跡

包含層出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量 (cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		(外面 色調 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
149	高杯	残高 4.6	唇部は細く、胴部へかけて外反して細く。	回転ナデ	④(Ⅱ)しほり浜 ④回転ナデ	淡青灰色	密 ○		
150	長脚盃	口径 (4.3)	口縁部は、肩部付近で上外方へ回曲し、さらに肩部で上方へ曲げられる。	①(Ⅱ)回転ナデ	①(Ⅱ)回転ナデ	暗灰色	密		
		残高 7.9		①(Ⅱ)ナデ	①(Ⅱ)ナデ	赤灰色	密 ○		
151	壺	底径 (8.6)	底端部に高台を付する。	④回転へう割り →同転ナデ	④回転ナデ	暗青灰色	密		
		残高 5.5		④ナデ	④ナデ	淡灰色	密 ○		
152	壺	底径 9.4	肩部が張り、底端部に高台を付する。	④回転へう割り →ナデ	④回転ナデ	灰 色	密 ○		
		残高 8.9		④ナデ	④ナデ				
153	深酒壺	口径(10.4)	口縁部は短く外傾する。肩部は張る。	同転ナデ	同転ナデ	淡灰色	密 ○	釜 山自然	
		残高 5.5							
154	平瓶	口径 (7.4)	体部は丸味をもつ。	①(Ⅱ)回転ナデ	同転ナデ	暗灰色	密		78
		残高 13.3		④回転へう割り		淡青灰色	密 ○		
155	皿	口径(13.4)	口縁部は外反し、端部は内傾する。	④回転ナデ	同転ナデ	灰 色	密		
		底径(11.0)		④ナデ		淡灰色	密 ○		
156	鉢	口径(18.1)	底部は丸く、やや尖っている。口縁部は内湾する。	同転へう割り →同転ナデ	④回転ナデ	淡灰色	密 ○		79
		器高 12.4		④ナデ					
157	甕	口径(23.2) 残高 5.8	口部は外反し、端部はわずかに丸味をもつ。	④マメツ ④叩き→回転ナデ	④マメツ ④叩き	乳灰色	密 ○		
158	不明	底径 (6.8) 残高 6.0	体部は上外方へ湾き気味にのびる。	ナデ	同転ナデ	乳灰色	密 ○		
159	甕	口径(25.9) 残高 8.0	口部は直線的に上外方へのび、端部付近で大きく外反する。	同転ナデ	マメツ	灰 色 茶灰色	密 ○	自然焼	79
160	坏身	底径(19.4) 残高 1.7	底端部付近に、やや湾き気味に高台を付す。	ヨコナデ	マメツ	白灰色 乳褐色	密 ○	黒表	
161	坏身	底径 (9.4) 残高 1.1	底端部より、やや内側に、直立して高台を付す。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 淡灰色	石・長(1) ○		
162	坏身	底径 (8.4) 残高 1.7	底端部よりやや内側に、直立して高台を付す。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰色 淡灰色	石・長(1) ○		

包含層出土遺物観察表 石製品

(6)

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
163	石灰丁	約4/5	結晶片岩	8.8	4.6	0.7	33.2		79
164	石灰丁	約1/2	結晶片岩	6.2	4.2	0.7	33.4		79
165	石灰丁	約1/2	結晶片岩	7.8	6.5	0.7	58.7		79
166	織針具	完形品		5.9	5.1	4.7	241.8		79

遺物観察表

包含層出土遺物観察表 石製品

(7)

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
167	瓶石		砂岩	5.0	8.3	5.1	480.0		79
168	用途不明	約1/2		9.3	6.0	2.1	154.9		79
169	用途不明	約2/3		12.3	4.5	2.6	180.4		79
170	石器素材	完存	結晶片岩	5.5	4.6	0.9	47.0		79
171	石器素材	約1/3	結晶片岩	6.0	3.0	1.6	47.5		79
172	石器素材	約1/2	結晶片岩	6.7	2.0	1.4	29.9		79
173	石器素材	約4/5	結晶片岩	11.8	3.3	2.4	148.9		79
174	石器素材	約1/2	結晶片岩	8.0	3.2	2.1	86.3		79
175	石器素材	約4/5	結晶片岩	18.0	3.6	2.7	37.5		79

包含層出土遺物観察表 土製品

(8)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
176	坏	底径 (7.2) 残高 3.6	円板高台。	ヨコナデ ◎ヘラ切り	ヨコナデ(一基ナデ)	乳白色 乳白色	密 ◎		10~ 11C 溝巻群
177	坏	底径 (6.5) 残高 1.7	円板高台。	回転ナデ ◎不明(ヘラ切り →ナデか?)	マメツ	乳茶色 乳白色	密 ◎		10~ 11C 土師群
178	坏	底径 6.1 残高 1.1	円板高台。	ヨコナデ ◎ヘラ切り	ヨコナデ ◎ナデ	黒灰色	石・長(1) ◎		10~ 11C 土師群
179	坏	底径 6.6 残高 1.6	円板高台。やや底部が厚い。 立ち上りは「ハ」の字にちか い。	ヨコナデ ◎マメツ(ヘラ削?)	回転ナデ	乳灰色 淡灰色	石・長(1~2) ◎		10~ 11C 土師群
180	坏	底径 6.6 残高 1.4	あいまいな立ち上がりをも つ。	ヨコナデ ◎ヘラ削→スノコ削	マメツ(ナデ)	淡灰色 乳茶色	長(2) ◎		10~ 11C 土師群
181	碗	口径(18.2) 残高 2.3	口縁部はわずかに外反し、丸 縁となる。緑釉。	釉	釉	灰褐色・ 灰緑色 灰褐色・ 灰緑色	密 ◎		11C後 陶群
182	碗	底径 6.2 残高 2.3	輪高台。内面に1片度を垂取 する。	回転ナデ	ミガキか?	淡黄白色 黒灰色	密 ◎		11C後 ~12C 内黒
183	碗	底径 5.3 残高 1.9	低く、小さな輪高台。	回転ナデ ◎回転削り	回転ナデ	淡灰色 黒灰色	密 ◎		11C後 ~12C 溝巻 群付着

包含層出土遺物観察表 土製品

(9)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
184	椀	口径(14.2) 残高 2.4	口縁部はゆるやかに外反する。	ナデ	ナデ	淡黄白色 淡黄白色	密(砂・3) ◎	11C後 →12C	80
185	椀	底径(6.3) 残高 2.1	「ハ」の字状の高い輪高台。	ヨコナデ ◎ヘリ切り(→器ナデ)	ミガキ	乳白色 乳白色	石・長(1) ◎	11C後 →12C	80
186	椀	底径 6.2 残高 2.1	輪高台。	円転ナデ	マメツ	乳白色 乳白色	密(石・長1-2) ◎	11C後 →12C 保存者	
187	椀	底径(6.4) 残高 3.8	「ハ」の字状の低い輪高台。	ヨコナデ ◎ナデ(→ヨコナデ)	ミガキ	乳白色 乳白色	密 ◎	11C後 →12C	
188	坏	底径 6.5 残高 1.5	器壁の厚い円板高台。	ヨコナデ ◎器壁を切り→ナデ	マメツ	乳白色 乳白色	密 ◎	11C後 →12C	80
189	坏	底径 5.7 残高 2.4	器壁が著しく厚い円板高台。	ヨコナデ ◎器壁を切り	ナデ	淡灰色 淡灰色	石・長(1) ◎	11C後 →12C	80
190	椀	底径(2.9) 残高 1.9	低く、小さい輪高台。	ナデ(指痕僅有)	昭紋	黒灰色 黒色	密 ◎	13C 乳白型 瓦器類	80
191	椀	口径(16.2) 残高 3.4	口縁部の器壁は体部より薄くなる。	ナデ	ナデ	淡褐色 淡灰褐色	密 ◎	13C 粗面型 瓦器類	80
192	不明 (滑石)	口径(7.8) 残高 2.3	口縁部扁平に開き、断面形は、三角形を呈する。	軸	軸	灰色 灰色	密 ◎	15C 陶磁器	80
193	瓶 (白磁)	口径(6.9) 残高 1.4	口縁部は器壁が薄く、大きく開く。	軸	軸	淡灰白色 淡灰白色	密 ◎	13C 陶磁器	
194	台付椀	底径(6.0) 残高 1.7	高く大きい輪高台。	ケズリか? ◎ケズリ出し	紐	淡灰白色	密 ◎	13C 陶磁器	
195	台付椀 (滑石)	底径(5.4) 残高 0.9	器壁の厚い輪高台。底部は広い環状面をもつ。	軸 ◎ケズリ出し		緑色 淡青灰色	密 ◎	13C 瓦器類	
196	坏	底径(8.0) 残高 1.4	底、円板高台。	ナデ ◎器壁を切り	円転ナデ	淡黄白色 淡黄白色・ 灰色	密 ◎	13C	80
197	土鉢	長さ 4.3 幅 1.6	孔直径6mm。	ナデ		淡灰色・ 黒色 淡灰黄色	密 ◎	15C 瓦器	80
198	羽蓋	口径(37.0) 残高 1.8	三足、脚部片。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒灰色 灰褐色	砂(1) ◎	17C 保存者	
199	指鉢	口径(33.6) 残高 8.0	口縁部外向に2本の凹線。	ヨコ方向のケズリか?	器指条線	茶褐色 暗褐色	密 ◎	17C 指鉢	80
200	釜	残高 18.0	「L」字状の口縁部。口縁端部は丸くやや垂れる。	ナデ		黄褐色	石・長(1) ◎	15C 保存者	

第10章 調査の成果と課題

1. 土層

筋違遺跡は微高地に立地している。現在は、水田と造成地であり、いずれの調査地点も近・現代に包含層及び遺構が大きく削平されている。筋違C・E・G・H遺跡では包含層をわずかに検出し、古墳時代から中世までの遺物が出土している。包含層は、遺存が無いため厳密には時期特定できないが、筋違C遺跡の黒色土は6世紀代までの堆積層、筋違E・G・H遺跡の褐色系土層は中世までの堆積層である。また、筋違遺跡に東接する福音小学校構内遺跡では、黒褐色土は弥生時代後期～古墳時代、灰褐色土は中・近世に時代比定されている。よって、福音寺地区には、弥生時代後期～古墳時代の黒色系土層と、中・近世の褐色系土層が堆積していると考えられる。

ところで、現地表での地形観察からは、筋違E・F・H・I遺跡と筋違A・B・C・D・G遺跡の間には浅い谷状の凹地が存在している。この凹地部分の調査は実施されておらず、遺跡遺存の有無や、古墳時代及び中・近世の地形想定を難しくしている。

2. 先土器～縄文時代

筋違F・H遺跡では、サヌカイト製のナイフ形石器が各1点出土している。福音寺地区では河地区東部の浄蓮寺遺跡3次調査でナイフ形石器が出土しており、福音寺地区内では先土器文化が存在していた可能性は充分にある。また、石器は、いずれも後世の土層から出土したものであり、これ等が本来属する土層は地山と呼ばれる黄褐色土と考えられ、黄褐色土の調査が望まれるところである。なお、石器についての資料分析は重松佳久氏、多田仁氏、橋本雄一氏の論考があり、参照していただきたい。

3. 弥生時代の遺構

前期：筋違F遺跡では土坑2基が検出された。土坑の時期は埋土出土の土器片で判断した。よって、時期比定には不安を残す。ただし、筋違C遺跡には同時期の土器が出土していることより、福音寺地区での集落の存在は確かなものと考えている。

後期：竪穴式住居址は筋違C・F・G遺跡より計5棟が検出されている。筋違F遺跡SB5・7は後葉、筋違G遺跡SB2と筋違C遺跡SB1・2は終末に比定されるものである。後葉の竪穴式住居址には円形と方形、終末には同じく円形と方形の平面形態をもつものがみられ、同時期に二形態の平面形態が存在することがわかる。

住居構造では、筋違C遺跡SB5が注目される。床面に幅広の溝が巡っており、特異な構造を持つ。束本遺跡4次調査SB502においても同形態のものがあり、機能を含め継続的な調査が必要である。

このほか、遺物の出土状況にも違いがみられる。筋違F遺跡SB5からは多量の土器が出土しているが、他の住居址からは出土遺物が少ないのである。また、福音寺地区の北西1.5mにある後期後葉の中村松田遺跡SB4からは多量の土器が出土している。これらの資料は、当平野における住居の廃棄及び廃棄後の使用状況をうかがえる資料である。

4. 弥生時代の遺物

前期：筋違D・F遺跡からは前期の土器が出土している。福音寺地区では発見事例が少ない資料である。なお、近接する天山北遺跡からは前期前半と推定される壺形土器が出土しており、当地一帯には集落が展開していたと考えられる。

後期：筋違F遺跡SB5からは多量の土器が出土した。器種には甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器、支脚形土器がある。甕形土器には叩き調整が5点にみられ、壺には複合口縁を除き加飾がほとんどみられない。鉢形土器にはボタン状に突出する底部がみられる。高坏形土器には脚部に円孔を2段以上もつものがある。器台形土器は出土量が多い。SB5出土品は、後期後葉(梅木編年Ⅱ-2)の特徴をもつものである。

筋違C遺跡出土の「把手付広片口皿」は、松山平野では初例であり、注目される遺物である。遺跡内からは内面に朱が付着する土器が出土しているため、当地で赤色顔料精製の作業が行われていたと考えられる。なお、福音小学校構内遺跡からは「L」字状の石片1点が出土している。

5. 古墳時代の遺構

後半期：5世紀後半以降の遺構が多数検出されている。

竪穴式住居址は、筋違遺跡の多くの調査地(筋違D・I遺跡を除く)で検出されており、5世紀後半～6世紀前葉もしくは6世紀代のもので占められる。平面形態は方形で、床面積には19～20㎡のもの、26～32㎡のものがあり、最大は筋違H遺跡SB2の39㎡である。主柱穴は4本を基調とし、コマドは30㎡前後から最大の39㎡のものに多くみられ、19～20㎡の小型住居にはない。なお、床面積が10㎡前後となる筋違E遺跡SB1・2と筋違H遺跡SB10・11は、平面形態が不整で、主柱穴や壁体溝などの屋内施設はなく、住居址としては認定が難しいものである。さらに、筋違F遺跡SB9、筋違H遺跡SB6・9は遺構の全様が不明で、住居としては認定が難しいと考える。

掘立柱建物も時期決定が難しく、ほとんどが古墳時代以降としか時期決定ができない。柱構造には、総柱のものが筋違C・E・F・H遺跡でみられ、平野内においても検出数が多い地域となる。注目されるのは、筋違E遺跡掘立柱1である。柱掘り方は楕円形で、1辺が1mにおよぶものもあり、大型の総柱建物になる。掘立柱1の西には、規模のやや小さい掘立柱3があり、同時存在の可能性がある。掘立柱建物については、今後の調査地の拡大により、方位や構成による時期判断と集落構造の解明をしていきたい。

6. 古墳時代遺物

住居址出土資料には、筋違C遺跡SB2、筋違E遺跡SK7、筋違H遺跡SB12のように、須恵器と土師器が伴出するものが多く、土器編年の基礎資料になる。

須恵器には、3点の非陶邑系須恵器がある。筋違F遺跡SB1・SP81、筋違H遺跡SK30からは、各1点が出土している。非陶邑系須恵器は、隣接する福音小学校構内遺跡と東山古墳からも出土している。福音寺地区には5世紀後半から6世紀初頭にかけて、非陶邑系須恵器が少量ではあるが使用されていたことが分かる。

勾玉や円玉などの滑石製品が3点出土している。福音小学校構内遺跡では、了持ち勾玉を含む滑石製品が多数みられ、石製品の出土量は平野内の他地域に比べ多い。

7. 中世

筋違遺跡からは11世紀から15世紀の資料が出土している。

筋違F遺跡SB5出土の完形の白色系土師器埴2点は、SB5を切る柱穴より出土したものと考えられるものである。

12世紀代では、筋違C遺跡SB4の柱穴内より土師器の坏が出土している。筋違G遺跡からは土坑、井戸、柱穴等の遺構より同時性の高い資料が幾かの土器を伴い出土しており、編年研究の一資料とな

るものである。筋違C・G遺跡は隣接しており、調査地一帯には12世紀～13世紀の集落が存在し、集落構造の一部が知られるものとなった。

14～15世紀では筋違E遺跡の資料がある。筋違E遺跡SK13は土坑墓の可能性が指摘されており、今後は墓域の解明につくさなければならぬ。

一方、川附遺跡からは包含層中であるが、10世紀～13世紀、16世紀～17世紀の遺物が出土している。筋違遺跡では出土しなかった時代のものがあり、福音寺地区における集落の拡大と継続性を示す資料といえる。

8. 集落の動態

福音寺地区は、北から西を川附川、南は小野川、東は堀越川に挟まれた地域をさす。概ね1km四方の範囲であり、西部から中央部は筋違遺跡と福音小学校構内遺跡、東部は浄蓮寺遺跡が主要な遺跡となる。以下、福音寺地区の西部から中央部にある筋違遺跡と福音小学校構内遺跡の集落動態を概観する。

1) 立地

まず、現地地形から各調査地の立地を考える。現在の等高線を観察すると遺跡は標高27mから31mの間であり、東西方向に尾根線2つと、浅い谷1つが形成されている。筋違E・F・H・Iは北の微高地にあり、筋違A・B・C・D・G遺跡は南の微高地にある。福音小学校構内遺跡は、最も標高が高い地点にあり、近現代の削平により現在は平坦地となるが、本来は北と南の微高地が合流する地点にあたり、わずかに起伏をもった微高地と考えられる。

よって、居住に適した土地は、北・南・中央の三ヶ所の微高地であろう。

2) 変遷

この地区には縄文時代の遺構はない。最も古いものは、弥生時代前期の筋違F遺跡SK10・11である。竪穴式住居では、福音小学校構内遺跡SB15・58の中期後半～後期前半に時期比定されるものがある。福音寺地区は、この時期に集落が本格的に経営されはじめると推察される。

弥生時代後期後半には、筋違F遺跡、福音小学校構内遺跡、川附遺跡に住居址、溝、墓があり、集落関連遺構が各微高地で存在する。弥生末には、筋違A・B・C・G遺跡に住居址があり、南の微高地に住居址が集中してみられる。

古墳時代前半期の確実な遺構は、福音小学校構内遺跡の土器棺墓1基で、資料的に稀薄な時期である。後半期（5世紀後半以降）では、遺構は各所で急増する。5世紀後半～6世紀前半、さらに6世紀代の竪穴式住居は各微高地にあり、規模は面積の異なる大・小が存在している。また、筋違遺跡では、筋違G遺跡を除き住居址の切り合いが認められないという状況がみられる。

掘立柱建物は、時期決定に課題を残すが、全ての微高地に多数存在する。このうち筋違E・H遺跡周辺には総柱建物が集中し、古墳時代以降の遺地は注目される場所である。

6世紀末～7世紀前葉には、筋違F遺跡SK12がある。集落存在は確かであるが、構造が知られる資料は少ない。ただし、掘立柱建物の時期が判明すれば、この時期の集落構造はより詳細になる。

8世紀～10世紀の遺構は明確ではない。11世紀～15世紀の遺構と遺物は、確認が少なからずある。筋違G遺跡では井戸が検出され、出土遺物の検討より半世紀の使用が推定される。

次に、弥生時代後期から古墳時代の集落動態を考えてみる。福音寺地区の中～西部地域の集落動態には一つの傾向性がみられた。弥生時代中期後半から弥生時代末までは、単一もしくは2単位ほどの

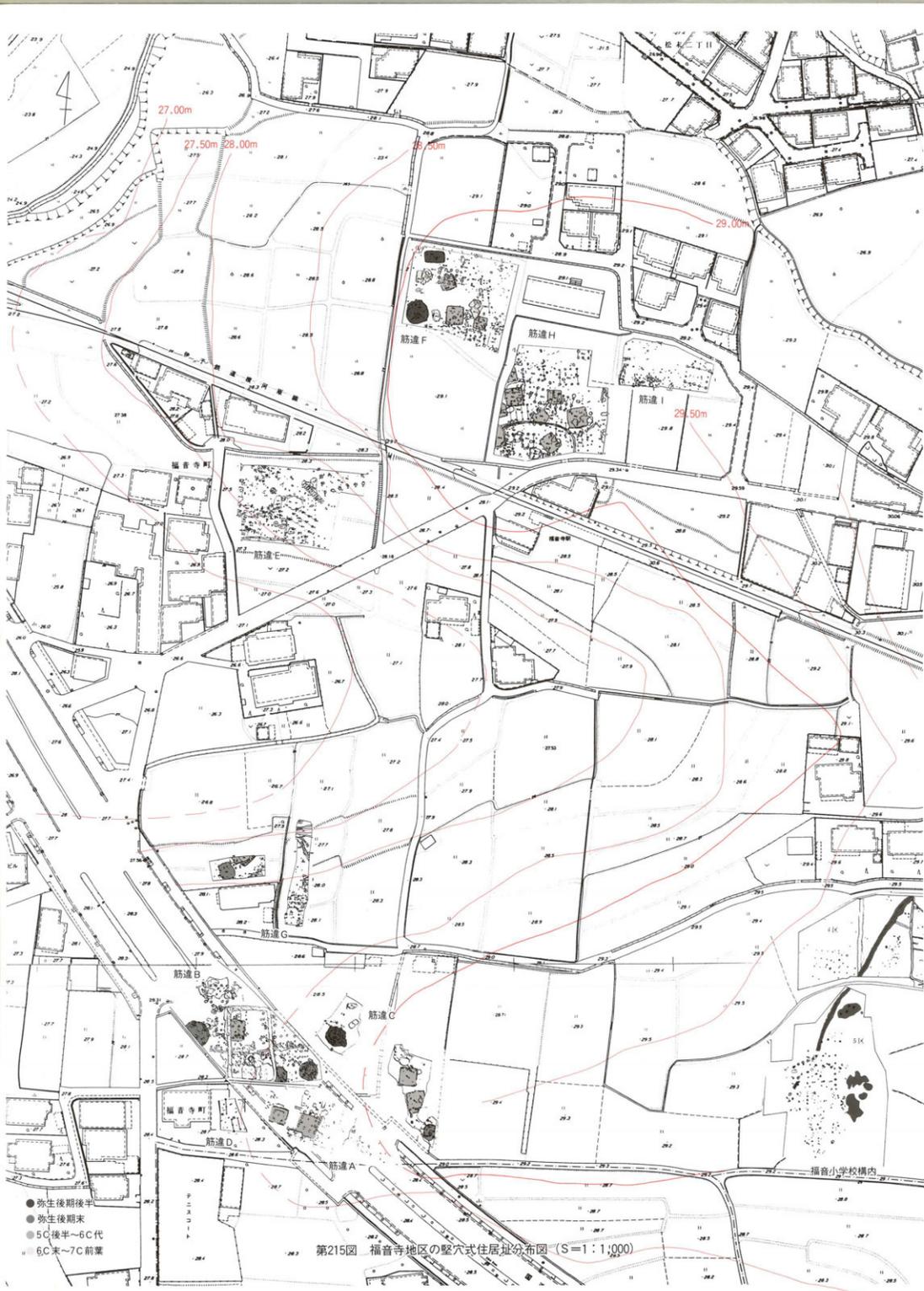
集落が三つの微高地を点々と移動し居住している。その後は、古墳時代後半期、5世紀後半には三つの微高地の各所に居住空間をもち、幾かの居住単位が存在し、6世紀末まで聚穴式住居を主体として集落が構成されている。7世紀代は、6世紀代の居住地を踏襲し、聚穴式住居址にかわり掘立柱建物を主要な建物とし、集落が経営されているのである。以後、11世紀までは集落についての資料は少なく、11世紀になり集落が展開される。よって、福音寺地区では、弥生時代後期後半と古墳時代後期後半に、集落が活発に展開されていたことが分かる。

このほか、北の微高地では筋違F遺跡の西側地域、南の微高地では筋違C遺跡の東側地域が古墳時代の居住域と推察される。重要な地域としては、北と南に挟まれた浅い谷部の土地利用である。これ等の地域での調査が進めば、福音寺地区における弥生時代後期から古墳時代の集落構造とその変遷は解明されることになるのである。

以上、調査の成果を概観した。今回報告した筋違C～I遺跡、川附遺跡は調査後10年を経過したのもあり、遺構の認定に変更を生じていたり、遺物の出土状況について十分に説明がなされなかったものが多い。ただし、継続的な調査によって福音寺地区には弥生～中世の集落が存在し、その構造と動態の一部ではあるが把握することになった。福音寺地区の今後の調査は、各遺構の時期決定を重視したものとし、集落構造の解明につとめなければならない。

【参考文献】

- 重松佳久 1992 「小野川水系における旧石器文化」『未住・久米地区の遺跡』御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 橋本雄一 1994 「北久米浄蓮寺遺跡-3次調査地-」松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 多田 仁 1994 「宝ヶ1遺跡」『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』御愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 長井数秋・森 光晴他 1973 「大山・櫻谷遺跡発掘報告書」松山市教育委員会
- 梅木謙一 1991 「松山平野の弥生後期土器-編年試案-」『松山大学構内遺構-第2次調査-』松山大学、松山市教育委員会、松山市立埋蔵文化財センター
- 梅木謙一・武正良浩 1995 「福音小学校構内遺跡-弥生時代編-」松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 梅木謙一 1994 「松山平野における非陶器系須恵器に関する一考察」『東山古墳群-4・5次調査-』松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 森 光晴 1983 「国道11号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書」松山市教育委員会
- 西尾幸則他 1987 「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ」松山市教育委員会
- 宮崎泰好他 1989 「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ」松山市教育委員会
- 栗田茂敏他 1991 「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ」松山市教育委員会、松山市立埋蔵文化財センター



第215図 福音寺地区の竪穴式住居址分布図 (S=1:1,000)

写 真 图 版

写真図版例言

1. 遺構の撮影は、各調査担当者が行った。

使用機材：

カメラ ニコンニューFM2他
レンズ ズームニッコール28-85mm他
フィルム ネオパンSS・カラーネガ

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ トヨ/ビュー45G
レンズ ジンマーS240mm F5.6他
ストロボ コメット/CA-322灯・CB2400-2灯(バンク使用)
スタンド他 トヨ/無撮影台・ウエイトスタンドF101
フィルム 白黒 プラスXパン4×5 カラー EPP4×5

3. 遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。

(白黒に限る)

使用機材：

引伸基 ラッキー450MD
ラッキー90MS
レンズ エル・ニッコール135mm F5.6A
エル・ニッコール50mm F2.8N
印画紙 イルフォードマルチグレードIVRC

4. 製版 150線

印刷 オフセット印刷
用紙 マットカラー110kg

【参考】『歴史写真研究』Vol.1～7

(大西萌子)

図 版 目 次

第2章 筋違C遺跡	
図版1. 1 調査前の状況(南より)	2 SB1遺物出土状況①(西より)
2 竪穴住居SB1(北より)	図版18. 1 SB1遺物出土状況②(西より)
図版2. 1 SB1と掘立柱建物SB4	2 SB1遺物出土状況③(西より)
(北東より)	図版19. 1 SB1遺物出土状況④(北より)
2 竪穴住居SB2(東より)	2 SB1・SB2(西より)
図版3. 1 SB2と掘立柱建物SB4	図版20. 1 掘立2(南より)
(北西より)	2 掘立4(南東より)
2 SB2遺物出土状況	図版21. 1 掘立1①(西より)
図版4. 1 竪穴住居SB3(南西より)	2 掘立1②(南より)
2 SB3カマド(南より)	図版22. 1 SK7遺物出土状況(北より)
図版5. 1 不明竪穴SX1(西より)	2 SK7(北より)
2 竪穴住居SB5(北より)	図版23. 1 SK9(南より)
図版6. 1 SB5と掘立柱建物SB6	2 SK13①(東より)
(北東より)	図版24. 1 SK13②(北より)
2 調査地周辺の現況(南西より)	2 SX1(北西より)
図版7. 1 SB1出土遺物	図版25. 1 SB1出土遺物①
SB5出土遺物	図版26. 1 SB1出土遺物②
SK3出土遺物	SB2出土遺物
図版8. 1 SB2出土遺物①	図版27. 1 SK6出土遺物
図版9. 1 SB2出土遺物②	SK7出土遺物①
図版10. 1 SB3出土遺物	図版28. 1 SK7出土遺物②
SB4出土遺物	図版29. 1 SK出土遺物
包含層出土遺物①	包含層出土遺物①
図版11. 1 包含層出土遺物②	図版30. 1 包含層出土遺物②
第3章 筋違D遺跡	
図版12. 1 完掘状況全景(北より)	第5章 筋違F遺跡
2 掘立柱建物SB1①(北西より)	図版31. 1 調査前途景(北東より)
図版13. 1 掘立柱建物SB1②(西より)	2 完掘状況(北東より)
2 掘立柱建物SB2①(東より)	図版32. 1 SB5遺物出土状況①
図版14. 1 掘立柱建物SB2②(北より)	(南西より)
2 調査地現況(南東より)	2 SB5遺物出土状況②(南より)
第4章 筋違E遺跡	
図版15. 1 遺構検出状況(南東より)	図版33. 1 SB5遺物出土状況③(北より)
2 作業風景(南東より)	2 SB5遺物出土状況④(北東より)
図版16. 1 完掘状況①(南東より)	図版34. 1 SB5完掘状況(北西より)
2 完掘状況②(東より)	2 SB5炉址(北より)
図版17. 1 SB1・SB2遺物出土状況	図版35. 1 SB7完掘状況(東より)
(南より)	2 SB1完掘状況(西より)
	図版36. 1 SB3完掘状況(北より)
	2 SB10完掘状況(東より)
	図版37. 1 SB5出土遺物①

- 図版38. 1 SB 5 出土遺物②
 図版39. 1 SB 5 出土遺物③
 図版40. 1 SB 5 出土遺物④
 図版41. 1 SB 5 出土遺物⑤
 図版42. 1 SB 5 出土遺物⑥
 図版43. 1 SB 5 出土遺物⑦
 図版44. 1 SB 5 出土遺物⑧
 図版45. 1 SB 5 出土遺物⑨
 図版46. 1 SB 5 出土遺物⑩
 図版47. 1 SB 5 出土遺物⑪
 図版48. 1 SB 5 出土遺物⑫
 図版49. 1 SB 1 出土遺物
 2 SB 3 出土遺物
 3 SK 出土遺物①
 図版50. 1 SK 出土遺物②
 図版51. 1 SK 14 出土遺物
 2 SP 出土遺物
 図版52. 1 SP 51 出土遺物
 2 SP 242 出土遺物
 3 SB 5 出土遺物⑬
- 第 6 章 筋違 G 遺跡**
- 図版53. 1 調査地遠景 (西より)
 2 調査地試掘状況 (南西より)
 図版54. 1 1×南半部完掘状況 (南東より)
 2 2 区完掘状況 (南西より)
 図版55. 1 SB 2 (北より)
 2 SB 1・3・4 (北東より)
 図版56. 1 掘立 1 (西より)
 2 掘立 3 (南より)
 図版57. 1 SE 1 (南より)
 2 SE 2 (南東より)
 図版58. 1 SX 1 (北東より)
 2 SX 1 遺物出土状況 (北より)
 図版59. 1 出土遺物
- 第 7 章 筋違 H 遺跡**
- 図版60. 1 完掘状況 (南東より)
 2 掘立 2 (南東より)
 図版61. 1 SB 2① (東より)
 2 SB 2② (北より)
 図版62. 1 SB 7 (東より)
 2 SD 1・SB 3 (東より)

- 図版63. 1 SB 2 出土遺物
 SB 3 出土遺物
 図版64. 1 SB 4 出土遺物
 2 SB 7 出土遺物
 3 SB 5 出土遺物
 図版65. 1 SB 州出土遺物
 図版66. 1 SB 12 出土遺物②
 図版67. 1 SB 12 出土遺物③
 2 掘立 2 出土遺物
 3 掘立 3 出土遺物
 4 SD 1 出土遺物①
 図版68. 1 SD 1 出土遺物②
 2 SK 3 出土遺物
 3 SK 30 出土遺物
 図版69. 1 出土遺物
- 第 8 章 筋違 I 遺跡**
- 図版70. 1 遺構検出状況 (北西より)
 2 遺構完掘状況 (北西より)
 図版71. 1 SB 1 (北より)
 2 掘立 1 (南東より)
 図版72. 1 SB 1 出土遺物
 2 SK 出土遺物
 3 出土地点不明遺物
- 第 9 章 川附遺跡**
- 図版73. 1 調査地全景 (東より)
 2 調査地南半部 (東より)
 図版74. 1 調査地北半部 (東より)
 2 SK 1 (南より)
 図版75. 1 SD 5 出土遺物①
 図版76. 1 SD 5 出土遺物②
 SK 5 出土遺物
 図版77. 1 SK 出土遺物
 包含層出土遺物①
 図版78. 1 包含層出土遺物②
 図版79. 1 包含層出土遺物③
 図版80. 1 包含層出土遺物④